

方形の孔が双方から穿たれた貫孔構造を形成している。きわめて精緻な造作のもので、孔は濠底下に埋設していたのでその性格は不明である。柱の頂部は自然劣化が認められる。現存長約106cmを測るが、本来は砂礫層よりも上で切断され、長期間の露出によって劣化したものと判断される。

柱材5は柱材2と4の頂部付近で、柱材6は調査区南西隅の黒粘Ⅱ中で検出されている。いずれも基部は平坦面をもち本来の底面の状態を残しているが、上部はそれぞれ基底から32cmと46cmの位置で双方から山形に切断されている。柱材6はさらにもう一面からつごう三方向からの切断痕が見られる。いずれもていねいなウリ削りを呈し、切断面も他と同じく鉄斧による裁断である。

柱材10もウリ削りを施した柱材で底面は手斧で平坦に加工されている。基部より20cmほどで山形に切断され、さらに半裁された残材である。

黒粘Ⅱ出土の木製品には他に、矢板状木製品、加工板材、角材、角棒、棒状木製品の他に、多数の木材切削片が出土している。こうした加工材の破片や切削片が黒粘Ⅱ中に多数含まれていることも、クビレ部南側周濠での大きな特徴である。柱材などの建築部材や祭祀的な木製品などの投棄に先立って材の切断や切削といった行為が伴っていたことを暗示しているといえよう。これらの木製品についての詳細は、実測図と観察表に整理してあるので参照いただきたい。

黒粘Ⅱ出土の土器には、復元可能の甕3個体（2・3・5）と甕上半部破片（4）、二重口縁壺口縁部（6）、広口壺口縁部（1）、高坏脚部（7）、小形碗形鉢（8）の8点を図示した。甕はいずれも突出底を残し、粗いタタキを施した弥生形甕である。土器の組成は庄内形甕や布留形甕を欠くことから、いわゆる「纏向1式」の特徴的な組成を残している。

しかしこの程度の組成内容や量で、様式としての「纏向1式」に限定することがいかに危険であるかはすでに論証してきたところであり、さらに他地点での周濠底の土器出土状況や他の時期決定要素をも援用しながら総合的な判断をおこなう必要がある。ちなみに4と5の胴部最大形は中程下半にあるようであり、とくに3は胴部の肩が張り球形化が著しい。弥生後期後半の第Ⅵ様式～「纏向1式」にはあまり見られないタイプである。

なお、遺物については別に観察表を用意してあるので参照いただきたい。

第3節 東区の調査（第2・3トレンチ）

西区（第1トレンチ）の纏向石塚古墳周濠調査に先立って、西区とは農道を隔てた東側の休耕田で2ヵ所のトレンチ調査をおこない、「東区」と仮称した。

東区は、北隣の字名「タカマル」と俗称される水田より一段低く、前方部南東隅が延びて周濠の一部がかかる可能性が予想されたため、まず、敷地東端部に幅3m、長さ16.2mの南北トレンチ（第3トレンチと呼称）を設定して発掘をおこなったが、纏向石塚古墳と直接関係するような遺構は検出されなかった。そこで今度は、調査区西端の農道に沿って、幅0.8m、長さ14.7mのトレンチ（第2トレンチと呼称）を南北に設けた。纏向石塚古墳墳丘や西区の3-1トレンチとの位置関係はトラヴァース測量によって位置関係を図化した。

東区は、建設に伴う基礎工事の関係で、トレンチの設定箇所や規模が限定されたために、十分な確認調査は行えなかったが、3-2トレンチでは南部においては前方部前面の周濠と考えられる溝状遺構を検出することができた。

(1) 第2トレンチ

農道に沿って設けた幅0.8m、全長14.7mの小規模なトレンチである。トレンチの南半で約10mにわたって溝状遺構を確認した。溝は北東-南西に走行する復元幅約6mで、地山層（灰色砂質土：9層、茶褐色砂質土：10層）上面で検出されている。溝内の堆積は、上から黒褐色砂質土（6層）→黒色粘質土（7層）であるが、いずれも砂礫を含んでおり、トレンチが狭小であるためと建物基礎への影響から下層への調査は断念した。現状で遺構面より約50cm掘り進んだ状況にある。

溝の堆積層下層（7層）からは、加飾の二重口縁壺口縁部（33）と甕底部（34）が出土している。甕は弥生形であろうが、壺は口縁端部に加飾した面をもつ垂下口縁を付加したもので、庄内式併行期に特徴的な型式であろう。

この溝状遺構は、西区の纏向石塚古墳の周濠や前方部の方向等の調査知見とあわせて考えると、前方部の前面を区画する位置と方向にあたり、後述するように、纏向石塚古墳周濠出土の土器とも年代的に合致するようであるから、纏向石塚古墳前方部前面周濠と考えて大過あるまい。ただ、溝内の堆積は後円部南側やクビレ部南側の周濠堆積とは大きく異なっているので、墳丘周囲の周濠部分とは環境の異なる小規模な溝状の浅い周濠遺構であった可能性が考えられる。

(2) 第3トレンチ

全長16.2m、幅3mのトレンチである。トレンチ東半で落ち込み状の遺構SX-01とSX-02を検出した。SX-01はSX-02を切って作られている。いずれも砂質

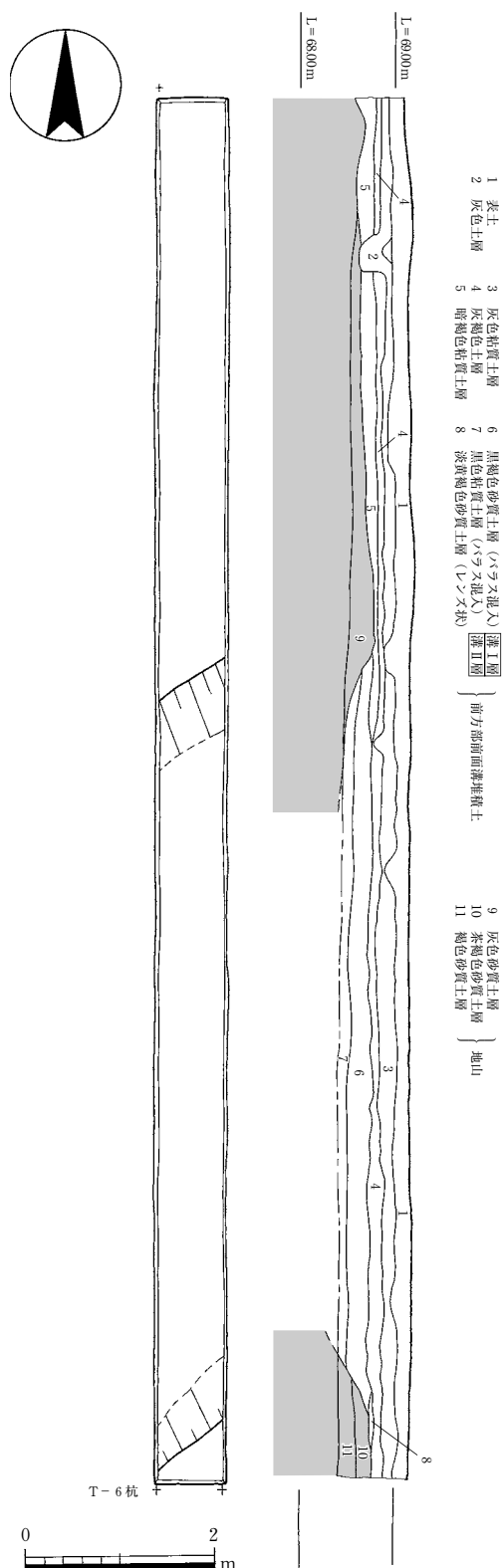


図34 3-2トレンチ平・断面図（1/80）



図35 3-3 トレンチ平・断面図 (1/80)

の土壌で充填されており、SX-01の底面には木質部が一部残存していた。SX-01の暗褐色砂質土層（4層）とSX-02の淡褐色礫質土層（5層）からは高坏脚部（48・49）が出土しているが、本来の時期のものではあるまい。

一方、トレンチの南端部では溝状の遺構を3時期にわたって検出している。もっとも古い溝は北東-南西方向に走行するもので、砂礫を混入した灰黒色土（17・18層）が充填し、北肩方向から拳大以下の小礫が多数流入した状況が看取された。出土遺物は有孔鉢底部のみで、溝の走行方向が纏向石塚古墳前方部前面（周濠）の方向に一致することは注意すべきであろうが、古墳に関連する積極的な根拠はない。

SD-01は、SD-02を切って作られた東西方向の溝で、灰褐色ないし灰黒色の土壌（13～16層）が充填する。上層から土師器の大形鉢高台部（38）や瓦器塊（37）が検出されている。おおむね12世紀のものであろう。さらにこれらの溝を切ってSD-03が存在する。北東-南西走行の溝で、暗褐色ないし濃灰色の粘質土（11・12層）で充填されており、土師器小皿（41～43）、瓦器塊（44～47）が出土している。13世紀後半期に下る時期となろう。さらにSD-03の上部に

は同一方向に走行する素掘り小溝が作られている。

これらの遺構は、SD-02を除けばいずれも11世紀から13世紀後半にかけてのものであり、古墳造営後のこの地域の古代末～中世開発の一端を物語る資料であろう。

第4節 小結—第3次調査の成果—

以上報告してきたように、第3次調査で明らかとなった成果は大きい。とはいえ、すでに三十有余年が経過し、もはや周知の事実となった事項、再検討すべき事項は少なくない。しかしここでは、明らかに訂正、修正すべき点以外はあくまでも当時の概報の総括²⁾に則って第3次調査の成果について整理しておこうと考える。纏向石塚古墳の長期間にわたる確認調査の総括的かつ総合的な成果については後論によりたい。

1. 纏向石塚古墳の墳形については、円あるいは楕円形墳の可能性が考えられていたが、東西方向に張り出し部があることを確認したことによって、円墳、楕円形墳の可能性は否定されることになった。

本調査の現状では突出部が未だ短いことから、これを「帆立貝」形ではないかとの憶測もあったが、東区の3-2トレンチで検出された溝状遺構が前方部前面周濠と考えてよいのであれば、突出部の長さは約30mとなり、後円部径約60mと比較しても決して「帆立貝形古墳」の範疇ではあり得ない。今後、纏向石塚古墳の墳形については「前方後円」形として理解し、かつ最古級の前方後円墳として位置づけていく必要がある。今後のさらなる調査を期待したい。

2. 周濠の開穿時期については、第2次調査と同様に、最下層の黒粘Ⅱからは、いわゆる「纏向1式」を想定するような一連の土器群が出土した。このことから第3次調査の概報段階では、第1次調査の黒粘Ⅱの土器の混在に不安を感じつつも、黒粘Ⅱと砂礫層は時間的にも判然として分離し、最下層が「纏向1式」、その後の埋没過程のなかで「庄内式」土器も堆積したと考え、一連の祭祀品も含め、第一次祭祀と二次的祭祀の存在を模索した。つまり、第2次調査成果との層位的整合性に固執して「纏向1式」期の築造説を容認したのであった。

しかし改めて木製品群の出土状況を見ると、黒粘Ⅱのすぐ上を覆う灰黒色の砂礫層中にもおよんでおり、黒粘Ⅱと砂礫層はさしたる時間差はなく、ほぼ一体として形成されていた可能性が考えられる。

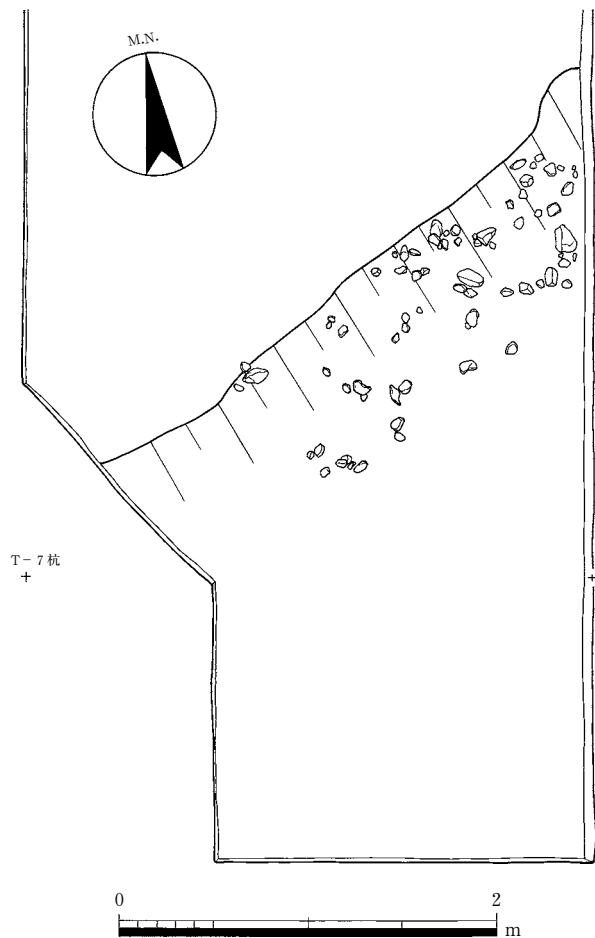


図36 3-3トレンチ SD-02 平面図 (1/40)

畢竟、砂礫層からは明らかに典型的な庄内形甕が出土しており、少なくとも周濠底への最初の遺物群の投棄が「纏向1式」期であることは再検討を余儀なくされたものと理解している。

その後、第1～2次調査の遺物を再検討する機会があり、築造時期を下らせて考えるようになったことは大きな変化であるが、それでもこの段階では庄内式の古い段階（庄内2式）を想定していた³⁾。現時点での私の纏向石塚古墳築造時期観を形成するには第4次調査を待たねばならなかったのである。

3. 最下層や砂礫層出土の木製品には柱材などの建築用材や祭祀的性格の強い木製品等が多数存在したが、第1～2次調査の事例を踏まえても、その性格を究明することができなかった。それでも、概報段階では「これらのなかには、二次的な転用を受けているものも含まれていて、何らかの形で使用されていたものが廃棄されたことを物語っている。しかし、前回調査した同一周濠内（第2次調査のこと：寺沢註）とは、わずかに隔てたところにおいて、一方では木製工具が多量に出土し、他方では材木を主体とする用材が検出されたことは、たんに周濠内に一括投棄したとも考えられず、埋蔵儀礼あるいは、墓上祭祀の問題とも関連して考えることが、今後に残された問題である」との見解を表明している。

現在の私の第1～3次調査にわたる一連の周濠調査に関しての見識として、もっとも強調しておかねばならないことは、これらの一連の周濠内遺物が黒粘Ⅱあるいは砂礫層の如何に関わらず、周濠底面近くにおいてプライマリーな投棄状態という機能面を確保している点であろう。この一括投棄性と同時性の認識こそが築造時期とこれらの遺物の性格を考える上での重要な思考基点であろうと思うのである。

（寺沢）

【註記】

- 1) 土層断面図には現れていない。当時のメモと木製品のなかに「青暗色砂質粘土層」という記載があり、本土層のことと考えられる。
- 2) 久野邦雄・寺沢薫「纏向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1976年度 奈良県立橿原考古学研究所 1977 なお、「まとめ」の項は久野邦雄の執筆になるものであるが、見解は両者協議の上のものであるので、部分的にここに引用する。
- 3) 寺沢薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館 1984

表6 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(1)

図番号 図版番号	地 区 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
37—1 96—8	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	壺 (口縁)	T—D—b	C : (121)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAb→ スリナデヨコICa				淡灰褐	
37—2 96—4	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	Ⅱ—A—3b	H : 164 C : 128 W : 140 B : 38	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIB	O. タタキ→ 一部スリナデヨコIC a i. スリナデヨコIB	O. タタキ i. ケズリB	40/CM	暗茶褐	・口縁～体部外面 にかけてスス付 着 ・底面～底部外面 に乾火痕あり
37—3 96—2	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	I—A—・b	H : (250) C : (180) W : (250) B : 32	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAb	O. タタキ i. (肩) スリナデヨコIAb スリナデIAb→ スリナデICa	O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデICa		O. (体部) 淡赤茶褐 (底部) 淡赤 i. 淡茶褐	
37—4 96—3	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	・――・b	C : (142) W : (185)	O. (口唇) スリナデヨコICa (口縁～頸) スリナデヨコIAb i. スリナデヨコICa	O. タタキ i. スリナデヨコIAa		40/CM 7/cm	淡褐	
37—5 96—1	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	I—B—1b	H : 199 C : 162 W : 185 B : 37	O. スリナデIB i. スリナデヨコIB	O. タタキ→ スリナデタテIAb i. スリナデヨコIAb	O. ケズリA i. スリナデIAb	30/CM	黒褐	・内部に炭化物 付着 ・底部外面にモ ミ圧痕あり
37—6 96—7	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	高坏	G—・――・	C : (161)	O. スリナデヨコICa i. ミガキA→ スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. スリナデICa			淡褐	
37—7 96—5	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	脚台 (高杯)	4—A—c	B : 142			O. (柱状部) ミガキA (裾部上半) タタキ→ (裾部下半) スリナデIa i. スリナデヨコICa		灰褐	・3方スカシ
37—8 96—6	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	鉢	Ⅳ—A1	H : 47 C : 76 B : 29	O. スリナデIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデIAa→ スリナデICa	O. スリナデIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデIAa→ スリナデICa	O. 押捺A i. 爪痕	23/cm	淡褐	・土器内から種 子出土 ・内面に炭化物、 赤色顔料が付着
37—9 96—9	第1トレンチ 濠内堆積土 灰黒色砂礫層 上面	甕 SY	Ⅱ—C—4e2	H : 136 C : 121 W : 143 B : 10	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. タタキ→ スリナデIAb i. ケズリA	O. タタキ→ スリナデIAb i. ケズリA	40/CM	淡褐	
37—10 96—10	第1トレンチ 濠内堆積土 灰黒色砂礫層 上面	底部 (甕)	2—C—b	B : 46			O. スリナデヨコICa i. スリナデ			・底面にモミ圧 痕あり
37—11 96—11	第1トレンチ 濠内堆積土 灰黒色砂礫層 上面	底部 (甕)	1—C—b	B : 31			O. スリナデIAa i. スリナデIAa	5/cm 7/cm		

表7 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(2)

図番号 図版番号	地 区 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
38—12 97—12	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	壺		C : (288)	O. i. ミガキA					
38—13 97—13	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	壺		C : (162)	O. (口縁) スリナデヨコ (頸) スリナデⅠAa→ スリナデⅠCa i. スリナデヨコ				淡茶褐	
38—14 97—14	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	底部 (甕)	3—1—・	B : 5.0			O. タタキ i. スリナデ			・内面にスス付 着
38—15 97—15	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	底部 (甕)	2—A—・	B : 3.8			O. タタキ→ スリナデⅠCa i. スリナデアAb?		O. 淡黒褐 i. 黒褐	・内面の一部に スス付着
38—16 97—16	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	有孔鉢		B : 3.9			O. 押捺A→ スリナデⅠCa i. 押捺A→ スリナデⅠCa		淡灰褐	・焼成後穿孔
38—17 97—17	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	土師器 高坏		—		O. ケズリ→ユビナデ i. ユビナデ→ ハラミガキ (放射状暗文) → ハラミガキ (螺旋状暗文)	O. ケズリ		茶褐	
38—18 97—18	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	脚台 (?)		B : (8.0)				O. スリナデ i. スリナデ	暗褐	・内面全体と外 面の一部にス ス付着
38—19 97—19	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	土師器 壺		C : (152)	O. ナデ i. ナデ	O. ミガキ i. ハケ			赤褐	
38—20 97—22	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	底部 (壺)		B : 5.0			O. マメツ不明		淡茶褐	
38—21 —	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	脚台 (高坏)		—		O. ヨコナデ			淡乳赤褐	
38—22 97—23	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 甕	甕A	C : (292)	O. ヨコナデ・押捺 i. ヨコナデ	O. ハケメ→ヨコナデ i. ヨコナデ	5/cm		淡褐	

表 8 纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (3)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
38—23 97—24	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環		C : (113)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ				
38—24 97—25	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環?		C : (128)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ケズリ i. 回転ナデ		淡赤褐	
38—25 97—26	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環?		C : (128)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ケズリ i. 回転ナデ		灰白	
38—26 97—27	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環	環C	H : (35) C : (146)	O. ナデ i. ナデ→ミガキ	O. ケズリ i. ナデ→ミガキ		淡赤褐	
38—27 97—28	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環?		H : 31 C : (144)	O. ナデ i. ナデ	O. 回転ケズリ i. ナデ		灰白	
38—28 97—29	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	須恵器 Ⅲ	ⅢB	B : (131)		O. (上半) ナデ (下半) ケズリ i. ナデ	O. (底部) 回転ヘラケズリ (高台) ヨコナデ i. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ	淡青灰	・ロクロ逆時計 回り
38—29 97—30	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	須恵器 Ⅲ	ⅢB	B : (142)			O. (底部) ケズリ→ナデ (高台) ナデ i. (底部) ナデ (高台) ナデ	暗青灰	・ロクロ時計回 り
38—30 97—31	第1トレンチ 濠内出土	土師器 環?		C : (140)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ケズリ→回転ナデ i. 回転ナデ		赤褐	
38—31 —	第1トレンチ 床土	底部 (?)	4—・	B : 30			O. スリナデ i. スリナデ	O. 淡褐 i. 赤褐	
38—32 —	第1トレンチ 床土	脚部 (高環)	・—A—c	—		O. スリナデ i. スリナデ			
39—33 98—32	第2トレンチ 前方部前面溝 黒色粘質土 (下層)	壺	G—・—・—・	C : 208	O. スリナデ I A b→ スリナデ I C a i. マメツ不明			赤褐	・二個一対の円 形浮文 8ヶ所

表 9 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色	調	備 考
					口	縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
39-34 98-33	第2トレンチ 前方部前面溝 黒色粘質土 (下層)	底部	2-A-・	B : 3.8				O. スリナデICa i. スリナデIAa	茶褐	
39-35 98-35	第3トレンチ SD-02	有孔鉢 底部		B : 3.6				O. タタキカスリナデIA b スリナデICa i. スリナデIB→ スリナデICa	茶褐	
39-36 98-36	第3トレンチ SD-01 上層	底部	2-A-・	B : (4.5)				O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデICa	O. 暗茶褐 i. 茶褐	
39-37 98-37	第3トレンチ SD-01 上層	瓦器 塊		C : (14.9)	O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)				O. 淡褐黒 i. 黒灰	
39-38 98-38	第3トレンチ SD-01 上層	土師器 鉢底部		B : (8.3)				O. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ i. (底部) ナデ・押捺→ ミガキナデ (高台) ヨコナデ	O. 淡褐 i. 黒灰	
39-39 98-39	第3トレンチ SD-03	口縁	H-I-?	C : (12.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデIAb→ スリナデヨコICb				O. 淡灰褐 i. 黒灰	・小溝
39-40 98-40	第3トレンチ SD-03	底部 (甕)	2-C-・	B : 4.0				O. タタキ 押捺A i. マメツ不明	O. 赤褐 i. 茶褐	・小溝
39-41 98-41	第3トレンチ SD-03	土師器 小皿		H : (1.4) C : (8.4)	O. ヨコナデ i. ヨコナデ				淡褐	・小溝
39-42 98-42	第3トレンチ SD-03	土師器 小皿		H : (1.4) C : (9.4)	O. ナデ i. ナデ		O. ヨコナデ・押捺		淡褐	・小溝
39-43 98-43	第3トレンチ SD-03	土師器 皿		H : (1.3) C : (9.2)	O. ヨコナデ i. ヨコナデ		O. ヨコナデ・押捺		淡褐	・第3トレンチ SD-01上 層と接合 ・小溝
39-44 98-44	第3トレンチ SD-03	瓦器 塊		C : (13.8)	O. ミガキ (暗文) i. ヨコナデ		O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)		黒灰	・第3トレンチ SD-01上 層と接合 ・小溝

表 10 纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色	調	備 考
					口	縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
39—45 98—45	第 3 トレンチ SD—0 3	瓦器 埴		C : (I72)	O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)		O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)		黒灰		・小溝
39—46 98—46	第 3 トレンチ SD—0 3	瓦器 埴		B : (59)				O. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ i. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ	淡灰		・小溝
39—47 98—47	第 3 トレンチ SD—0 3 上 包含層	瓦器 埴		B : (57)				O. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ i. (底部) ナデ→ミガキ (高台) ヨコナデ	黒灰		・第 3 トレンチ SD—0 3 直 小溝上包含層 と接合
39—48 98—48	第 3 トレンチ SX—0 1	脚台 (高坏)	・—A—・	—				O. マメツ不明 (ミガキ A か) i. スリナデ I C a	O. 淡赤褐 i. 赤褐		
39—49 98—49	第 3 トレンチ SX—0 2	脚台 (高坏)	・—B—・	—					茶褐		
39—50 —	第 2 トレンチ 床土	須恵器 ?		B : 5.3				O. (底部) 円形タタキ (高台) ヨコナデ i. (底部) 回転ナデ (高台) ヨコナデ	淡青灰		・クロ時計回 り
39—51 98—50	不明	脚台	・—A—・	B : (I58)				O. スリナデ I A a (端部) ミガキ B i. スリナデヨコ I A a (端部) スリナデヨコ I B	5/cm 4/cm		
— 97—20	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層 I	須恵器 甕									
— 98—34	第 2 トレンチ 前方部前面溝 黒色土 (下層)	口縁									

表 11 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
40-1 100-53	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木製品	L : 2945 W : 7.4 × 7.5	・両端折損 ・断面はほぼ円形	・一部に縦方向の手斧痕を残す	ヒノキ	分割材	(No.23)
40-2 99-51	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材	L : 2580 W : 22.5	・頭部は対面する2面を刃幅4.5cmの手斧で削り込み、先端を「コ」の字に加工 ・基部は平坦 ・断面はほぼ円形	・全面に手斧による丁寧な瓜削りを施す	ヒノキ	芯持材	(No.19)
40-3 100-52	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材	L : 2144 W : 13.2	・頭部を「く」の字に加工 ・基部は平坦 ・断面は多角楕円形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	芯持材	(No.22)
40-4 101-54	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材	L : 1955 W : 13.0 × 15.0	・頭部を「く」の字に加工 ・基部は斜めに切断 ・断面は多角楕円形	・頭部木口に工具刃幅4cm強の加工痕を顕著に残す ・側面に手斧による瓜削り状態を残す	ヒノキ	芯持材	(No.20)
40-5 103-56	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断柱材	L : 32.0 W : 18.0 × 18.9	・木口は一端を「く」の字に加工、他端を比較的平坦に加工 ・断面は多角楕円形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	分割材	(No.13)
40-6 103-57	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断柱材	L : 46.6 W : 17.0 × 18.8	・木口は、一端は対面する2方向およびそれに垂直する一方より削り出しており、他端は平坦 ・断面は多角楕円形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	分割材	(No.21)
40-7 102-55	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	臍穴付柱材	L : 1063 W : 18.0 × 18.4	・基部より約24cmの位置に臍穴を設ける ・臍穴は貫通しており、中ほどで段を画して形を変える ・一方は9 × 8 cm、深さ6.6cmの楕円柱形、他方は一辺6.2cmの方形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	分割材	(No.24)
41-8 —	第1トレンチ 濠内堆積土 灰色砂層下面	杭状木製品	L : 51.0 W : 8.0	・上部と基部先端を折損 ・樹皮がついた自然木の先端を尖状に加工	・刃幅2.5～3cm以上の工具を使用	—	芯持材	(No.32)
41-9 104-65	第1トレンチ 濠内堆積土 灰色砂層	有孔円盤状木製品	L : 34.6 W : 19.3 (36.0) T : 1.5	・1/2を折損 ・平面円形 ・中央部に2.5cmの方形の穴を設け、周囲に直径5mm程の孔を8ヶ所設ける(残存孔数5)	・表面を刃幅2cm前後の小型手斧で調整 ・側面にも丁寧な加工を施す ・孔はほかの部分に比べて粗雑である ・赤色顔料付着	ヒノキ	柵目材	(No.14)
41-10 104-61	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材片	L : 21.3 W : 16.4 T : 7.7	・1/2を折損 ・木口は一端は斜めに、他端はほぼ平坦に切断	・材の側面は刃幅5cm以上の手斧で加工し、木口は刃幅4cm以上の手斧で加工	ヒノキ	分割材	(No.16)
41-11 104-59	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	異形蓋状 木製品(蓋板部?)		・乾燥のため劣化。観察不可		—	板目材	13と一体品 観察不可能 (No.4)

表 12 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表（2）

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
41—12 104—58	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	柱材片	L : 14.0 W : 16.4 × 15.0	・木口の一端は、対面する2面より削り込みを施し、他端はほぼ平坦 ・断面は多角楕円形	・手斧痕がみられる	—	芯持材	(No. 1)
41—13 104—64	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	異形蓋状木製品 臍穴付棒状部	L : 44.5 W : 2.8 T : 2.2	・断面は、上部から約20cmのところから先端に向かいて、円形から長方形へと変わる ・先端から4.5cmのところから4.0×0.5cmの楕形の穴を設ける ・先端8cmをさらに細く作り、先端より4cmに約		—	分割材	(No. 4)
41—14 104—60	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	柱材片	L : 25.5 W : 13.5 (14.0)	・木口の一端を平坦に切断、他端は上方からの刃痕が認められる	・全面に手斧による瓜削りを施す	—	芯持材	(No. 3, 31)
41—15 104—62	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	小切り状木製品	L : 3.0 W : 3.2 T : 1.8			—	分割材	全面被火のため炭化 (No.105)
41—16 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	棒状木片	L : 30.0 W : 3.3 T : 2.6	・木口の一端を平坦に切断、他端は斜めに切断	・表面および木端を手斧で加工（刃幅3cm以上）	—	板目材	(No.29)
41—17 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	板状木片	L : 23.4 W : 6.4 T : 2.4			—	板目材	(No. 3-②)
42—18 104—63	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断材	L : 18.0 W : 10.2 × 12.3	・芯持材の両端を折切 ・横断面は多角形 ・側面は全面加工を施しているが、整形されていない なく、横断に伴う剥離等もあり詳細不明	・刃幅4～4.5cm程の鑿状工具で木目と直交する方向に切り込み、切断している	ヒノキ	芯持材	(No.39)
42—19 105—66	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	加工板	L : 14.9 W : 13.5 T : 1.6		・表面磨滅のため加工痕不明 ・切断面に荒い加工痕が認められるが刃幅等不明	—	板目材	(No.41)
42—20 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角材	L : 14.6 W : 8.0 T : 3.2	・木口の一端を斜めに、他端を平坦に削る	・木口に手斧痕がみられる	—	分割材	(No.30)
42—21 105—67	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角材	L : 15.4 W : 9.9 T : 3.5	・木口の一端を斜めに、他端を平坦に削る	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	分割材	(No.10)
42—22 105—69	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	矢板状木製品	L : 24.7 W : 6.9 T : 1.3		・手斧痕がみられる	—	板目材	(No.122)

表 13 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表(3)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
42—23 105—75	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 16.8 W : 4.4 T : 2.5	・断面長方形	・刃幅3 cm以上の工具で加工	—	分割材	(No.42)
42—24 105—68	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	角材	L : 16.8 W : 8.0 T : 1.8	・片側面は剥離あるいは折損 ・木口の一端を斜めに、他端を平坦に削る ・断面長方形	・全面に手斧痕がみられる ・斜めの面は数回に渡って削りこんでいる	—	板目材	(No.123)
42—25 105—77	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	板状木片	L : 19.3 W : 7.2 T : 2.3		・手斧痕がみられる	—	分割材	(No.124)
42—26 105—70	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 19.6 W : 4.2 T : 1.1		・手斧痕がみられる	—	板目材	(No.107)
42—27 105—76	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角材片	L : 17.2 W : 4.6 T : 3.0	・断面台形		クスギ	框目材	・被火により一部炭化 (No.40)
42—28 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 21.2 W : 4.2 T : 1.0			—	框目材	(No.15-②)
42—29 105—71	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	木片	L : 21.7 W : 3.6 T : 2.1	・断面三角形	・手斧痕がみられる	コウヤマキ	分割材	(No.11)
42—30 105—72	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 22.1 W : 2.8 × 3.0 T : 2.1	・両端折損 ・断面円形		—		(No.48)
42—31 106—80	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 23.9 W : 2.9 T : 2.1	・側面に斜めの切り込みが入る ・断面方形		—	分割材	(No.50)
42—32 105—73	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	角棒状木片	L : 23.7 W : 2.8 T : 1.6			—	分割材	(No.125)
42—33 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断木片	L : 16.2 W : 6.7 T : 3.2		・手斧痕がみられる	—		(No.15-①)

表 14 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表(4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
42—34 106—87	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 15.5 W : 1.7 T : 2.1	・両端折損		—		(No.49)
42—35 106—90	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 15.0 W : 3.0 × 1.8	・両端折損		—		(No.47)
42—36 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	木片	L : 6.4 W : 5.3 T : 2.4		・手斧痕がみられる	—		(No.38)
43—37 106—78	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 69.6 W : 2.4 T : 1.4	・3面に手斧痕が認められ、他面は剥離している ・残存部中央に鋭い刃物による斜めの切り込みを有する ・断面長方形	・各面ともに手斧で丁寧な面取りを行う	ヒノキ		(No.61, 62)
43—38 106—79	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	角棒状木片	L : 50.5 W : 3.0 T : 1.9	・木口的一方を斜めに削る ・断面長方形	・各面ともに手斧で丁寧な面取りを行う	ヒノキ		(No.120)
43—39 106—82	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 19.4 W : 3.2 T : 2.1	・下端折損 ・各面を手斧で加工した棒状の木の一面に、斜めに鋭い「V」字状の切り込みを入れる ・切込みを入れ、さらに木目方向の縦割りを施す ・断面長方形	・各面ともに手斧で丁寧な面取りを行う	—		(No.64)
43—40 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 15.9 W : 1.8 T : 0.4	・両端を折損 ・3面に手斧痕が認められ、他面は剥離している	・手斧で丁寧な面取りを行う	—		(No.63)
43—41 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木材	L : 51.8 W : 3.9	・断面楕円形	・全体に手斧痕を残す	—	分割材	(No.33)
43—42 106—94	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木材	L : 54.8 W : 5.2 T : 2.5			ヒノキ		(No.45)
43—43 106—81	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 23.0 W : 3.5 T : 3.4	・割材の棒に2ヶ所の切り込みを入れている	・手斧痕がみられる	—	分割材	(No.106)
43—44 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 29.3 W : 2.2 T : 0.9	・断面長方形		—	紐目材	(No.34)

表 15 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
43—45 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 33.0 W : 1.2 T : 2.4			—		(No.35)
43—46 106—92	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 31.0 W : 3.0 × 1.8	・断面楕円形		—		(No.46)
43—47 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 38.1 W : 4.3 T : 0.9	・断面長方形		—	板目材	(No.15-③)
43—48 106—93	第 1 トレンチ 濠内堆積土 青黒粘砂層	杭状木片	L : 39.3 W : 4.2 T : 3.5	・両端を折損 ・四分割材の先端を杭状にしたもの		—	分割材	(No.121)
44—49 107—95	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.7 W : 3.2 T : 0.2		・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	柃目材	(No.68)
44—50 107—105	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.6 W : 2.7 T : 0.2		・表面および両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.72)
44—51 107—101	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 10.5 W : 2.7 T : 0.4		・片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.69)
44—52 107—99	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.0 W : 3.2 T : 0.5	・両木口を斜めに削る	・木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	柃目材	(No.76)
44—53 107—97	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.5 W : 3.6 T : 0.2	・両木口を斜めに削る		ヒノキ	板目材	(No.73)
44—54 107—98	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.2 W : 2.7 T : 0.2	・両木口を斜めに削る	・表裏と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.75)
44—55 107—96	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.0 W : 3.1 T : 0.4	・両木口を斜めに削る	・表裏と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	柃目材	(No.59)

表 16 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (6)

図番号	地 区 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
図版番号								
44—56 107—100	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 65 W : 32 T : 04	・両木口を斜めに削る	・木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.77)
44—57 107—110	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 50 W : 23 T : 04	・両側面を折損 ・木口の一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.118)
44—58 107—109	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 60 W : 36 T : 03	・木口の一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ		(No.86)
44—59 107—108	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 68 W : 26 T : 02	・両側面と下端を折損	・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.117)
44—60 107—106	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 94 W : 21 T : 03		・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.97)
44—61 107—104	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 120 W : 25 T : 02	・両端を折損	・表面と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.67)
44—62 107—103	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 124 W : 25 T : 04	・下端を折損	・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.115)
44—63 107—102	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 124 W : 28 T : 04	・両端を折損 ・両側を加工した後もう一面を加工した時の削片 か	・表面と両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.66)
44—64 107—107	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 78 W : 28 T : 01		・表裏面に手斧痕がみられる	ヒノキ	柃目材	(No.116)
44—65 107—136	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 56 W : 22 T : 05	・表裏面と両側面が剥離または折損 ・両木口を斜めに削る	・木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.60)
44—66 107—132	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 62 W : 32 T : 05	・両木口を斜めに削る	・木口と両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.74)

表 17 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表(7)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
44-67 107-127	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.8 W : 2.6 T : 0.9	・両木口を斜めに削る	・木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.78)
44-68 107-134	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.6 W : 2.8 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・表面および両側面、木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.82)
44-69 107-129	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.2 W : 3.6 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・表面および両側面、木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.83)
44-70 107-130	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 4.7 W : 2.8 T : 0.7	・両木口を斜めに削る		ヒノキ	板目材	(No.91)
44-71 107-128	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.8 W : 2.4 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.112)
44-72 107-126	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.4 W : 3.1 T : 0.9	・樹皮側を小型手斧で加工した丸材または分割材を制ったものか ・両木口を斜めに削る	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.84)
44-73 107-135	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.0 W : 5.7 T : 0.8		・表面に千鳥に加工痕を有す	ヒノキ	板目材	(No.80)
44-74 107-131	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.3 W : 2.7 T : 0.7	・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.114)
44-75 107-133	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.5 W : 3.6 T : 0.6	・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.89)
44-76 107-124	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.1 W : 2.7 T : 0.8	・表裏ともに剥離 ・両木口を斜めに削る	・両木口と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.109)
44-77 107-125	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.2 W : 3.3 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.81)

表 18 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (8)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
44-78 107-123	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.7 W : 2.7 T : 1.1	・両木口を斜めに削る	・表面および片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.71)
45-79 107-118	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.2 W : 3.0 T : 0.9	・両木口を斜めに削る	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.87)
45-80 107-117	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.3 W : 3.7 T : 1.1	・樹皮側を手斧で整えた丸材に二次的加工を施した際の削片か	・一次加工時の工具刃幅1.2cm以上 ・二次加工時の工具刃幅2.7cm以上	ヒノキ	分割材	(No.58)
45-81 107-116	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 11.5 W : 2.4 T : 0.7	・断面長方形	・表面と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	紐目材	(No.52)
45-82 106-88	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 12.6 W : 3.0 T : 1.1	・断面長方形	・両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.53)
45-83 107-112	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.2 W : 2.7 T : 0.5			ヒノキ		(No.90)
45-84 107-114	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.4 W : 2.5 T : 0.9	・木口的一方を斜めに削っており、他方は折損不明 ・断面長方形		ヒノキ	板目材	(No.103)
45-85 107-111	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.0 W : 2.7 T : 0.6	・木口的一方を斜めに削っており、他方は折損不明 ・断面長方形	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.95)
45-86 107-113	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.1 W : 2.2 T : 1.1		・木口と両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.92)
45-87 107-115	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.3 W : 2.5 T : 0.8	・木口的一方を斜めに削っており、他方は折損不明 ・断面長方形	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.111)
45-88 107-122	第 1 トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	削片	L : 7.7 W : 4.9 T : 0.9	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る	・斜めの部分は 2 回にわたって削り込んでいる	ヒノキ		(No.126)

表 19 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(9)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
45—89 107—119	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.9 W : 2.6 T : 0.8	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.93)
45—90 107—120	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.1 W : 3.5 T : 0.8	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る ・表面に斜めに切り込んだ刃痕あり		ヒノキ	板目材	(No.113)
45—91 106—86	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.3 W : 1.9 T : 1.2		・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.102)
45—92 108—144	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.7 W : 1.1 T : 1.3	・両木口を斜めに削る	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.110)
45—93 106—85	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.1 W : 1.8 T : 1.3	・上面は木目方向に、一方は深く斜めに、他方は 0.5cmくらいの深さまで斜めに切り込む	・両木口に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.96)
45—94 108—142	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.2 W : 2.5 T : 1.3	・両木口を斜めに削る ・断面長方形	・木口と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.79)
45—95 108—141	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 14.5 W : 2.0 T : 1.5	・両木口を斜めに削る ・断面平行四辺形		ヒノキ		(No.36)
45—96 108—143	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 13.4 W : 5.0 T : 1.9	・裏面剥離 ・両木口を斜めに削る ・丸材の表面を手斧で加工し、さらに大きな手斧 で再加工した時の削片か	・表面と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.108)
45—97 108—140	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.0 W : 5.5 T : 1.5	・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.57)
45—98 108—139	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 14.9 W : 2.1 T : 2.3	・下端を折損 ・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.37)
46—99 107—121	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.5 W : 5.8 T : 1.2	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.43)

表 20 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表 (10)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
46—100 108—138	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.1 W : 5.2 T : 1.6	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.94)
46—101 108—137	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.1 W : 6.3 T : 1.5	・表裏面と両側面は剥離 ・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.44)
46—102 108—148	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 4.7 W : 2.0 T : 0.8	・方形の板状木の角を削った削片	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.100)
46—103 108—152	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 4.5 W : 3.6 T : 0.6	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.99)
46—104 108—147	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.8 W : 4.0 T : 0.6	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.98)
46—105 108—151	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.9 W : 3.9 T : 0.8	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.70)
46—106 108—150	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.3 W : 3.1 T : 0.1	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ	榎目材	(No.104)
46—107 108—146	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.1 W : 3.2 T : 0.2	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.119)
46—108 108—149	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.3 W : 3.1 T : 0.2	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.101)
46—109 108—145	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	削片	L : 6.1 W : 4.8 T : 0.7	・樹皮側を加工した丸材から削られたものか	・刃幅2cm以上の工具で表面を加工した後、さらに刃幅4.7cm以上の手斧で削り取っている	ヒノキ	板目材	(No.28)
46—110 106—83	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 17.9 W : 2.0 T : 1.0	・両端を折損 ・断面長方形		ヒノキ	板目材	(No.56)

表 21 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (11)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
46—111 106—89	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 17.3 W : 2.5 T : 1.4	・裏面および両側面が剥離、両端を折損		ヒノキ	柵目材	(No.54)
46—112 106—84	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 17.1 W : 3.4 T : 1.1		・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.55)
46—113 106—91	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 15.2 W : 3.0 T : 1.7	・両端を折損 ・断面楕円形		—		(No.65)
46—114 105—74	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 14.8 W : 5.1 T : 3.6	・樹皮側を加工した丸材から削られたものか	・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	分割材	(No.51)
(115) 109—154	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	円座状樹皮製品	φ : 24	・東ねた栓皮を円状に巻き、外から中心へ巻き綴じを 6 ヶ所施している		ヒノキ 樹皮		・赤色顔料が付着
(116) 109—155	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	円座状樹皮製品	φ : 20			ヒノキ 樹皮		・赤色顔料が付着
(117) 109—156	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	円座状樹皮製品	φ : 16			ヒノキ 樹皮		・赤色顔料が付着

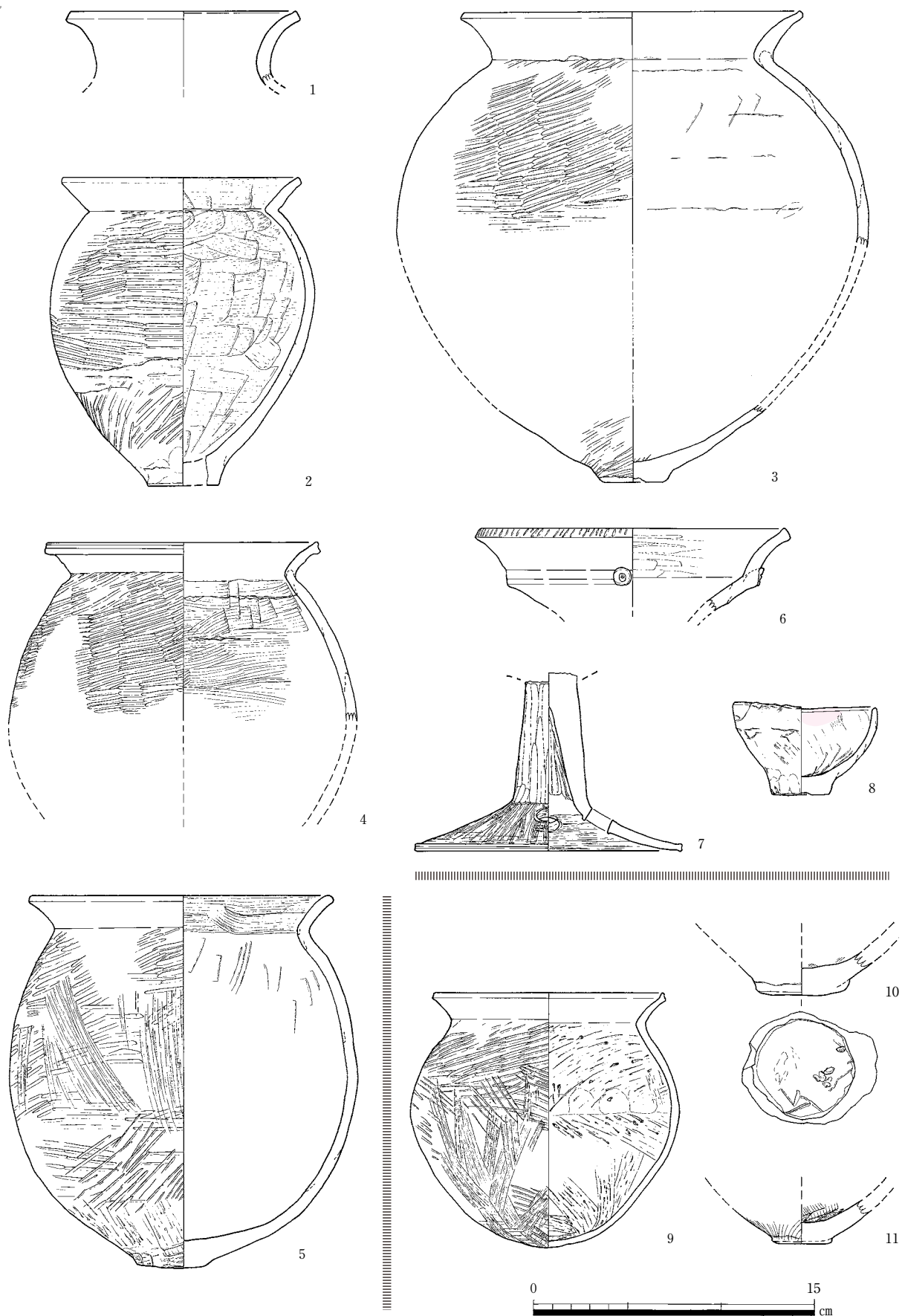


図37 纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図1 (1/3)
 第1トレンチ 濠内堆積土：1～8 黒色粘土層Ⅱ 9～11 黒灰色砂礫層上面

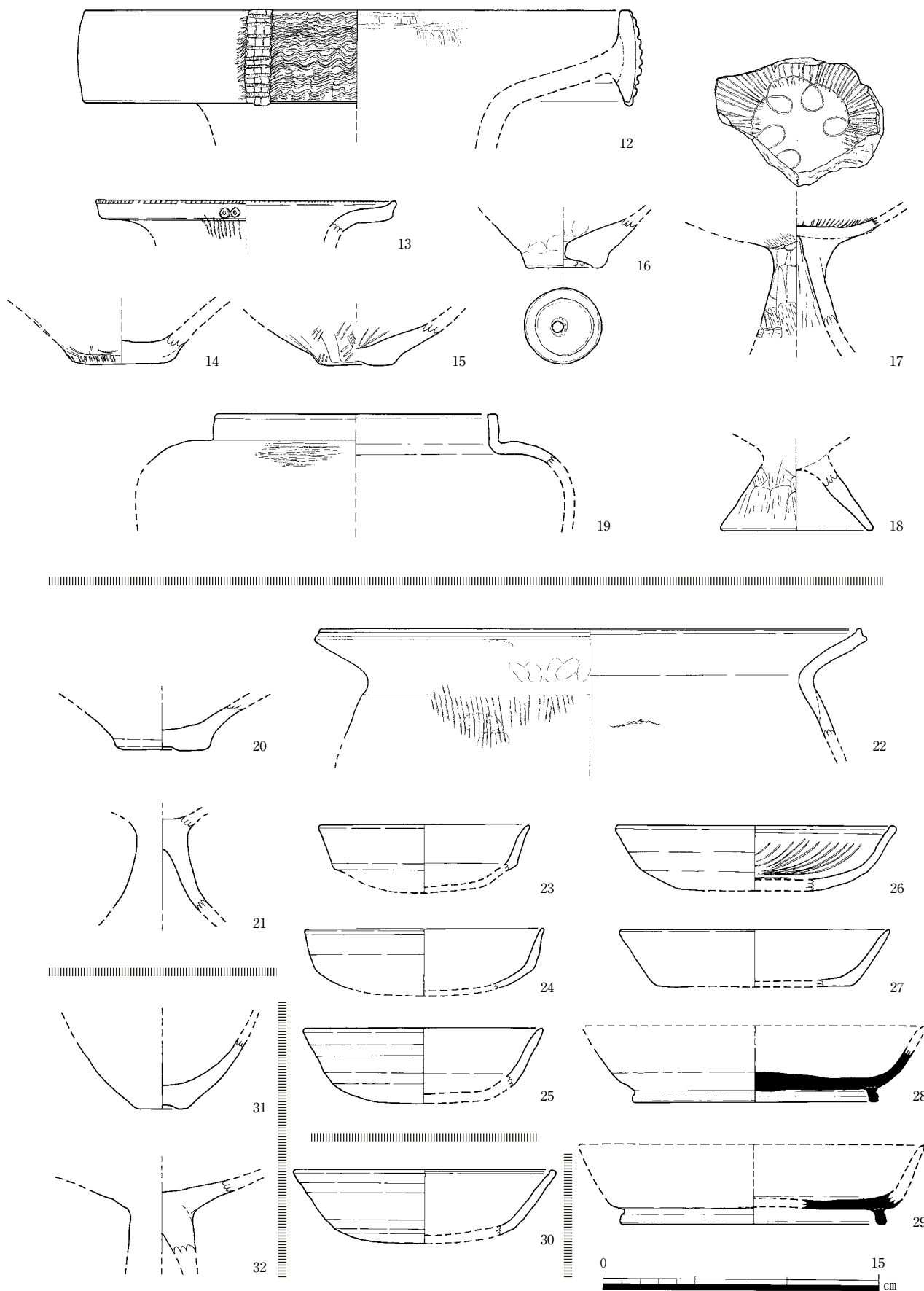


図38 纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図2 (1/3)
 第1トレンチ 濠内堆積土：12～19 黒色粘土層Ⅰ 20～29 暗灰褐色土 30 濠内出土 31～32 床土

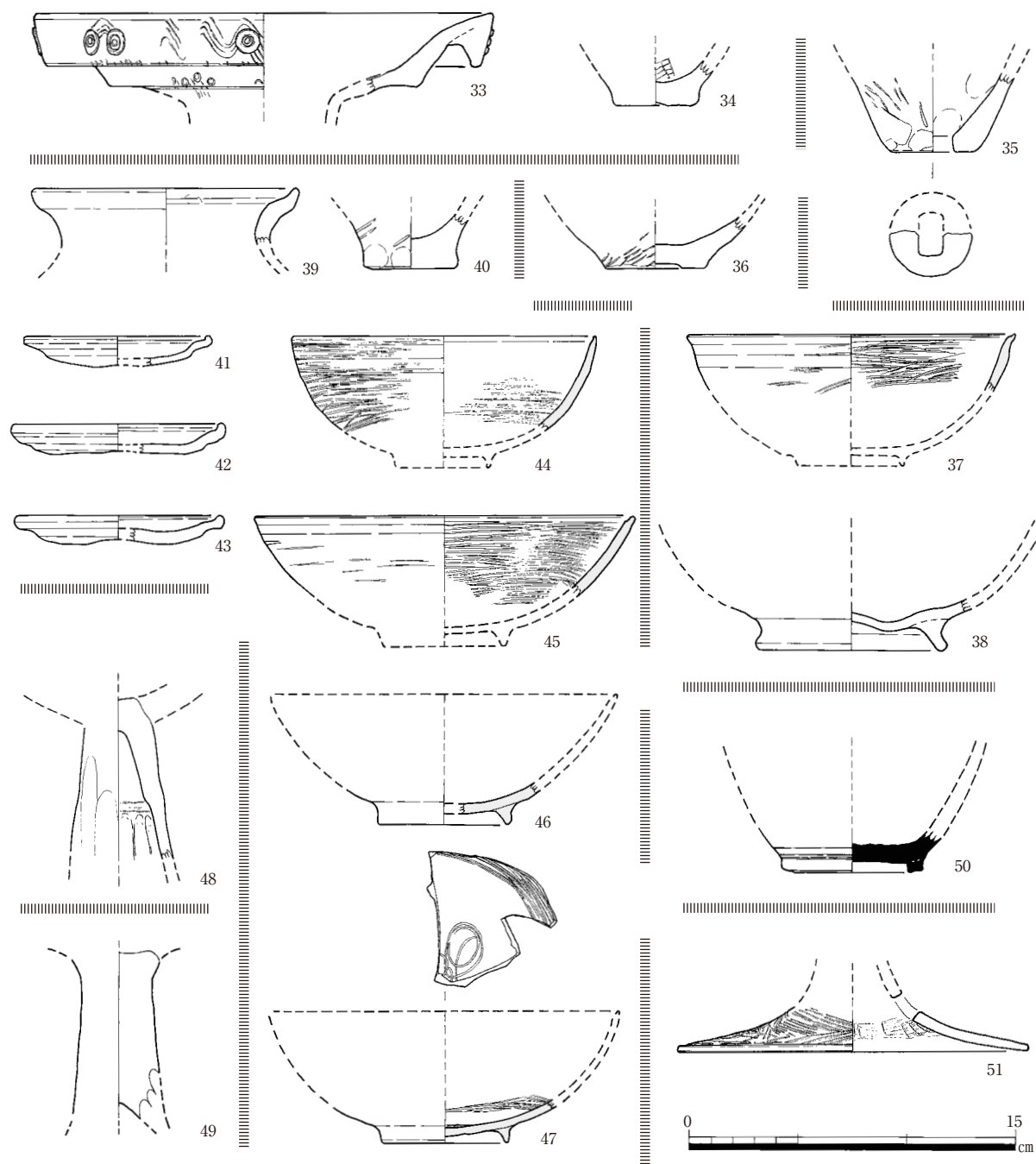


図39 纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図3 (1/3)
 第2トレンチ：33・34 前方部前面溝 黒色粘質土（下層） 50 床土
 第3トレンチ：35 S D - 02 36～38 S D - 01 上層 39～47 S D - 03
 48 S X - 01 49 S X - 02 51 不明

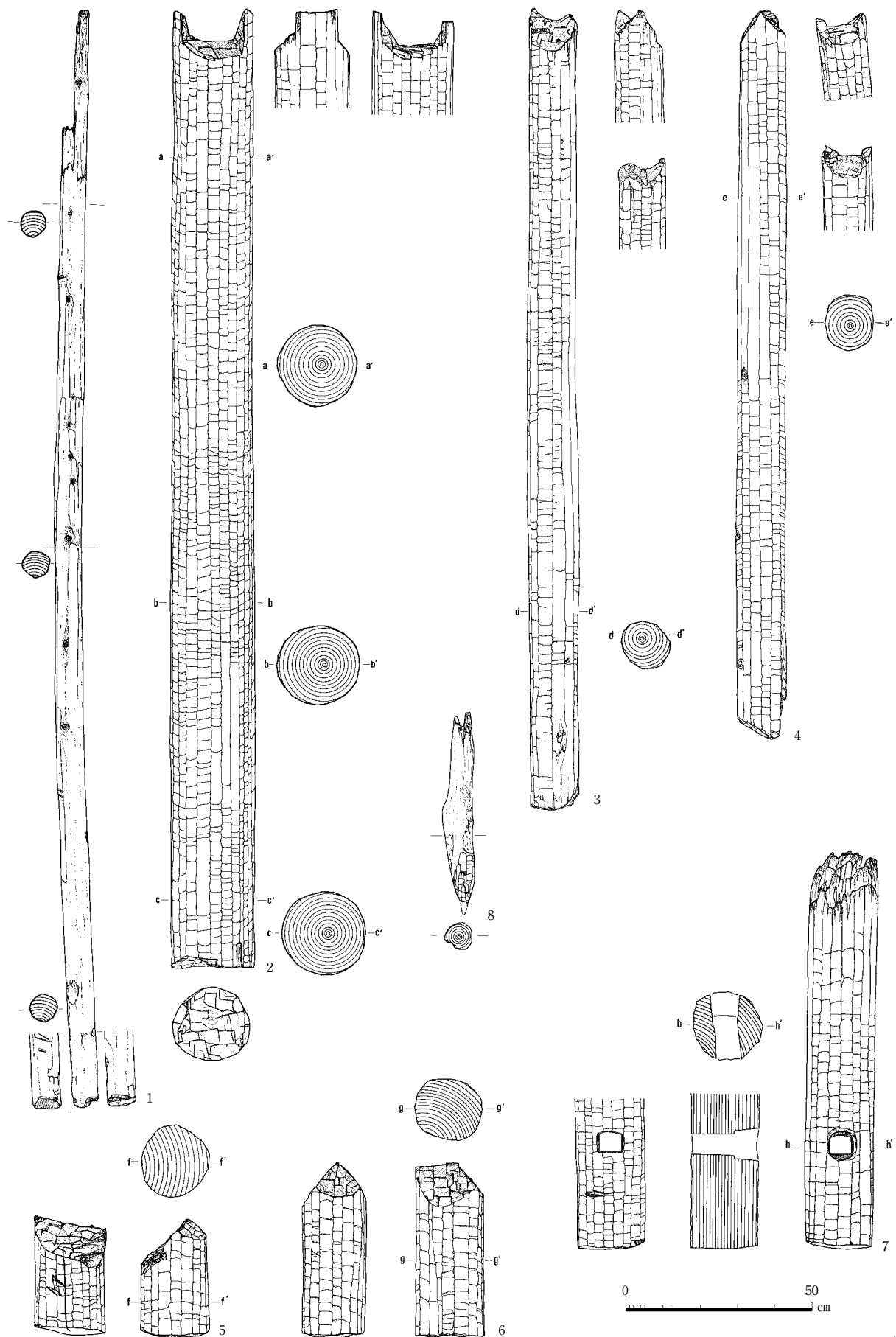


図40 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図1 (1/15)
第1トレンチ 濠内堆積土：1～7 黒色粘土層Ⅱ 8 灰色砂層下面

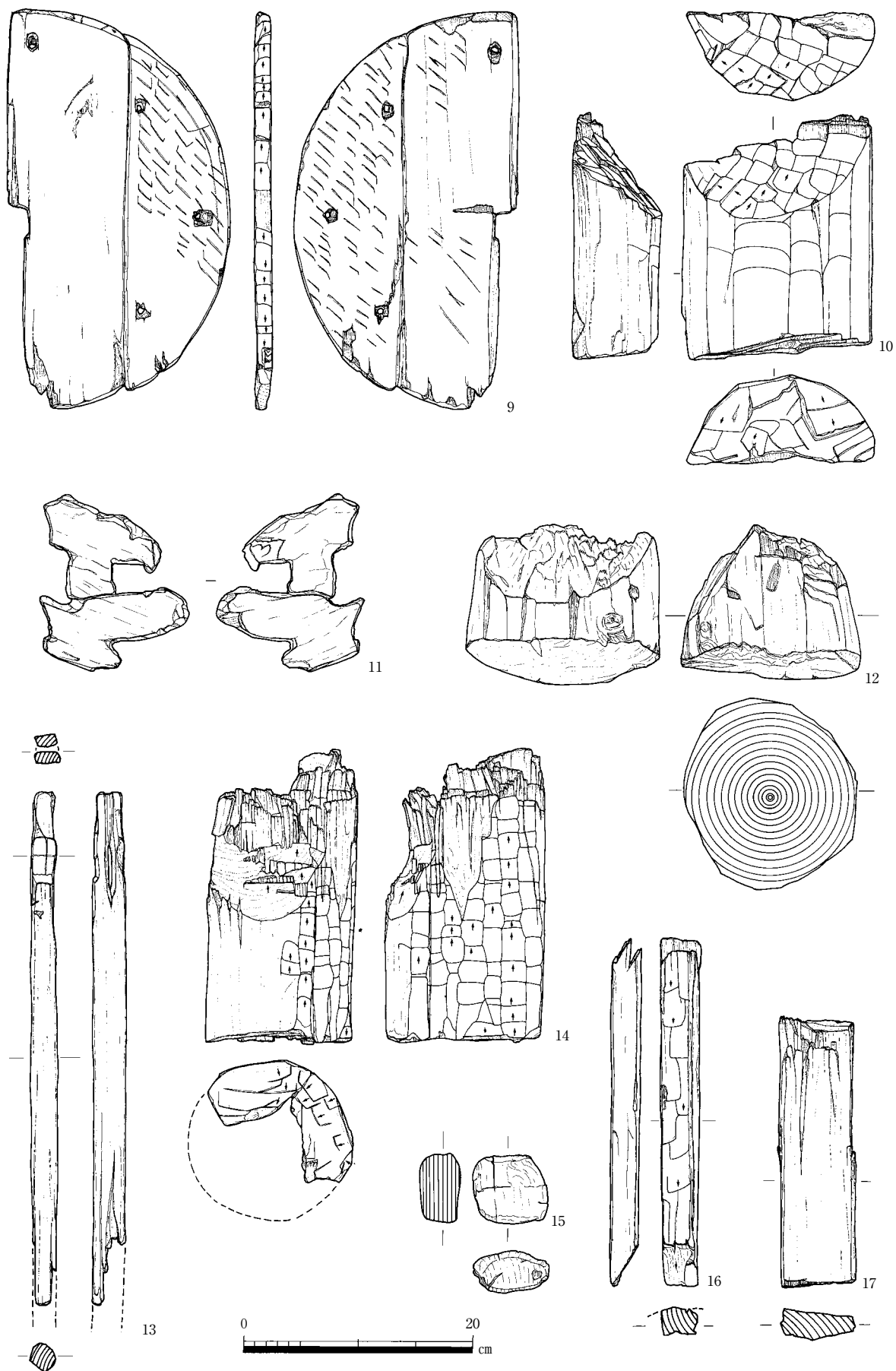


図41 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図2 (1/5)
 第1トレンチ 濠内堆積土: 10、15、17 黒色粘土層Ⅱ 9、11~14、16・17 黒灰色砂礫層

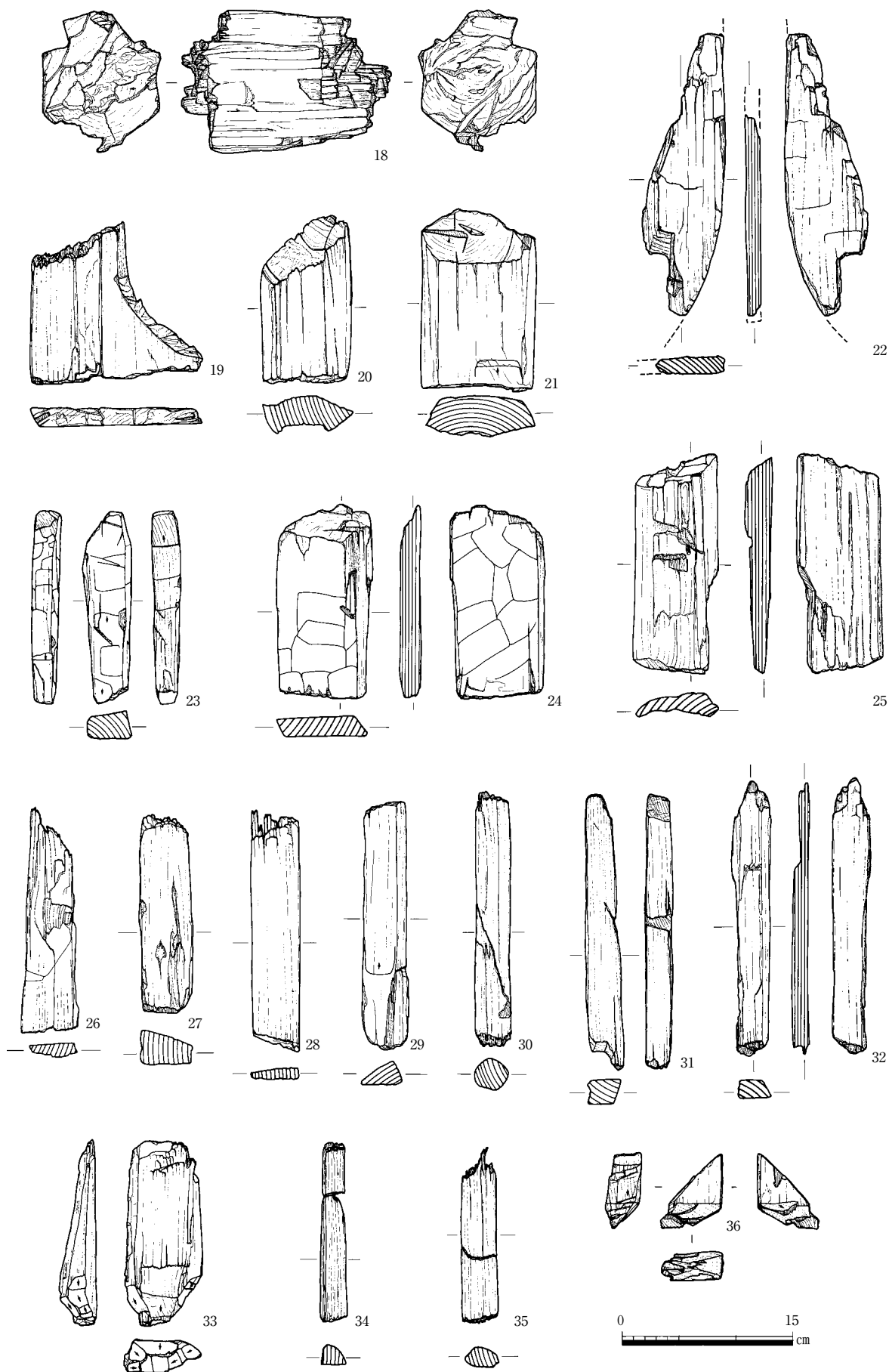


図42 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図3 (1/5)
 第1トレンチ 濠内堆積土：18～23、26～36 黒色粘土層Ⅱ 24・25、32 青黒色粘砂層

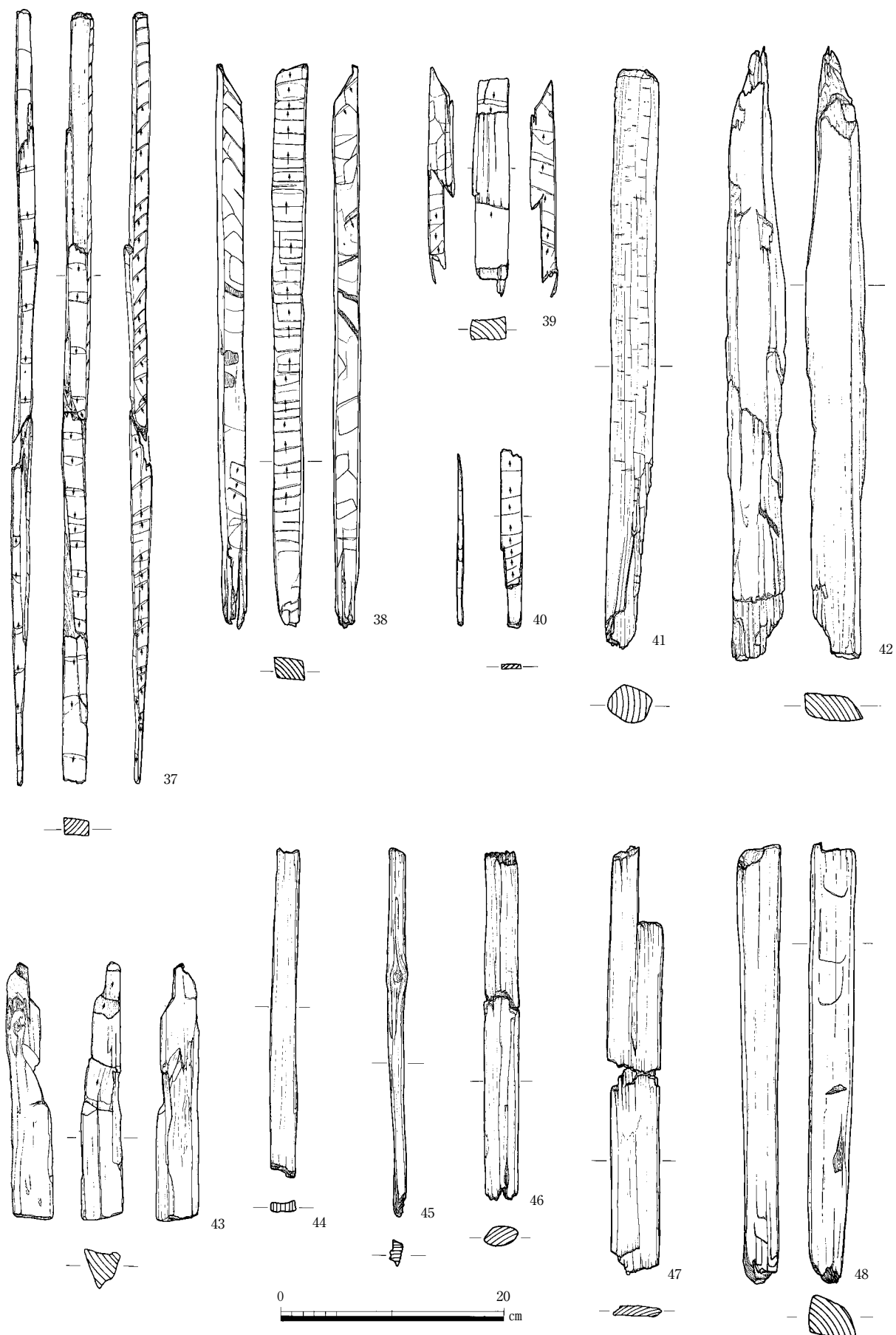


図43 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図4 (1/5)
 第1トレンチ 濠内堆積土：37、39～47 黒色粘土層Ⅱ 38、48 青黒色粘砂層

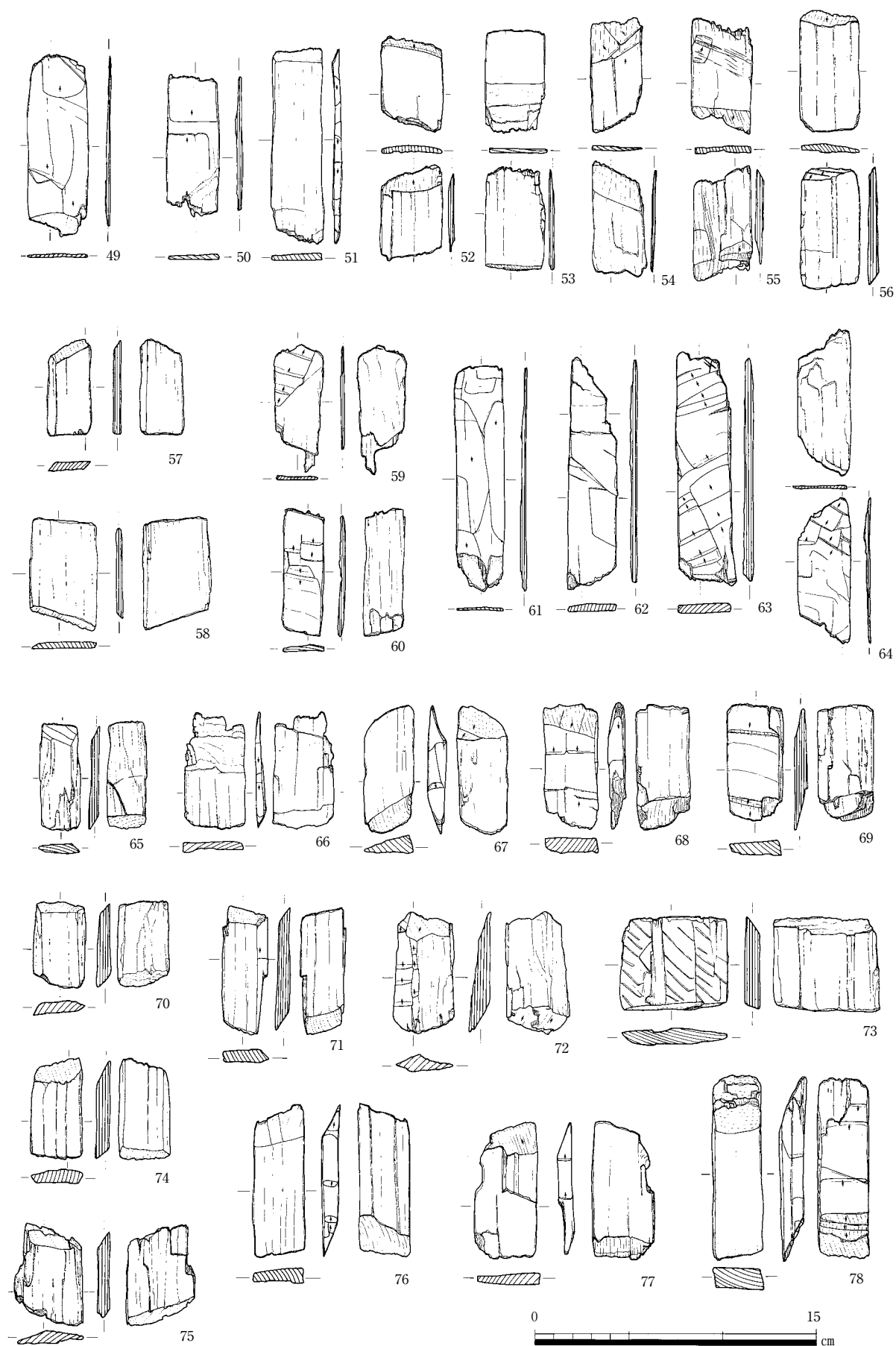


図44 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図5 (1/3)
第1トレンチ 濠内堆積土：49~78 黒色粘土層Ⅱ

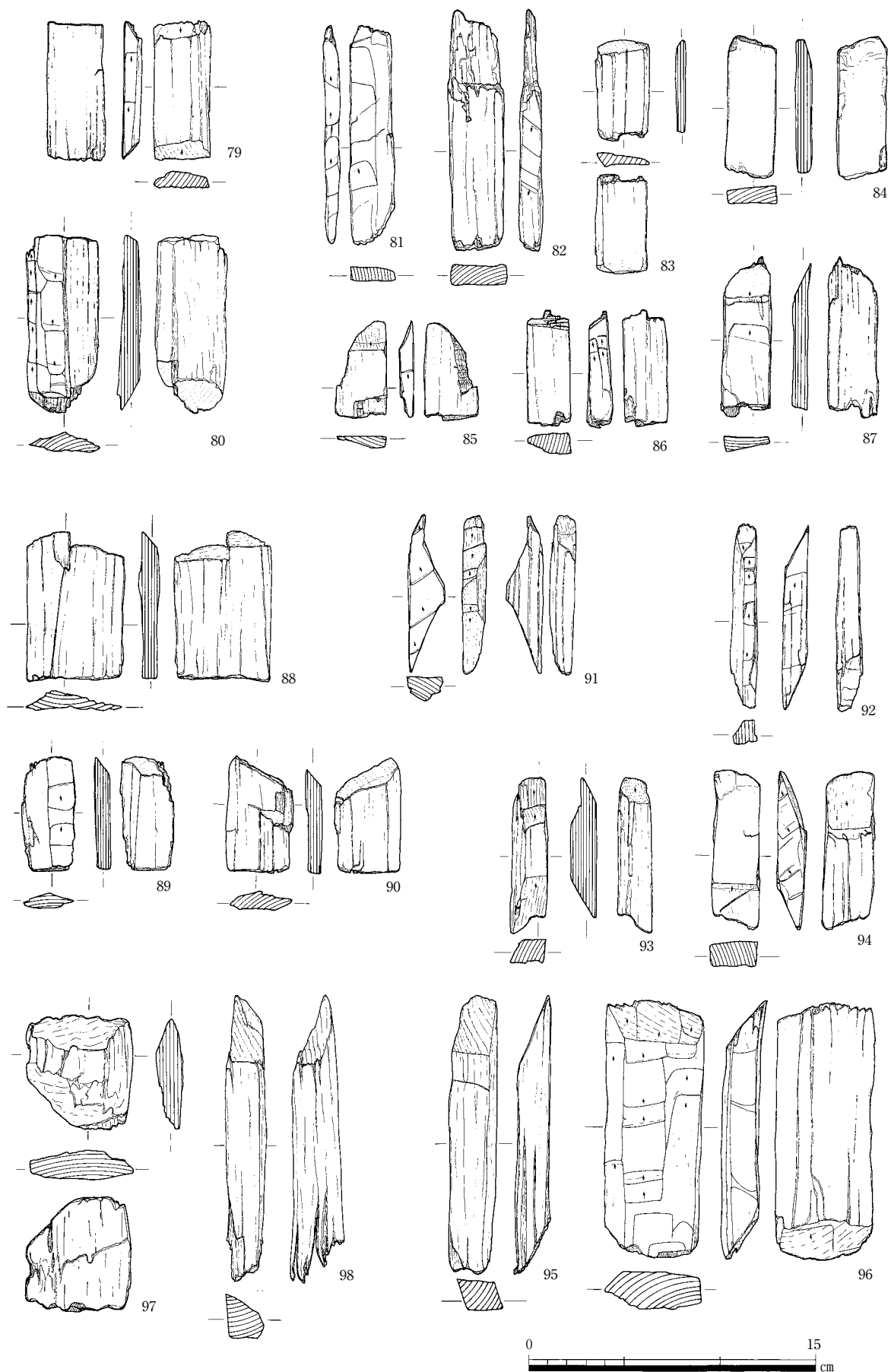


図45 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図6 (1/3)
 第1トレンチ 濠内堆積土：79～87、89～98 黒色粘土層Ⅱ 88 青黒色粘砂層

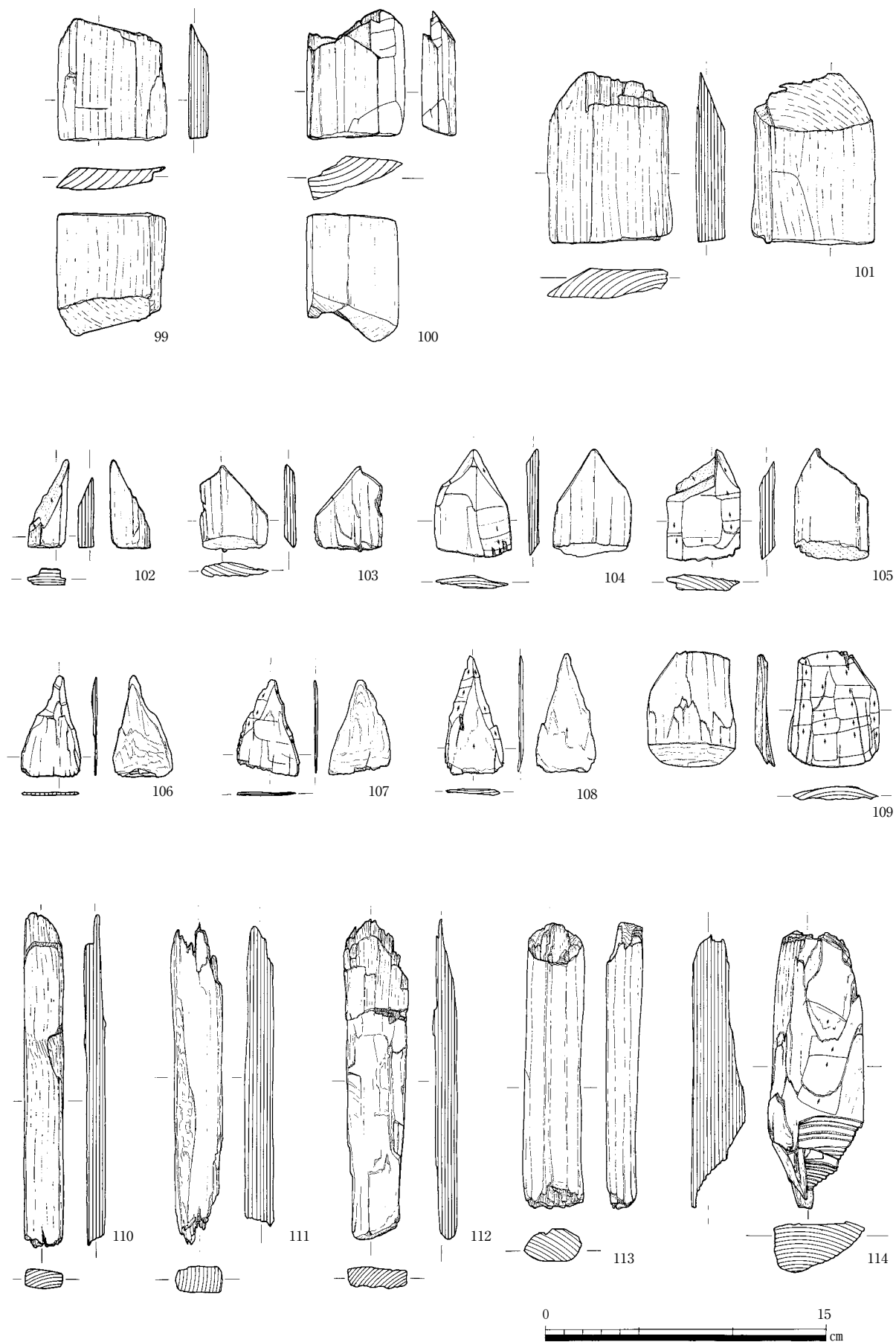


図46 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図7 (1/3)
 第1トレンチ 濠内堆積土：99～108、110～114 黒色粘土層Ⅱ 109 黒灰色砂礫層

第6章 纏向石塚古墳第4次調査報告

(纏向遺跡第55次調査報告)

第1節 はじめに

纏向石塚古墳の調査は、昭和46年から昭和51年の間に3次にわたって実施されているが、発掘調査は墳丘の西側と南側に限られていた。とりわけ第3次調査では現在墳丘が残る後円部から南東方向に張り出す前方部が確認され、初めて墳丘が前方後円形であることが確定されたことから前方部の形状や、周濠の形状、墳丘の規模等の早急な確認が期待されていた。

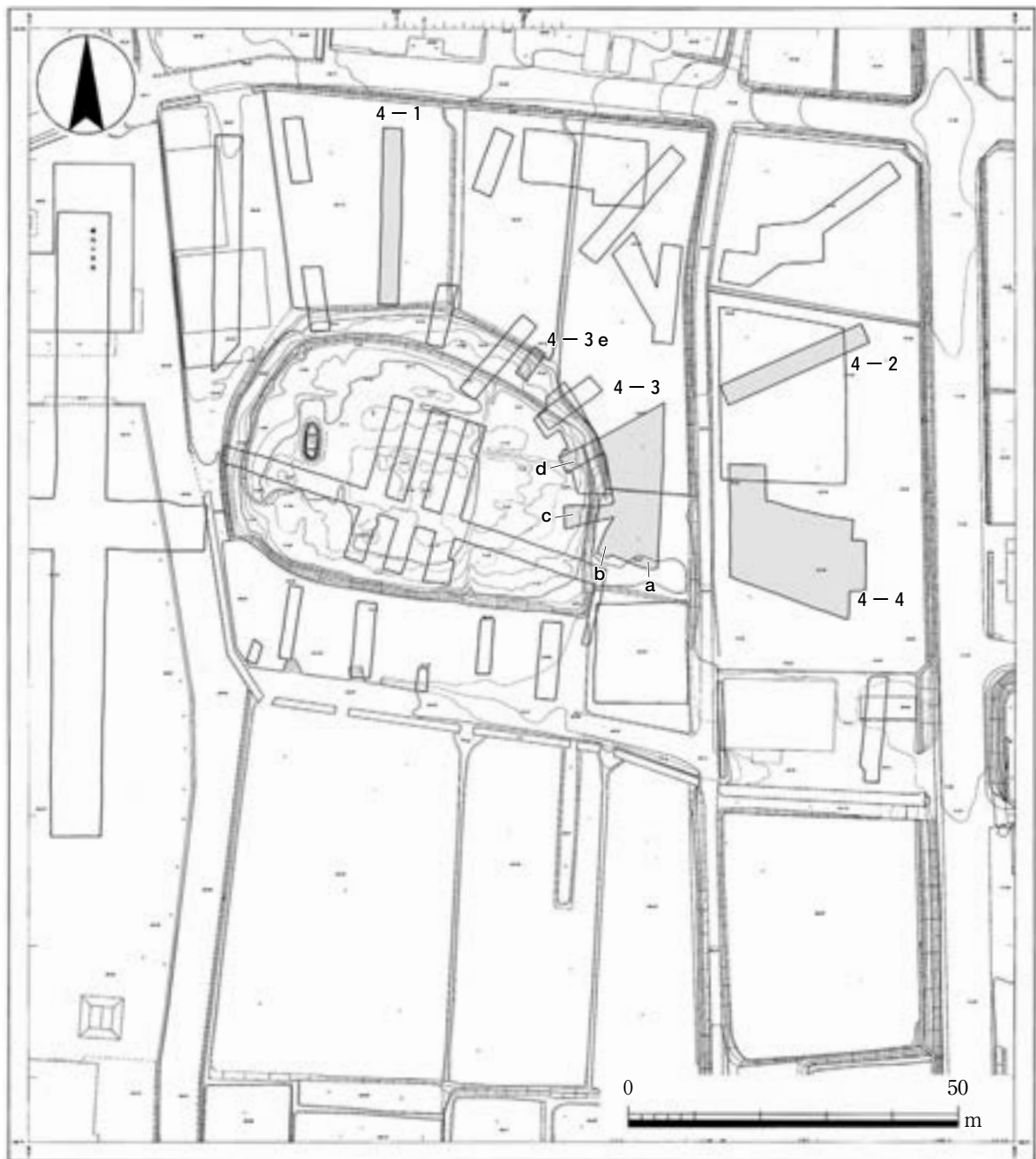


図47 纏向石塚古墳第4次調査地位置図（1／1,000）

こうして実に23年ぶりに、桜井市教育委員会によって纏向石塚古墳の前方部を中心とした確認調査が計画され、平成元年4月17日から6月17日にわたって第4次調査が実施される運びとなった。調査は桜井市教育委員会社会教育課の萩原儀征、清水眞一、奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫が担当した。

実はこの調査の空白期間には、纏向石塚古墳は保存整備を目指して（財）大和文化財保存会による用地買収が進められており、発掘調査はそうした纏向石塚古墳の保存整備事業に先だつ範囲確認調査として位置づけられ、纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと実施されたのである。

調査地点は、桜井市大字太田255-2番地ほかで、未確認部分であるクビレ部の北側と前方部前面部分、後円部の北側周濠に重点をおくこととなり、纏向石塚古墳の墳形と周濠形態全体を把握しようというものであった。調査方法は、既往の調査成果を補足することを目的とするため、クビレ部北側周濠以外は墳丘と周濠の確認をできるだけ上面で確認することとされた。その結果、第1・第2トレンチでは墳丘と濠の取り付き部分と濠外肩部を上面で確認した。

また第4次調査の主体をなす第3トレンチでは、前方部の形状と第3次調査までに確認した濠内堆積状態と時期の再確認を目的として、墳丘裾と周濠底までの発掘調査をおこなったが、既往の調査で認められた植物腐植土層下のいわゆる黒色粘土層Ⅱの堆積は確認できなかった。以下、調査地点（トレンチ）ごとの発掘調査の報告をおこなう。

第2節 クビレ部北側周濠の調査（第3トレンチ）

（1）調査の概要

第3トレンチは第3次調査で検出したクビレ部の北側の状況を確認するために設定した本次調査では主体となる調査区である。調査区は、標高70.0mの等高線がわずかに前方部の隆起を残すと考えられる部分から周濠推定部分に、南北25.5m、東西約8mの矩形の調査区を設定し、前方部から周濠にかけて地山面まで全掘をおこなった中心部分（aトレンチと呼称）と、aトレンチから前方部に延ばしたbトレンチ、後円部墳丘に延ばしたc・dトレンチを補助トレンチとして設定し、必要に応じ拡張する方法をとった。

その結果、a・bトレンチでは前方部北側の裾線を検出した。cトレンチでは前方部と後円部の接点において後円部裾線が前方部北裾線とほぼ直交するような状態で検出された。

cトレンチは、クビレ部が推定される地点に、後円部の墳丘裾を確認するために設定した幅3m、長さ7.5mのトレンチで、当初の調査区（a・bトレンチ）では予定通りに墳丘裾が検出されなかったために、急遽設定した。その結果、墳丘裾は思いのほか現墳丘内に食い込んで検出され、現墳丘地表下1.7mにわたって10世紀末頃の整地・盛土地層がなされていることが判明した。しかし、地山直上の高さ50cmにわたっては本来の墳丘盛土と考え得る暗褐色の硬質の土層を確認した。

dトレンチは、後円部墳丘確認のために後円部北東裾に設定したトレンチ（幅3m、長さ7m）で、現在の墳丘裾より5.2m内側で本来の墳丘裾線を確認した。また、10世紀末頃の整地層は1.6mに及んでいる。また本来の墳丘盛土も高さ80cmにわたって確認したが、地山の高まりや成形の状況は認められ

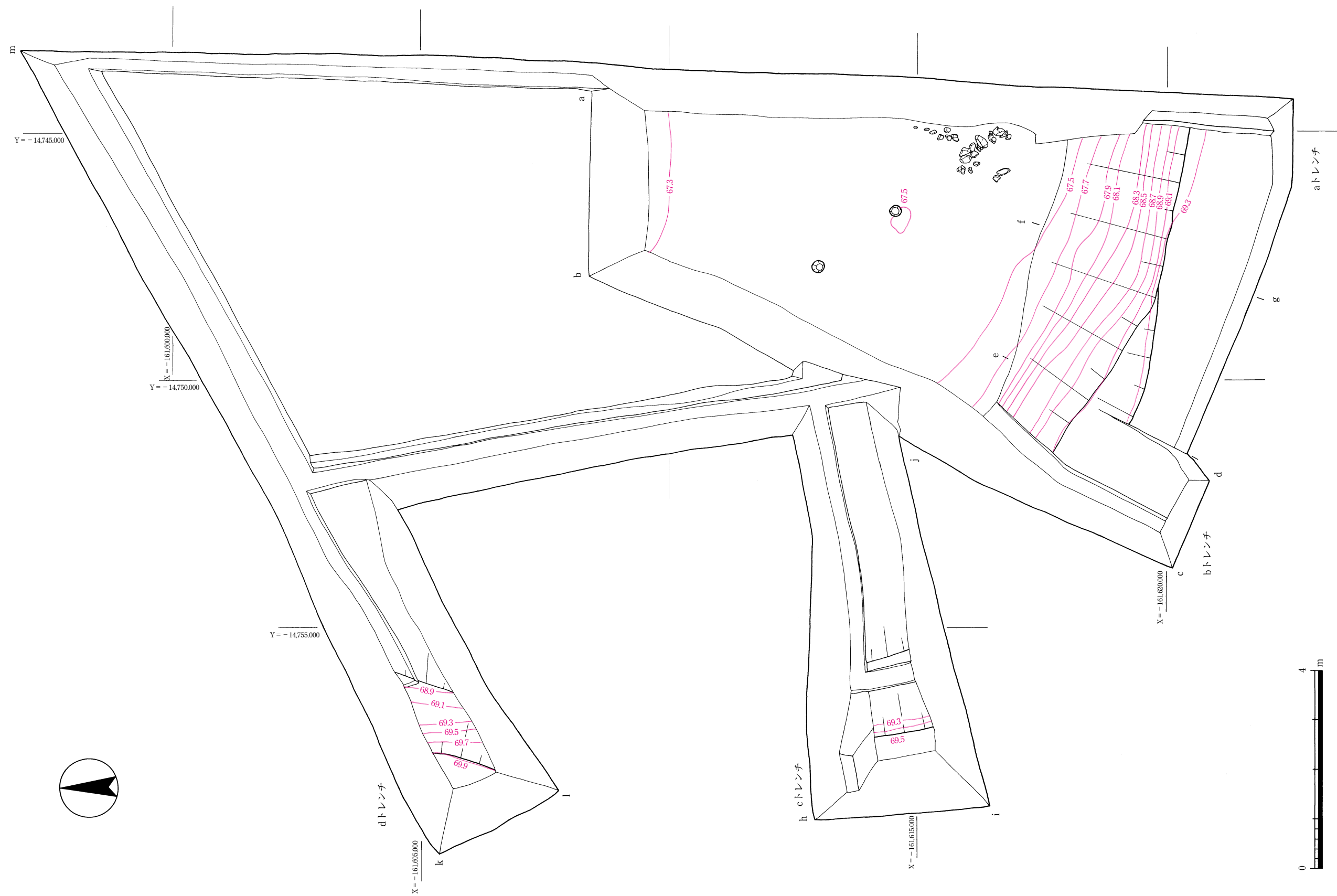


図48 4-3 トレンチ平面図 (1/80)

ない。

（２）墳丘盛土の堆積状況とその時期

クビレ部北側の墳丘の堆積状況は、aトレンチのe—dライン、g—fライン、bトレンチ西壁（c—bライン）、cトレンチ南・西壁（j—iライン・i—hライン）、dトレンチ北・西壁（k—mライン・l—kライン）において比較検討した。

前方部の土層状況は、a・bトレンチにおいて検出できたが、後世の削平が著しく、現地表より70cmは11世紀以降の畑跡や水田跡によって攪乱を受けてはいたものの、地山上30～40cmにわたって、本来の墳丘盛土と考えられる暗黄灰色砂質の盛土層ないしはその崩壊土（31～38層）が確認できた。現状で確認できる盛土面は標高69.4mで、前方部の地山層（39～41層）上面の水準はほぼ69.0mである。

16～20層は本来の墳丘土上に盛り上げられた土壌で、あたかも墳丘盛土のように見えるが、それは暗褐色砂質土系土層（14・15・21・22層）の充填する溝状遺構による作業面のためであり、おそらくは11世紀以降の最初の水田化に伴うものであろう。また、11・12層で切断された作業面も後世（おそらく13世紀後半以降）の水田化によるものであろう。

なお、33・34層は墳丘盛土残存面からの掘り込み充填土であり、幅60cm、深さ1mにわたって掘削されており、墳丘形成時ないしは形成後に穿たれた土坑の可能性があるが、その性格は不明である。

一方、後円部の墳丘盛土状況は、c・dトレンチにおいて把握できる。

cトレンチでは、20層のみが本来の墳丘盛土層であり、西壁の状況からは50～60cmの厚さで盛土されていることがわかる。炭化物と粘土ブロックが混入してよく締まっており、古式土師器細片が包含される。しかし、その上部の現状で墳丘を形成している土層はいずれも中世以降の二次的に盛土された土壌であり、中世以降、墳丘の縁辺部分に大きく手が加えられたことを物語っている。残存盛土の上面は標高約70m、地山（21・22・23層）上面は約69.3mと、a・bトレンチの前方部より高い。

dトレンチでは、44・45層が本来の墳丘盛土層である。前者は砂礫や炭化物細片が混入してよく締まっており、後者は炭化物や腐植土をふくむ暗（灰）褐色土で粘性が高く、やはり古式土師器破片が出土する。後者は現状で1.5mの厚さを示し、標高も70.8mと最も高い水準を記録している。墳丘下地山（46層）面の標高は69.3mと、cトレンチに大過ない

45層出土の土師器は4点が知られる。1はほぼ完形に近い小形の高坏で、坏部は明瞭な稜線をもって外傾して直線的に伸びる。明らかに庄内1式以降の型式的範疇に属する。2は甕底部、3・4は鉢底部で4は有孔鉢である。2～4は詳細な時期決定資料とはならないが、1は墳丘の形成が遡っても庄内1式段階であることを示しているといえる。

ここでも現墳丘縁辺部の盛土は明らかに中世以降の新しいことがわかる。本来の墳丘を削土した作業面には水田化の痕跡が幾重にも確認される。墳丘縁辺の溝状断面から、①39層 → ②37層 → ③28層 → ④24層 → ⑤22層という水田化の作業が確認できるが、それはそれぞれ、①40層 → ②38層 → 35層 → ③34層 → ④33層 → ⑤21・20層 → 19層という水田耕土の諸段階に対応している。

図49 4-3 a・bトレンチ断面図 (1/80)

図50 4-3 c・d トレンチ断面図 (1/80)

この段階までの纏向石塚古墳後円部墳丘は、地山層の落ちるラインから勘案して、本来の墳丘一周濠上面ラインを5.2m後退したことになるが、この段階で再度、19層上面から墳丘が大規模に盛土されて、⑥水田化の作業面12・13層あるいは9・10層による水田耕土（8層）→そして現水田耕土（1層）へと継起的に展開したことがわかる。その時期は明確ではないが、出土した遺物の年代から中世末から近世の頃と推定している。

（３）周濠の堆積状況とその時期

クビレ部北側（第3トレンチ内）の周濠の堆積は、dトレンチ北壁の延長を断ち割った部分（k—mライン）と、濠底までの主体的な調査を行ったa・bトレンチの西壁（前方部に直交して設定したbトレンチ西壁の延長c—bライン）、b—aラインにおいて検討し、東壁において比較検討した。c・dトレンチにおいては後円部墳丘下地山面と周濠堆積上面までの調査しかおこなっていないので、墳丘一周濠上面ラインを検出するに止まっている。

周濠の堆積土は大別すると、上から（青）黒（灰）色粘質土層Ⅰ（以下、第1～3次調査にならって「黒粘Ⅰ」と呼称）、→植物腐植土層（同、「植物層」と呼称）→暗青灰色シルト層であり、黄灰色ないし青灰色のシルトないしは灰色砂礫の地山に達している。

さらに、黒粘Ⅰは砂粒の量や有機質の分解度の差、炭化物の量などからa（23層）・b（24層）・c（25・26層）の3層に分層可能であり、それぞれ30cmほどの厚さでほぼ水平に計90cm堆積している。黒粘Ⅰcはさらに、上層（25層）と、粒子の細やかさや有機質分解度の高い下層（26層）に分層する。黒粘Ⅰ上面の標高はa・bトレンチで68.6m、dトレンチで69.6mと一定する。なお、dトレンチでは40層が黒粘Ⅰaであるが、前に述べた水田化①の耕土として利用されたものと考えられるが、直上の38層は暗灰茶褐色の粗砂を含む硬い土層であり、軟弱な周濠堆積土を耕土とすることの改善を目的として客土によって整地したものと考えられることができる。

植物層も本調査では分解度の違いから、腐植化の進行した上層（28層）と植物質残存物の多い下層（29層）に分層している。植物層も水平堆積が明瞭で、上下層とも約25cmの厚さで堆積している。最下層の暗青灰色シルト層は地山の砂礫や黒色粘土のブロックをふくんだ土壌で、5cmほどの厚さで濠底の所々で検出されるが、濠底全面に普遍的な存在ではない。

さて、クビレ部北側の周濠では、第2・3次調査で確認された最下層の黒色粘土層Ⅱ（以下、「黒粘Ⅱ」と呼称）は確認されていない。本調査区での周濠底最深部は標高67.3mで、周濠クビレ部交点から北東12mの地点にあたる。つまり濠底は調査区北に向かってわずかに低くなっていることを考えれば、クビレ部北側の北方未調査部分で黒粘Ⅱが検出される可能性は皆無ではない。しかし、古墳自体が東から西へ、北から南へわずかに傾斜する微地形と周濠の範囲から考えて、黒粘Ⅱが北側クビレ部周辺に明確に堆積する可能性は薄い。おそらくは北側周濠では後円部の北側から西方にかけて分布するのであろう。

黒粘Ⅰの形成年代は、出土土器を見る限りa～cで異なる。黒粘Ⅰcはほとんどが古式は時期の細片で占められる（31～47）。布留形甕口縁部（36～38）や底部（45）から見て布留0式土器がほとんど考

えて大過あるまい。下田所式ないしは亀川上層式相当の型式の特徴をもつ吉備形甕（32・33）もほぼ併行するであろう。しかし唯一細片とはいえ須恵器壺の口縁端部（48）があることから、古墳時代後期と考える。この点は、先行調査の黒粘Ⅰの形成時期を6世紀代としたことと矛盾しない。

黒粘Ⅰbの高坏脚部（49）と円筒埴輪片（50）も後者の時期から6世紀代のものである。ところが、黒粘Ⅰaには大量の土師器埴（55）、土師器小皿（56～61、64、65）、土師器甕（62、67～72）、土師器移動式竈（73）、土師器釜（羽釜：74）、須恵器壺口縁部（75）が出土しており、7世紀から10世紀末ないし11世紀初頭と考えられる。このことは周濠堆積の最上層である黒粘Ⅰの上部がこの時期に攪乱されていたことを示しており、前項で指摘したように、それは水田化に伴う行為と考えることができよう。ただし、水田土壌とすれば量的に多いことを考えれば、第4トレンチの調査で報告するように、この時期の水田隣接地における宅地開発との関係も考慮すべきかも知れない。

さらに周濠堆積土を覆う黒褐色土、黒灰色土（dトレンチ）や暗灰色粘質土（b・cトレンチ）からも、多数の土師器小皿（81・82・93～99）、土師器甕（78・79・88・89・105～109）、土師器釜（羽釜：110）、黒色土器埴（84・85・86・100・102・103）、瓦器埴（87）、灰釉陶器皿（104）、須恵器小壺（111）が出土している。その時期は、10世紀末から13世紀後半におよぶ。これも前に述べた古墳周辺（周濠と墳丘）のその後の開発状況を示しているであろう。

（4）周濠内の遺物出土状況と堆積状況

第3次調査の報告でも述べたように、黒粘Ⅰは6世紀における人為的な周濠埋設によって形成された可能性がある。従って、古墳周濠の自然埋没状況を示す層は植物層より下であるが、黒粘Ⅱが欠落するため出土遺物のほとんどは植物層から出土したものである。ところが、第1～3次調査の植物層からは5世紀代以前の土器が出土しているにもかかわらず、本調査では須恵器はもとより5世紀代の土師器の出土は皆無であり、細片の一片すら出土していないという現状がある。そればかりではなく、後述するように明らかに布留1式と考えられる土師器も植物層下層には存在しないのである。

植物層出土の遺物は土器、木製品、植物自然遺体（種子など）である。図51は植物層（上層：28層および下層：29層）と最下層の暗青灰色シルト層（30層）の出土状況を示したものである。

そこから、3点の完形に近い広口壺（9）、二重口縁壺（26）、小形丸底鉢（30）は、前方部裾から1mほどのところに転落するように出土しており、クビレ部に近い前方部側からの投棄の色彩が強い。また、木製品も長さのある建築部材や棒状の木製品、鋤、板材などをみると、多くがクビレ部から前方部にかけての墳丘側線に沿うように出土していることがわかる。木製品もまた、クビレ部の前方部側から投棄された状況が想像されるのである。

とくに、調査区の南東隅の周濠の前方部裾にあたる部位では、拳大から人頭大の石25点とともに、丹塗りの棒、横槌、加工木などの木製品が集中して出土している。石の出土はごく部分的であるがやはり前方部に沿うようであるから、祭祀的行為に伴う祭具や設えの一括廃棄が想起される。こうした石の出土状況や数量は第3次調査のクビレ部南側周濠内の石の出土状況とも通底するところがあり、前方部クビレ部付近での南北周濠それぞれへの投棄行為を想起するのである。同様に、前方部裾から

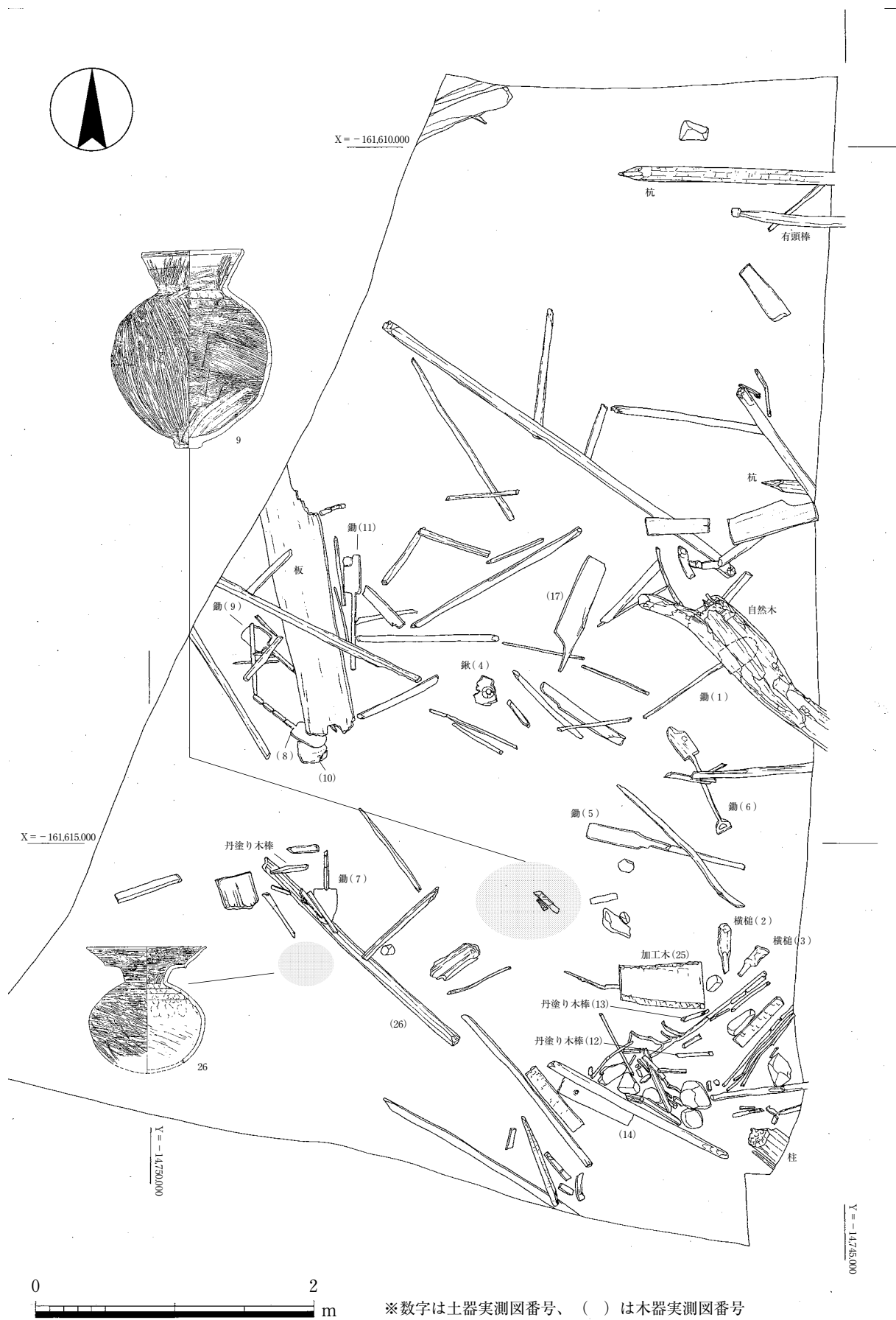


図51 4-3a トレンチ クビレ部周濠内遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8)

約3mのライン上では、鋤5点と鍬1点の木製土木・開墾具が並んで一括出土している。やはり祭祀時の一括性の反映であろうか。

なお、濠底では径20cmのピット2基を検出している。わずか2基ではあるがこれも墳丘のクビレ部裾から1.5m離れたラインに位置するのではないかと想像する。第3次調査の周濠底では、臍穴を有した立柱の基部と径50cmの柱穴の検出があったが、前方部北側では深さ10～15cmのごく小規模ではあるが、立柱穴の可能性も無視できない。

このように、クビレ部北側の周濠内では南側周濠の黒粘Ⅱはまったく欠落するものの、南側周濠の遺物出土状況と同様の各種の建築部材や土木・開墾具類、祭祀的色彩の濃厚な木製品や土器が、植物層下層を中心にプライマリーな状態で面的に検出されているのである。とすれば、黒粘Ⅱや暗灰色砂礫層などの形成が植物層の形成よりも相対的に先行することは明らかであるとしても、前者に属する遺物こそが纏向石塚古墳の築造時期を示す資料であって、前方部北側周濠内の植物層下層の一群の遺物を黒粘Ⅱの遺物群よりも新しくみるべきであるといった固執した考えは再考せざるを得ない。クビレ部北側周濠において黒粘Ⅱが欠落するのであれば、あくまで濠底のプライマリーな遺物群を南側と同様の目線で総合的に判断する必要があると言えよう。

ちなみに、クビレ部南側周濠（3次）調査の最下層で確認した暗青灰色の砂質土層は、北側周濠の最下層である30層と対応するのではないかと考えている。

（5）周濠内の遺物

土器

土器の内訳は、前に掲げた3点の完形に近い土器のほかは破片ばかりで、壺5点（複合口縁壺口縁部：6、口縁部10～12、底部：13）、甕14点（口縁：8・14～18・27～29、底部：5・7・19～21）、小形丸底壺（鉢）2点（22・23）、小形器台脚部1点（24）である。これらの土器を層位的にみると、最下層（30層）出土の土器群と植物層下層（29層）出土のものは弥生形甕、庄内形甕と考えうる胴部破片を含むものの布留0式古相に属し、様式的な差はないと考えざるをえない。

広口壺（9）は淡い黄灰色ないし乳白色を呈する。越前地方からの搬入品の可能性が高い。胎土や色調からすると、10の広口直口壺や布留形甕（15・16）なども越前地方の可能性はある。18の甕は黄橙色の胎土で阿波地方からの搬入品であろう。また、最下層（30層）出土の複合口縁壺口縁（6）も越前地方かもしれない。受口の有段口縁甕（8）は近江北部からの搬入品である。

これに対して植物層上層（28層）の土器群は、胴部最大径が過半部にあり偏球状を呈する二重口縁壺（26）、口縁部全体が肥厚して内湾し、肩部横位のスリナデを放棄した布留形甕の主流化などから布留0式新相ないしは布留1式に属する。北側周濠へ投棄された土器は最下層と植物層下層によってまず被覆されたものと考えられるのである。

木製品

すでに述べたように、3a・bトレンチの植物層および暗青灰色シルト層からは夥しい量の木製品が出土している。その種目は、土木・開墾具類（鋤・鍬）、農具（横槌）、槽、柱材、板材、杭材、棒状

材、加工材断片、削屑などである。

土木・開墾具類には鋤と鍬がある。鋤は8点あるが、その内訳は一本造りの直柄鋤（1・6・7・8・9・10・11）と、着柄鍬（5）である。前者はいずれも先端を円く整えスコップ状を呈する。6・9は把手部まで残存しており、復元長は約90cmにおよぶ。6の鋤身の基部には4×2cmの長方形内に中央を残して2孔が穿孔されている。踏み込み用の棒板を装着するためであろうか。5は柄に装着した状況で出土したが、柄は保管中欠損している。

鋤の刃部はいずれも使用によって磨滅している。しかし、柄部の折損がないのであれば使用に給することも可能なはずであるにもかかわらず、これだけの数がまとまって投棄されていることは、古墳造営に関わった用具（当然、祭祀的行為をとまって）の一括遺棄と考えることもできよう。

鍬は1点が出土している。直柄平鍬の風呂部臍部分（4）であろう。

農具には横槌2点（2・3）があり、いずれも使用痕が認められる。なお、以上の土木・開墾具、農具類はいずれも植物層下層のほとんど濠底に接して出土している。

容器としての槽（18）はかなりの大形品と考えられるが、直線的に伸びる平縁のごく一部であるため全体の形状は明らかにならない。内面は緩やかに内湾する。

柱材は2点あり、1点は直径26cmの太柱で、その大部分を調査区の東壁奥に陥入した状態で出土した。表面をていねいにウリ削りし、検出された基部は、第3次調査でも検出された棟持柱ないしは通柱などと同様の、3～4方向から山形に切断された状況が見られた。柱材は原位置に遺存させた。26は径7.6cm、長さ約180cmの細柱である。前面ウリ削りを施しているが各所に節が残り、前者ほどていねいな作りではない。柱は上下端で切断痕があるが、下端より約80cmと140cm付近に長さ約10cm、幅約7cm、深さ約2cmの手斧による抉入をもつ。軒桁材あるいは垂木材などとの結合・束縛のためであろう。

板材は多数出土している。うち、14はていねいな手斧痕を残す板面に円孔が穿たれており、縦2面は切断されているが、横1面は断面がV字形になるほどの切断である。よほどの力が加わったのであろうか。赤色顔料の塗布が認められる。15も板状の木片であるが、手斧痕は極めてていねいである。完形と考えられるが一部破損している。

17は大形の板材で一方向に円弧上の切り込みをもつ。板面は手斧痕をていねいに消しており、片面に線刻、片面に直線的に連なる小孔列が数条みられる。側辺には一部突出部があり、材を受ける覆いのような建築部材ないしは調度品材と考えられる。20も板材の一部と考えられるが、やはり両面に直線的に並ぶ小孔をもつ。21は矢板であろう。

25は大形の加工板材である。長辺の一側面は角を面取りして調整しているが、端辺は切断、他の一長辺は折断している。表面には手斧痕を残す。本板材は光谷拓実氏からの要請で年輪年代資料として萩原を通じて供され、その結果が公表された資料である（第12章 第4節に収録）。

杭材は2点を確認している。いずれも径10cmで東壁に陥入しており採取できていない。長い方は1.5m分を確認し、杭としてはかなり長大なものであろう。表面はていねいなウリ削りを施していることから、単なる土木用材ではなく何らかの施設に伴うものであろうか。

棒状の丸太材には、径6.6cm、長さ3mを超える27がある。一端は切断痕がみられるので、本来はさらに長い材であったと考えられる。有頭棒としたものは東壁にそのほとんどを陥入した状態で長さ70cm分出土した。径約7cmの断面円形で、表面はていねいにウリ削りを施す。採取はできず実測図はないが、おそらくは2m前後の天秤棒であろう。

16は角材、24は角棒。丹塗りの棒状木製品は3点出土したが、2点を図示する（12・13）。12は一方を鋭利な刃物で斜位に切断され、13は折断される。19の棒状木製品は方形孔を穿孔する。

以上のほかにも板材、棒状材、加工材断片、削屑などが多数出土している。板材や棒状材には調査区の壁に陥入しているため取りあげることができなかった木材も少なくない。また、木製品には保存状態が思わしくなく、極度の劣化や紛失等によって図化されなかったものも一部にはある。とくに棒状の木製品や板材、加工材断片、削屑、切片の類はほとんど報告できなかった。ただ、これらの木製品や加工材断片には一部に赤色顔料が付着したものがあり、木工作業の工程で赤色顔料が使用されていたことが考えられる。さらには往々にして火を受けて炭化した部位を残すものもある。周濠への投棄に先駆けて何らかの火を伴う祭祀行為が存在したらしいことも記録しておきたい。

第3節 前方部北東隅の調査（第4トレンチ）

（1）調査の概要

第4トレンチは、前方部の北半から北東隅、さらには前方部前面の状況を確認するために設定した。その結果、調査区の南半で前方部北東隅部分の墳丘部を検出した。しかし、周濠については当初から完掘しないことを旨としたため、後述するように、前方部前面の一部と周濠の北東隅部分（導水遺構）を除いて、その堆積状況や深さ、あるいは前方部裾については確認していない。

第4トレンチは当初、表土下約70cmの整地土層上において中世遺構面を検出したため、この面での遺構検出を徹底した。整地土は砂礫を多く含む暗灰色土（23層）を基盤とし、西部の暗灰褐色土（7層）、灰褐色土（8層）、東部では灰褐色粘質土（25層）、暗灰褐色土（26層）、灰褐色土（27層）、暗茶褐色土（28層）などで構成され、土器片を若干包含している。

しかし、この時点ですでに前方部の微高所の一部が露呈した状況にあり、また周濠の西よりの深い部分の状況が上層に反映し、検出当初は周濠が前方部前面の左右隅で切れる状態ではないかとの感があった。そこでトレンチ南半の整地層を20～30cmにわたって、前方部推定線に沿って地山面まで掘り下げたところ、前方部前面を囲繞するように周濠が存在することが明らかとなり、前方部北東隅も明瞭に検出することができた。また同様に、周濠北東隅の外肩線の一部も確認できたことから第2トレンチで確認した周濠外肩線との関係によってその周濠形態も復元可能となった。

（2）周濠北東隅の調査と出土遺物

前方部の北東隅

北西から南東に延びる纏向石塚古墳前方部北東隅角の北側線を約10m、前方部前面を約5mにわたって検出した。前方部は後世に大規模な削平を受け（これは周辺調査の状況から勘案して、おそらくは

10世紀末～11世紀の耕地開発に深く関係するものと考えている)、その後改めての宅地化によってさらなる削平を被った可能性がある。その時期は、後述するように10世紀末ないしは11世紀初頭のことなのであろう。

前方部隅角はわずかに撥形に広がるように見えるが、纏向石塚古墳の前方部の「撥形」の測線の変換点はむしろ、第3次調査との間にある農道付近であり、本調査区における端部の開きは撥形に開いたなかでのさらなる膨らみといったことになる。前方部上の地山面の残存標高は前方部前面端と南壁付近が最も高く69.5mを測る。

前方部前面の周濠と出土遺物

前方部前面の周濠部分については、南壁に沿って設けた幅2mの試掘坑によって濠底まで掘り下げた。その結果、前方部の前面濠は幅4.8～5m、深さ約60cm程度の浅い溝状の掘り込みであり、その規模や方向から、第3次調査の第2トレンチで検出した溝状遺構に連なるものであることが判明した。

堆積層は上から、黒褐灰色土ほか(29層:「最上層」と呼称)→黒褐色土(30層:「上層」と呼称)→黒灰色砂質土(33層:「中層」と呼称)→黒色粘土(34層:「下層」と呼称)→青灰色粘質土(38層「最下層」と呼称)→地山(43～49層:黄灰色ないし黒灰色の粘質土)である。

ところが、断面図を見ると、前方部側と周濠外岸壁の立ち上がりには差が見られる。前方部側では淡黄色土混じりの灰褐色粘質土(25層)や灰色砂礫層(42層)を切って、標高69.8m付近で立ち上がっているのに対して、外岸壁部分では、周濠内最上層にあたる黒褐灰色土(29層)が周濠外へとオーバーフローし、周濠の掘り込みは黒灰色土層(39層)上面の標高69.5m付近となっていることである。

このことは、25層と42層がわずかに盛土を残している可能性を物語っている。大規模な削平を受けながらも、墳丘を有していた前方部と周濠外部とは、わずかに削平の度合いに差があったのであろうか。従って、濠底は最深68.9mを計測しているけれども、前方部残存頂高との水準差は90cm、外部残存高層上面との水準差は60cmということになる。

なお、今調査における周濠堆積層の黒褐色土(30層)は、第3次調査の前方部前面周濠堆積の黒褐色砂質土(3-2トレンチ 6層)に、黒色粘土(34層)は黒色粘質土(同7層)に対応するものと考えられる。とすれば、第3次調査の前方部前面の周濠底はあと20cm(暗青灰色粘質土:38層)ほどで濠底に達することになる。また、灰褐色粘質土(25層)や灰色砂礫層(42層)も、第3次調査では周濠を覆う灰褐色土(同4層)ということになる。

前方部前面周濠内からは、下層より広口壺口縁(163)と布留形甕口縁(164)が、中層からは二重口縁壺口縁(165)、布留形甕口縁(167～170)、小形器台脚部(176)、円筒埴輪片(177・178)が、上層からは須恵器高坏坏部片(180)が出土している。前方部においても最下層の堆積が布留0式段階であることが明らかであろう。

このように周濠の堆積は、他の調査地点と同様に6世紀にはかなり進行していたことがわかるが、最上層からは土師器小皿や甕が出土しており、前面の溝もまた10世紀末には埋没を終えていることが明らかとなった。整地地業に伴う行為であろう。

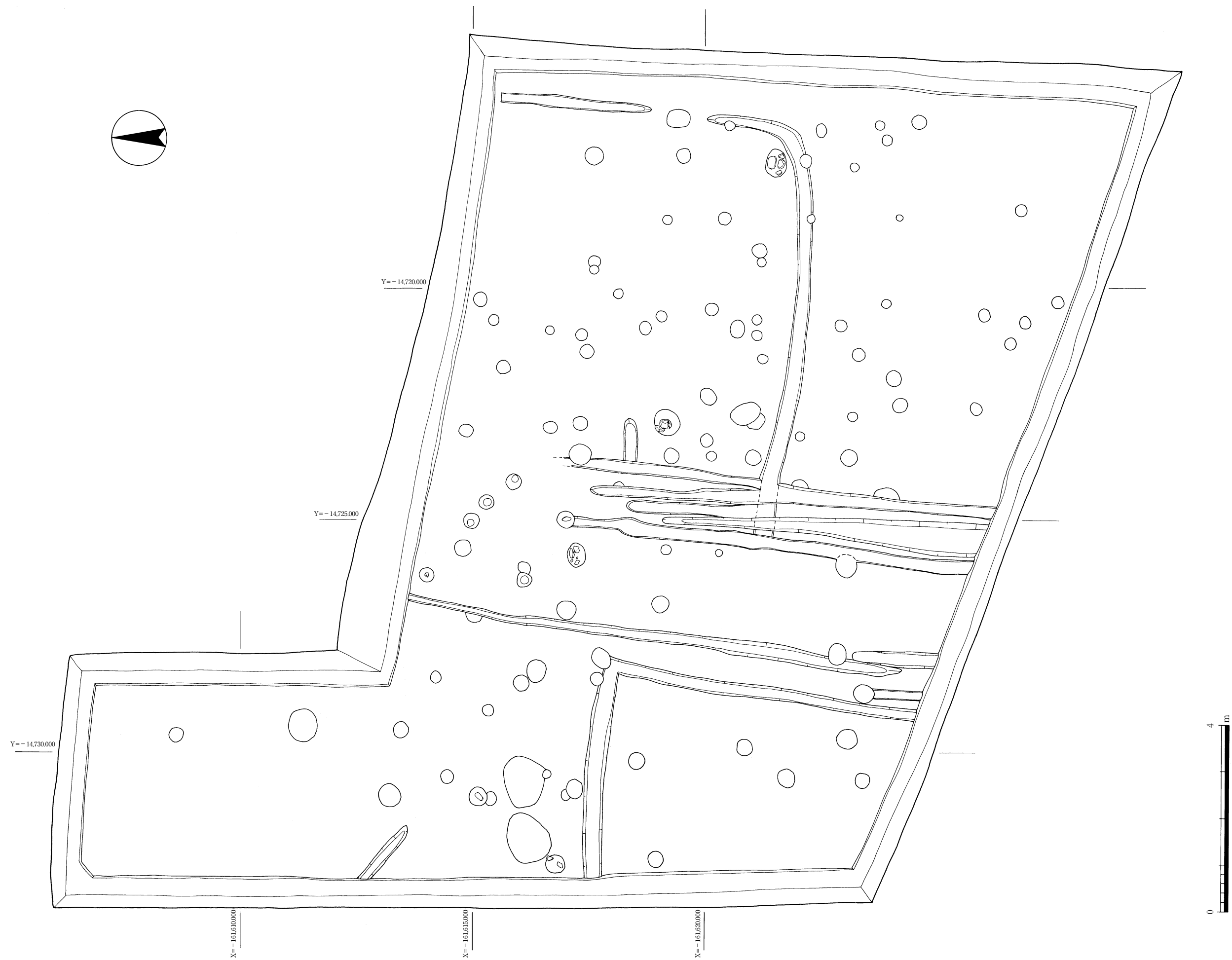


図52 4-4トレンチ上層遺構確認状況図（1／80）



図53 4-4 トレンチ平・断面図 (1/80)

前方部北東周濠部の調査と出土遺物

第4次調査の第4トレンチでは、周濠の北東隅の状況を把握するために一部地山面までの掘り下げをおこなった。古代末～中世の整地土は、地山面が標高69.6mと高いこともあって、ここでは10～20cmほどであり、周濠の北東隅のコーナーを検出することができた。

さらに、周濠北東隅角から南東方向に伸びる溝状の遺構を検出したので、8×3mにわたって調査区を東に拡張してこの溝状遺構の性格を把握することに努めた。その結果、周濠北東隅角とこの南東に延びる溝状遺構のほかにも、土坑、ピット群、前方部前面辺に平行するような溝状遺構を検出した。

周濠内の堆積はおおよそ5層に分層される（図55 断面b-aライン）。「最下層」は黒灰色土（12層）および青黒色土（13層）の厚さ20～30cm粘質の土壤で、低脚高坏脚部（139）が出土した。「下層」は暗灰色砂質土（10層）で、小形器台の半完形品（155）のほか、S字形口縁甕脚台部（154）、布留形甕の口縁部多数（143～151）が知られる。142は庄内形甕口縁であろうか。「上層」は灰褐色土（2層）、褐灰色土（3層）、暗灰褐色土（4層）で、二重口縁壺口縁（157）や布留形甕（158～160）、吉備形甕（161）が出土している。完形の小形鉢（156）は4層（上層下部として採取）出土である。なお、5～9層は周濠北側外部からの流入土であり、その形成は最下層埋没後、下層の形成と期を一にしたものと考えられるが出土遺物はない。

上層出土土器は布留1式、下層以下は布留0式と考えられるけれど、「最下層」は前方部前面周濠の「最下層」と「下層」に、「下層」は「中層」に、「上層」は「上層」に対応するものと考えているから、最下層と下層以外は後世の埋没ないし埋設土であろう。

一方、濠底の青灰色シルト層（地山）を穿って径80×50cm、深さ30cmのpit 5を検出した。土坑内の粘土層は有機質を大量に含み木片と土器片を若干検出したが、時期は明らかではない。しかし、濠低最下層の堆積と土坑内の堆積状況から、古墳造営以前のものと考ええるよりは造成時に穿孔された可能性を考えておきたい。さらに、周濠底を抉るように流れ込む導水溝（幅0.7～1m、深さ10～30cm）を検出し、復元可能な土器片をこの抉られた部分から一括採取した。

また、前方部前面周濠に平行するように走行する溝状遺構は、幅0.8～1.5mで、南東に走行する溝の手前で途切れる。この溝は南壁付近でピットによって切られているがその土層断面の状況から、ともに古墳築造時ないしは以前であることは明らかである。築造時（直前）における前方部前面の区画溝の可能性を指摘しておきたい。

導水溝の調査と出土土器

周濠の北東隅のコーナーから南東方向に伸びる溝状の遺構は、幅4～5m、深さ10～30mで、北東の肩を周濠北東辺の延長上にあわせて設定されていた。溝底は凹凸があり中央部で深く抉られた状況で、東端の上流部では幅90cmと狭い。また、下流の周濠合流部付近では広い落ち込み状を呈していることから、集水流下させていた機能が想定される。

取り付き部分の縦断面（c-bライン）と、横断面（d-eおよびf-gライン）の堆積土層の精査によって、本溝状遺構は周濠とは切り合い関係がないことを確認した。周濠と溝状遺構は一体的同時に埋没

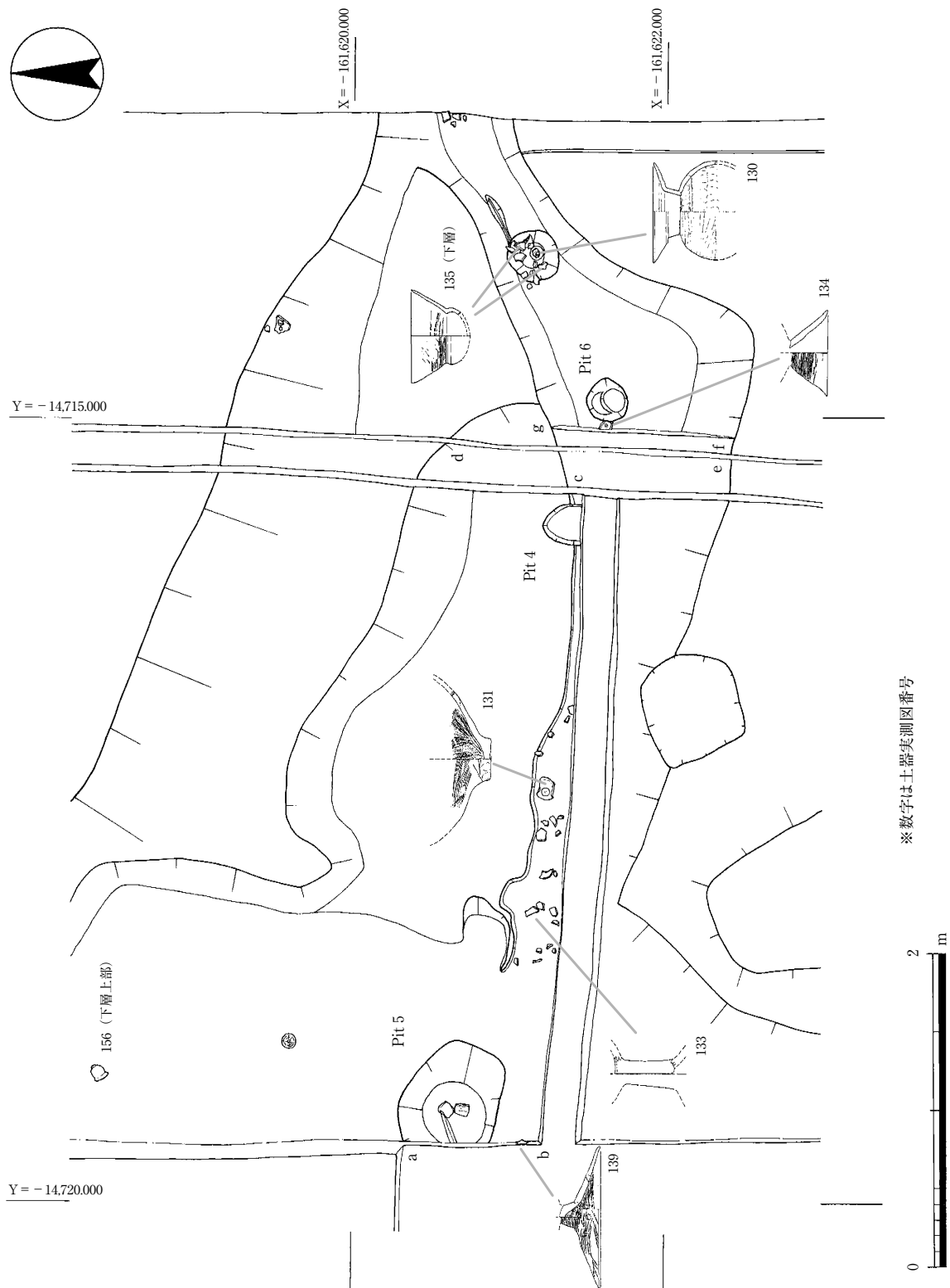
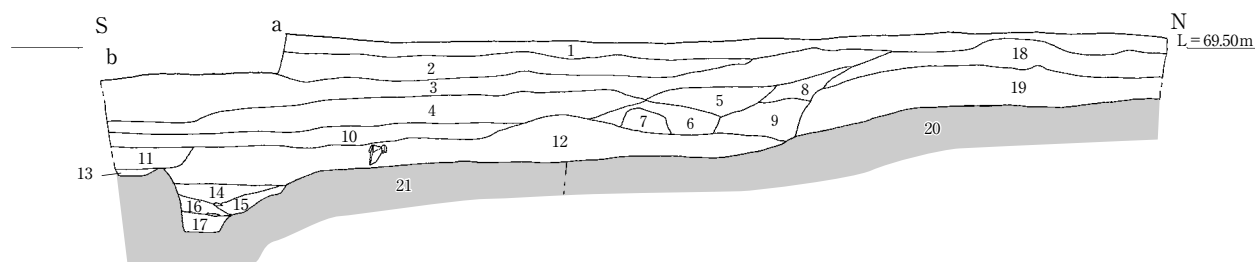


図54 4-4 トレンチ導水溝遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8)

したことになる。

溝内の堆積土は、「最下層」= 5～7層、「下層」= 3・4層（暗灰色砂質土・灰褐色細砂層）、「上層」= 2層（暗灰褐色土）である。「最下層」は、北東隅周濠の堆積物とは違いがあるが、ほぼ北東隅周濠の「最下層」（12・13層）に対応するものと考えられ、「下層」は「下層」（10層）に、「上層」は



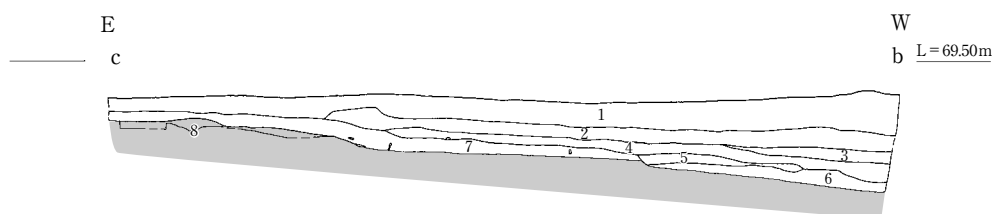
前方部周濠北東隅畔東壁 (b-a)

- 1 灰褐色土層 (1cm大の小石・粗砂を多量に含む)
- 2 灰褐色土層 (5mm大の小石と粗砂を中量含む)
- 3 褐色土層 (5mm大の小石と粗砂を中量含む)
- 4 暗灰褐色土層 (やや砂質。2～4mm大の小石を少量含む)
- 5 灰褐色土層 (5mm大の小石を多量に含む)
- 6 灰褐色土層 (5層よりやや褐色強い。1cm大の黄砂をまばらに含む)
- 7 暗灰色土層 (2mm大の小石を中量含む)
- 8 褐色土層 (5mm大の小石を多量に含む)
- 9 暗灰褐色土層 (やや砂質。粗砂・小石をまばらに含む)
- 10 暗灰色砂質土層 (1cm大の小石と粗砂を中量含む)

周濠内堆積土

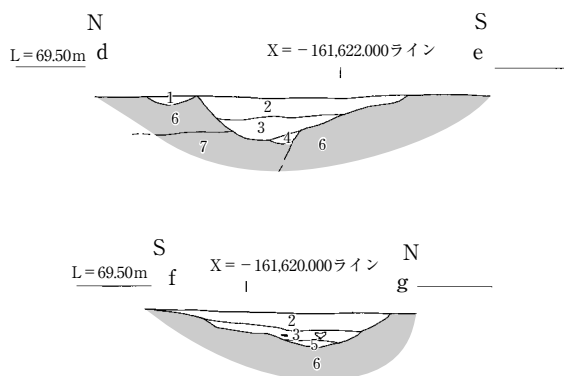
- 11 灰褐色細砂層
- 12 黒灰色土層 (やや粘質。遺物含む。2cm大の礫をまばらに含む)
- 13 青黒色粘質土層
- 14 青黒色粘土層 (ややシルト質) — pit5埋土最上層
- 15 暗灰色砂質土層
- 16 黒色粘土層
- 17 青黒色粘土層 (有機物を含む) — pit5埋土最下層
- 18 黄褐色土層 (よく締まる)
- 19 黒褐色土層 (よく締まる)
- 20 黄灰色シルト層
- 21 青灰色シルト層 } 地山

pit5埋土



導水溝東西畔北壁 (c-b)

- 1 褐色土層 (周濠北東隅畔東壁の3層に同じ)
- 2 暗灰褐色土層 (周濠北東隅畔東壁の4層に同じ)
- 3 暗灰色砂質土層 (周濠北東隅畔東壁の10層に同じ)
- 4 灰褐色細砂層 (周濠北東隅畔東壁11層に同じ)
- 5 灰褐色細砂層 (やや粘質)
- 6 青黒色粘質土層 (周濠北東隅畔東壁13層に同じ)
- 7 黒灰色砂質土層 (礫を多く含む)
- 8 黄灰色シルト層 — 地山



導水溝南北畔西壁 (d-e)・東壁 (f-g)

- 1 暗褐色土層
- 2 暗灰褐色土層
- 3 黒灰色土層
- 4 暗青灰色シルト層 (木質を含む)
- 5 褐色砂礫層
- 6 黄灰色シルト層
- 7 青灰色シルト層 } 地山

導水溝内堆積土

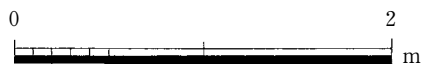


図55 4-4 トレンチ前方部周濠・導水溝断面図 (1/40)

「上層」下部 (4層) に全く対応関係にある。

こうしたことから、本溝状遺構の造営は周濠の掘削に伴ってなされたものであり、溝底の水準や土壌の堆積が周濠内に傾斜していることから、古墳周濠への導水遺構と考えた。以下、本溝を「導水遺構」と仮称する。

導水遺構の出土遺物は土器のみであるが、最下層から半完形の二重口縁壺 (130)、小形器台脚部 (134)、高坏脚部 (133)、壺底部 (131)、甕底部 (132) が、下層からは小形丸底鉢 (135) が出土している。

ここでは甕の胴部破片や口縁部細片が確認されているにもかかわらず、布留形甕と認定できるものは皆無であることから、布留0式に先行する可能性が高い。

とりわけ小形丸底鉢は、赤褐色を呈する口径12cmの口頸部がやや内湾気味に著しく発展しているもので、外面ともに繊細なミガキを施している。庄内3式以降の纏向遺跡やホケノ山古墳埋葬施設出土品に類例がある。従来、一般に布留式でも典型的な発展型式（布留1式）とされてきたものであるが、伊勢湾沿岸地域の脚台付小形丸底鉢・壺や、中・東部瀬戸内地域における口頸部を内湾拡大させた小形丸（尖）底鉢との型式的統合によって庄内3式段階に纏向遺跡において成立した可能性が極めて高いと考えられる¹⁾。また本資料は概報段階では、胎土観察による情報から吉備製の可能性をも考え、「将来このタイプの初現を考慮する資料になるかもしれない」と述べたが、本型式の祖型（初源）論としてはともかく、本資料そのものの製作地の位置づけとしては撤回する。

なお、上層からは加飾二重口縁壺口縁（136）、小形高坏（137）、低脚埴形高坏埴部（138）が出土しており、庄内3式から布留0式の資料と考えられるが、前述したような周濠埋土との対応関係からすれば、その埋設時期は6世紀頃ということになるろう。

（3）中世の遺構と出土遺物

すでに述べたように、整地土層上においては中世の遺構多数を検出している。遺構は素掘り溝とピット（柱痕跡の残る柱穴を含む）、径80cmから1mほどの土坑である（図52参照）。

しかし、中世遺構のほとんどは発掘調査を行わずに検出遺構の平面的な記録にとどめているため、遺構の構造は明らかではない。ただ、第3トレンチの周濠部分のような明らかな水田土壌の存在は、少なくとも中世以降のベースとなる土壌では確認できていないことや、ごく小さな礎石を据えた径30～40cmの掘形をもつ柱穴も確認されているから、これらのピット群や素掘りの区画溝は居住遺構に関わるものである公算大である。おそらくは小規模な掘立柱建物と宅地区画溝の可能性の高いものであろう。

出土した遺物はわずかであるが、周濠内上面から出土した土師器小皿（182～185）や甕（186）、あるいは整地層内の土器細片から10世紀末の整地層を基盤としていと考えられるので、およそ同時期から11世紀にかけての開発に伴う宅地経営と関係があるものと理解できよう。このことは墳丘縁辺部の削平や盛土中の土器の時期とも符合するから、平安時代後期に一带に土地開発がなされたものと考えられよう。

第4節 周辺周濠の調査

（1）第1トレンチ

後円部のほぼ中央北側に、南北方向に設定した幅3m、長さ27mのトレンチで、トレンチ南端の現墳丘外（北）5mの地点で、周濠堆積層上面と交接する墳丘線を確認し、またトレンチ北端ではかろうじて、周濠上面と地山層が交接する外肩線を確認した。このレベルでの濠幅は23mを測る。

発掘調査は、周濠内堆積層と考えられる褐色土（16・19層）、灰茶褐色土（23層）、そして黑色粘土

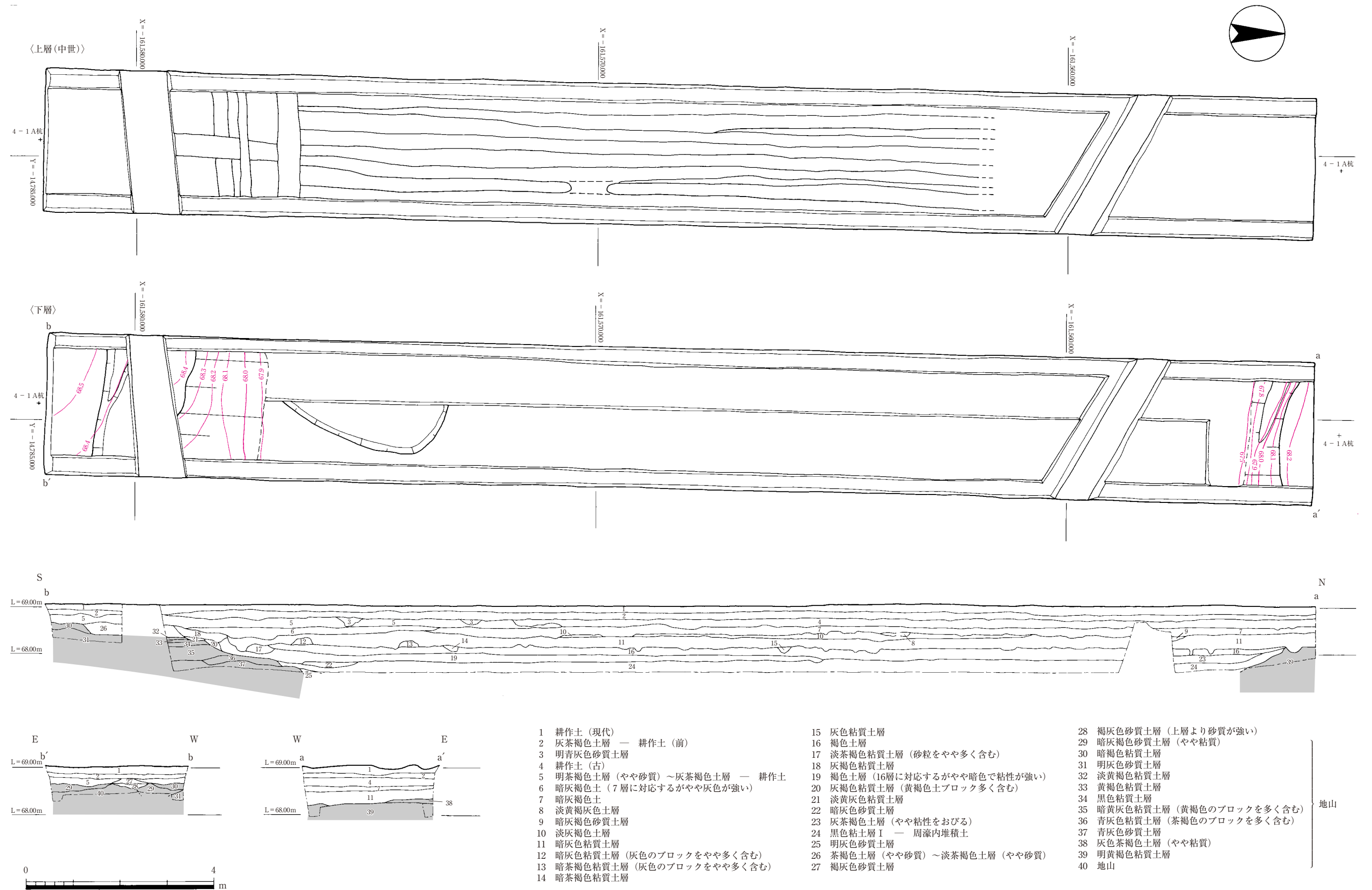


図56 4-1 トレンチ平・断面図(1/80)

- | | | | | | |
|------------|-----|----------------------------|-------------|-----------------------|-----------------|
| 1 淡灰褐色土層 | 耕作土 | 11 暗灰色土層（やや砂質） | 石塚東古墳周濠内堆積土 | 21 淡黄褐色砂質土層 | 31 淡灰色砂礫層 |
| 2 淡灰褐色土層 | | 12 暗灰褐色粘質土層（土器片含む） | | 22 灰褐色粘質土層 | 32 黄灰色砂質土層 |
| 3 青灰色粘質土層 | | 13 暗灰色砂質土層（土器片含む） | | 23 灰色砂礫土層 | 33 淡灰色砂質土層 |
| 4 明黄茶褐色土層 | | 14 暗灰色粘質土層 | | 24 灰褐色粘質土層（砂礫を少量含む） | 34 灰褐色砂質土層 |
| 5 茶褐色土層 | | 15 淡黄褐色砂質土層 | | 25 淡灰色粘質土層 | 35 灰色粘質土層 |
| 6 暗灰茶褐色土層 | | 16 灰褐色粘質土層 | | 26 暗茶褐色砂質土層 | 36 茶褐色砂質土層 |
| 7 暗灰色粘質土層 | | 17 灰茶褐色粘質土層 | | 27 暗灰褐色砂礫層 | 37 淡黄灰色粘質土層 |
| 8 淡灰色砂質土層 | | 18 暗灰色粘質土層 — 方形周溝墓周溝堆積土 | | 28 淡黄灰色砂質土層 | 38 暗茶褐色粗砂層 — 地山 |
| 9 暗灰色土層 | | 19 暗灰褐色土層（やや粘性を帯びる） | | 29 暗灰色粘質土層（やや砂礫を多く含む） | 39 灰色砂礫土層 |
| 10 灰褐色砂質土層 | | 20 暗灰褐色砂質土層（黄褐色砂質土が一部混入する） | | 30 黄茶褐色砂質土層 | 40 黄灰色砂質土層 |

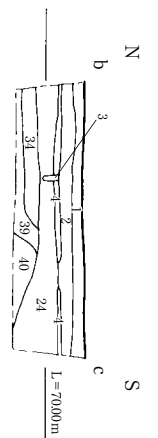
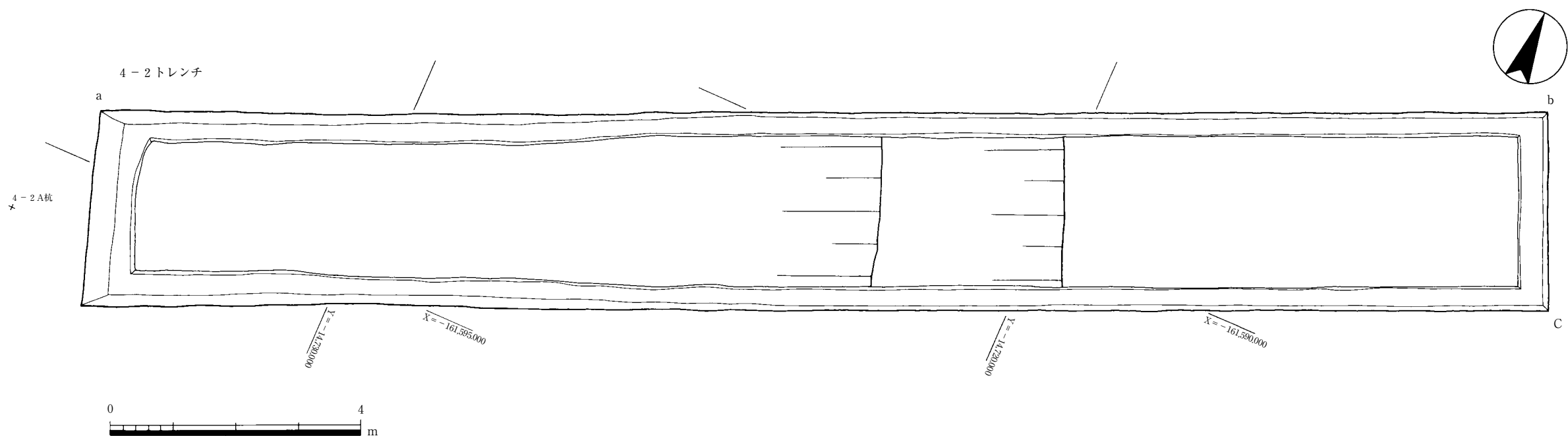
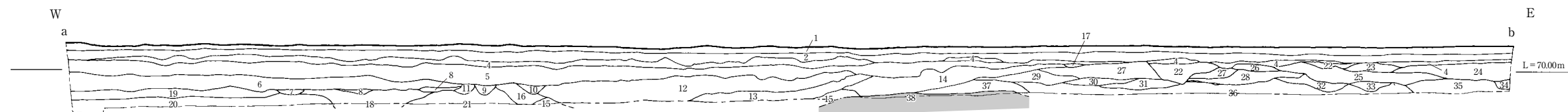


図57 4-2 トレンチ平・断面図（1/80）

層Ⅰ（24層）を若干掘り下げて終わっている。墳丘は地山層を確認しているが、明らかに本来の墳丘盛土と考えられる土層はない。黄褐色土のブロックを含む灰褐色粘質土（20層）がその可能性の高い土層ではあるが、一次的な盛土であるかは保留しておきたい。黒粘Ⅰ上面では暗灰色砂質土（22層）を充填する浅い落ち込みを確認したが、人為的なものかは判断しがたい。図化しえた出土遺物はない。

（2）第2トレンチ

後円部部分の周濠北東部外肩線を確認するために、後円部中心から放射線状に設定した幅3m、長さ23mのトレンチで、トレンチのほぼ中央で地山面（暗茶褐色粗砂層：38層）を確認した。周濠内の発掘はおこなっていないが、地山はこれより西（墳丘方向）に向かって下がり、周濠外部の地山上には砂礫層や砂質土層、粘質土層がレンズ状になって互層をなして堆積しており、その堆積土はトレンチの東端付近にいたる基底幅約10mにおよぶ土堤状堆積を形成しているかに判断された。また、この土堤状堆積の頂部付近から墳丘方向に向けて、茶褐色土層（5層）、暗灰茶褐色土層（6層）、暗灰褐色粘質土層（12層）、暗灰色砂質土層（13層）、暗灰色粘質土層（14層）などが傾斜して堆積している状況が看取された。

こうしたことから本トレンチのほぼ中央部を周濠外肩と判断し盛土土堤を伴った可能性も考えた。従ってこのレベルでの周濠幅を38m程と判断したのである。しかしのちに、第9次調査において、本トレンチを含めた面的な調査によって周濠の全面発掘をおこなったところ、周濠本来の掘り込みである外肩線は本トレンチの西端部ギリギリであることが判明した²⁾。そうであれば、前述の土堤状の盛土は旧河道堆積物による自然の土堤状堆積ということになるが、第9次調査の纏向石塚古墳周辺の遺構の調査状況を見ると、ちょうどこの落ち込み状の遺構は「石塚東古墳」と命名された方墳の周濠東肩部に対応しており、結果としてその周濠等を誤認した可能性が高くなった。とすれば、この盛土状の堆積は石塚東古墳の墳丘の一部ということになるかもしれない。正式報告での判断を待ちたい。

なお、本トレンチ出土で図化しえた土器はないが、周濠外の土堤状堆積の暗灰褐色砂礫層（27層）から全長19.8cmのサヌカイト製の石槍1点を検出した。先端から11cmの両側面に押圧剥離を施して鋭利な刃部形成を行い、基部から6cm以下は丁寧で細やかな敲打によって刃潰しを施す。この土堤状の堆積中からは弥生時代前期と思われる土器細片も出土しているので、本時期に所属する可能性が高い。

（3）第3eトレンチ

第3トレンチとしては北西に12m遊離しているが、後円部北東部分の墳丘裾を確認するために設けたトレンチである。土地承諾

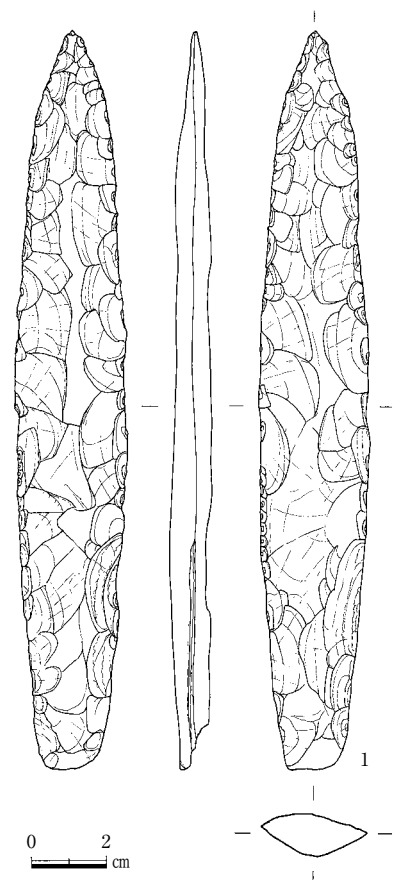


図58 4-2トレンチ暗灰褐色砂礫層出土石槍実測図（1／2）

の高まりが反応した個所について、興味ある反応が認められる。また、地表下2.0mのところ、安定した平坦面が続いており、古墳築造前の地山層の可能性が高い。この他、太平洋戦争時の大砲砲台の基礎かとみられる傾斜面も確認されており、未発掘ながらも数多くの手がかりを知ることができた。その結果については第12章第6節で別に報告する。(清水)

(2) ラジコンヘリによる撮影

今回の調査では、発掘トレンチが小規模でかつ調査が段階的になることから、ラジコンヘリコプターに撮影機器を搭載させ、地上に送られた映像を見ながら撮影を行う方法をとった。近年の撮影用ヘリコプターは振動が少なく、ビデオカメラで同時映像投写と記録ができるため、今回のような撮影に機動力を発揮するであろう。本報告書における上空からの遺構写真はいずれもその成果である。

第6節 小結—第4次調査の成果—

ここでは、纏向石塚古墳第4次調査の成果として、とくに墳形と築造時期を取り上げる。しかし三十有余年にわたる纏向石塚古墳の調査にとって、最も重要かつ他地域への影響の大きいともいえるこの問題は、第4次調査の成果に収斂されることでもなければすべき問題でもあるまい。それは9次にわたる総括的な判断と纏向諸古墳、纏向遺跡全体の脈絡のなかで解決されるべき問題であろう。

とはいえ、トレンチによって解剖された纏向石塚古墳の調査回数³⁾ごとのデータは真摯に取り扱わねばならない。ここでは、第4次調査の概報の総括でもある「まとめ」に立ち戻ること、その時点(平成元年の時点)での評価や考え方の原形を残して記録しておくことに重点をおき、現時点での私見との違いを明確化する手法をとった。結果的には、二十有余年を経た今も大きな修正の必要は感じないが、現時点での結論と問題点については本報告書の総括編を参照されたい。

(1) 墳形と規模について

今回の調査では、整備保存を目的とした調査のため、調査方法もその目的に沿ったトレンチを設定し、できる限り上面で遺構を確認する方法をとった。そのため、第1次から第3次の周濠資料を合わせ、墳形と周濠形態をほぼ復元することができたとはいえ、すべてのトレンチにおいて墳丘裾をおさえたわけではなく、墳丘自体が後世の削平や攪乱によって変形を被っている箇所も少なくない。従って、墳形、周濠の形態、計測値も正確なものではなく、概略を把握したにとどまる。

概報では、「墳形は東南方向に前方部に向けた明確な前方後円形で、墳丘の全長は約93m、後円部は最大幅部が中心よりやや西に寄った横長の扁楕円状を呈している。その計測値は、最大幅部で約64m、短径約62mが復元できる。前方部は括れ部が狭まって開く撥形を呈す。括れ部の幅は15～16m、前方部前面の最大幅は約32m、前方部の長さは約32mを測る」としたが、この意味では以前の推定値をも加味して、墳長は93～96m、後円部径62～64mと見ておくことが寛容であろう。

周濠形態は、第1トレンチと第2トレンチの間隔が広く、全掘もしておらず、また墳丘の南側での調査資料を欠くので復元は困難であるが、前方部前面周辺が突出した楕円に近い馬蹄形が想定される。その規模は径112～116mほどで、周濠幅は18～24mで、クビレ部付近では38mに達するようである。

前方部前面では約 5 m と狭くなり、むしろ区画溝的な機能の名残と考えられる。前方部前面の区画溝が墳丘部周濠に接続したことによって、墳丘が周濠によって周囲を囲まれ、陸部とは隔絶した前方後円墳ということになる。いずれにせよ纏向石塚古墳は、千葉県神門 3 ～ 5 号墳など、類似した墳形の古墳（後述の「纏向型前方後円墳」のこと）と比較してもより周濠が墳丘部を囲み陸部と切断していることから、形式的にも「定形型」前方後円墳に近づきつつある前方後円墳として位置づけることができる。反面、後円部が正円形を示さず、クビレ部が細く、前方部の平面的、立体的発達度が低い点や区画溝的な前面周濠の様相などは「定形型」以前の様相を示しているといえることができる。

なお、纏向石塚古墳の墳形については、第 4 次調査のちょうど 1 年前に、「纏向型前方後円墳」なる概念を提唱し、その起源的な典型として位置づけた⁴⁾。そしてその 23 年後の平成 23 年には、自ら纏向型前方後円墳を再検討したなかで、纏向石塚古墳の墳形については 9 次にわたる発掘調査の成果を受け、かつ魯班尺の適用を仮定した上で、以下のような墳丘の規模と企画性を提案した⁵⁾。

①墳形は、後円部が正円ではなくやや偏球状に膨らみ、前方部が大きく撥形に開く、IC-β1 類型の纏向型前方後円墳である。

②墳丘規模の規格は、墳長 95.445 m（魯班尺 300 尺）、後円部径 63.63 m（魯班尺 200 尺）、前方部長 31.815 m（魯班尺 100 尺）、前方部前面幅 31.815 m（魯班尺 100 尺）、クビレ部幅 15.9075 m（50 尺）の可能性はある。

纏向石塚古墳の纏向遺跡のなかでの位置づけ、列島規模での歴史的意味等々については前掲書に詳しいので、参照いただければ幸いである。

（2）築造の時期について

第 4 次調査も墳形確認の域を出ないため、墳丘本体での外表施設や遺物の状況はほとんど知られない（存在しない）。従って本墳の場合、今のところ周濠内出土の遺物が唯一の築造時期を知る手がかりである。

すでに見てきたように、今回の調査地区では、従来、木製品群や若干の完形土器群がプライマリーな状態で検出された最下層の黒粘Ⅱがまったく欠落し、かわって従来は布留式でも新しいと考えられていた植物腐植土下において、まったく同様の木製品群や土器若干を検出している。前方部南側（第 3 次調査）と今回の北側の周濠底水準も差はない（ただし第 2 次調査地は西方へと深くなる）。たとえ最下層の堆積層の違いはあっても、これらの木製品群や土器群が同時に、同じ理由と目的を持って前方部両側に投棄されたと考える所以である。

周濠内の木製品群に伴う土器の示す時期は、今回の出土資料によって布留 0 式と考えうる。このことは纏向石塚古墳の第 1・2 次調査報告（以下、『纏向』と略称する⁶⁾）でこれを纏向 1 式（≡庄内 0 式）とする見解と齟齬をきたすであろうか。しかし、私は第 1 次調査の周濠内黒粘Ⅱのなかに布留形甕（『纏向』P259 図 111-10・11）、布留式影響庄内形甕（7）、庄内大和形甕（6・8・9）と庄内 1 式以降の器種・型式（5・16）、北陸製甕（12）や近江製甕（13）が共存型式としてはより新しい様相を示しているということ⁷⁾を早くに指摘してきた。

また、石野・関川両氏の方法の根拠となる、①第2次調査での完形土器が纏向1式である、②出土土器片は纏向1式45片に対して2・3式は17片であり、圧倒的に1式が多い、③墳丘下と包含層に第5様式後半土器を含む、についても方法的な問題があると考えた。特に③では、『纏向』図111の1・3・10・11などは庄内様式の範疇で捉えるべきであり、今回の墳丘盛土中の資料とも矛盾しない。こうして、纏向石塚古墳の上限は遡っても庄内式期であり、周濠底への製品の一括投棄は布留0式期に下ることは必至であろう。その実年代は3世紀後葉と考える。

ところが、植物腐植土層下の暗青灰色シルト層の堆積や導水遺構（流入溝）の土器は古墳の築造時期じたいが微妙に遡る可能性を物語っている。これらの土器群には布留様式的な土器様相が見られず、なにより布留形甕は一片の破片も見られない。それは微妙に庄内3式期に食い込む公算があり、隣接する纏向型前方後円墳である矢塚古墳とほぼ同時期に造られた可能性が高い。

纏向石塚古墳の年代がこのように考えられるのであれば、当然、第2次調査で共伴した弧文円板の時期や文様系統論についても検討が余儀なくされる。また纏向古墳群の築造時期と纏向遺跡の経営年代との関係、纏向遺跡の歴史的評価にまでおよぶかもしれない。

纏向石塚古墳の墳形が庄内3式期の築造と考えられている矢塚古墳やホケノ山古墳とともに纏向型前方後円墳に属し、勝山古墳、東田大塚古墳は纏向型前方後円墳ではなく、「定形化」前方後円墳として評価されることになった今、勝山古墳の築造時期がいまだ不安定とはいえ、布留0式古段階の築造が確かな典型的な巨大定形型前方後円墳たる箸墓古墳の築造に向けて、一つの発展的図式が見えてきたようにも感じる。この点についても前掲書に詳しいので参照いただければ幸いである。（寺沢）

【註記】

- 1) 寺沢薫 「第二部第四章 前方後円墳出現論」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
- 2) 丹羽恵二編「纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集）桜井市教育委員会 2006
- 3) 萩原儀征・寺沢薫編『纏向石塚古墳範囲確認調査（第4次）概報』桜井市教育委員会 1989 なお、「まとめ」は萩原と寺沢が協議の上、（1）墳形・規模については萩原が、（2）築造の時期については寺沢が執筆しているが、現時点での寺沢の目線で修正を施している。
- 4) 寺沢薫 「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』（同志社大学考古学シリーズⅣ）同志社大学考古学研究室 1988
- 5) 寺沢薫 「第二部第四章 前方後円墳出現論」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
- 6) 石野博信・関川尚功編『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 7) 寺沢薫 「築造の時期について」註3『前掲書』所収、寺沢薫編『纏向遺跡をめぐる』（『石野博信さんと語る会』座談会資料）奈良県立橿原考古学研究所 1992

表 22 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
60-1 111-1	第3-d トレンチ 墳丘盛土	高坏	B ₆ -1-A-・	H : 87 C : 124 B : 84	O. ミガキA i. ミガキAか	O. ミガキA i. ミガキAか	O. マメツ不明 i. マメツ不明		7.5Y R 7/4にぶい橙	
60-2 111-2	第3-d トレンチ 墳丘盛土 暗灰褐色土	底部 (甕)	1-C-・	B : 445			O. タタキ i. マメツ不明		O. 淡褐 i. 赤褐	・外面にスス付 着
60-3 111-3	第3-d トレンチ 墳丘盛土 暗灰褐色土	鉢	・-・2-・	B : 40		O. スリナデIA bかIB i. スリナデIA a ケズリB	O. 押捺A i. 押捺A	5/cm	O. 7.5Y R 7/4にぶい橙 i. 7.5Y R 7/3にぶい橙	
60-4 111-4	第3-d トレンチ 墳丘盛土 暗灰褐色土	有孔鉢	・-・B ₁ -・	B : 375		O. マメツ不明 i. スリナデIA b	O. 押捺A		10Y R 7/4にぶい黄橙	・焼成後穿孔
60-5 111-5	第3-a トレンチ 暗青灰色シルト 下層	底部 (ミニ チュア 甕)	2-C-・	B : 26			O. スリナデIA a i. ケズリB→ スリナデIC a	4/cm	灰褐	・底面にもスリ ナデIC aを 施す
60-6 115-6	第3-a トレンチ 暗青灰色シルト	壺	N-A-? ?	C : 18.4	O. スリナデヨコIC a i. スリナデヨコIC a				淡灰褐	
60-7 115-7	第3-a トレンチ 暗青灰色シルト	底部 (甕?)	2-A? -・	B : 48		O. タタキ i. スリナデIA a	O. 押捺A i. 押捺A	8/cm	暗褐	
60-8 111-8	第3-a トレンチ 暗青灰色シルト	甕	近江形	—	O. スリナデヨコIC a→ i. スリナデヨコIC a				灰白	
60-9 111-9	第3-a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	壺	H-A-d	H : 28.5 C : (14.7) W : 23.0 B : 3.7	O. (口縁) ミガキA (口縁) スリナデIA a→ミガキB (頸) スリナデIA a→ミガキB i. (口縁) スリナデIB→ミガキB (口縁) スリナデIA a→ミガキB (頸) スリナデIA a→ミガキB	O. (上半) スリナデIA a→ミガキA (上半) ミガキA (底部付近) スリナデIA a i. (上半) スリナデIA a→ (下半) スリナデIC a (IB か)	O. ケズリB i. スリナデIA a→ スリナデIC a (IB か)	6/cm 8/cm 8/cm 6/cm	O. (上半) 10Y R 8/3浅黄橙 (下半) 10Y R 6/2灰黄褐 i. (口縁) 10Y R 8/2灰白 (胴部) 10Y R 6/2灰黄褐	・底面にもスリナデ IC aを施す。植 物繊維の痕跡あり ・胴部下半にふきこはれ ・輸入品 (越前か?)
60-10 115-10	第3-a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	壺	TC (T ?) -D-a	C : (15.25)	O. スリナデヨコIC a (口縁～頸) スリナデIA a i. スリナデIA a				O. 2.5Y 7/2灰黄 i. 2.5Y 6/1黄灰	
60-11 115-11	第3-a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	壺	TC (T ?) -・-a	C : (15.0)	O. (口縁) スリナデヨコIC a (口縁～頸) ミガキA タテ (口縁) スリナデIC a (口縁～頸) ミガキA タテ?				10Y R 7/3にぶい黄橙	

表 23 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
60—12 115—12	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	壺	?	C : (18.0)	O. (口底)スリナデヨコICa (口縁〜胴)スリナデヨコICa→ ミガキA i. スリナデヨコICa				25Y6/2灰黄	
60—13 115—13	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	底部 (甕)	5—・	—				O. スリナデICa i. スリナデICa 押捺	O. N3/0暗灰 i. 5Y4/1灰	・外面にスス付 着
61—14 115—14	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 S	?	C : (14.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				25Y6/2灰黄	・口縁部外面に スス付着
61—15 115—15	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 F	・—・—?	C : (13.1)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. スリナデヨコIAa→ スリナデIB i. ケズリア			10Y R7/3にぶい黄橙	
61—16 115—16	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 F	・—・—?	—	O. スリナデIB i. スリナデIB				O. 10Y R2/1黒 i. 10Y R6/2灰黄褐	・口縁にスス付 着
61—17 115—17	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 F	・—・—g ₃	C : (14.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリア			25Y8/3淡黄	
61—18 115—18	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕	阿波形	C : (15.0)	O. スリナデICa i. スリナデICa	O. スリナデIAa i.			10Y R6/3にぶい黄橙	
61—19 115—19	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	底部 (甕)	2—A—・	B : (4.9)				O. 右上がりタタキ→ スリナデ? i. スリナデICa?	O. 25Y5/1黄灰 i. 25Y6/2灰黄	
61—20 115—20	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	底部 (甕)	2—C—・	B : (4.1)				O. 右上がりタタキ→ スリナデICa i. スリナデタテICa	30/CM 25Y4/1黄灰	
61—21 115—21	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 Y	?	B : (5.0)		O. (上半)スリナデIAa→ スリナデICa i. スリナデIAa		O. スリナデ? i. 押捺	O. 10Y R5/2灰黄 i. 10Y R2/1黒	・底面に木の葉 の痕跡あり
61—22 115—22	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	小形丸 底甕?	?	C : (13.0)					O. 5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R5/2灰褐	

表 24 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (3)

図番号 図版番号	地 層	区 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
						口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
61—23 111—23	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	小形丸 底鉢?	?	—		O. ミガキAヨコ i. スリナデICA→ ミガキAタテ	O. ケズリア→ ミガキAタテ i. ミガキAタテ	10Y R6/2灰黄褐			
61—24 115—24	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	脚台 (小形器 台?)	?	—			O : スリナデIA→ スリナデICA i : スリナデIAa	10Y R6/3にぶい黄橙		・内面に赤色顔 料付着 ・外面にスス付 着	
— 111—25	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 S	?	—		O. タタキ i. ケズリア→スリナデ	40/CM	O. 75Y R4/1褐灰 i. 75Y R5/1褐灰			
61—26 111—26	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土	壺	N—A ₂ —a	C : 17.1 W : 16.55	O. (口縁) ミガキBナナメ→ (頸部) ミガキBヨコ i. (口縁) ミガキBナナメ→ (頸部) ミガキBヨコ	O. (上半) ミガキBナナメ→ (下半) ミガキBヨコ i. (上半) 押捺A (下半) ケズリア→スリナデ		O. 10Y R5/2灰黄褐 i : 10Y R4/2灰黄褐～ 10Y R3/1黒褐			
61—27 115—27	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土	甕 F	・—・—d	C : (15.0)	O. スリナデヨコICA i. スリナデヨコICA			O. 10Y R6/3にぶい黄 橙 i. 75Y R5/2灰褐			
61—28 115—28	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土	甕 F	・—・—g ₁	C : 13.0	O. スリナデIB i. スリナデIB	O. スリナデIAa i. ケズリア	9/cm	暗灰褐			
61—29 111—29	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土上層	甕 F	・—・—?	C : 16.55	O. スリナデヨコICA i. スリナデヨコICA	O. スリナデIAa i. ケズリア	6/cm	O. 75Y R6/3にぶい褐 i. 5Y R6/4にぶい橙			
61—30 112—30	第3—aトレンチ 周濠 植物腐植土上層	小形丸 底鉢		C : 9.2 H : 7.6	O. スリナデヨコICA i. スリナデヨコICA	O. スリナデIAa i. (上半) スリナデICA (下半) スリナデIAb?→ スリナデII Ca	8/cm 9/cm	10Y R6/3にぶい黄橙			
62—31 115—31	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ic 黒色	甕 S?	?	—	O. (口唇) スリナデヨコICA (口縁～頸部) ミガキA i. スリナデヨコICA			2.5Y 5/2暗灰黄			
62—32 115—32	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ic 黒色	甕	吉備形甕	—	O. (口唇) 櫛状スリナデ ヨコIAa i. スリナデヨコICA			5Y R7/3にぶい橙			
62—33 115—33	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ic 黒色	甕	吉備形甕	—	O. (口唇) 櫛状スリナデ ヨコIAa i. スリナデヨコICA			10Y R7/2にぶい黄橙			

表 25 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
62—34 115—34	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 Y (F)	?	—	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa			5Y R7/6橙	
62—35 115—35	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 S	?	—	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa			O. 25Y3/7浅黄 i. 25Y5/1黄灰	
62—36 115—36	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 F	・—・—e ₁	—	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠAa	9/cm		25Y5/1黄灰と5Y R1/3 にぶい橙が斑状になる	
62—37 115—37	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 F	—	—				O. 5Y2/1黒 i. 10Y R6/2灰黄褐	
62—38 115—38	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 F	・—・—g ₁	—	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa			25Y6/2灰黄	
62—39 115—39	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 Y	・—・—?	C : (15.0)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa			10Y R6/3にぶい黄橙	・外面にスス付 着
62—40 115—40	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	甕 F	?	C : (13.0)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa			10Y R8/2灰白	
62—41 115—41	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	底部 (ミニ チュア 甕)	2—?—・	B : (2.7)			O. タタキ→ミガキA i. スリナデⅠCa→ スリナデⅠCa	O. 25Y5/2暗灰黄 i. 10Y R5/2灰黄褐	
62—42 115—42	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	底部 (甕?)	3—C—・	B : (2.9)			O. マメツ不明 押捺あり i. マメツ不明	O. 10Y R7/1灰白 i. 25Y7/1灰白	
62—43 115—43	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	底部 (甕?)	2—C—・	B : 3.8		O. スリナデⅠCa		25Y5/2暗灰黄～10Y R 5/2灰黄褐	
62—44 115—44	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰc 黒色	底部 (甕Y)	1?—C—a	B : 3.8			O. タタキ i. スリナデⅠAb	25Y6/2灰黄	

表 26 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
62—45 112—45	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	底部 (甕)	6—・	B : 70		O. ケズリ A i. ケズリ A	O. ケズリ A i. ケズリ A	O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 2.5Y4/1黄灰	
62—46 115—46	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	底部 (甕)	3—C—・	B : 20			O. 押捺 i. スリナデ I C a	2.5Y5/1黄灰	
62—47 115—47	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	底部 (甕)	2—C—・	B : 37.5			O. タタキ? i. スリナデ I C a	2.5Y5/2暗灰黄	
62—48 115—48	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	須恵器 鉢?		C : 28.0	O. 回転ナデ i. 回転ナデ			O. 2.5Y5/1黄灰 i. N4/0灰	
62—49 112—49	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I b 青黒色下部	脚台 (高坏)	3か4—B—b か c	—			O. スリナデ I A a i. 押捺	8/cm	・ ロクロ右回転
62—50 115—50	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I b 青黒色下部	円筒 埴輪		—		O. タテハケメ→ヨコハケメ i. 荒いユビナデ		2.5Y R5/6明赤褐	
62—51 115—51	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a 黒灰色	底部 (甕)	5—・	B : (2.5)			O. タタキ→ スリナデ I C a i. スリナデヨコ I A b スリナデヨコ I C a		
62—52 115—52	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	脚台 (高坏)	・—B—b	—			O. スリナデ I C a i. スリナデ I A b	5Y R5/6明赤褐	
62—53 115—53	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	円筒 埴輪		B : (15.0)			O. 板オサエ i. ユビナデ	10Y R7/2にぶい黄褐	
62—54 112—54	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	朝顔形 埴輪		—	O. タテハケメ i. (上半) ヨコハケメ (下半) 斜めユビナデ	7/cm (約 2cm 幅)		7.5Y R7/4にぶい橙	
63—55 115—55	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 埴輪		H : (4.1) C : (12.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			10Y R8/3浅黄橙	

表 27 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (6)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
63—56 115—56	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		o. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 2.5Y R7/6橙	
63—57 115—57	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ケズリ? i. 横方向ユビナデ		7.5Y R6/4にぶい橙	
63—58 115—58	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		o. 7.5Y R7/1灰白 i. 7.5Y R6/1灰	
63—59 115—59	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		o. 2.5Y 6/2灰黄 i. 2.5Y 4/1黄灰	
63—60 115—60	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		H : (1.8) C : (14.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. (上半) 横方向ユビナデ (下半) ヘラケズリ i. (上半) 横方向ユビナデ (下半) 押捺		2.5Y 6/2灰黄 口縁部付近は2.5Y 3/1黒 褐	
63—61 115—61	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		H : (2.2) C : (16.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ 押捺 i. ユビナデ		10Y R8/2灰白	
63—62 115—62	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		—	O. ユビナデ i. ハケメ	3/cm		7.5Y R6/4にぶい橙	
63—63 115—63	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	瓦器 碗		—		i. ミガキ		5Y R6/4にぶい橙	
63—64 116—64	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		C : (14.8)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ケズリ i. 横方向ユビナデ		2.5Y 7/2灰黄	
63—65 116—65	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		C : (18.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		10Y R6/2灰黄褐	
63—66 116—66	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	黒色 土器 碗		B : (8.0)		O. 不明 i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. ユビナデ	O. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 7.5Y R2/1黒	・内黒

表 28 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (7)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
63—67 116—67	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕？		—	O. ユビナデ i. ユビナデ			5Y R6/6橙	
63—68 116—68	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕？		—	？			10Y R7/3にぶい黄橙	
63—69 116—69	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕？		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			5Y R6/6橙	・口縁外面にス ス付着
63—70 116—70	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 押捺		5Y R7/6橙	
63—71 116—71	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		C：(18.0)	O. 横方向ユビナデ i. ハケメ			10Y R7/3にぶい黄橙	
63—72 116—72	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		C：(20.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 10Y R6/2灰黄褐	
63—73 116—73	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 移動式 甕		C：(24.0)	O. ヘラケズリ・ユビナデ i. ユビナデ	O. タテハケメ i. ユビナデ	5/cm	5Y5/4にぶい赤褐	
63—74 116—74	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 羽釜		W：(38.4)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		5Y R6/6橙	・羽の下にスス 付着
63—75 112—75	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層Ⅰa (黒灰色)・黒色 粘土層	須恵器 大甕		C：(63.0)	O. 回転ヨコナデ → (頸) 櫛歯文 回転ヨコナデ i. 回転ヨコナデ	O. 回転ヨコナデ i. 回転ヨコナデ		N5/0灰～10Y5/1灰	
64—76 116—76	第3トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	土師器 埴		H：(3.6) C：(15.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 押捺 i. 横方向ユビナデ	i. 押捺	7.5Y R6/6橙	・口縁に沈線が 入る
64—77 116—77	第3トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	瓦器 埴		H：(4.0) C：(12.0) B：(7.0)	O. 横方向ユビナデ i. ミガキ	O. 押捺 i. ミガキ	O. ユビナデ i. ミガキ	O. 10Y R6/4にぶい黄 橙 i. 10Y R6/2灰黄褐	

表 29 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (8)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
64—78 112—78	第3トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	土師器 甕		C : (20.0) W : (19.0)	O. 横方向ユビナデ i. ヨコハケメ	O. ユビナデ i. ユビナデ			5Y R6/6橙	・口縁に沈線が 入る
64—79 112—79	第3トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	土師器 甕?		C : (25.0)	O. 横方向ユビナデ i. ヨコハケメ	O. ユビナデ i. ユビナデ			7.5Y R6/4にぶい橙	・口縁部外面に スス付着
— 112—80	第3トレンチ 中央部 ③—④間黒褐色 土	人物埴 輪 手		—					O. 7.5Y R7/4にぶい橙 i. 10Y R8/2灰白	
64—81 116—81	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 皿		C : (12.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ			10Y R7/3にぶい黄橙	
64—82 112—82	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 皿		C : 15.85	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ		2.5Y R6/8橙～2.5Y R 5/8明赤褐	
64—83 116—83	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 碗		C : (15.0)	O. 横方向ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ			O. 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R5/4にぶい褐	
64—84 116—84	第3トレンチ 黒褐色土層	黒色 土器 碗		H : (3.5) C : (14.0) B : (6.4)	O. 横方向ユビナデ i. ヘラミガキ	O. (上半) 押捺 (下半) 横方向ユビナデ i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R7/3にぶい黄 橙 i. 7.5Y 2/1黒	
64—85 116—85	第3トレンチ 黒褐色土層	黒色 土器 碗		B : (8.0)		O. ユビナデ i. ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ		O. 2.5Y 7/2灰黄 i. 5Y 3/1オリーブ黒	・内黒
64—86 116—86	第3トレンチ 黒褐色土層	黒色 土器 碗		B : (7.8)		O. ユビナデ i. マメツ不明	O. ユビナデ i. マメツ不明		O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 2.5Y 4/1黄灰	・高台の取り付 けが汚い
64—87 116—87	第3トレンチ 黒褐色土層	瓦器 碗		B : (5.7)		O. ユビナデ i. ユビナデ→ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		N4/0灰	
64—88 116—88	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 甕		C : (18.0)	O. ユビナデ i. (口唇～口縁) 横ヘラミガキ (頸) ケズリ	O. ユビナデ i. ハケメ	9/cm		O. 2.5Y 6/2灰黄 i. N3/0暗灰	・外面にスス付 着

表 30 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表(9)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
64—89 112—89	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 甕？		C：18.5	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			O. 10Y R7/3にぶい黄 橙 i. 10Y R8/4浅黄橙	
64—90 116—90	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 移動式 甕		C：(21.5)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ハケメ i. ユビナデ	3.5/cm		O. 10Y R5/2灰黄褐 i. 2.5Y3/1黒褐	
64—91 116—91	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 移動式 甕		C：(21.7)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ			O. 10Y R7/3にぶい黄 橙と10Y R5/1褐灰 i. 2.5Y5/1黄灰	
— 112—92	第3トレンチ 中央部 ③－④間黒褐色 土	緑釉？		—					5Y6/2灰オリーブ	
65—93 116—93	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 小皿		H：(1.65) C：(9.2)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			O. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
65—94 116—94	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 小皿		C：(11.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			10Y R7/3にぶい黄橙	
65—95 116—95	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C：(13.0)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ			10Y R7/4にぶい黄橙	
65—96 116—96	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C：(14.0)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 ユビナデ i. ユビナデ		O. 押捺 ユビナデ i. ユビナデ	O. 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 10Y R7/3にぶい黄 橙	
65—97 116—97	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		H：(2.8) C：(15.0) B：(7.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 縦方向ユビナデ i. ユビナデ		O. 押捺 ユビナデ i. ユビナデ	7.5Y R4/2灰褐	
65—98 116—98	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C：(16.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ケズリ i. ユビナデ			5Y R6/6橙	
65—99 116—99	第3－dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C：(15.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			7.5Y R6/6橙	

表 31 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (10)

図番号 図版番号		地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
						口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
65—100 112—100		第 3 - d トレンチ 暗灰褐色土	黒色 土器 埴		B : (8.2)		O. 横方向ユビナデ i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R6/3にぶい黄 橙 i. N3/0暗灰	
65—101 116—101		第 3 - d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 埴		B : (7.8)		O. ユビナデ i. 剥離不明	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 7.5Y R8/4浅黄橙 i. 5Y R7/8橙	
65—102 116—102		第 3 - c トレンチ 暗灰褐色土	黒色 土器 埴		B : (8.9)		O. マメツ不明 (ナデか) i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R7/4にぶい黄 橙～10Y R6/4にぶ い黄橙 i. 10Y 2/1黒	
65—103 116—103		第 3 トレンチ 暗灰褐色土	黒色 土器 埴		B : (10.8)		O. ユビナデ i. ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ		10Y R5/4にぶい黄褐	
65—104 112—104		第 3 - c トレンチ 暗灰褐色土	灰軸 皿		H : 22 C : 15.1 B : 7.6	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. (上半) ヘラケズリ→ ユビナデ (下半) ユビナデ i. ?	O. ユビナデ i. ユビナデ		O. 10Y R7/1灰白 i. 5Y 7/2灰白	・全体に灰釉が かかる ・裏面にヘラ描 きあり
65—105 116—105		第 3 トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : (20.0)	O. 横方向ユビナデ i. ハケメ	O. ユビナデ i. マメツ不明			5Y R5/4にぶい赤褐	
65—106 116—106		第 3 トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : (17.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			O. 5Y R7/6橙 i. 7.5Y R5/4にぶい褐	・外面にスス付 着
65—107 116—107		第 3 トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : (27.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ナナメユビナデ i. ユビナデ			7.5Y R6/4にぶい橙	
65—108 116—108		第 3 トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		—	O. 横方向ユビナデ i. (口縁) ハケメ (頸) 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. 押捺			5Y R6/6橙	
65—109 112—109		第 3 - c トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : 29.0	O. ユビナデ i. (口唇) ユビナデ (口縁～頸) ハケメ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			5Y R6/6橙	
65—110 116—110		第 3 トレンチ 暗灰褐色土	土師器 羽釜		—		O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			5Y R6/6橙	・羽先端に沈線 入る

表 32 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (11)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
65—111 112—111	第3トレンチ 暗灰褐色土	須恵器 小壺		B : (38)		O. ユビナデ i. 回転ナデ		O. 回転ヘラケズリ i. 未調整	10Y5/1灰	・火ぶくれによる 破損箇所あり
66—112 116—112	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : (15) C : (80) B : (24)	O. ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. ユビナデ i. 横方向ユビナデ	10Y R6/3にぶい黄橙	
66—113 113—113	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : (20) C : (100)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	5Y R6/6橙	
66—114 113—114	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : 18 C : 98	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ			5Y R7/6橙～5Y R6/6 橙	
66—115 113—115	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : 23 C : 101	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺		O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺	5Y R6/6橙	
66—116 116—116	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 皿		H : (30) C : (140) B : (86)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺		O. 押捺 i. 押捺 ハケメ	7.5Y R7/6橙	
66—117 116—117	第3トレンチ 黄褐色土	瓦器 碗		—	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ケズリ→ミガキ			N5/0灰	
66—118 116—118	第3トレンチ 黄褐色土	瓦器 碗		—	O. ヘラミガキ i. ナデ→ミガキ (暗文)	O. オサエ ナデ→ ヘラミガキ (暗文)			N6/0灰	
66—119 113—119	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 碗		B : (68)		O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ		O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	2.5Y 4/1黄灰	
66—120 117—120	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 碗		C : 148	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. マメツ不明 i. ヘラミガキ			5Y3/1オリープ黒	
66—121 117—121	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 碗		C : (138)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ヘラケズリ→ナデ i. ヘラミガキ			O. 5Y4/1灰 i. 2.5Y3/1黒褐	

表 33 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (12)

図番号 図版番号	地 区 位 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
66—122 113—122	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 埴 埴		H : 535 C : 160 B : 74	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	2.5Y 2/1 黒～5Y 3/1 オ リーブ黒	・面黒
66—123 113—123	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 埴 埴		H : 54 C : 17.0 B : 78	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ	5Y 3/1 オリーブ黒	・面黒
66—124 113—124	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 埴 埴		H : (54) C : (16.5) B : (7.5)	O. ユビナデ i. 不明	O. ユビナデ i. ミガキか	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 10Y R 7/4 にぶい黄 褐 i. 黒	・内黒
66—125 117—125	第3-c トレン チ 黄褐色土	瓦器 埴 埴		B : (5.0)		O. ヘラミガキ i. らせん状ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ	N 4/0 灰	
66—126 113—126	第3-c トレン チ 黄褐色土	須恵器 甕 甕		W : 99		O. (上半) ユビナデか (下半) ヘラケズリ→ ユビナデ i. ユビナデ	O. ヘラケズリ→ユビナデ i. 無調整	N 6/0 灰～N 5/0 灰	・自然釉あり
66—127 113—127	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 甕 甕		C : (18.0)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺		O. 5Y R 6/4 にぶい橙 i. 10Y R 8/2 灰白	・外面にスス付 着
66—128 117—128	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 甕 甕		C : (15.0)	O. (口縁) ユビナデ (頸) ハケメ→ ユビナデ i. 櫛方向ユビナデ	O. 櫛方向ユビナデ i. ユビナデ		O. 5Y R 6/4 にぶい橙 i. 7.5Y R 5/4 にぶい褐	
66—129 113—129	第3トレンチ 耕作土	土師器 羽釜		C : 21.8	O. ユビナデ i. 押捺	O. マメツ不明 i. マメツ不明		7.5Y R 8/2 灰白	・外面にスス付 着
67—130 113—130	第4トレンチ 前方部 流入溝 最下層	壺	N—?—a	C : 12.7	O. マメツ不明 (ミガキAか) i. マメツ不明 (ミガキAか)	O. マメツ不明 (ミガキAか) i. マメツ不明 (ミガキAか)		O. 7.5Y R 7/6 にぶい橙 ～7.5Y R 6/4 にぶい 橙 i. 5Y R 6/4 にぶい橙	
67—131 113—131	第4トレンチ 前方部北東隅 流入溝 最下層	底部 (甕)	2—A—・	B : 52		O. スリナデIAa i. スリナデIAa	O. 押捺A i. ケズリB	茶褐	
67—132 117—132	第4トレンチ 前方部北東隅 流入溝 最下層	底部 (甕)	3—C—a	B : (3.8)			O. スリナデICa i. スリナデIAa	10Y R 6/3 にぶい黄橙	

表 34 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (13)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
68—133 117—133	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 最下層	脚台 (高坏)	4 (か2) —B —?	—		O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明	10Y R7/2にぶい黄褐	
68—134 113—134	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 最下層	脚台 (小形器 台)	5—A—?	B : (10.9)			O. (上半) ミガキ A (裾) スリナデ I C a i. スリナデ I C a	10Y R7/2にぶい黄褐	
68—135 113—135	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 下層	小形丸 底鉢	II—D I	C : 11.8	O. (口唇) スリナデ I B? (口縁~頸) ケズリ→ミガキ A i. (口唇) スリナデ I B (口縁~頸) ミガキ A	O. ? i. スリナデ I C a		2.5Y R6/6橙	
68—136 113—136	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 上層	壺	㊦—C—a	C : 23. 0	O. (上半) スリナデ I B→ 液体文5本→ 竹箸彫彩律文 (下半) スリナデ I B i. スリナデ I B			10Y R8/2灰白	
68—137 114—137	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 上層	高坏	E—・—・—・	C : 12.3	O. (口唇) スリナデ I B i. (口唇) スリナデ I B	O. (上半) ミガキ A (下半) ケズリ→ミガキ i. ミガキ A ヨコ→ミガキ A タテ		O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R6/6橙~5Y R6/6橙	
68—138 114—138	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 上層	高坏	B ₆ —4—B—・	H : 8.7 C : 11.1 B : 9.8	O. ミガキ A か? i. スリナデ I B ヨコ	O. ミガキ A か i. (上半) スリナデ I A a (下半) スリナデ I C a	O. (柱状部) ケズリ→ ミガキかスリナデ I C (裾部) スリナデ I B i. (柱状部) スリナデ I C a (裾部) スリナデ I B	7.5Y R7/4にぶい橙	
68—139 114—139	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 最下層	脚台 (高坏)		B : 17.8			O. ミガキ A i. スリナデ I A a (裾) スリナデ I C a	10Y R6/2灰黄褐	
68—140 117—140	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 Y	・—・—?	C : (14.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a	O. 右上がりタタキ		10Y R7/3にぶい黄橙	
68—141 117—141	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 Y	・—・—?	C : (15.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			O. 2.5Y 4/1黄灰 i. 2.5Y 6/3にぶい黄	
68—142 117—142	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 S Y	・—・—d ?	C : (16.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			10Y R7/3 にぶい黄橙	
68—143 117—143	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—?	C : (13.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			10Y R7/3 にぶい黄橙	

表 35 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (14)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
68—144 117—144	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—g	C : (128)	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. スリナデ I A a i. ケズリ B	6/cm		7.5Y R7/2明褐灰	
68—145 117—145	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F ?	・—・—a ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10Y R6/3にぶい黄褐	
68—146 117—146	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 ?	・—・—?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 2.5Y3/1黒褐 i. 2.5Y5/2暗灰黄	
68—147 117—147	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F		—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				7.5Y R8/4浅黄橙	
68—148 117—148	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	?	—	O. スリナデヨコ I B i. スリナデヨコ I B				7.5Y R7/4にぶい橙	
68—149 117—149	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—e ₂	—	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a				2.5Y5/2暗灰黄	・外面にスス付 着
68—150 117—150	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F ?		—					O. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 5Y R7/4にぶい橙	
68—151 117—151	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—e ₁	—	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a				5Y R7/4にぶい橙	
68—152 117—152	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	底部 (甕 ?)	6—・	B : 5.4				O. スリナデ I A a i. ケズリ	O. 10Y R6/2灰黄褐 i. 2.5Y5/1黄灰	
68—153 114—153	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	底部 (甕 ?)	2—A—・	B : 6.3				O. スリナデ I A a i. スリナデ I A a	O. 7.5Y R6/2灰褐 i. 10Y R7/2にぶい黄 橙	・底部外面にス ス付着
68—154 114—154	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	脚台 (甕)	東海形	B : 6.0				O. (上半) スリナデ I A a (下半) ミガキ B i. 押捺 A	10Y R6/2灰黄褐	

表 36 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (15)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
68—155 114—155	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	小形器 台	I—C ₄	H : 88 C : 100 B : 11.2	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. ミガキ B i. ミガキ B	O. (上半) ケズリ B ミガキ B i. スリナデ I A a→ スリナデ I C a		5Y R 6/6橙～7.5Y R 6/4 にぶい橙	・ 3 方スカシ
68—156 114—156	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層下部	鉢		H : 66 C : 7.9 B : 2.4	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. ? i. 押捺	?		10Y R 4/2灰黄褐	
68—157 114—157	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	壺	N—A—b	C : 29.0	O. (口縁) スリナデ I C a (口縁) ミガキ A (口縁) マメツツ不明 i. (口縁) ミガキ A (口縁) マメツツ不明				5Y R 7/6橙	
68—158 117—158	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕 F ?	・—・—e ₁	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				5Y R 7/6橙	
68—159 114—159	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕 F	・—・—g ₂	C : (16.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. スリナデヨコ I C a i. ケズリ B			7.5Y R 6/3にぶい褐	
68—160 117—160	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕 F	・—・—b ?	C : (16.4)	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. スリナデ I A a→ スリナデ I C a i. スリナデ I C a	6/cm		10Y R 7/3にぶい黄橙～ 10Y R 6/3にぶい黄橙	
68—161 117—161	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕	吉備形	C : (12.0)	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a				O. 7.5Y R 7/4にぶい橙 i. 2.5Y R 6/8橙	
68—162 117—162	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	底部 (?)	3—A—・	C : (4.3)			O. 右上がりタタキ i. スリナデ I A a	7/cm	O. 10Y R 5/3にぶい黄 橙 i. 10Y R 3/2黒褐	
69—163 117—163	第4トレンチ 前方部前面薄 下層 (青灰色粘 質土)	口縁 (甕)	b	C : (11.0)	O. スリナデ I C a i. スリナデ I A a				7.5Y R 6/3にぶい褐	
69—164 117—164	第4トレンチ 前方部前面薄 下層 (青灰色粘 質土)	甕 F	・—・—e ₁ ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				7.5Y R 7/4にぶい橙	
69—165 117—165	第4トレンチ 前方部前面薄 中層 (黒灰色砂 質土)	壺	N—A ₁ —a	C : (20.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				7.5Y R 8/3浅黄橙～10Y R 8/3浅黄橙	

表 37 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (16)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
69—166 117—166	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 Y ?	・—・—?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10Y R5/3にぶい黄褐	
69—167 117—167	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 ?	・—・—?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 5Y R7/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	
69—168 117—168	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 F	・—・—e ₁ ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			7.5Y R7/4にぶい橙	
69—169 117—169	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 F	・—・—e ₂ ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10Y R6/2灰黄褐	・外面にスス付 着
69—170 117—170	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 F	・—・—e ₁ ?	C : (11.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 7.5Y R7/4にぶい橙 i. 10Y R7/4にぶい黄 橙	
69—171 117—171	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕?)	6—・	B : (5.6)			O. スリナデ I A a→ スリナデ I C a i. ケズリ	O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 5Y 5/1灰	
69—172 117—172	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕)	3 ?—C—?	B : (2.8)			O. スリナデ I C a ? i. マメツ不明	10Y R8/1灰白	
69—173 114—173	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕?)	2—・	B : (4.3)			O. タタキ→ スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. 5Y R7/4にぶい橙 ~2.5Y R6/4にぶい 橙 i. 2.5Y 5/1黄灰	
69—174 117—174	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕?)	1—C—c ?	B : (4.3)			O. 左上がりタタキ i. スリナデ I A a・ スリナデ I C a	O. 10Y R7/4にぶい黄 橙 i. 7.5Y R7/6橙	
69—175 117—175	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	口縁 (高坏)		C : (18.0)	O. マメツ不明 i. ミガキ A か?			10Y R7/2にぶい黄橙	
69—176 117—176	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	脚台 (小形器 台)		B : (10.0)			O. ミガキ A ヨコ i. スリナデ I C a	5 Y R6/6橙	

表 38 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (17)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
69—177 114—177	第4トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	円筒 埴輪 底部		—				O. B種ヨコハケ i. ユビナデタテ	2.5Y 8/2灰白	・底部に凹線あり
69—178 117—178	第4トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	円筒 埴輪 胴部		—		O. タテハケ i. ユビナデ	7/cm		O. 5Y R7/6橙 i. 10Y R8/4浅黄橙	
69—179 117—179	第4トレンチ 前方部前面溝 上層 (黒褐色土)	甕 ？		—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10Y R6/3にぶい黄橙	
69—180 117—180	第4トレンチ 前方部前面溝 上層 (黒褐色土)	須恵器 高坏？		—		O. 回転ナデ i. 回転ナデ			N5/0灰	
69—181 114—181	第4トレンチ 前方部前面溝上面 包含層 黒褐色土	土師器 碗		C : 10.0 H : 2.9	O. ヨコユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	7.5Y R8/4浅黄橙	
69—182 117—182	第4トレンチ 周濠上面	土師器 小皿		H : (1.5) C : (9.6)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. 押捺		O. 押捺 i. 押捺	O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
69—183 117—183	第4トレンチ 周濠上面	土師器 小皿		H : (1.4) C : (10.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	O. 10Y R7/4にぶい黄 橙 i. 5Y R6/6橙	
69—184 114—184	第4トレンチ 周濠上面	土師器 小皿		H : (1.4) C : (10.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. ヨコユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	
69—185 117—185	第4トレンチ 周濠上面	土師器 皿		C : (12.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. 押捺			5Y R5/4にぶい赤褐	
69—186 117—186	第4トレンチ 周濠上面	土師器 甕		C : (28.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコハケ	O. タテハケ i. ユビナデ			O. 7.5Y R6/4にぶい黄 橙 i. 7.5Y R4/2灰褐	

表 39 縄向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (1)

図番号 図版番号	種類	地層	区 位	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	木取り	備 考 (実測番号)
70—1 118—1	第3トレンチ 周濠底	直柄鋤		L : 101.2 D : 3.4 I : 31.4 w : 16.1 t : 2.7	・把手を折損 ・身部は角肩で ・身部横断面は中央がややふくらんだ菱形を呈する	・身部両面に幅 2.5cm前後の手斧痕がみられる	柃目材	・柄部と鋤先が使用により磨耗している (縄向 55 - 3)
71—2 118—2	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	横槌		L : 37.3 D : 4.3 I : 19.5 w : 7.0 t : 7.6	・身部と握り部の境目がくびれない ・身部は断面円形	・握り部に手斧痕がみられる ・両木口には材を切り取った際の工具痕がみられる	芯持材	・明瞭な使用痕が認められない ・身の一部に樹皮が残る (縄向 55 - 15)
71—3 118—3	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	横槌		L : 28.5 D : 3.3 I : 13.1 w : 6.4 t : 5.7	・身部と握り部の境目がくびれる ・身部は断面方形	・握り部に細かい手斧痕がみられる	芯持材	・身部は使用による磨耗が激しく、四面のうちの二面が特によく使われている (縄向 55 - 7)
71—4 118—4	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	鎌身 (平鉄)		L : 9.9 w : 15.0 t : 2.5 柄孔 : 3.5	・身部のうち柄孔周辺のみが残存 ・柄孔周囲の隆起がなだらかで段を成さない	・身部両面に手斧痕がみられる	柃目材	(縄向 55 - 12)
71—5 118—5	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	鋤身 (着柄鋤)		L : 64.2 w : 11.3 t : 軸部上半 1.5 軸部下半 2.0	・軸部上半は段をつけて刃部より薄く加工している	・身部両面に幅 2 cm前後の手斧痕がみられる	柃目材	(縄向 55 - 4)
71—6 119—6	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 87.7 W : 11.3 D : 2.9 × 2.7 I : 25.8 w : 13.4 t : 2.3	・把手は逆半円形で、櫛木を太くつくる ・身部は角肩で、横断面は前中央がややふくらみ後面は平坦である ・身部の亀裂を植物質のもので縛って補修している	・身部前面に手斧痕がみられる	柃目材	・鋤先が使用により磨耗している (縄向 55 - 10)
72—7 119—7	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 53.6 D : 3.4 × 3.1 I : 23.5 w : 17.3 t : 2.7	・柄部の一部と把手を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ、後面は平坦	・身部両面に手斧痕がみられる	柃目材	(縄向 55 - 6)
72—8 119—8	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 62.6 D : 3.2 × 3.0 I : 27.1 w : 13.2 t : 2.6	・柄部の一部と把手を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ、後面は平坦	・身部および柄部に手斧痕がみられる	柃目材	・柄部と鋤先が使用により磨耗している (縄向 55 - 5)
72—9 120—9	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 77.9 D : 3.3 × 2.2 I : 19.4 w : 14.5 t : 2.2	・把手の大半を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ後面は平坦	・全体に幅 1 ~ 2 cm 程度の手斧痕がみられる	柃目材	・柄部が使用により磨耗している (縄向 55 - 2)
72—10 119—10	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 24.3 w : 15.9 t : 2.2	・柄部と把手を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ後面は平坦	・身部前面に手斧痕がみられる	柃目材	(縄向 55 - 11)
73—11 120—11	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 85.9 D : 3.6 × 1.8 I : 26.6 w : 11.7 t : 2.1	・把手を折損 ・身部は角肩	・身部両面に柄部に刃幅 3 cm 程度の手斧痕がみられる	柃目材	・柄部が使用により磨耗している (縄向 55 - 1)

表 40 纏向石塚古墳第 4 次調査出土木器観察表 (2)

図番号 図版番号	種 類	地 区 層	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	木取り	備 考 (実測番号)
73-12 120-12	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	朱付き棒	L : 28.8 D : 約 1.5 ~ 2.4	・木口の一端は斜めに削り、他端は材を切り離したままの状態 ・断面円形		分割材	・赤色顔料の塗布が認められる (纏向 55 - 19)
73-13 120-13	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	朱付き棒	L : 18.2 D : 約 1.8 ~ 2.1	・木口の一端は V 字に切り込み、他端は材を切り離したままの状態 ・断面円形		分割材	・赤色顔料の塗布が認められる (纏向 55 - 20)
73-14 121-14	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	加工板	L : 54.0 W : 6.3 T : 1.9	・側面は両側ともに折損 ・木口の一方を平坦に、他方を V 字に削り込んでいる	・表裏両面と短辺の端面に手斧痕がみられる	板目材	・赤色顔料の塗布が認められる (纏向 55 - 16)
73-15 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	板状木片	L : 50.4 W : 6.3 T : 1.9	・両木口を斜めに削る ・断面長方形	・両面に手斧痕がみられる		
73-16 121-16	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	角棒状木片	L : 72.4 W : 2.5 T : 1.5	・断面方形	・両面に手斧痕がみられる		(纏向 55 - 13)
74-17 122-17	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	有孔板状木製品	L : 80.7 W : 20.0 T : 2.0	・一部折損 ・片面には直線的に連なる小孔がみられ、他面には人為的なものか不明であるが多数の凹線が走る	・両面に手斧痕がみられる	板目材	・一部が被火により炭化 (纏向 55 - 21)
75-18 121-18	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	槽				板目材 半裁材	(纏向 55 - 14)
75-19 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	有孔棒	L : 30.5 W : 3.4 T : 3.1 孔約 2 × 1	・方形の穴が穿たれている ・断面不整円形		分割材	
75-20 121-20	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	有孔板状木製品	L : 48.0 W : 12.1 T : 2.8	・一部折損 ・両面に、直線的に連なる小孔がみられる		板目材	・一部が被火により炭化
75-21 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	矢板状木製品	L : 35.0 W : 11.7 T : 2.9				
75-22 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	加工木	L : 15.2 W : 7.4 T : 厚い部分 2.5 薄い部分 1.4				

表 41 纏向石塚古墳第 4 次調査出土木器観察表 (3)

図番号 図版番号	種 類	地 区 層	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	木取り	備 考 (実測番号)
75—23	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	角材	L : 10.6 W : 11.2 T : 3.5	・断面長方形	・表裏と両木口に手斧痕がみられる ・特に表面は細かく丁寧に整形している		
—							
75—24	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	角棒状木片	L : 41.4 W : 4.8	・両木口を斜めに削る	・刃幅約 3 cm の手斧痕がみられる		
—							
75—25	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	加工板	L : 32.6 W : 59.5 T : 28.0	・両側を折損	・表裏両面と木口に手斧痕がみられる	板目材	(纏向 55 - 18)
121—25							
76—26	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	柱状木製品	L : 179.7 W : 約 7.6	・端部は、一方が腐食しており、他方には縦方向に刻むように刃痕が認められる ・材を斜めに削り込む部分が 2 ヶ所ある	・全面に手斧による丁寧に丁寧な瓜削りを施す	芯持材	(纏向 55 - 8)
123—26							
76—27	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	棒状木製品	L : 306.8 W : 6.6	・端部は、一方を折損、他方は刃痕が認められることから切断した可能性がある	・明瞭な加工痕は認められないが、縦方向に面をもっていることから全体的に手斧等で整えてあるとみられる	分削材	(纏向 55 - 9)
123—27							

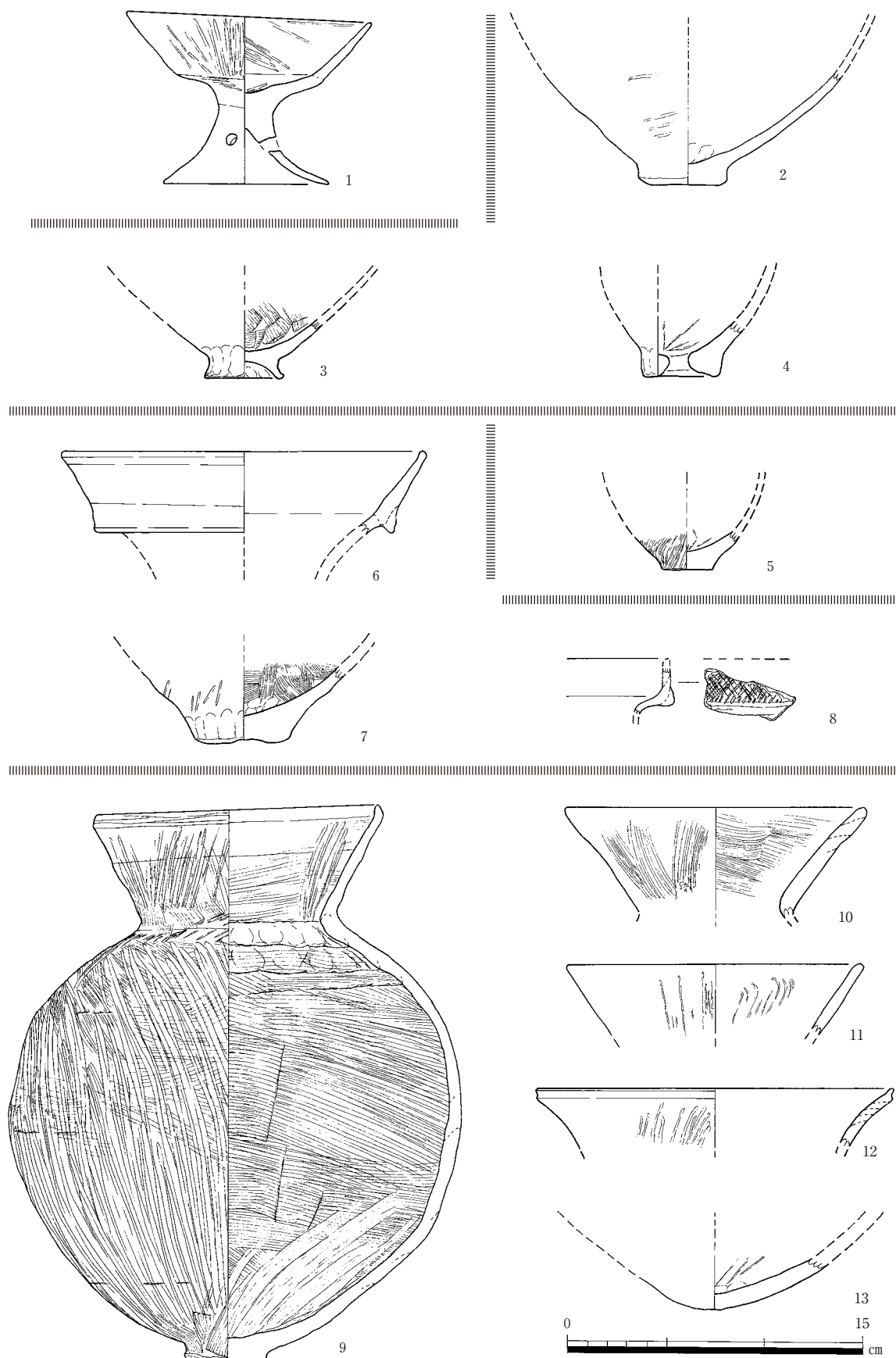


図60 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図1 (1/3)
 第3トレンチ：1 墳丘盛土 2～4 暗灰褐色土 (墳丘盛土)
 5 暗青灰色シルト下層 6～8 暗青灰色シルト 9～13 植物腐植土下層

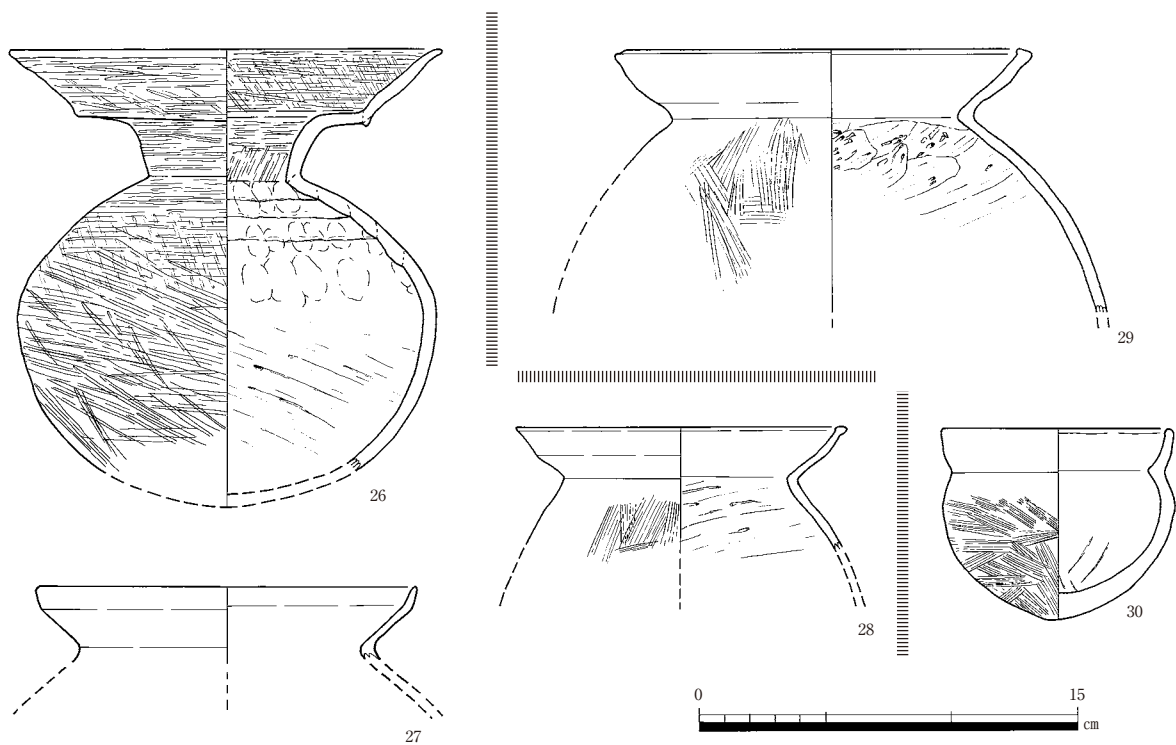
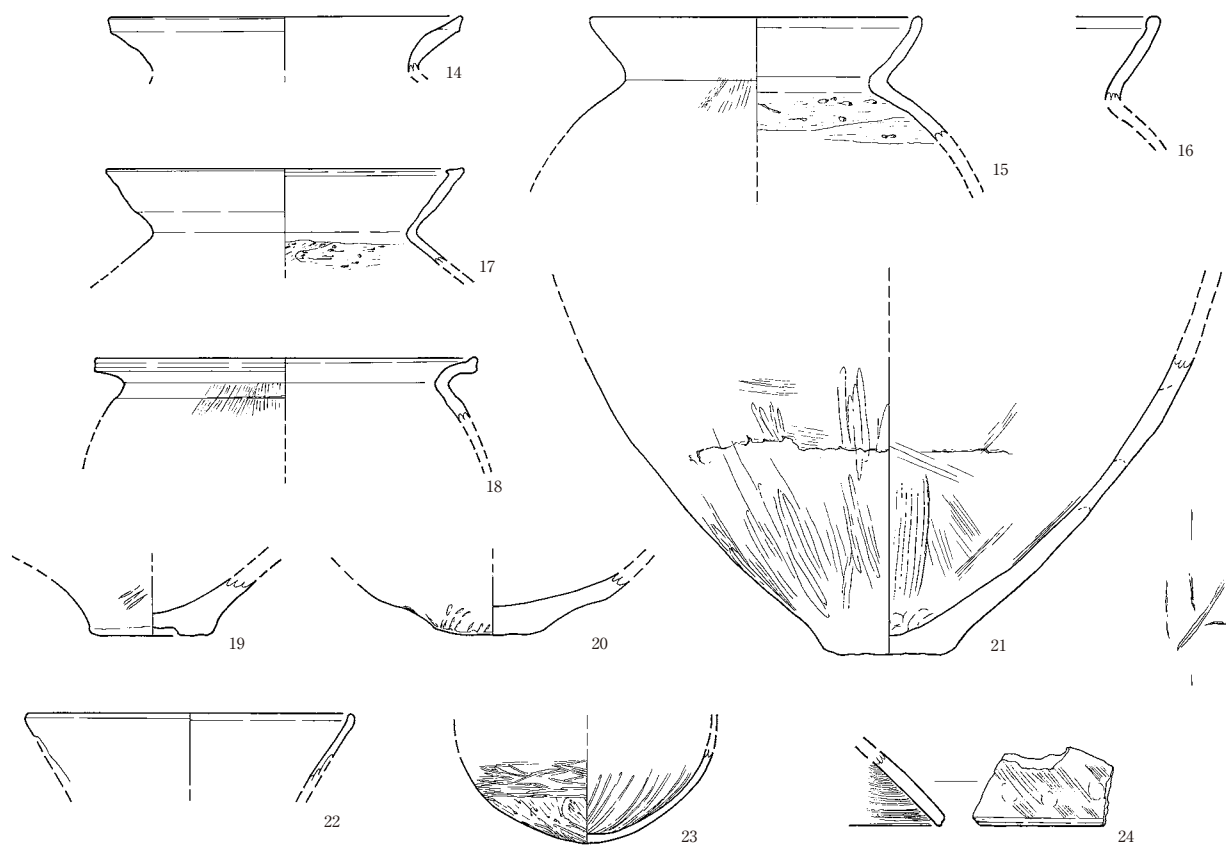


図61 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図2 (1/3)
 第3トレンチ：14～24 植物腐植土下層 26～28 植物腐植土 29・30 植物腐植土上層 (25) は写真図版のみ

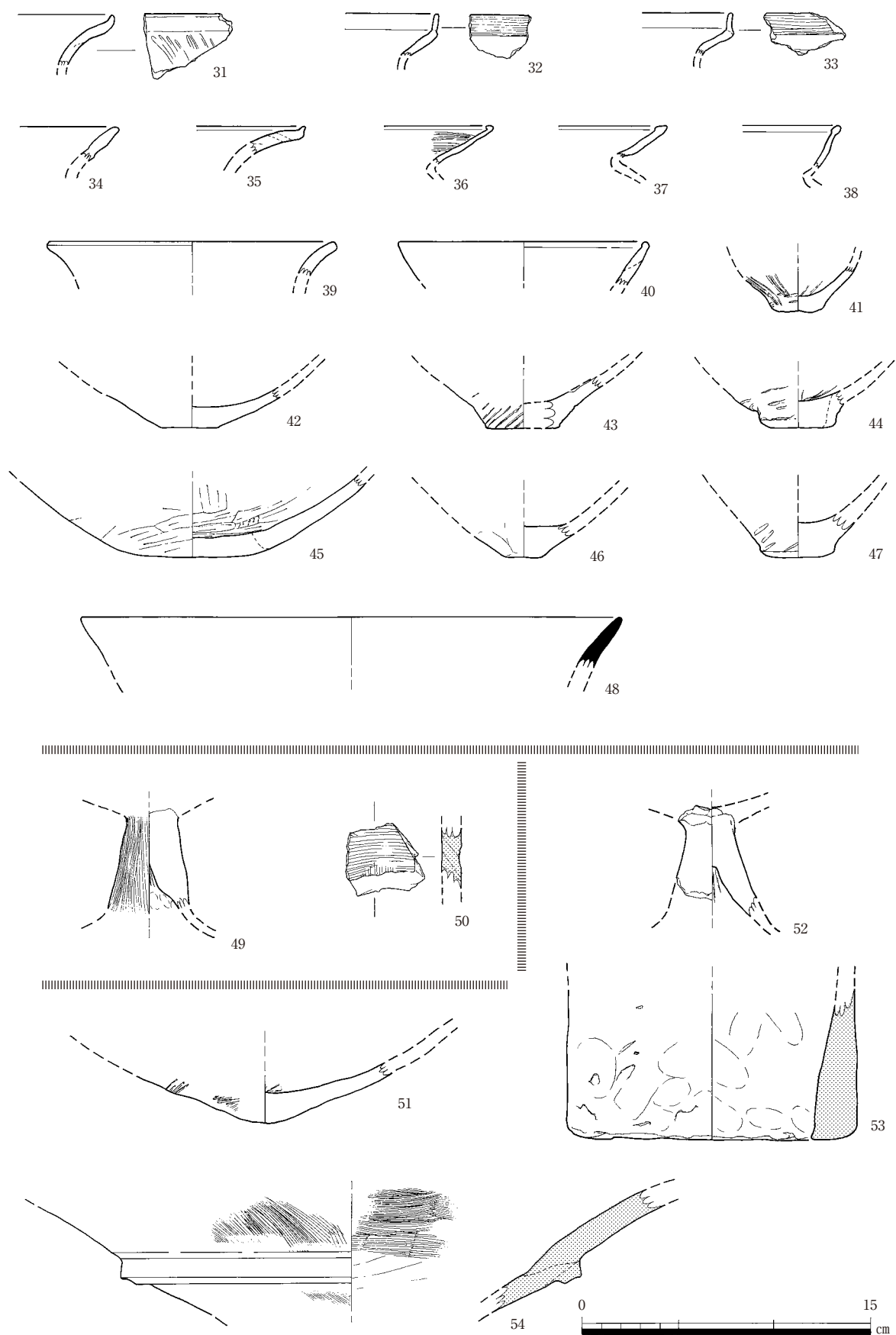


図62 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図3 (1/3)
 第3トレンチ：31～48 黒色粘土層Ⅰc 49・50 黒色粘土層Ⅰb 51～54 黒色粘土層Ⅰa

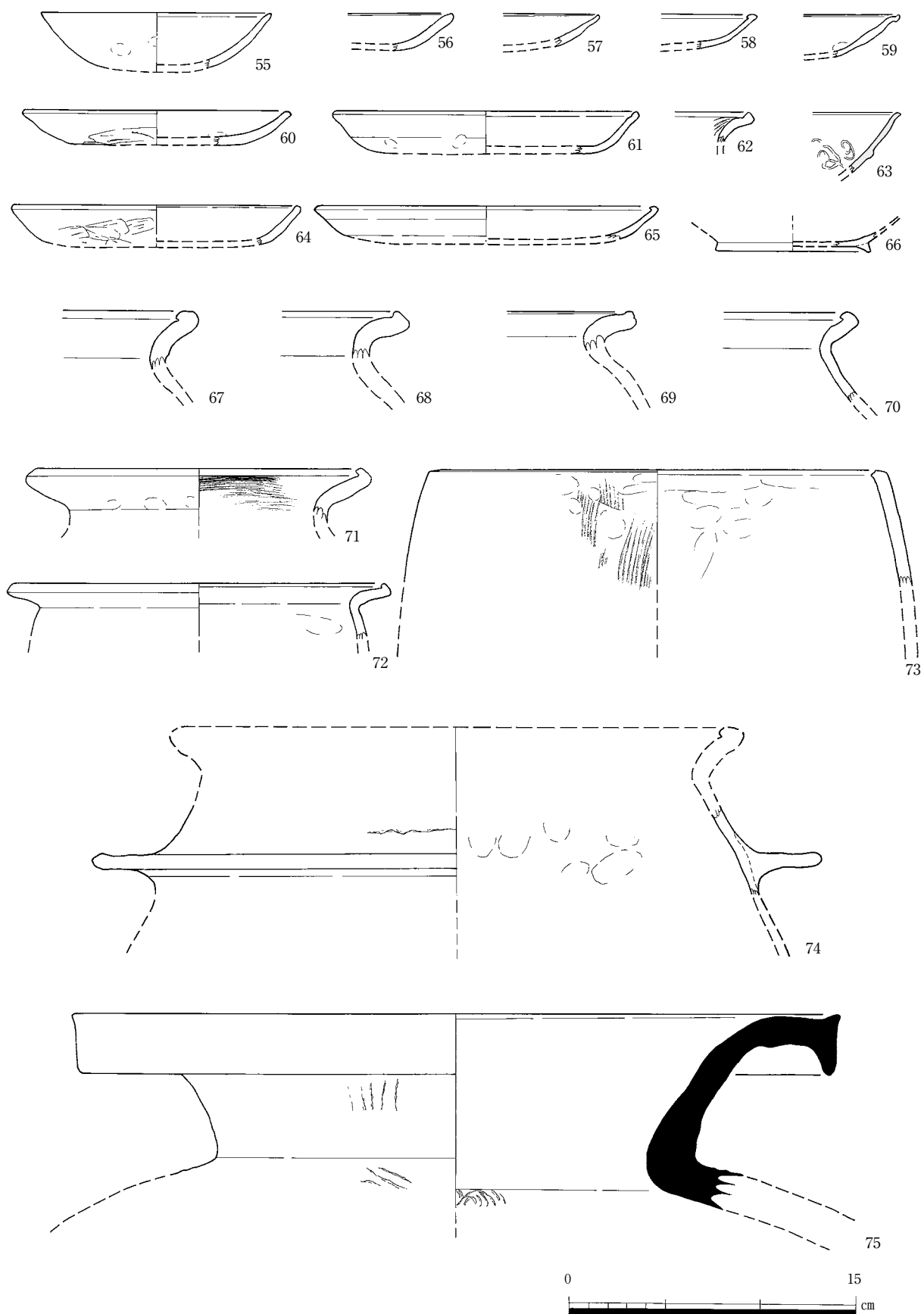


図63 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図4 (1/3)
第3トレンチ：55~75 黒色粘土層Ⅰa

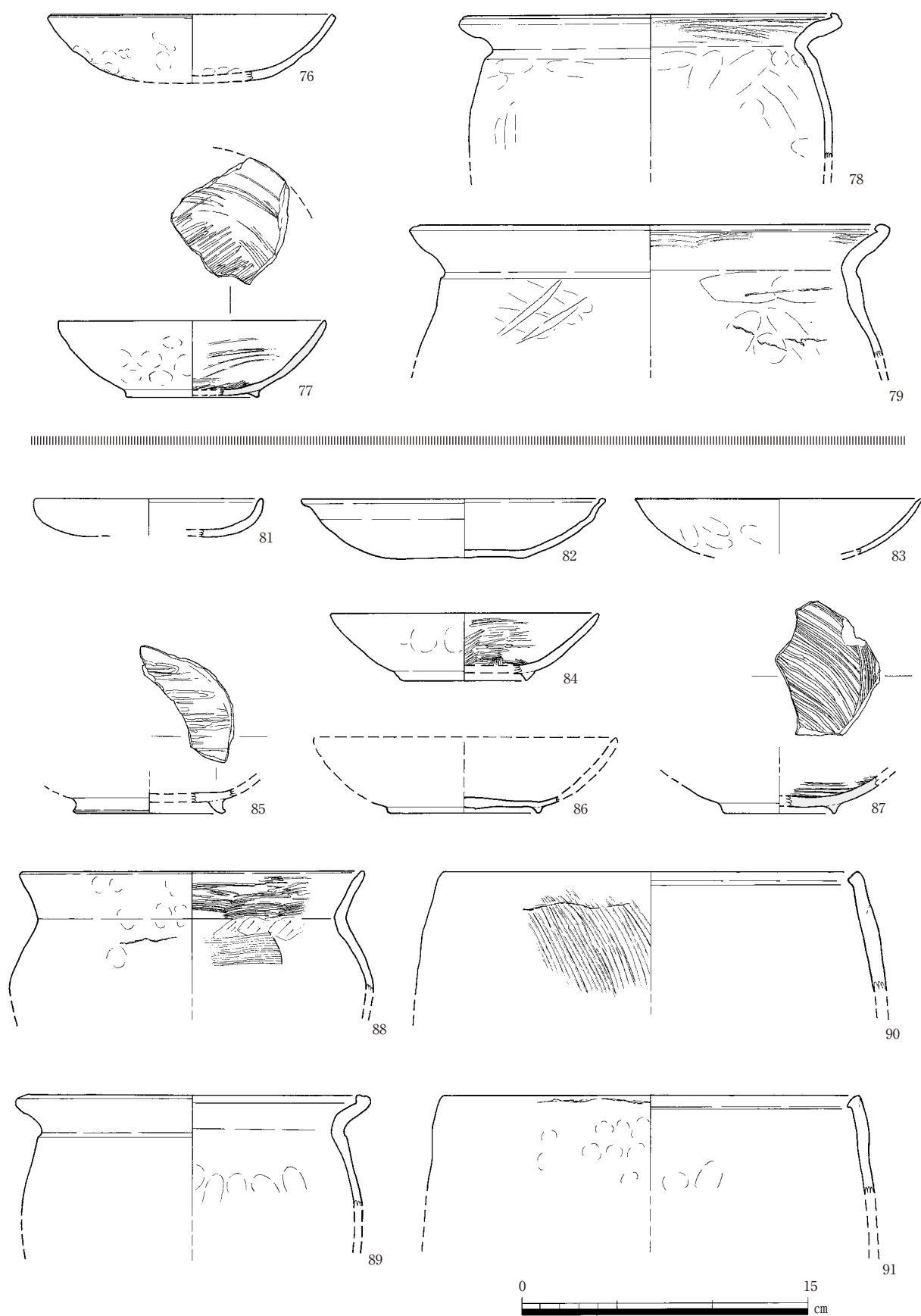


図64 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図5 (1/3)
 第3トレンチ：76～79 黒褐色土層・黒灰色土層 81～91 黒褐色土層 (80・92) は写真図版のみ

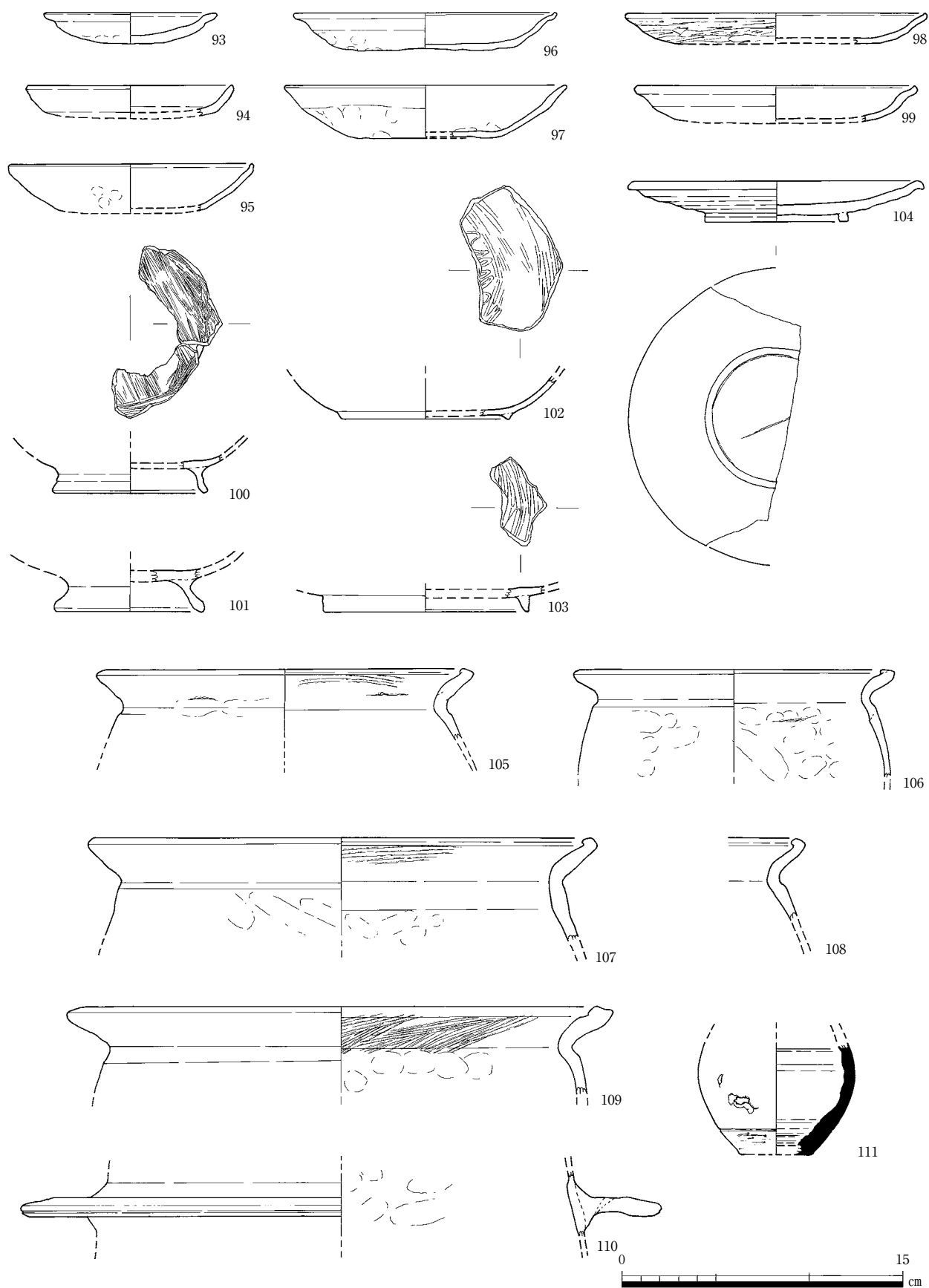


図65 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図6 (1 / 3)
第3トレンチ：93～111 暗灰褐色土層

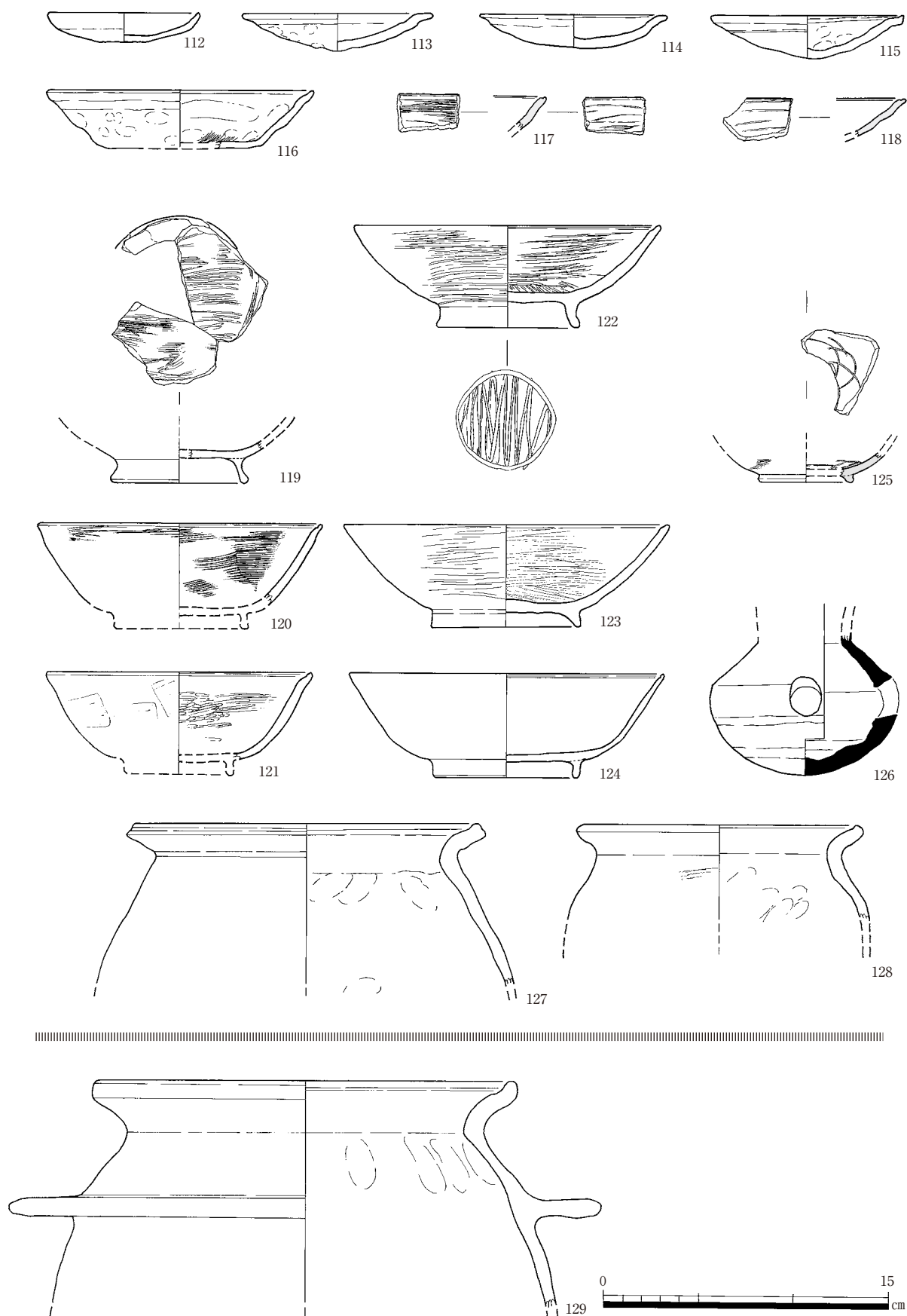


図66 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図7 (1/3)
第3トレンチ：112～128 黄褐色土（黄灰褐色土）129 耕作土

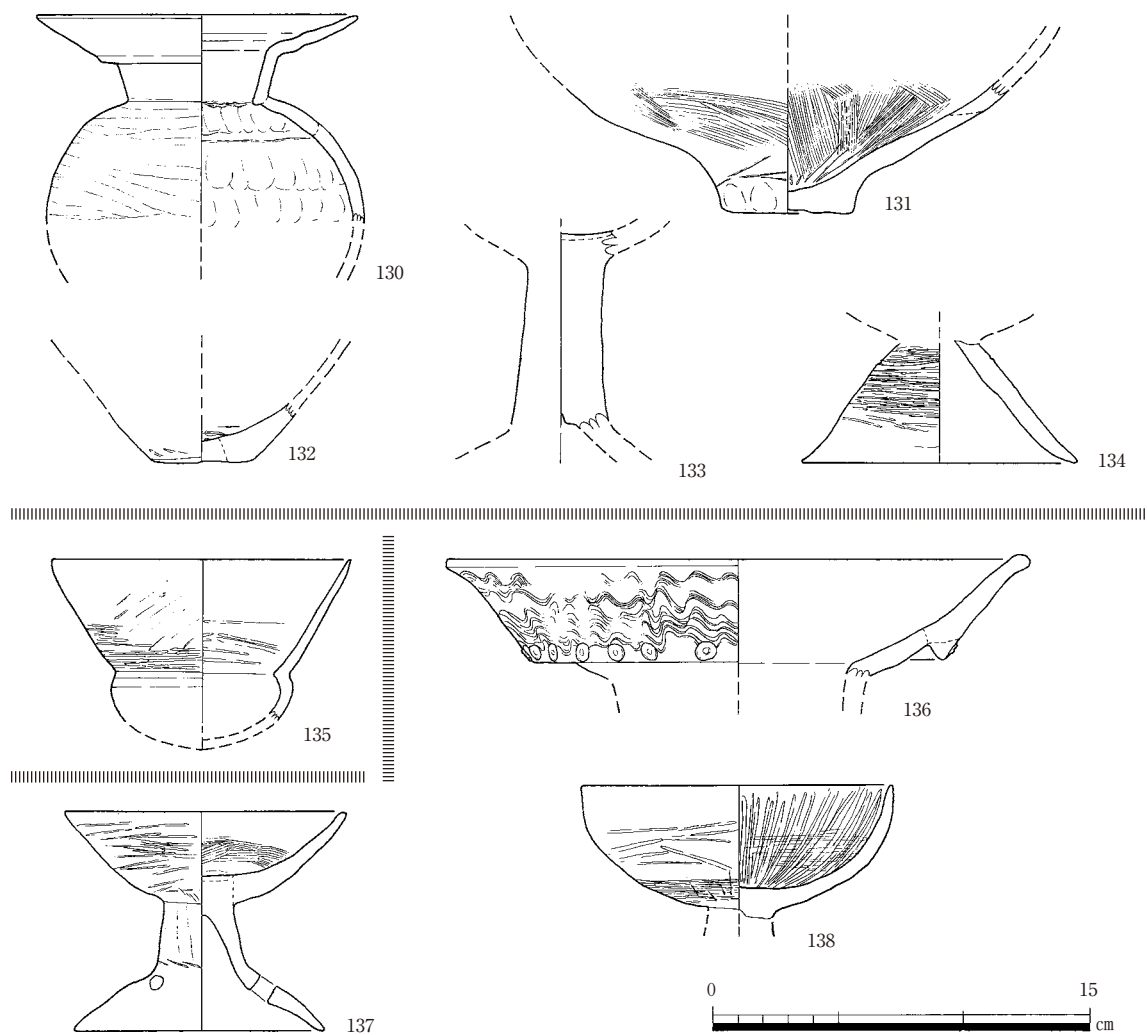


図67 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図8 (1 / 3)
 第4トレンチ：導水溝 130～134 最下層 135 下層 136～138 上層

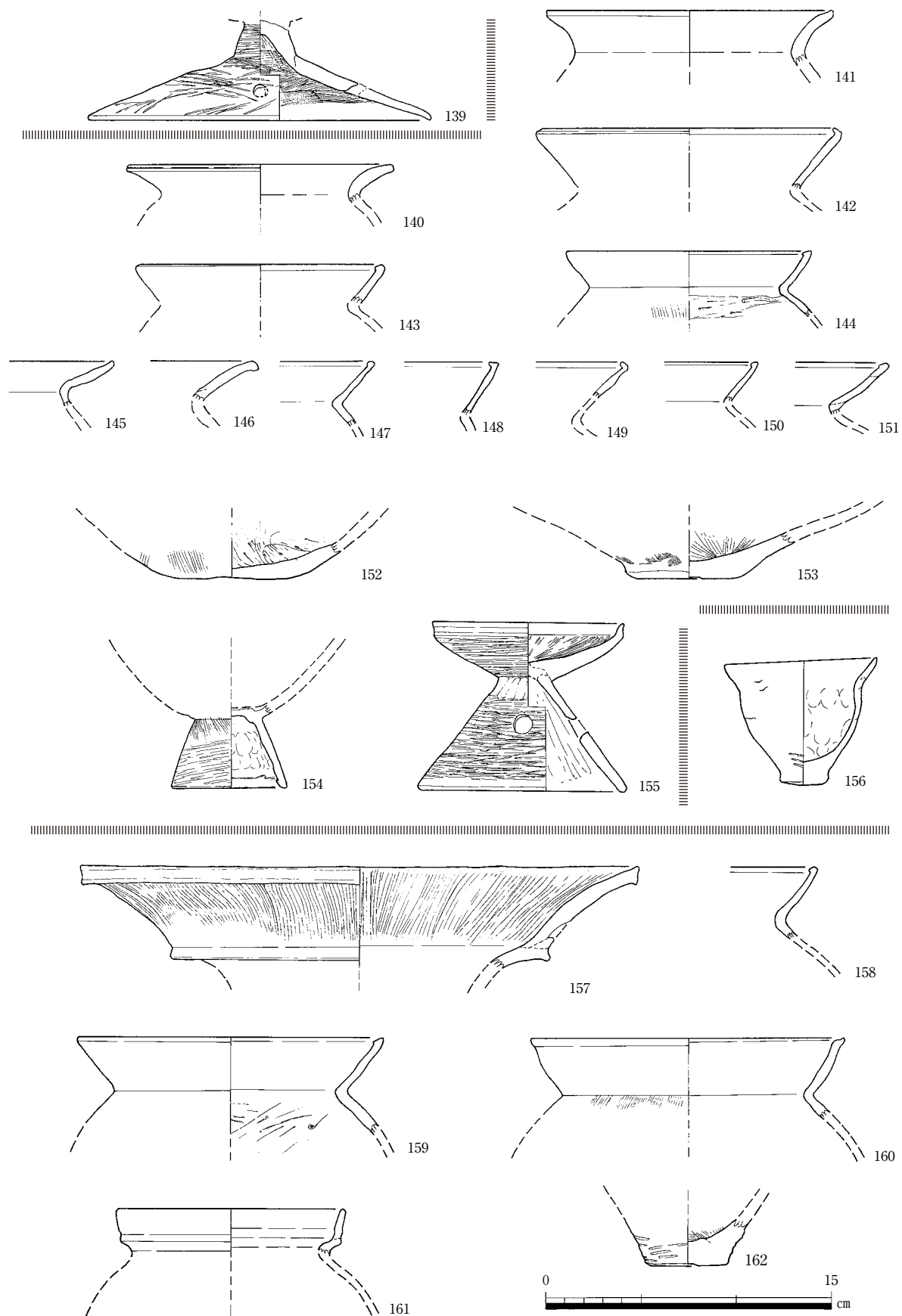


図68 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図9 (1 / 3)
 第4トレンチ：前方部北東隅周濠 139 最下層 140～155 下層
 156 下層上部 157～162 上層

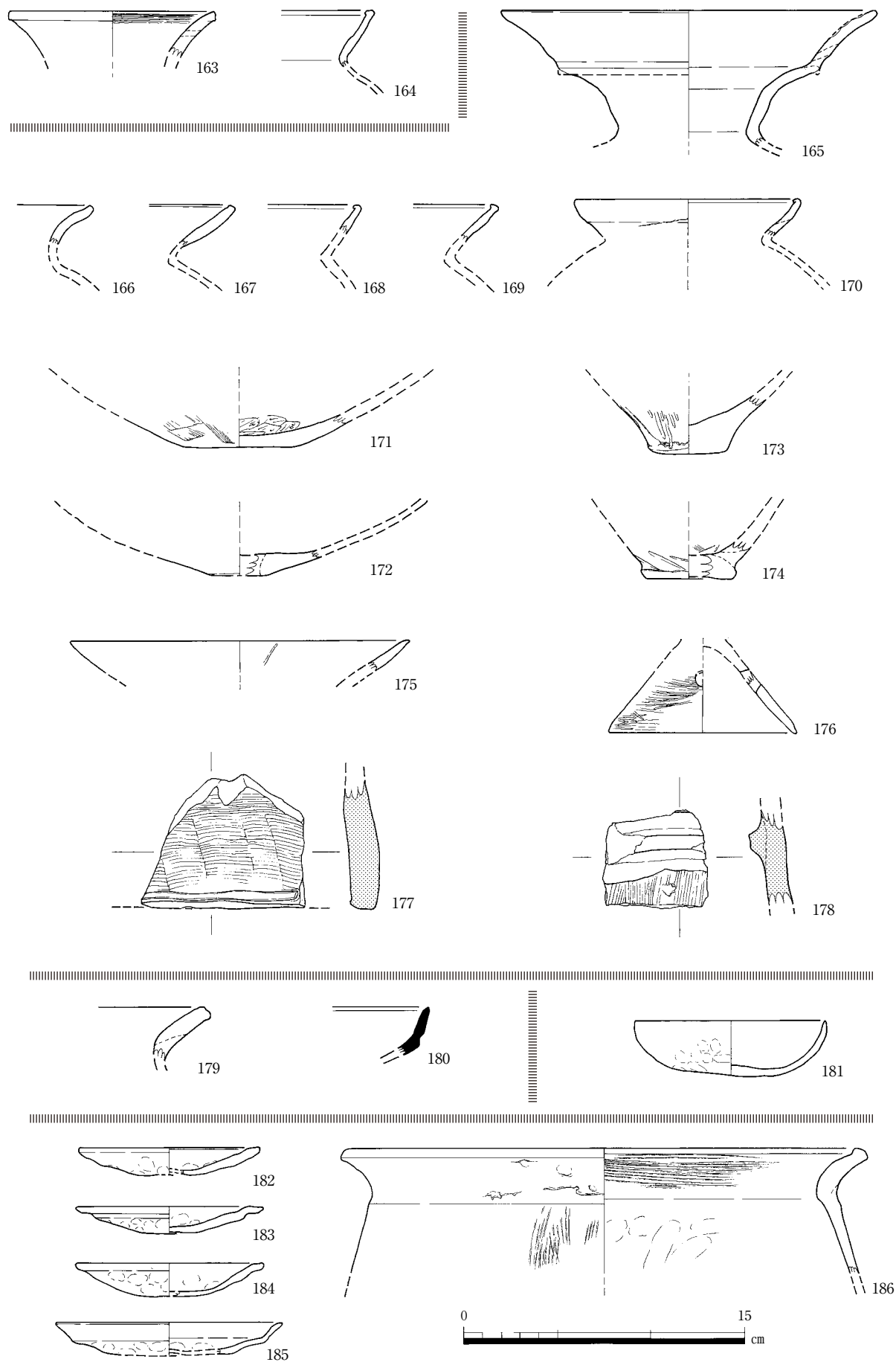


図69 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図10 (1 / 3)
 第4トレンチ：前方部前面周濠 163・164下層 165～178 中層 179・180 上層
 181 前方部前面周濠上面包含層 182～186 周濠内

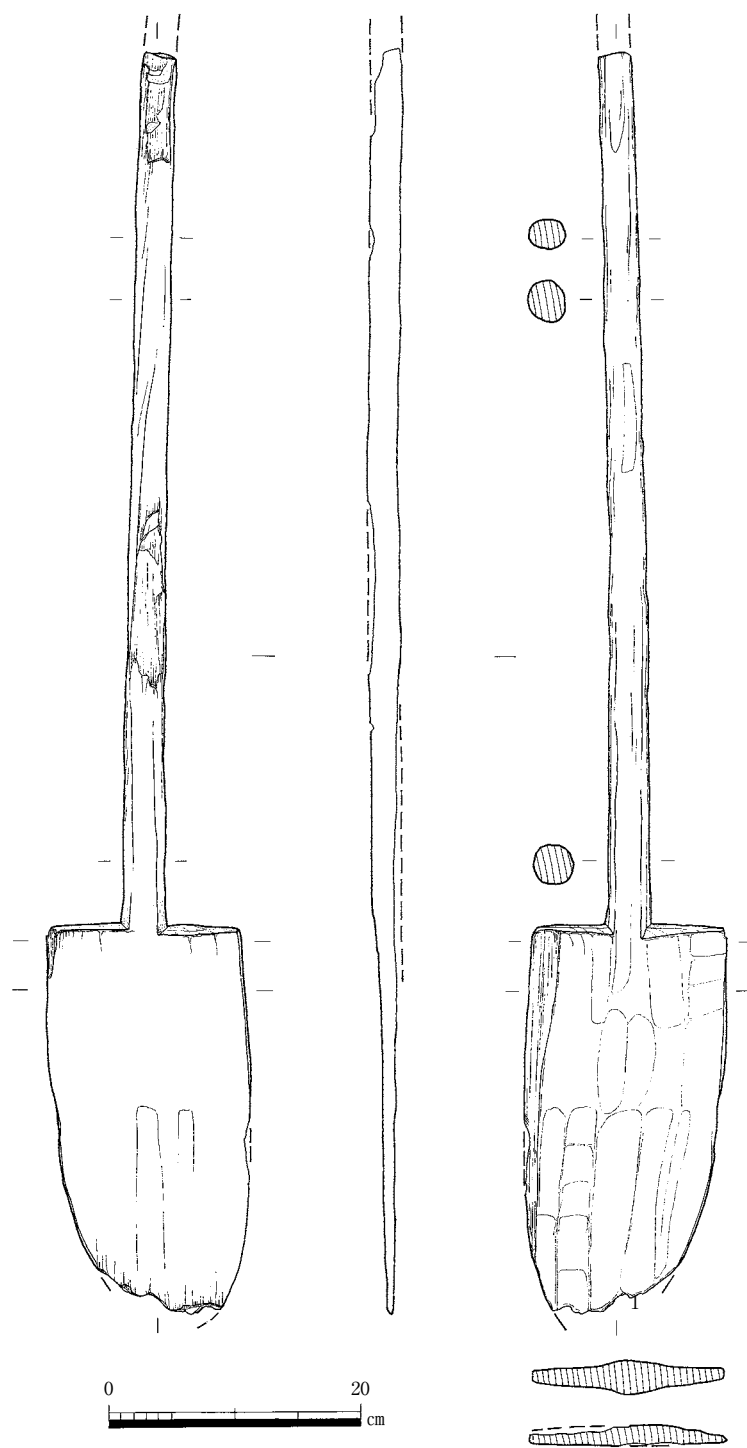


図70 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図1 (1/6)
1 周濠底

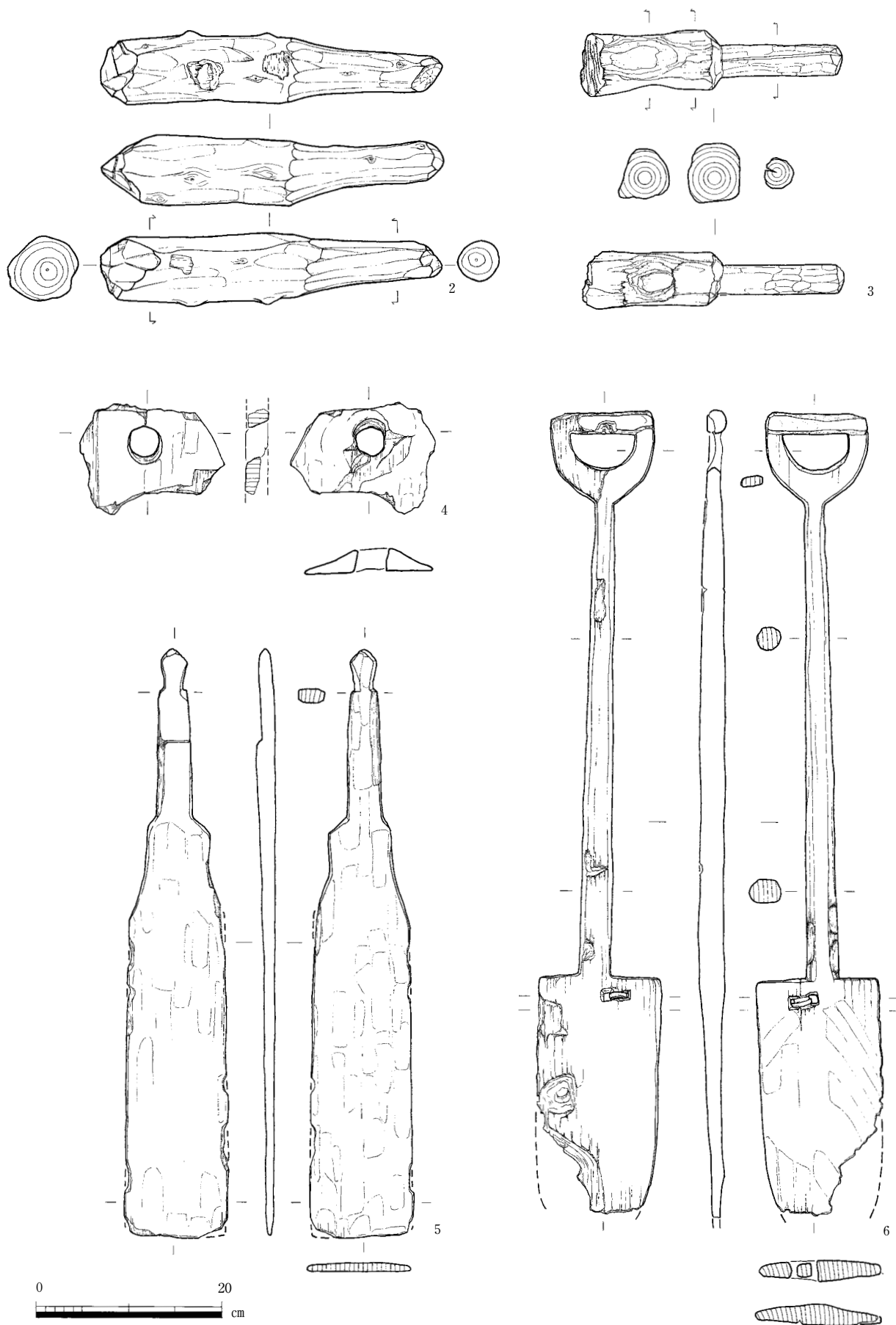


図71 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図2 (1/6)
2～6 植物腐植土下層

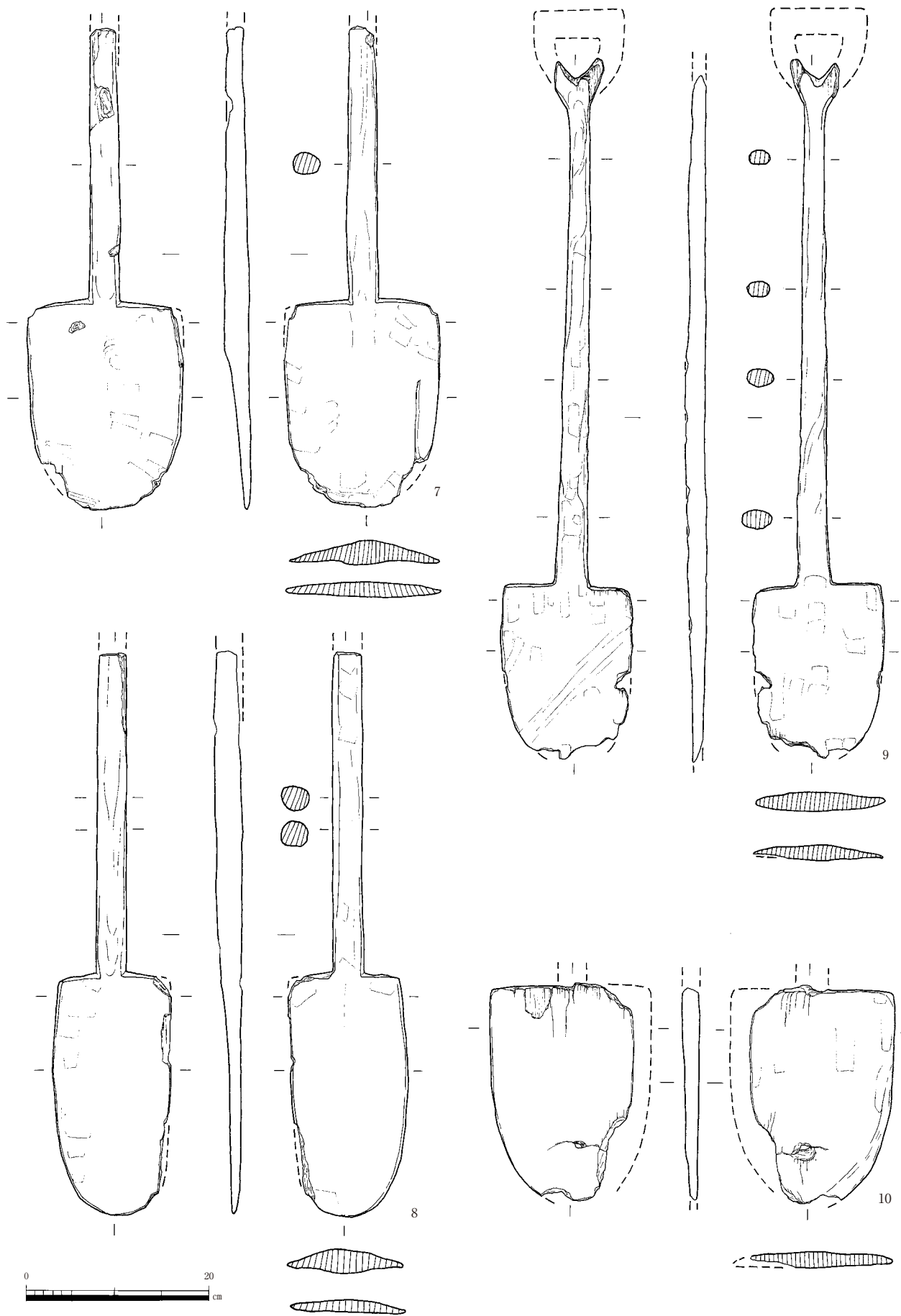


図72 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図3 (1/6)
7~10 植物腐植土下層

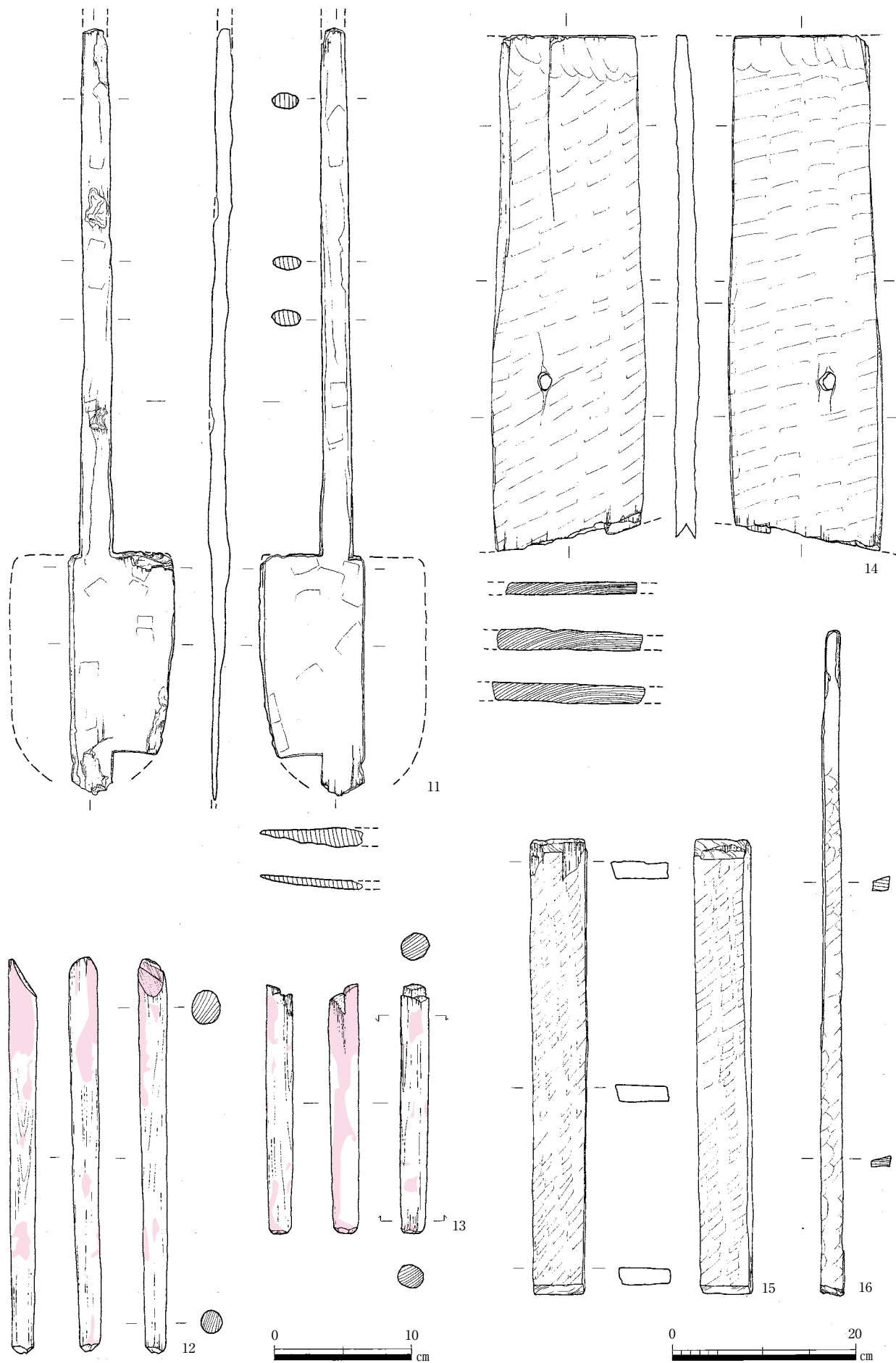


図73 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図4 (12・13：1／4、11・14～16：1／6)
11～16 植物腐植土下層

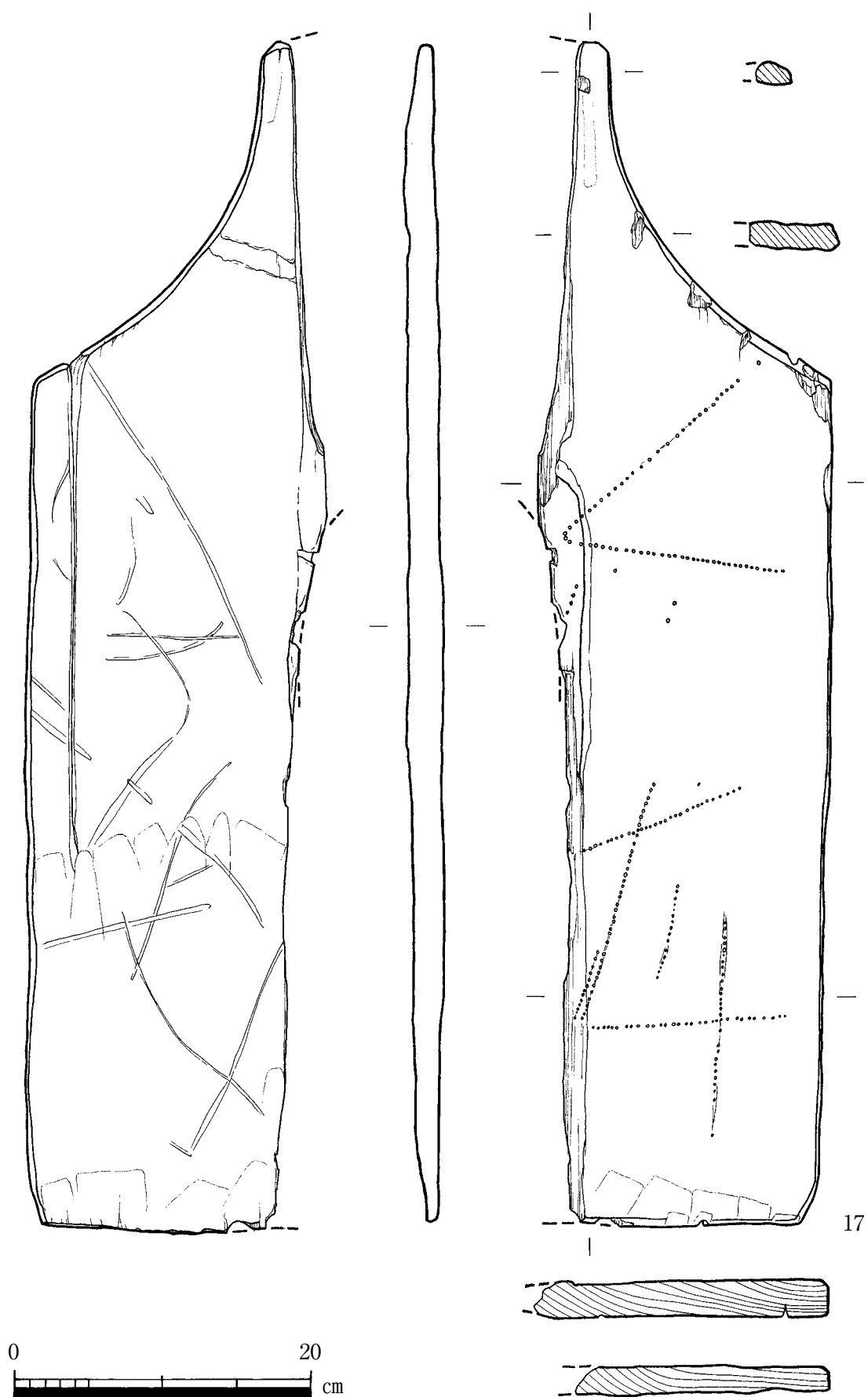


図74 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図5 (1/4)
17 植物腐植土下層

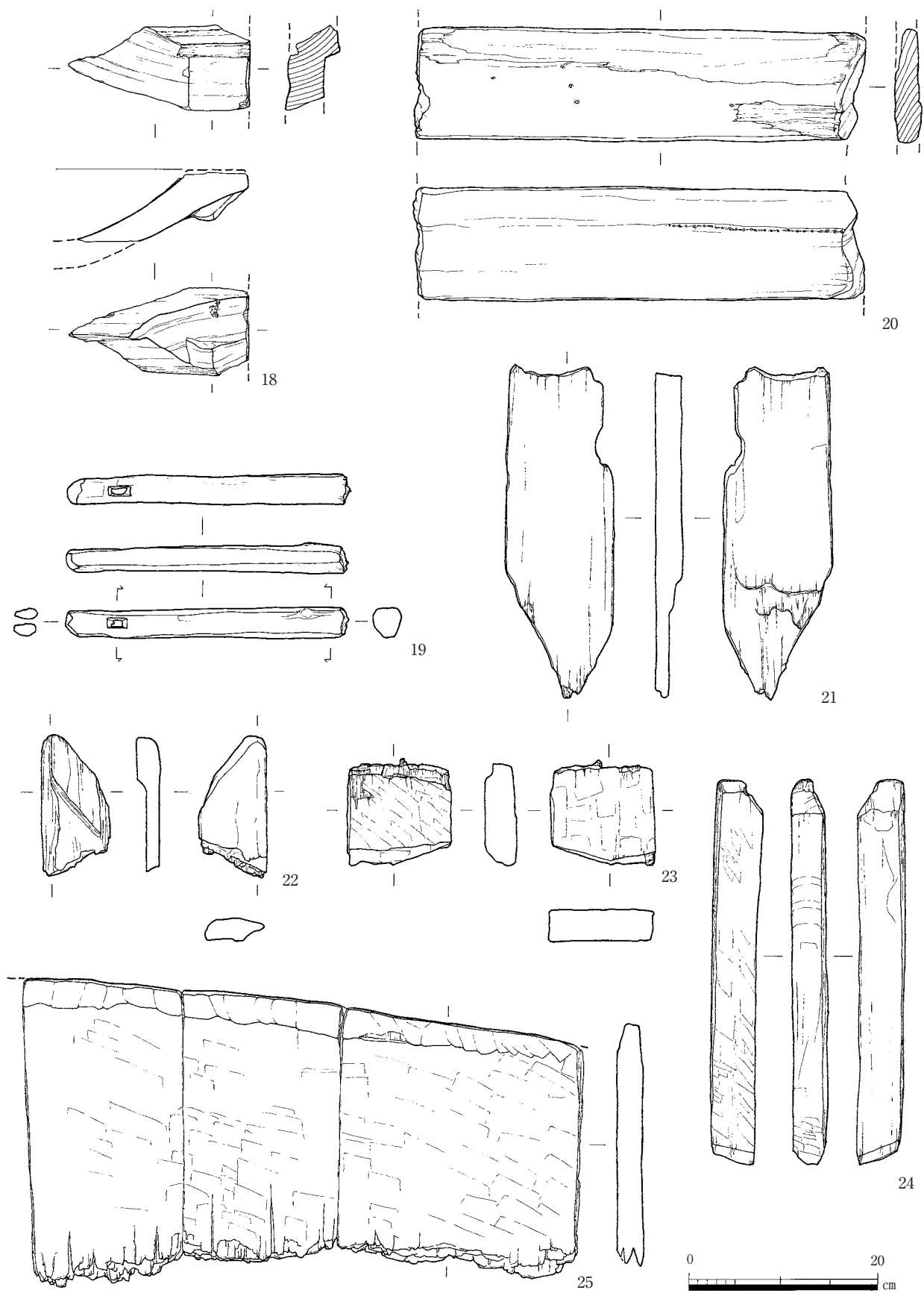


図75 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図6 (1/6)
18~25 植物腐植土

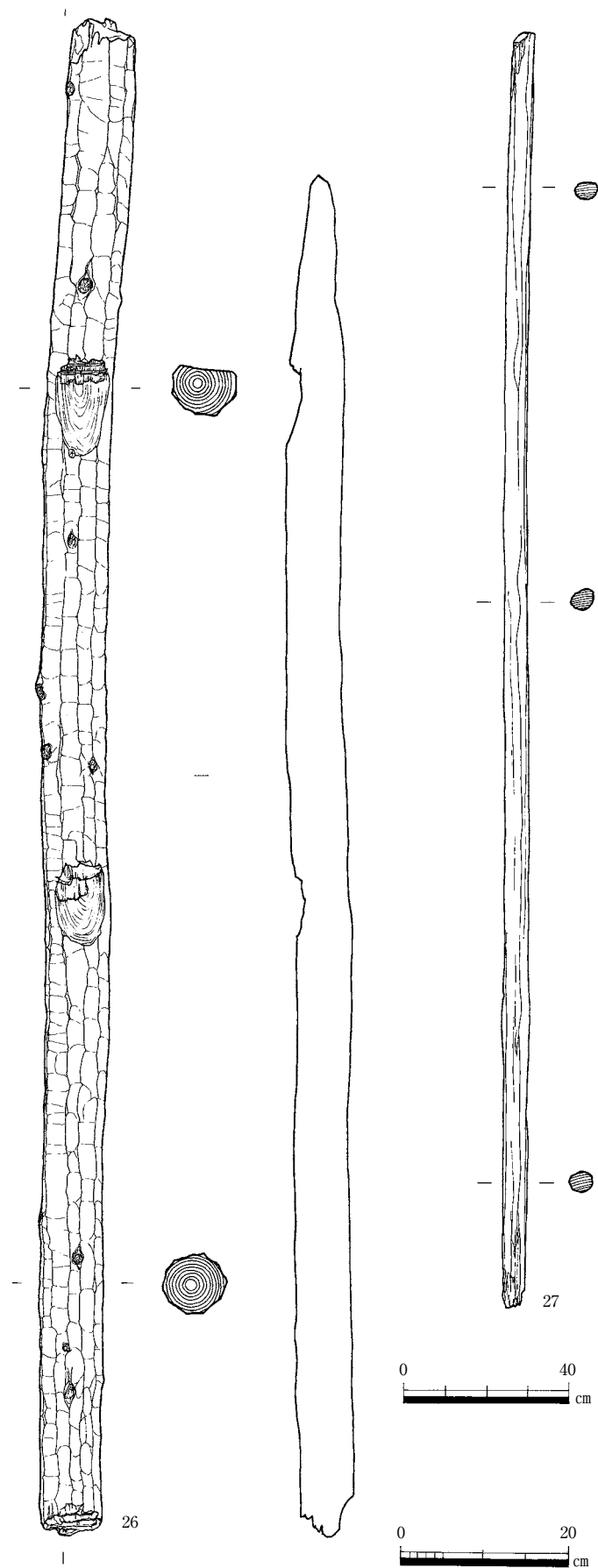


図76 縄向石塚古墳第4次調査出土木器実測図7 (26: 1/8、27: 1/16)
26・27 植物腐植土

第7章 纏向石塚古墳第5次調査報告

(纏向遺跡第62次調査報告)

第1節 はじめに

第5次調査は古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである。

本調査の目的となったのは墳丘北側の周濠外肩ラインの確認だが、このラインは1-2、4-1・2トレンチにおいて既にその一部が確認されているものの、4-1・2トレンチは各調査区が約70mもの距離において設定されていること、1-2トレンチは国土座標に基づいた記録が残されておらず正確な位置情報を欠くことなどから、この間の様相をさらに明らかにすることを目的として、想定される周濠の推定ライン上に5-1から5-6までの計6本、総面積350㎡のトレンチを設定し、遺構の検出を行っている(図77)。

調査は基本的に周濠堆積上面(暗灰色粘土)が周濠の滞水時に堆積した層位と判断し、これに相当する層の上面を露呈させ、これより以下は掘り下げを中止することとした。

なお、現地調査は平成3年9月17日から同年11月17日にかけて行われているが、この調査の終了後、明けて平成4年1月からは本調査と同じ年度事業として第6次調査が引き続き実施されることとなったため、周濠ラインが検出されなかった5-1トレンチのみ調査区の埋め戻しが行われ、残るトレンチは第6次調査終了後に埋め戻されている。

第2節 各トレンチの成果

(1) 第1トレンチ

1. 調査の成果

周濠推定ラインの北東部にあたる位置に設定した幅3m、長さ27mの調査区である。この調査区については図78に示した土層断面図の8・9層、中世遺構面の構成土上面において径30cmの掘形を持つ柱穴が数基確認されたことから、上層遺構面において調査を行ったのちに下層遺構面の調査を行うこととした。上層遺構面の調査はこの柱穴の広がりを確認するために先に検出されている柱穴の周辺を拡張しているが、結果的には新たな遺構の確認はできなかった。

検出された柱穴のうち、SP-02~05で構成されるSH-01は拡張区から新たな柱穴が検出されず、建物としてまとまりを持つものとはならなかったが、仮にSP-05北側に想定される柱穴が削平を受けて消滅したと考えるならば、その規模は東西2間(4.2m)×南北1間(1.8m)以上で、GN-2.5°-Wに方位を持った掘立柱建物と考えているが、柱穴からの遺物には恵まれず、建物の厳密な時期は判然としない。

さて、第4次調査の成果から推定された周濠ラインの調査はトレンチの西端部を通過するものであったためこの部分についても上層遺構面において調査区の拡張を行い、下層での周濠の検出に備えるこ

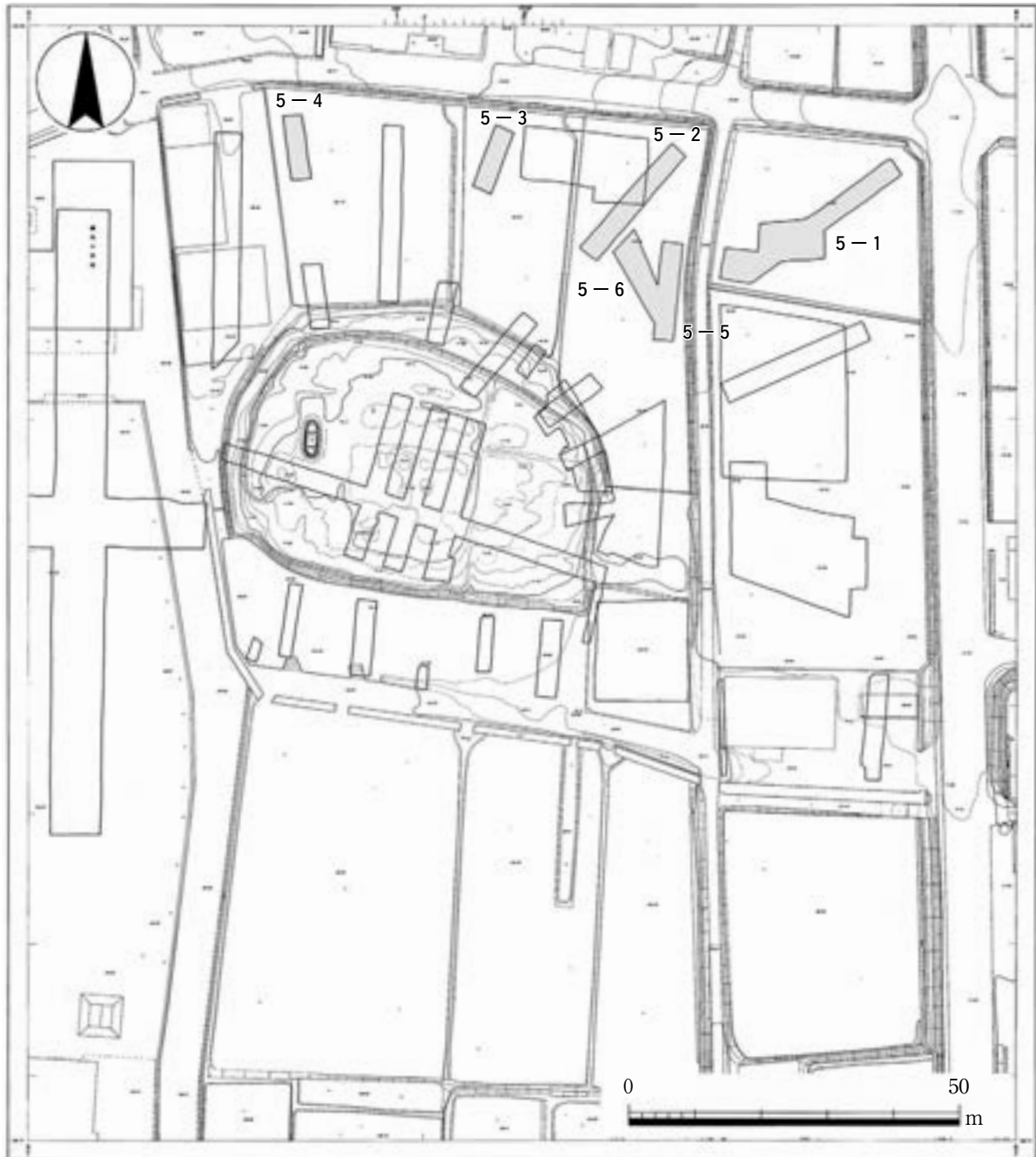


図77 纏向石塚古墳第5次調査地位位置図（1／1,000）

ととした。周濠の探査を目的として行った下層遺構面の調査は調査区西端の一部を地山とみられる淡黄灰色シルト面まで掘削を行い遺構の精査を行ったが、周濠の存在を確認することができなかったため拡張部分の掘り下げは行っていない。なお、拡張部分を含めた第1トレンチの調査面積は135㎡であった。

2. 出土遺物

本調査区からの遺物の総量はそれほど多くない。残念ながら遺構に伴うものは皆無であったが、トレンチ内の各層位からは若干の遺物の出土があった（図 83・84）。1 から 3 は淡灰褐色土から出土し

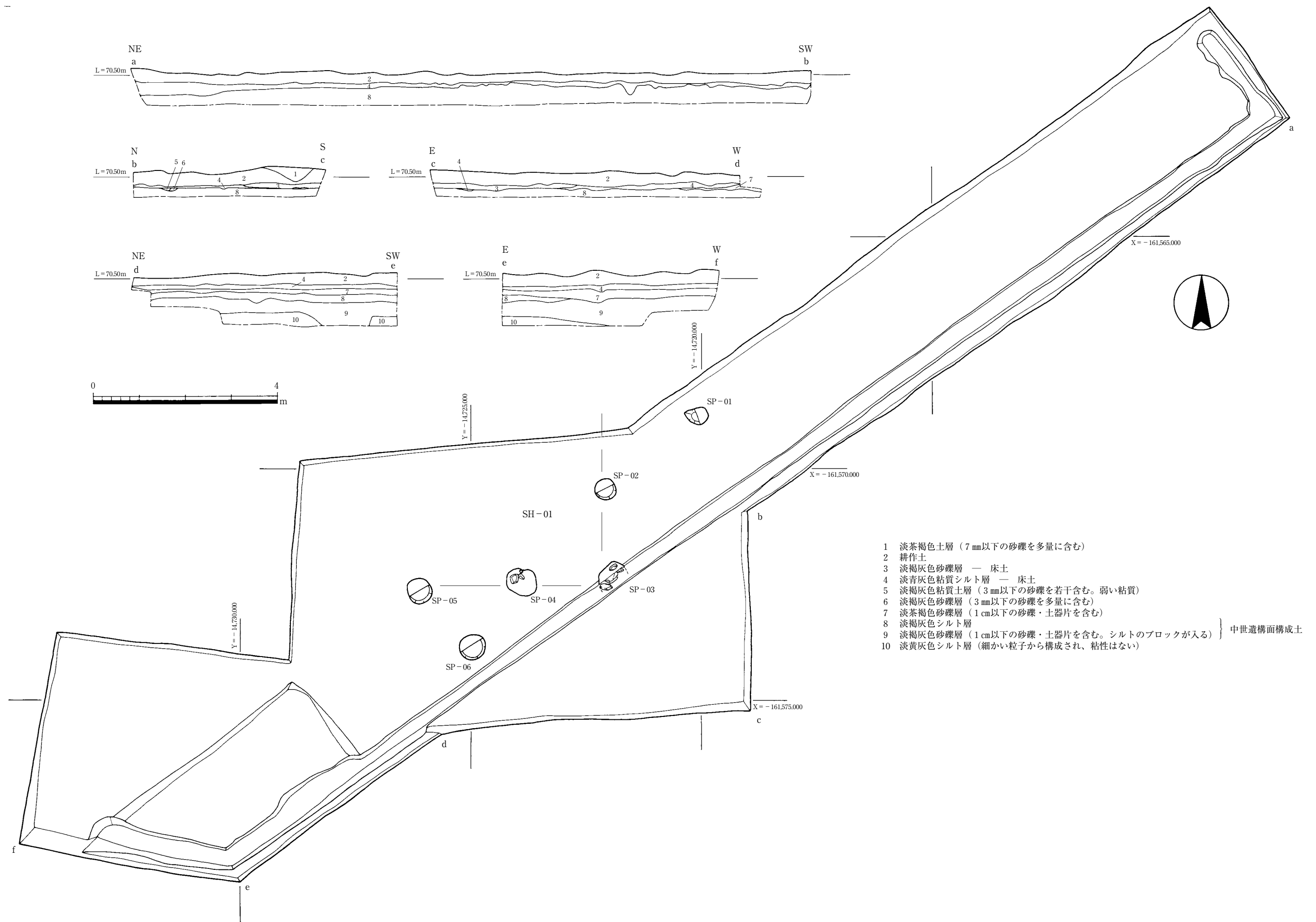
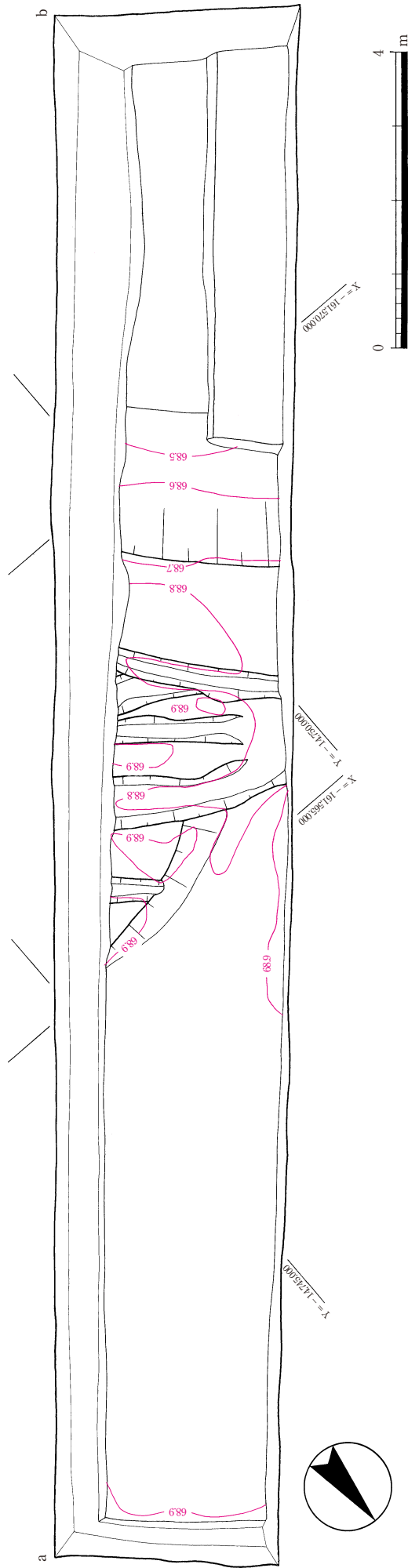
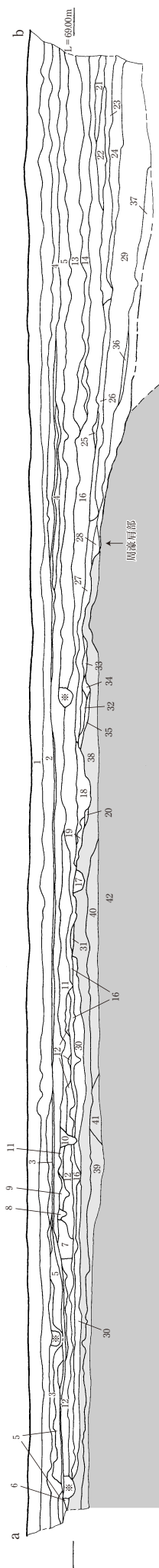


図78 5-1 トレンチ平・断面図（1/80）

NE

SW



1 耕作土
2 暗青灰色土層 (2層より青みが強い)
3 暗青灰色土層 (シルト質)
4 暗青灰色土層 (シルト質)
5 黄灰色土層 (シルト質)
6 灰褐色粘質シルト層 (5mm以下の砂粒を多く含む)
7 灰褐色土層 (シルト質。5mm以下の砂粒を含む)
8 淡黄灰色土層 (シルト質。5mm以下の砂粒を含む)
9 黄灰色土層 (シルト質。5mm以下の砂粒を含む)
10 灰褐色土層 (1cm以下の砂粒・炭・土器片を含む)
11 灰褐色土層 (1cm以下の砂粒・炭・土器片を含む)
12 暗灰褐色土層 (13層と同質)
13 灰褐色砂礫土層 (16層と同質)
14 暗灰褐色砂礫土層 (2mm以下の砂礫を多量に含む)
15 暗灰色砂礫土層 (5mm以下の砂礫を少量含む)

16 灰褐色砂礫土層 (1cm以下の砂礫・砂で構成される)
17 灰褐色砂礫土層 (5mm以下の砂礫・土器片を若干含む)
18 黄灰色砂礫土層 (2~5mmの砂を多く含む、2cm大の小石も入る)
19 暗黄灰色シルト層 (2mmの砂を若干含むが、きめ細かくよく揃っている)
20 茶褐色粘質シルト層 (2mmの砂を若干含む)
21 淡灰色砂礫土層 (2mm以下の砂を少量含む)
22 灰褐色砂礫土層 (5mm以下の砂礫を多量に含む)
23 暗灰褐色砂礫土層 (5mm以下の砂礫を多量に含む)
24 淡灰色砂礫土層 (3mm以下の砂礫を大量に含む)
25 灰褐色砂礫土層 (3mm以下の砂礫を大量に含む)
26 暗灰褐色砂礫土層 (2~4mmの砂礫を多く含む)
27 暗灰褐色砂礫土層 (1cm以下の砂礫を比較的多く含む)
28 暗灰色粘質砂礫土層 (5mm以下の砂礫を少量含む)
29 暗灰色砂礫土層 (5mm以下の砂礫を少量含む)

30 暗灰褐色土層 (12層と類似。1cm以下の砂礫・炭・木・土器を含む)
31 黄褐色粘質土層 (シルト質を含み、極めてきめ細かい)
32 暗灰色砂礫土層 (33層より粒子が細かくそろっている)
33 淡黄灰色砂礫土層 (4mm以下の砂礫粒を多く含む)
34 暗灰色シルト層 (1mm以下の粒子で構成され、きめ細かい)
35 茶褐色砂礫土層 (2~5mmの砂礫を多く含む)
36 暗灰色粘質土層 (5mm以下の砂礫を含む)
37 暗灰褐色粘質シルト層 (2mm以下の砂粒を若干含む。粘性強い)
38 淡灰黄色粘質土層 (5mm以下の砂礫を含む)
39 淡灰色砂礫土層 (3mm以下の砂礫で構成され、粒子はよく揃っている)
40 暗灰色砂礫土層 (3mm以下の砂礫を多量に含む)
41 黄褐色砂礫土層 (やや粘性があり、7mm以下の砂礫を多量に含む)
42 黄褐色粘質土層 (2mm以下の砂礫を若干含む)
※ 暗渠

周濠埋土 (黒粘 I 相当)
古墳築造前の包含層?
—— 地山

図79 5-2 トレンチ平・断面図 (1/80)

た須恵器坏身・坏蓋である。残念ながら断面図等の調査記録には同一の層名が確認できず、厳密な出土位置を確認することはできなかったが、ラベルに記載された日付からは調査区西端の下層遺構探査に伴う遺物ではないかと考えられる。4から9は須恵器坏蓋や土師器甕口縁・円筒埴輪や平瓦である。これらの遺物には整地層からの出土とのラベルが伴うが、整地層の名称も調査記録からは確認できない。断面図の記載から類推するに、恐らくは中世遺構面の構成土である8・9層を指すものと考えている。10から14は円筒埴輪や馬形埴輪・須恵器壺・緑釉陶器などの小片で、いずれもが3・4層、現代水田の床土からの出土である。15は須恵器壺もしくは甕の口縁部小片とみられ、現代水田の耕土からの出土であった。

この他、纏向石塚古墳に直接かかわるものでは無いと判断されるが、特殊な遺物として挙げられるものに床土内より出土した凝灰岩片（図83-1）がある。この凝灰岩片は多くの面が欠損しているものの、表面にはベンガラとみられる赤色顔料の付着が顕著であった。同様の石材は本調査区よりも西側に設定された第6トレンチからも出土しているが（図83-2）、材質・形状などの観察からはともに石棺材の一部となるのではないかと考えている。

なお、本調査区の南隣接地で行われた第9次調査では5世紀後半の帆立貝形古墳である石塚東古墳¹⁾が検出されているが、この古墳の周濠の一部は第1トレンチにかかることが想定されることや出土遺物の様相が良く似ていることなどから、今回の出土遺物のうち4～6・10～12の埴輪や1～3の須恵器類などは、この石塚東古墳に由来するものではないかと考えられる。

（2）第2トレンチ

1. 調査の成果

後円部墳丘の北東、周濠推定ライン上に設定した幅3m、長さ21mの調査区で、調査面積は66㎡であった。この調査区からは第4次調査で推定されていた地点よりもやや墳丘に近いところで周濠の外肩部を検出している。

調査は地山となる黄褐色粘土層上面を露呈させる方針で遺構の検出が行われたが、地山が明瞭に確認されたのは調査区中央よりやや西側の周濠肩部だけであり、遺構面の大半は古墳築造前の包含層とみられる粘質土層や砂礫層（図79-38～41層）によって構成されることが確認された。

検出された遺構は中世以降の素掘り小溝と纏向石塚古墳の周濠のほか、今回の調査では掘削を行わなかったが、調査区北側には東壁にはかからないかたちで大きな落ち込み遺構が確認されている。落ち込み遺構は掘削が行われなかった上に、平面図等の記録が作成されておらず、その性格は明らかではないが写真では方形にめぐる落ち込みにもみえることから、或いは古墳築造前の包含層上面から切り込まれた古墳の周濠のようなものになる可能性も考えられる。

さて、周濠部分の調査では周濠堆積の最上層にあたる灰色・灰褐色系の砂層・砂礫層（図79-23～27・29層）の厚い堆積が認められた。この砂礫層はこれまでに判明している纏向石塚古墳の周濠堆積の基本土層となる黒色粘土層Ⅰの上部に堆積するものとみられ、第5次調査区では中央～東側地区に設定した2・3・5・6トレンチにおいて確認されている鍵層となるものであった。本調査区におけ

る周濠埋土の掘り下げはこの周濠堆積の最上層にあたる砂礫層の掘削を行い、黒色粘土層Ⅰに相当するとみられる淡灰黄色粘質シルト層（図79－37層）を露呈させるのみにとどめ、以下の掘り下げは行っていない。また、周濠外肩部の状況は非常に緩やかな傾斜を持って落ち込んでいくもので、この緩斜面周辺には動物或いは人のものとみられる足跡状の窪みが多数検出されている。この窪み及びその上面からは須恵器や円筒埴輪の小片が採集されており、この頃までは周濠の名残となる若干の窪地が存在していたことがうかがえる。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や周濠埋土最上層からの須恵器・円筒埴輪などの小片がみられたが、遺物の総量は少ないものであった。また、今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような遺物は認められなかった。

（3）第3トレンチ

1. 調査の成果

5－3トレンチは後円部墳丘の北側に設定した幅3m、長さ10mの調査区で、調査面積は30㎡であった。遺構の検出は古代以降の覆土を除去し地山面となる明黄灰色シルト層（図80－19層）上面で行い、周濠外肩部を検出したほか地山面において幅約60cmの弧状にめぐる溝を1条検出している。

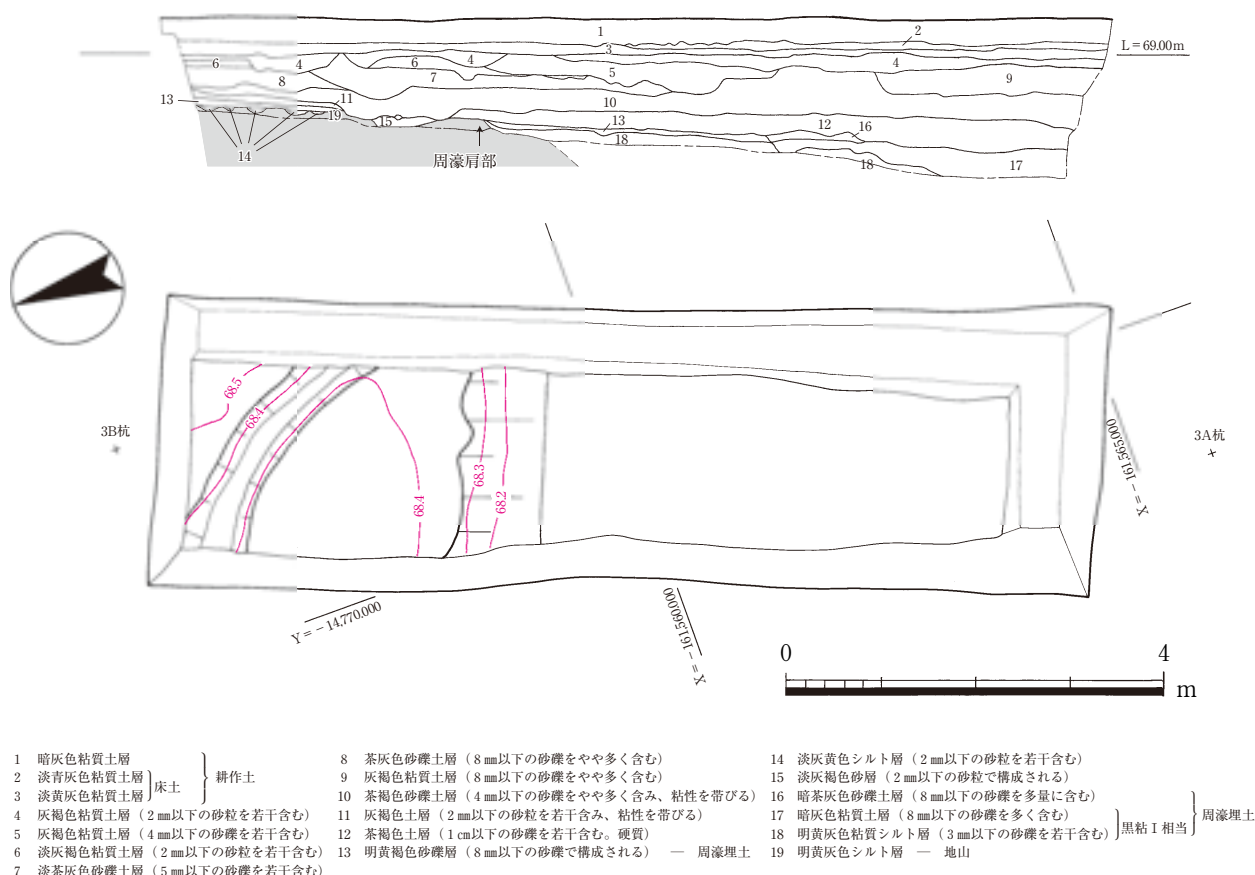


図80 5－3トレンチ平・断面図（1／80）

この溝は中世のものとみられる10層下面より掘削されたもので比較的新しい遺構と考えられるが、遺物の出土に恵まれず、厳密な時期を限定することはできなかった。

さて、周濠外肩部はトレンチ北端より約3mの地点において検出されたもので、5-2トレンチよりは比較的急な角度で南へと落ち込んでゆく様子が確認されている。

周濠内の調査は5-2トレンチと同様に周濠堆積最上層にあたる砂礫層(図80-13・16層)を除き、黒色粘土層Iに相当するとみられる粘質土・粘質シルト層(図80-17・18層)の上部を露呈させるにとどめ、以下の掘り下げは行わないこととした。なお、周濠肩部および地山面からは5-2トレンチと同様、多くの足跡状の窪みが検出されている。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や須恵器小片がみられたが、遺物の総量は非常に少ない。今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような遺物は認められなかった。

(4) 第4トレンチ

1. 調査の成果

5-4トレンチは後円部北側水田の北西隅に設定した長さ10m、幅3mの調査区である。調査面積は30㎡で、1-2トレンチにおいて検出されている周濠外肩のラインが国土座標による記録が残され

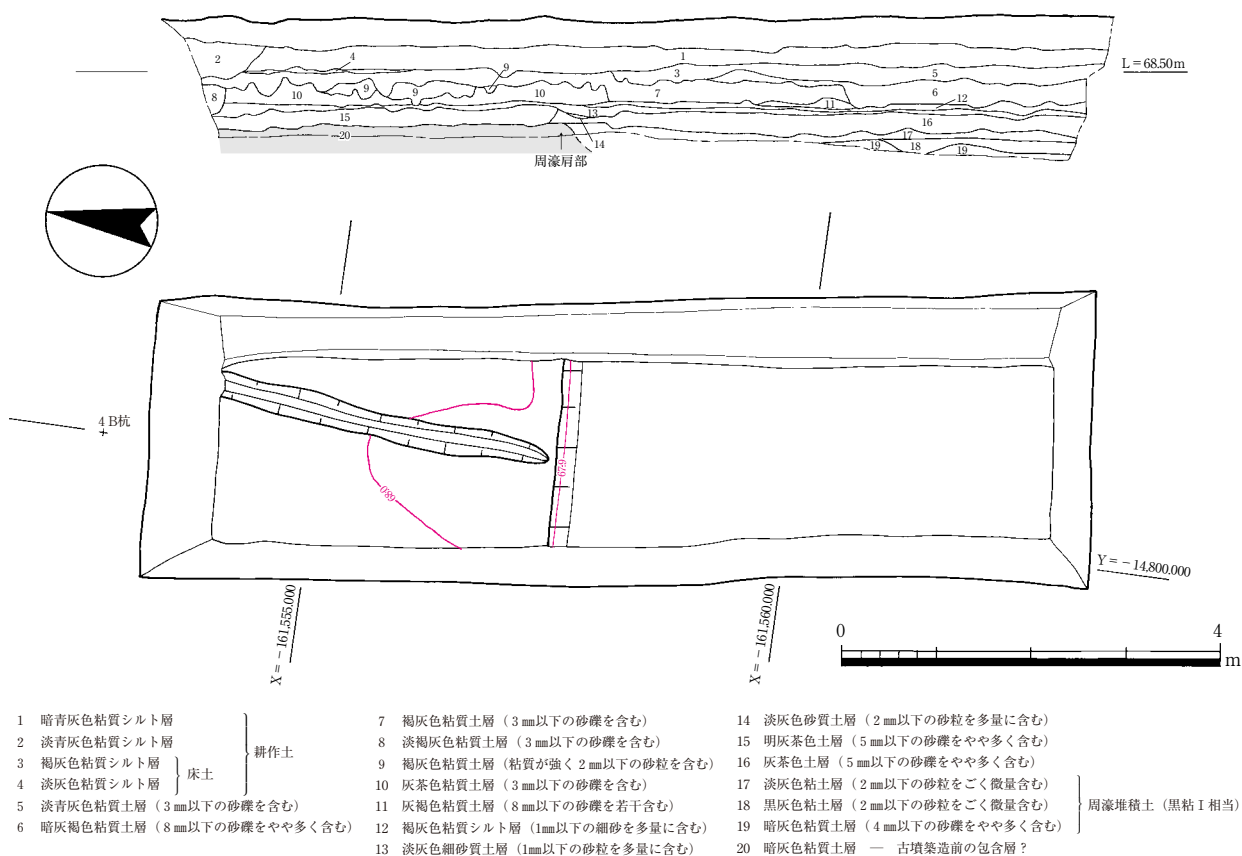


図81 5-4トレンチ平・断面図 (1/80)

ていなかったため、再度 1 - 2 トレンチに近い位置での周濠外肩の検出を目的として調査が行われたものである。

本調査区内においては遺跡のベースとなる地山層は確認されておらず、代わりに古墳築造以前の包含層とみられる暗灰色粘質土層（図81-20層）が基盤層として確認されたため、この暗灰色粘質土層上面において遺構の検出を行うこととした。この結果、時期は判然としないが、幅約30cmの南北素掘り小溝 1 条と周濠の外肩部が検出されている。

さて、周濠の外肩部は調査区北端より約3.5mの地点において検出されたもので、5 - 3 トレンチなどと同様に明瞭な落ち込みが確認されているが、本調査区は今回の調査対象地内においては最も低い地点に位置するためか、周濠埋土の最上層にあたる砂礫層の存在は確認することができなかった。

このことから、本調査区において確認された周濠埋土（図81-17～19層）は黒色粘質土 I に相当するものと考えられたため、周濠内の掘り下げは周濠外肩部を明確にするため、17～19層の上部の一部を掘り下げることとしている。

なお、周濠外肩部から周濠内埋土上面には 5 - 2・3 トレンチと同様、多くの足跡状の窪みが検出されている。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や須恵器小片・埴輪片などがみられたが、遺物の総量は少ないものであった。今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような特筆すべき遺物は認められなかった。

（5）第 5・6 トレンチ

1. 調査の成果

5 - 5 トレンチは 5 - 2 トレンチの調査において当初推定されていた位置よりも墳丘寄りの地点において周濠外肩部が検出されたことを受け、4 - 4・4 - 2 トレンチで検出された周濠外肩部との関係を探るために 5 - 2 トレンチの東側に設定された幅3.2m、長さ15m、調査面積48㎡の調査区である。

本調査区における遺構面の状況は図82-25～30層にみられるようにシルト或いは粘質土で構成される地山面を確認しており、遺構の検出はこの地山面において行っている。検出された周濠外肩は当初の推定位置よりさらに南に位置する調査区北端から南へ約11mの地点で明瞭な落ち込みを確認している。

この周濠堆積の最上層にあたる埋土は図82-24 層に示した暗灰色粗砂層がこれに該当するもので、周濠埋土の掘削はこの粗砂層上面までの掘り下げとし、黒色粘土層 I に相当する上層埋土までの掘削は行っていない。また、周濠外肩部から周濠内埋土上面にかけては他のトレンチと同様、多くの足跡状の窪みが検出されている。

なお、このトレンチにおいて検出された周濠のラインは東壁部分において若干北へと回るこむような形で図示されている。この部分については調査時に作成された遺構平面図などには記録されていなかったものの、図版37・38に示した写真では東壁にかかるかたちで土坑、或いは溝状の落ち込みの存

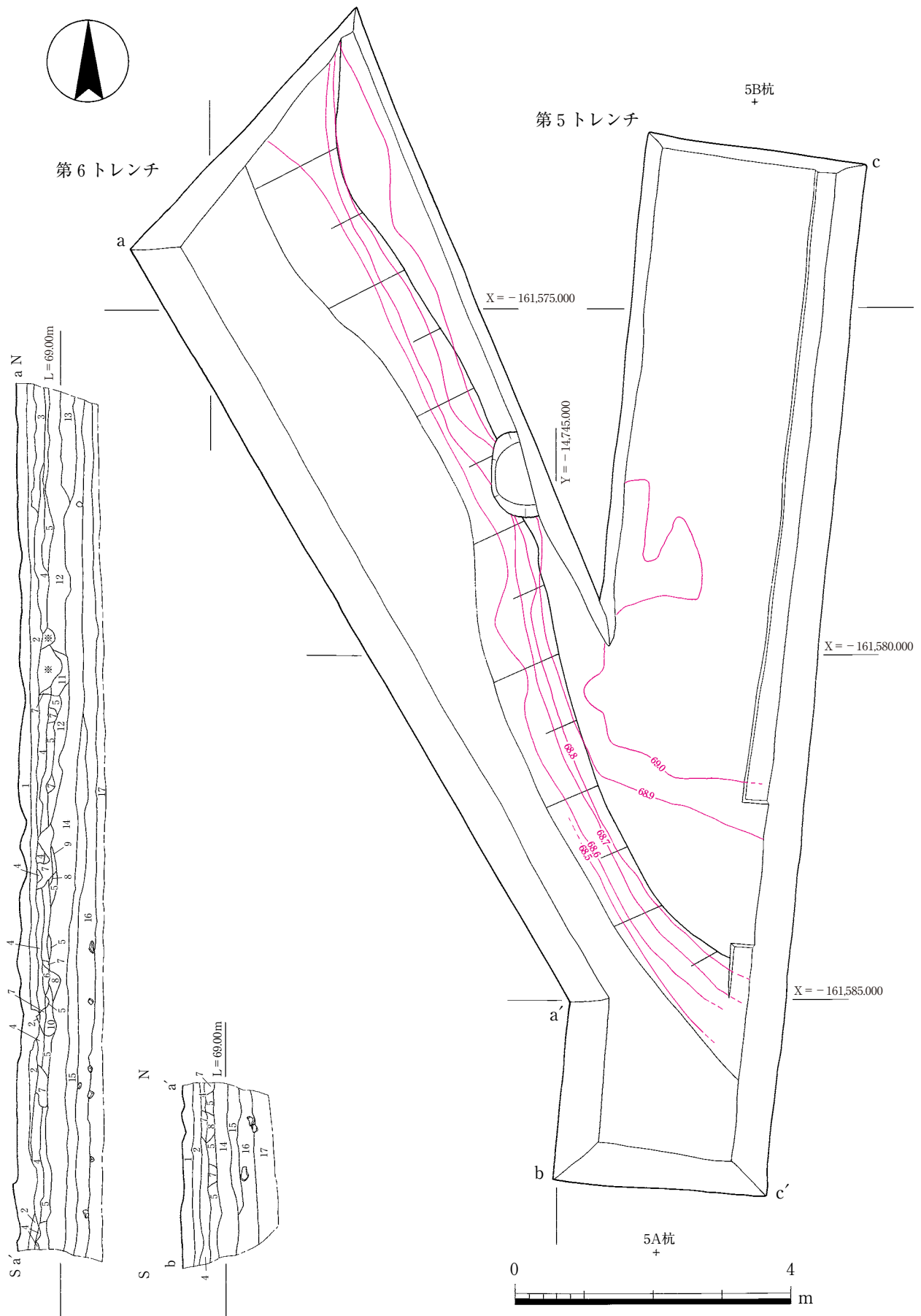


図82-1 5-5・6トレンチ平・断面図 (1/80)

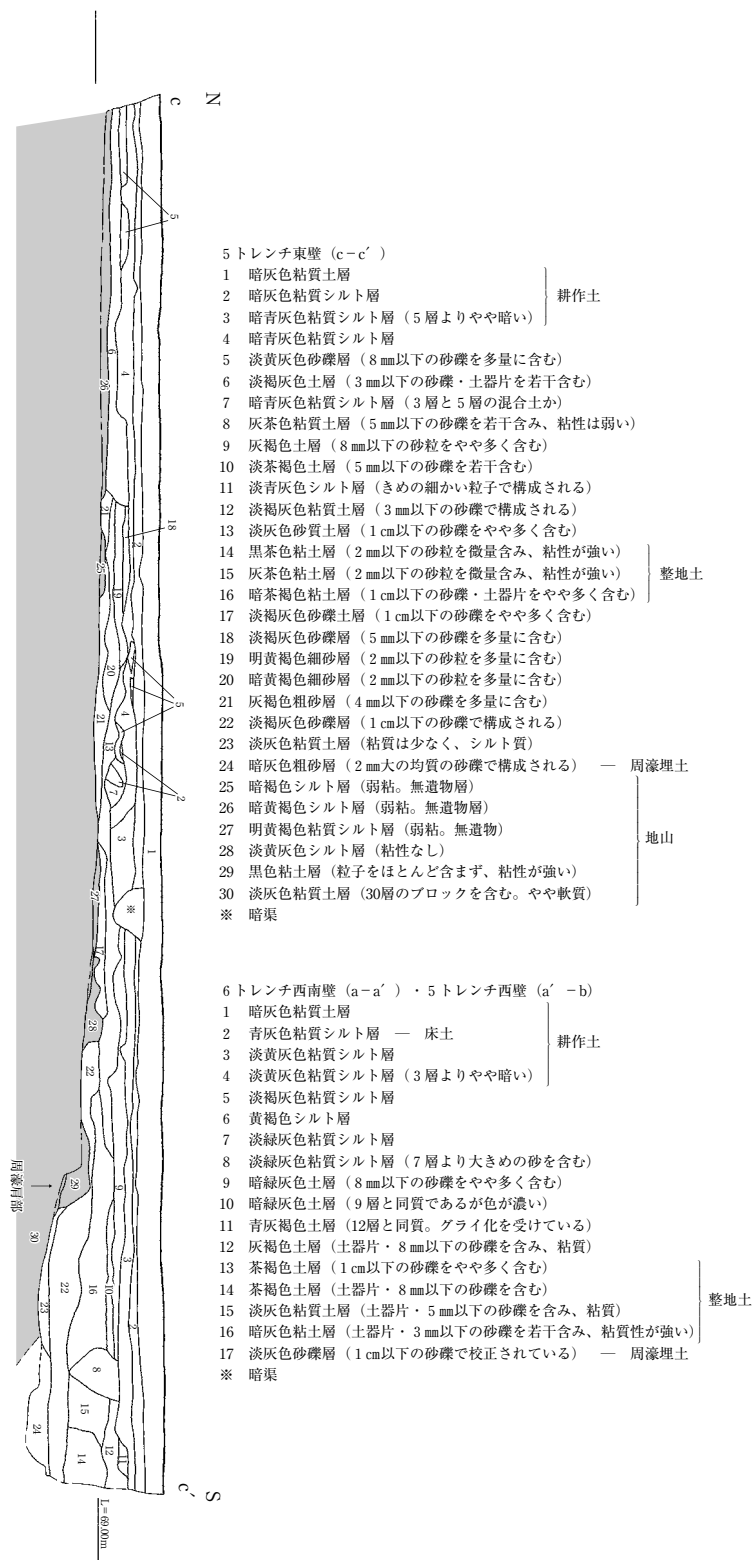


図82-2 5-5・6 トレンチ断面図 (1/80)

在を確認することができるから、東側へとやや乱れる等高線や周濠外肩のラインはこの遺構に影響を受けた結果と考えられる。東壁断面図(図82)にみられる土層のうち、この遺構の埋土にあたるとみられる土層には22・23層がある。確実なことは不明だが、22層は分層の不備によるものか遺構南側の上がりの確認できないのに対し、23層は24層より上部から堆積した様子が明瞭に見て取れ、ほぼ確実にこの遺構の埋土と想定することができると考えている。

さて、5-5 トレンチの調査において当初の推定位置よりも大きく南にはずれた地点において周濠の肩部が検出されたため、5-2 トレンチとの関係をさらに明らかにするために設定されたのが5-6 トレンチである。5-6 トレンチは幅4m、長さ約10m、調査面積が41㎡の調査区で、5-5 トレンチと接続するかたちで調査区が設定されたため、結果的には5-5 トレンチと一体の調査区となっている。

この調査区では5-5 トレンチ内において先に確認された周濠外肩のラインが自然な形で5-2 トレンチの周濠外肩部へと繋がる事が確認されている。

本調査区における周濠部の堆積状況は最上層埋土となる淡灰色砂

礫層（図82-17層）の上に平安時代以前の土器片を含んだ整地土層（図82-13～16層）が覆う状況が明確に認められた。調査ではこの整地土層を除去し淡灰色砂礫層上面までを露呈させるかたちで掘削を行い、以下の掘り下げは行っていない。

2. 出土遺物

本調査区からの遺物は多くないが、各層位から若干の出土があった（図85）。ここに図示できたもののうち多くは5-5トレンチ部分からの出土で、5-6トレンチ部分からの遺物はごく少量である。

5-5トレンチ部から出土したもののうち、16～18は暗灰褐色土から出土した円面硯・灰釉陶器壺・緑釉陶器片で、16は硯面に、17は内面、18は外面に墨の付着が認められた。残念ながら断面図等の調査記録には同一の層名が確認できず、厳密な出土位置を確認することはできていない。19は灰釉陶器鉢で図82-7層からの出土、20～25は床土よりも下部の包含層からの出土で、縄文時代の深鉢や土師器鉢、須恵器蓋・皿、平瓦片などがあり、26は床土より出土の平瓦片、27・28は耕作土直下から出土した土師器鉢や人物埴輪の腕部片とみられるものである。

5-6トレンチ部から出土した遺物には図85-29と図83-2がある。いずれもが図82-12層からの出土で29は須恵器坏、2は凝灰岩片で5-1トレンチより出土した凝灰岩片（図83-1）と同様に表面にはベンガラとみられる赤色顔料の付着が顕著であることや、その材質・形状などの観察からは図83-1と同じく石棺材の一部となるのではないかと考えている。

さて、これら5-5・6トレンチからの出土遺物は縄文時代から古代にいたるまでの多様な時期の様相を示すものの、その主体となるのは古代の遺物であり、概ね9世紀代の平安時代前期を中心とする時期のものが目に付くことは当該期の遺構・遺物の少ない桜井市域においては注目すべきことで、纏向石塚古墳の東方に円面硯や緑釉・灰釉陶器などの特

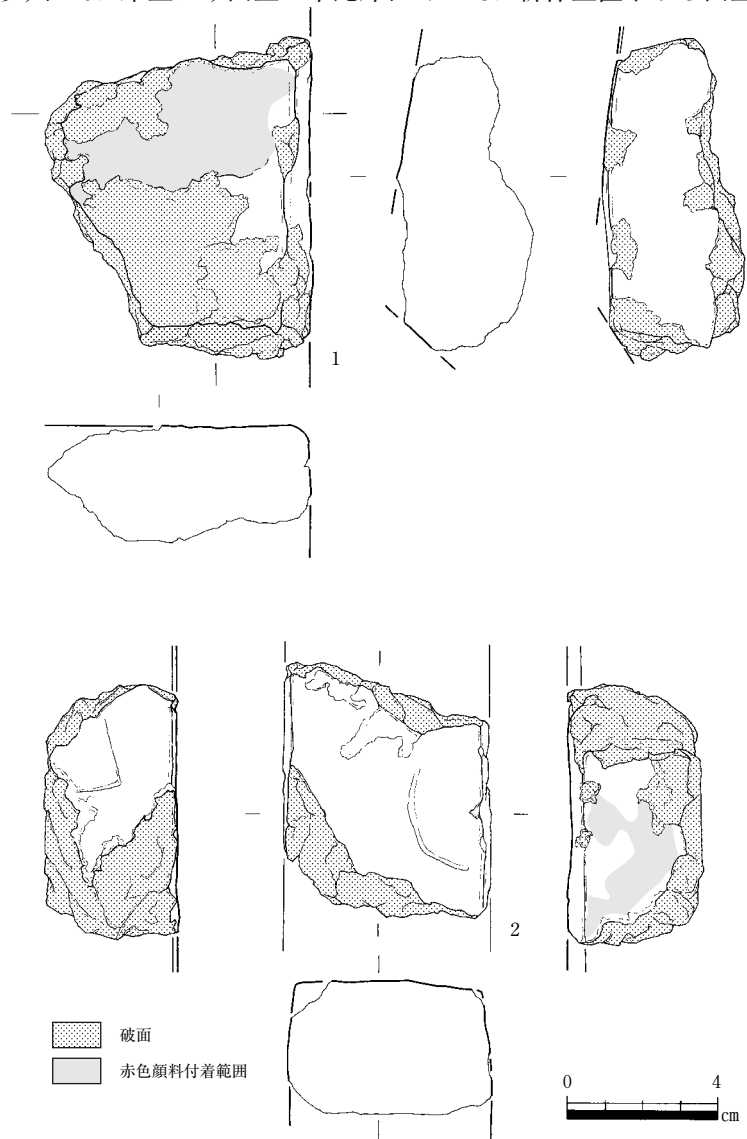


図83 纏向石塚古墳第5次調査出土棺材実測図（1／2）
第1トレンチ：1 床土 第6トレンチ：2 灰褐色土

筆すべき遺物を持ち得る人々の存在が想定できるものである。

第3節 小結—第5次調査の成果—

第5次調査は墳丘の北側を中心に6本のトレンチを設定し、周濠の形状確認を行った。この結果、5-2トレンチから5-4トレンチに至る対象地西側部分ではほぼ推定ラインどおりに周濠の外肩部が検出されたものの、5-1トレンチにおいては周濠外肩が検出されず、当初の想定よりも墳丘に近い部分に5-5・6トレンチを設定し、周濠外肩のラインを検出することに成功している。

これらの調査から明らかになった周濠外肩の復元ラインは5-5・6トレンチ部において想定されていた位置よりも墳丘側で検出されたことと、4-2トレンチで検出されている周濠外肩ラインの調査成果とを勘案することにより、概要報告書の時点では第13章第1節で細述するように前方部の側面部において一部が外側へと突出する特異な平面プランを示す結果となったが、このプランについては後の第9次調査において4-2トレンチにおける周濠の検出に誤認があったことが明らかとなり、現在では異なった周濠形状が提示されることとなっている。

しかしながら、一連の調査において後円部北側一帯における周濠形状をほぼ確定するに至ったことは本調査の最も大きな成果であり、また結果的に4-2トレンチにおける調査成果に対する疑義を生みだし、そして第9次調査という再調査の契機となったことも一つの成果と言えよう。

(橋本)

【註記】

- 1) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006
- 2) 萩原儀征・寺沢薫『纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）』桜井市教育委員会1989
- 3) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査（第5次～7次）概報－』（財）大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995

表 42 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 位 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
84-1 124-1	第1トレンチ 淡灰褐土	須恵器 坏蓋		H : (4.3) C : (12.9)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	<天井部> O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ→仕上げナデ		25Y8/1灰白～ 10Y R7/1灰白	・時計回り
84-2 124-2	第1トレンチ 淡灰褐土	須恵器 坏身		H : (4.5) C : (11.3)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ→仕上げナデ		O. 10Y R5/1灰 i. 7.5Y6/1灰	・時計回り
84-3 124-3	第1トレンチ 淡灰褐土	須恵器 坏身		H : (4.8) C : (10.1)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ		O. 10Y R5/1灰 i. 7.5Y6/1灰	・時計回り
84-4 125-4	第1トレンチ 整地層	円筒 埴輪			O. B c種かB d種ヨコハ ケ i. ヨコハケ	9 /cm			7.5Y8/4浅黄橙～ 10Y R8/4浅黄橙	・ヘラ記号あり
84-5 125-5	第1トレンチ 整地層	円筒 埴輪		W : (16.0)		O. タテハケ i. ユビナデ 押捺	O. 板オサエか？ i. ハケメ ユビナデ 押捺		O. 10Y R8/6浅黄橙 i. 7.5Y R8/6浅黄橙	・基底部～2段 目
84-6 125-6	第1トレンチ 整地層	円筒 埴輪		B : (18.0)		O. タテハケ→ B c種ヨコハケ i. ユビナデ	O. タテハケ i. タテユビナデ	8～ 10/cm	5Y R7/8橙	・基底部～2段 目
84-7 125-7	第1トレンチ 整地層	須恵器 蓋	坏B蓋	C : (17.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ				N6/0灰～N5/0灰	
84-8 125-8	第1トレンチ 整地層	土師器 甕		C : (24.2)	O. (口縁部) ヨコナデ (頸部) 押捺 i. ヨコハケ	5 /cm			10Y R8/4浅黄橙	・奈良 (終わり) ～平安くらい ・桶巻造りでは ない。
84-9 124-9	第1トレンチ 整地層	平瓦			凸面. 細目タタキ 凹面. 布目				O. N3/0暗灰 i. N8/0灰白	
84-10 125-10	第1トレンチ 床土	円筒 埴輪		W : (18.0)		O. タテハケ i. ハケメ		6 /cm	5Y R6/6橙	
84-11 125-11	第1トレンチ 床土	円筒 埴輪		W : (19.8)		O. タテハケ→ B cかB d種ヨコハケ i. ユビナデ・押捺		10～ 12/cm	5Y R6/6橙	

表 43 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
84—12 124—12	第1トレンチ 床土	馬形 埴輪				O. ユビナデ・押捺 i. ユビナデ・押捺		5Y R7/8橙	・馬形埴輪の右 耳と面繋、辻 金具の部分
84—13 124—13	第1トレンチ 床土	須恵器 壺	壺 L	B : (8.2)			O. 回転ナデ i. 回転ナデ	N6/0灰～N7/0灰白	・貼付高台
84—14 125—14	第1トレンチ 床土	緑釉陶 器片				O. 回転ナデ i. 押捺→マメツ不明		10Y R7/3にぶい黄橙 (釉) 3G6.5/5.0わさび	・外面施釉
84—15 125—15	第1トレンチ 耕作土	須恵器 甕			O. 回転ナデ→櫛描波状文 i. 回転ナデ	8 /cm		O. N4/0灰 i. N6/0灰	
85—16 124—16	第5トレンチ 暗灰褐色土	須恵器 陶足円 面硯		C : (16.2)	O. 回転ナデ i. ナデ			N6/0灰	・第5トレンチ 床土と接合 ・長方形透孔約 14ヶ所に ・外面に墨付着
85—17 124—17	第5トレンチ 暗灰褐色土	灰釉 陶器 壺	壺 M	W : (9.4)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ			N5/0灰～2.5Y5/1黄灰、 2.5Y8/1灰白 (釉) 10Y5/1灰 (一部10 Y R6/4にぶい黄褐)	・外面施釉 ・内面に墨付着
85—18 124—18	第5トレンチ 暗灰褐色土	緑釉陶 器片				O. ナデ i. ナデ		10Y R8/2灰白 (釉) 10Y5/2オリープ 灰	・胎土精良 ・外面施釉 ・外面に墨また は煤付着
85—19 124—19	第5トレンチ 淡褐灰色土	灰釉 陶器 鉢		B : (17.8)			O. 回転ヘラケズリ (高台) 回転ナデ i. 回転ナデ	N8/0灰白 (釉) 5Y7/1灰白	・外面と底面に 施釉
85—20 125—20	第5トレンチ 包含層	縄文 土器 深鉢		C : (18.0)	O. ヨコナデ i. ヨコナデ	O. ナデ i. タナナデ		O. 10Y R5/2灰黄褐～ 10Y R4/2灰黄褐 i. 10Y R6/4にぶい黄 橙	-
85—21 124—21	第5トレンチ 包含層	底部 (鉢)	Ⅱ - A ₂ - ・	B : 8.2		O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	10Y R4/2灰黄褐～ 10Y R3/2黒褐 (黒斑部分はN1.5/黒)	
85—22 125—22	第5トレンチ 包含層	須恵器 蓋	坏B蓋	C : (10.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ			2.5Y7/1灰白	

表 44 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (3)

図番号 図版番号	地 層 区 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
85—23 125—23	第5トレンチ 包含層	須恵器 蓋	坏B蓋	C : (18.0)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	〈天井部〉 O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ→仕上げナデ		N7/0灰白～N6/0灰	・内面に墨付着
85—24 124—24	第5トレンチ 包含層 第5トレンチ 灰褐色砂質土	須恵器 皿	皿C	H : (1.9) C : (18.4) B : (14.4)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ→ナデ i. 回転ナデ		5Y7/1灰白～N7/0灰白	・第5トレンチ 灰褐色砂質土 と接合
85—25 124—25	第5トレンチ 包含層	平瓦			凸面. 細目タタキ 凹面. 布目				O. 10Y R4/1褐灰 i. 10Y R5/2灰黄褐	・内面は被火の痕が見 られ、炭化物が付着 ・稀巻通りではない。 ・一方の細縁残存
85—26 125—26	第5トレンチ 床土	平瓦			凸面. 細目タタキ 凹面. 布目				0. 7.5Y4/灰 (二次焼成を受けた部 分5Y R7/明褐色～7.5Y R6/4 にふい橙) i. 10Y R5/3にふい黄褐 (二次焼成 を受けた部分は5Y R6/6橙)	・二次焼成を受けてい る ・内面に炭化物付着 ・稀巻通りではない。
85—27 124—27	第5トレンチ 耕作土下	底部 (鉢)	Ⅱ - A ₂ - ・	B : (7.4)		O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. スリナデ I C a i. 押捺A		10Y R4/2灰黄褐	・底面に黒斑
85—28 125—28	第5トレンチ 耕作土下	人物 埴輪 腕				O. ユビナデ・ケズリ i. ユビナデ			7.5Y R8/2灰白～ 7.5Y R7/4にふい橙	
85—29 125—29	第6トレンチ 灰褐色土	須恵器 坏	坏B	H : 5.0 C : 16.85 B : 12.1	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		N5/0灰	・第6トレンチ砂礫 混じり灰褐色土、第 6トレンチ灰褐色 砂礫土層と接合
図番号 図版番号	地 層 区 位	種 類	全 長 (残 存)	幅 (残 存)	厚 さ (残 存)	重 量	材 質	色 調	備 考	
83—1 125—S1	第1トレンチ 床土	石棺材?	(8.5) cm	(7.0) cm	(3.6) cm	217g	凝灰岩	10YR8/1 灰白	・赤色顔料付着	
83—2 124—S2	第6トレンチ 灰褐色土	石棺材?	(6.7) cm	5.5cm	(3.5) cm	162g	凝灰岩	10YR8/1 灰白	・赤色顔料付着	

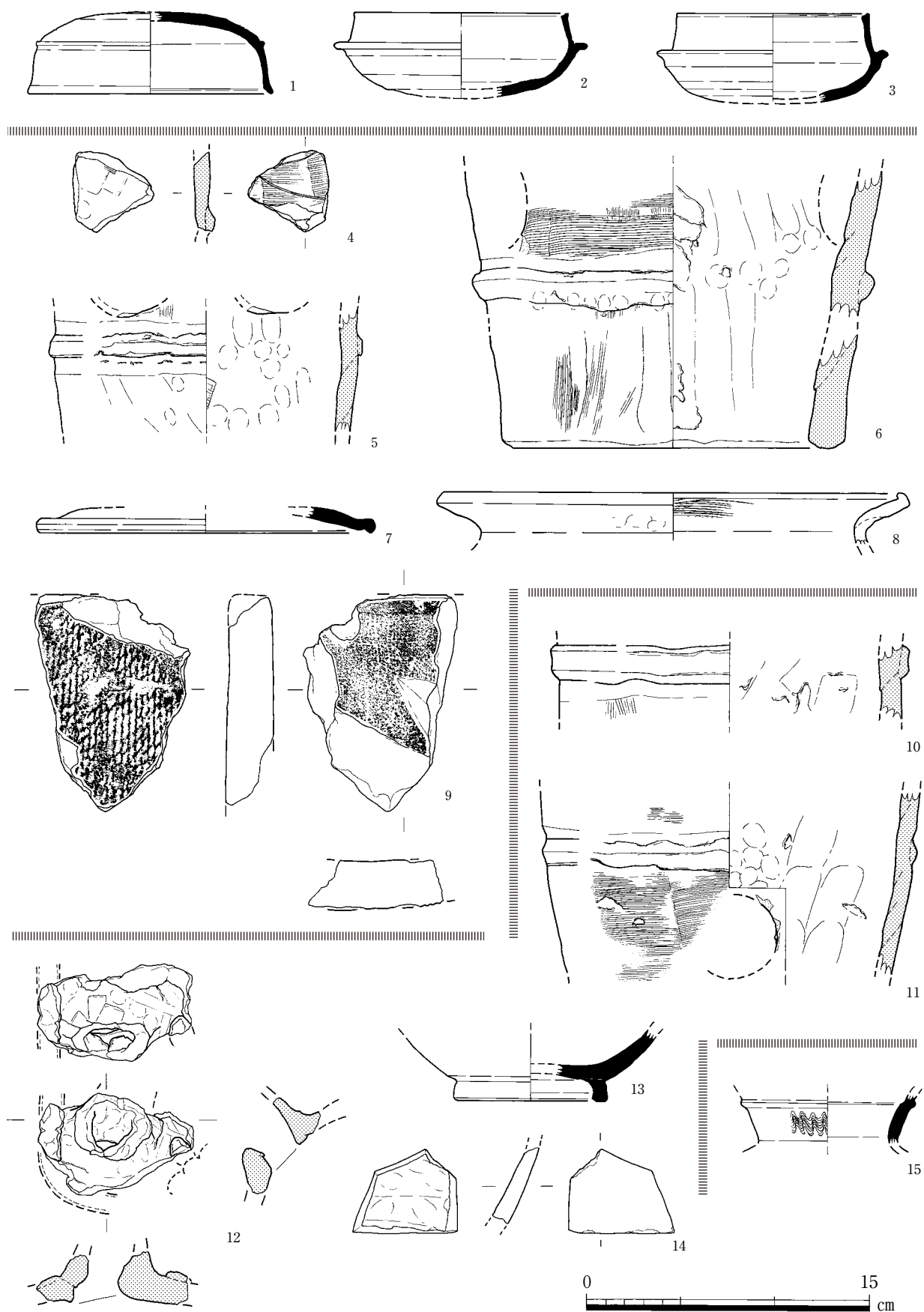


図84 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図1 (1 / 3)
 第1トレンチ：1～3 淡灰褐色土 4～9 整地層 10～14 床土 15 耕作土

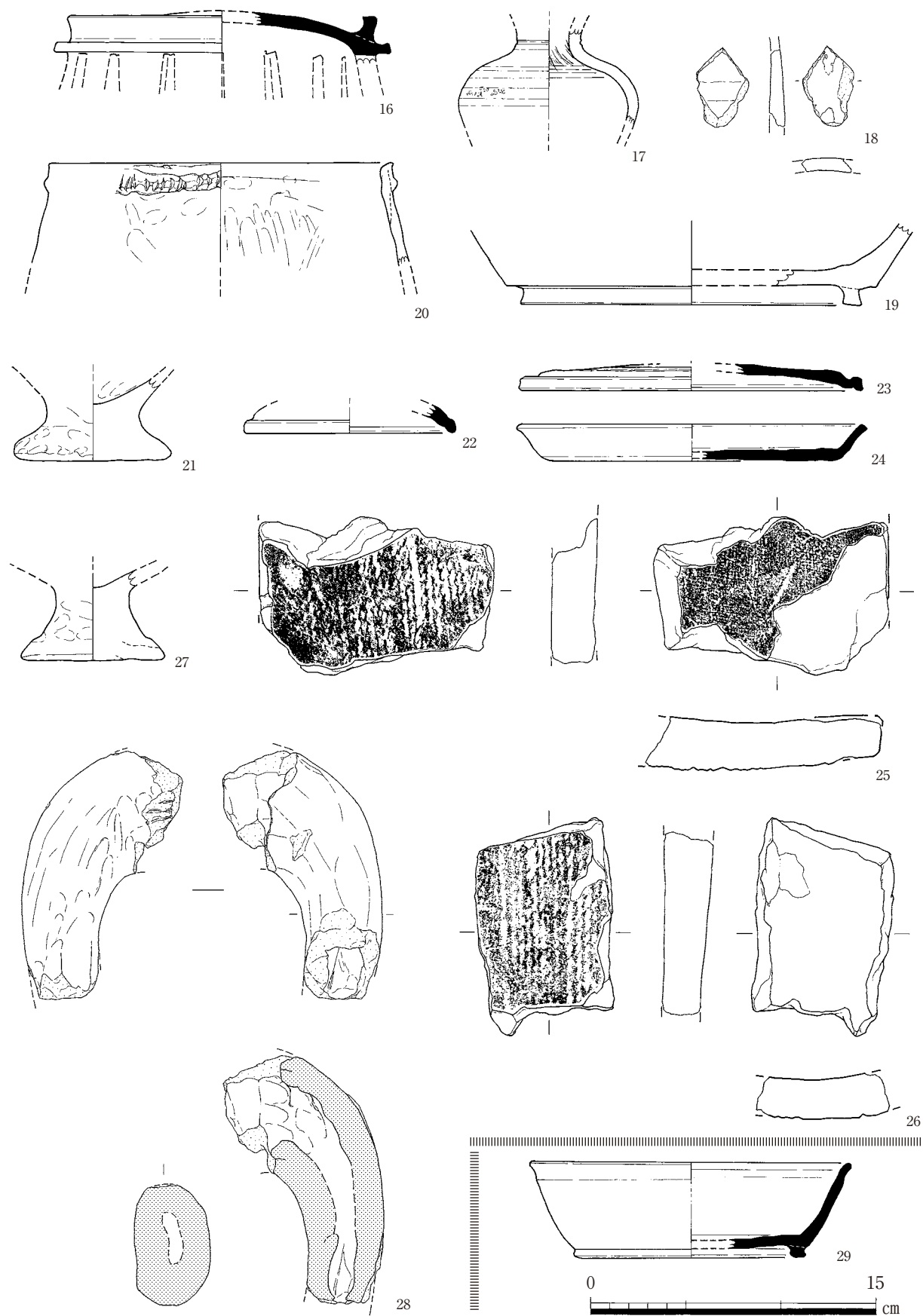


図85 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図2 (1 / 3)
 第5トレンチ：16～18 暗灰褐色土 19 淡褐灰色土 20～25 包含層 26 床土 27・28 耕作土下
 第6トレンチ：29 灰褐色土

第 8 章 纏向石塚古墳第 6 次調査報告

(纏向遺跡第66次調査報告)

第 1 節 はじめに

第 6 次調査は古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである。

本調査の目的となったのは墳丘北側の墳丘ラインの確認である。この墳丘ラインについては第 4 次調査の 4-1・3d・3e トレンチにおいて既に確認調査が行われているが、国土座標に基づいた記録の残されていない 1-2 トレンチと 4-1 トレンチ間の墳丘ラインや 4-1 トレンチと 4-3 e トレンチ間の墳丘の状況など、状況の判然としない部分が幾つか残されていたため、第 5 次調査の 5-1～4 トレンチの墳丘側延長部分に軸線を合わせる形で 6-1～4 の 4 本のトレンチを設定し、確認調査を行ったものである。

調査では墳丘部分は第 4 次調査で確認されている平安時代以降の攪乱土を除去して墳丘上面を露呈させることとし、周濠にかかる部分はこれまでの調査と同様に周濠堆積土上面（暗灰色粘土）までの掘削を基本として調査を行うこととした。

このうち、6-1 トレンチにおいては土層断面の検討のため一部墳丘の断ち割りを行ったところ、墳丘盛土下にて古墳に先行するとみられる溝や土坑の存在が確認されたため、当初の予定を変更して盛土の除去を行い、下層遺構の調査を行っている。

なお、現地調査は平成 4 年 1 月 21 日から平成 4 年 3 月 11 日にかけて行っており、調査面積は 131㎡であった。

第 2 節 各トレンチの成果

(1) 第 1 トレンチ

1. 調査の成果

先の第 5 次調査において設定された 5-2 トレンチの延長線上に設定した幅約 3 m、長さ約 15 m の調査区で、調査面積は 43㎡であった。

この調査区では墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認と、墳丘肩部と周濠ラインの検出を目的として調査を行っている。

このうち周濠部分の調査ではトレンチ北端から 3.4 m の地点において周濠肩部を検出することができ、以下新しい時期の覆土を除去して周濠堆積の最上層とみられる暗灰色粘土層（図 87-1-44 層）、もしくは淡灰色粘土層（図 87-1-45 層）を一部掘り下げて調査を終了している。一方、墳丘部分の調査は人力によって表土以下の覆土を除去し墳丘盛土の検出に努めたが結果的には明確な盛土は確認することはできず、後述する墳丘下の包含層とみられる土壌の存在を確認することとなった。

なお、図 87-1 に示した等高線の入った平面図は覆土の掘削過程において一端墳丘盛土と判断した

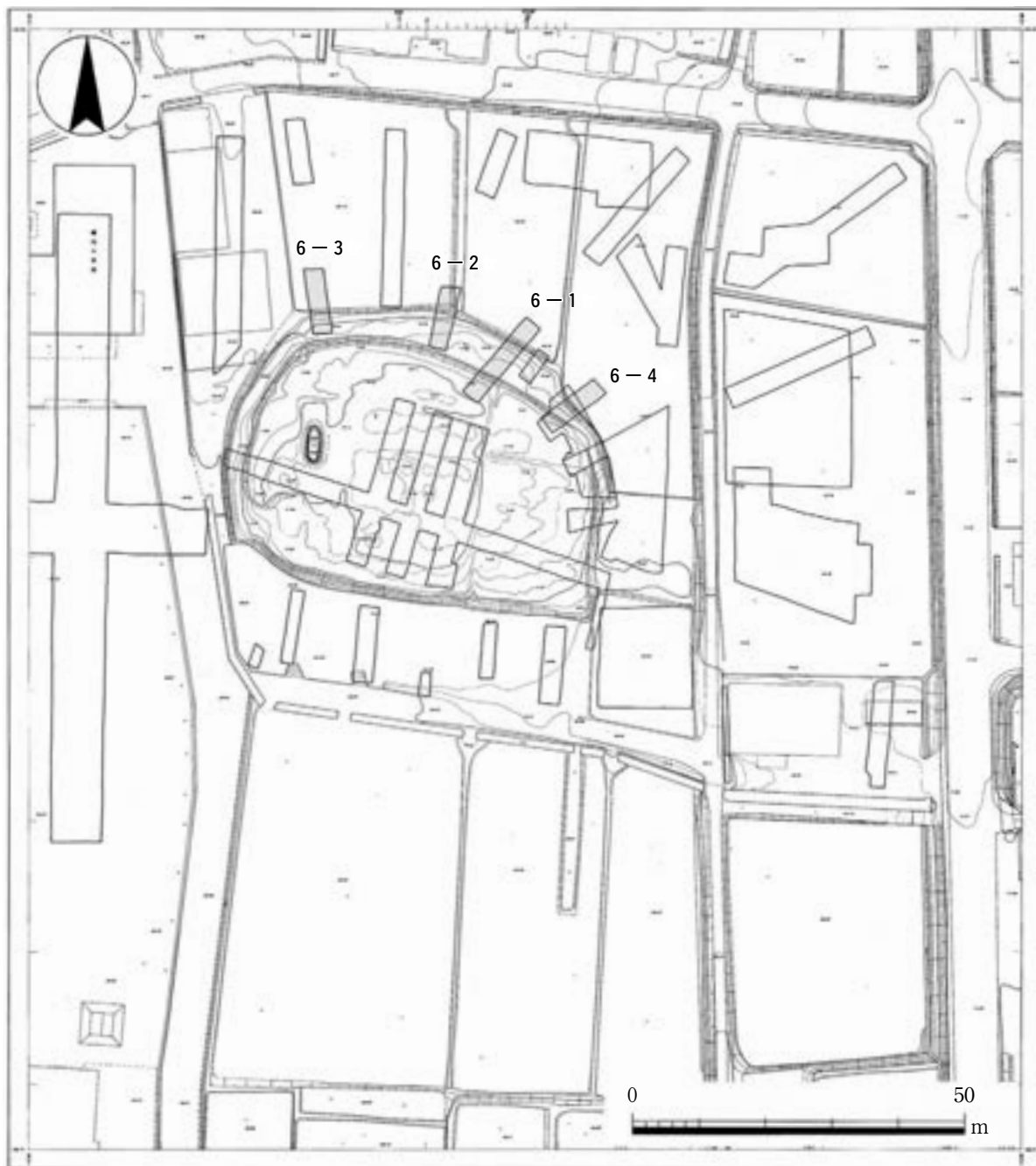


図86 纏向石塚古墳第6次調査地位位置図（1/1,000）

遺構面において作成したものであるが、結果的には土層の認定に誤りがあり、トレンチ北側部分は地山面、中央部では包含層上面、南端部では覆土内で掘削を止めた状態となっており、残念ながら図示した平面の状況や等高線は統一した面での状況とはなっていない。

この墳丘盛土上面と仮定した面での調査後、土層の状況を確認するために調査区の東部分において断ち割りを行ったところ、6-1 トレンチ部分では後世の削平により墳丘盛土は残されておらず検出した遺構面の認定に誤りがあったことが判明するとともに、纏向石塚古墳の墳丘下に存在する包含層（図87-1-62～73層）とみられる堆積土の存在を確認した。しかしながら、図87-1に示した断面図で

はこの墳丘下包含層とみられる堆積土は、調査区南端部では南へと向かって大きく盛り上がる74～76層の上に被る形となっており断面図の土層註記には記載がないものの、この74～76層を墳丘盛土と考えると62～73層も包含層では無く墳丘盛土ということになり、後述する溝1や土坑1、ピット群などは墳丘構築の最中に掘削された遺構と考えざるを得ないが、遺構の時期やその状況から勘案して、築造途中にこれらの遺構が構築されたと判断するのは難しいと思われる。

一方、74～76層を地山の高まりと考えると遺構の状況に矛盾は生じないものの、これまでの纏向石塚古墳の調査においては墳丘内にこのような地山の高まりは未だ確認されていないし、地山としては右上がりの堆積状況にも不自然さがあること、また色調や土質から考えると地山と判断するのは困難と言わざるを得ない。

このことから、74～76層部分においては何らかの分層の誤りも想定することができるが、本報告では明らかに纏向石塚古墳に先行するとみられる溝や土坑の存在を重視し、62～73層を墳丘下の包含層として取り扱うこととし、調査区南端部の74～76層の性格についてはこれを保留しておく。

さて、この断ち割り部分の調査では先述した古墳に先行するとみられる包含層とその上面から切り込まれたピットなどの遺構の存在が確認されたことを受けて急遽、除去しきれていなかった覆土の掘削を行い、墳丘下包含層の上面を露呈させ下層遺構の検出に努めることとなった。

この結果、墳丘下包含層上面からは図87-2の墳丘下層遺構平面図に示した溝1・土坑1・ピット1～12などの遺構を検出することができた。

以下、個々の遺構についてみていくこととしよう。

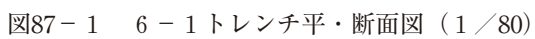
溝1 調査区内の西壁際で検出された溝状遺構である。調査時点では先述したように土層の認識に過ちがあり、本来は墳丘下の包含層上面で検出すべき遺構であったが、包含層を大きく掘り下げてしまった時点で遺構の存在に気付いたため、ほぼ地山面が露呈した部分より下部のみ調査を行っている。

検出された溝1は幅20～30cm、深さ5～10cm程度しか残存していなかったが、幸いにしてこの溝1の北端は西壁面にかかるかたちで存在したため、壁面に残された土層の観察からは本来幅約55cm、深さ約40cmの規模を持つものであることが判明している。

また、この溝1は南端部分が後述する土坑1と重複する状況にあった。両遺構の切り合い関係については記録が残されておらず、前後関係は明確ではないが、図87-2に示した土坑の断面には溝の痕跡が確認できないことから溝1が先行する遺構と考えている。

なお、溝1の埋土の記録は図87-2に示したように最下部しか残されていないが、淡茶褐色粘質シルトおよび褐灰色土で構成されていることが判明している。

土坑1 調査区内の西壁にかかるかたちで検出された土坑で、遺構の大半は調査区外へ展開するためその全容は明らかではない。この土坑は溝1と同様に本来は墳丘下の包含層上面で検出すべき遺構であったが、やはり包含層を大きく掘り下げてしまった時点で遺構の存在に付き、急遽調査を行ったものである。この結果、検出された土坑1は径1.35m以上、深さは30cm前後しか残されていないが、西壁断面の状況から本来は径1.85m以上、深さ約75cmをはかる比較的規模の大きい遺構であった



6-1 トレンチ東壁・南壁・土坑1

- 1 暗灰色土層
 - 2 灰色土層 (5mm以下の砂を含む。シルト質)
 - 3 淡茶灰色土層 (2mm以下の砂を含む。シルト質)
 - 4 淡茶灰色土層 — 杭跡
 - 5 淡灰色土層 (マンガン粒と4mm以下の砂を含む)
 - 6 暗茶褐色土層
 - 7 暗褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む)
 - 8 暗黄褐色土層 (11層より赤みがある。8mm以下の砂礫を含む)
 - 9 暗灰色粘質土層 (8層のブロックと8mm以下の砂礫を含む)
 - 10 淡褐色シルト層 (5mm以下の砂礫と炭化物を含む)
 - 11 暗黄褐色土層 (1cm以下の砂礫を含む)
 - 12 淡褐色土層 (7mm以下の砂礫を含む)
 - 13 淡茶褐色土層 (4mm以下の砂礫を含む。弱粘質)
 - 14 淡茶灰色土層 (4mm以下の砂礫を含む)
 - 15 淡紫灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
 - 16 暗黄褐色土層 (暗灰色と黄灰色の粘土ブロック、8mm以下の砂礫を含む)
 - 17 淡褐色土層 (5mm以下の砂礫・炭化物・陶器片を含む)
 - 18 灰褐色土層 (5mm以下の砂礫を含む)
 - 19 淡紫灰色シルト層 (マンガン粒・3mm以下の砂を含む)
 - 20 灰褐色砂礫層 (3mm以下の砂を含む)
 - 21 暗黄褐色土層 (11層より色が濃い。1cm以下の砂礫を含む)
 - 22 暗褐色土層 (黒褐色粘土を含む)
 - 23 暗褐色土層 (黒灰色粘土ブロックと淡黄灰色粘土ブロックを含む)
 - 24 暗褐色土層 (黒灰色粘土ブロックと淡黄灰色粘土ブロックが互層状に入る)
 - 25 黒褐色・淡黄褐色粘土ブロック土層 (表土を若干含み、粘土は互層をなす)
 - 26 黒褐色・淡黄褐色粘土ブロック土層 (淡褐色シルトを含み、粘土は互層をなす)
 - 27 黒褐色・淡黄褐色粘土ブロック土層 (淡褐色・暗灰色のシルトを含み、全体的に互層をなす)
 - 28 暗灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂・炭化物を含む)
 - 29 灰色砂礫層 (8mm以下の砂礫を多く含む)
 - 30 淡灰褐色土層 (暗灰色粘土ブロック・土器片・炭化物を含み、3mm以下の砂礫を多く含む)
 - 31 紫茶褐色土層 (5mm以下の砂礫・暗灰色粘土ブロック・土器片を含み硬質。層底に鉄分が堆積)
 - 32 淡褐色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
 - 33 茶褐色土層 (8mm以下の細砂を含み、硬質)
 - 34 褐灰色土層 (5mm以下の砂礫・土器片・炭化物を含む)
 - 35 褐灰色土層 (5mm以下の砂礫を含む)
 - 36 暗茶灰色土層 (2mm以下の砂を含む)
 - 37 灰色土層 (4mm以下の砂を若干含む)
 - 38 淡茶灰色土層 (3mm以下の砂粒を含み、弱粘質)
 - 39 淡紫灰色粘質土層 (5mm以下の砂礫・土器を含む)
 - 40 淡灰色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多量に含む)
 - 41 茶灰色土層 (2mm以下の砂礫を若干含む)
 - 42 淡灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を含む)
 - 43 灰色粘質土層 (マンガン粒・5mm以下の砂礫を若干含む)
 - 44 淡灰色粘土層 (3mm以下の砂礫を若干含む)
 - 45 暗灰色粘土層 (1mm以下の細砂をやや多く含む)
 - 46 灰褐色シルト層 (マンガン粒・1mm以下の細砂をごく微量含む)
 - 47 暗褐色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
 - 48 褐灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
 - 49 褐灰色土層 (1mm以下の細砂を多く含む)
 - 50 暗黄褐色土層 (1mm以下の砂礫を多く含み、シルト質)
 - 51 褐灰色土層 (47層より淡い。1mm以下の砂礫を多く含む)
 - 52 灰色細砂層 (1mm以下の砂礫を多く含む)
 - 53 淡茶灰色粘土層 (0.5mm以下の細砂を多く含む)
 - 54 淡紫灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂を多く含む)
 - 55 淡褐色シルト層 (マンガン粒・1mm以下の細砂を含む)
 - 56 淡茶灰色土層 (1mm以下の細砂と土器片を含む。シルト質)
 - 57 淡茶灰色砂礫層 (8mm以下の砂礫を多く含む)
 - 58 淡茶灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む。弱粘質)
 - 59 茶灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多量に含む)
 - 60 茶灰色土層 (3mm以下の砂礫と炭化物を含む。シルト質)
 - 61 茶灰色土層 (0.5mm以下の細砂を若干含む。弱粘質)
 - 62 淡茶灰色土層 (1mm以下の細砂を多量に含む)
 - 63 淡茶灰色シルト層 (55層より色が濃く、0.5mm以下の砂礫を多量に含む)
 - 64 淡茶灰色粘質土層 (0.5mm以下の砂礫を若干含む)
 - 65 淡黄灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂を多量に含む)
 - 66 暗灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多く含み、比較的硬質)
 - 67 淡褐色土層 (5mm以下の砂礫を含む)
 - 68 灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多く含む)
 - 69 暗褐色土層 (3mm以下の砂礫を多く含む)
 - 70 淡紫灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多く含む)
 - 71 灰褐色砂質土層 (1mm以下の砂礫を多く含み、炭化物を含む)
 - 72 灰黄褐色土塊 (2mm以下の粗砂を多く含む)
 - 73 淡紫灰色砂質土層 (2mm以下の粗砂を多量に含む)
 - 74 暗褐色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多く含む)
 - 75 暗灰色シルト層 (0.5mm以下の均質な細砂を多量に含む)
 - 76 淡灰色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多く含む)
 - 77 淡茶色粘土層 (強粘質) 地山
- ※ 番号註記のない土層は、原因に記載なし

〈墳丘下層遺構面〉



現代整地土

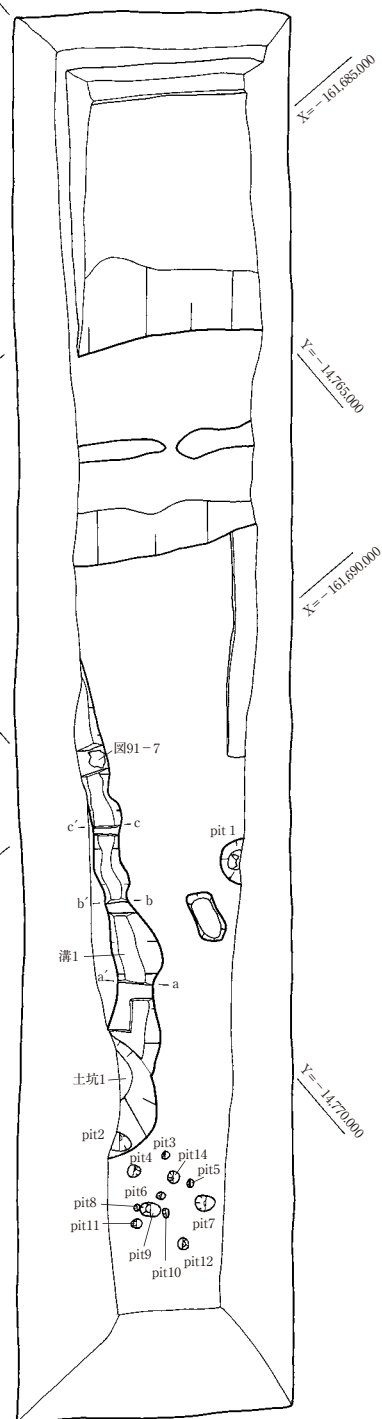
現代整地土

周濠内堆積土

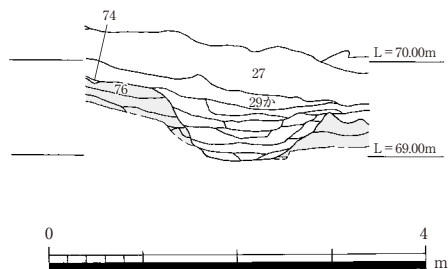
pit1埋土

遺構埋土

古墳築造前の包含層



〈土坑1〉



〈溝1〉

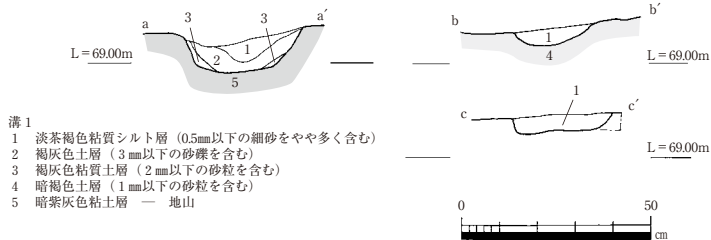


図87-2 6-1 トレンチ平・断面図 (平面：1/80・断面：1/20)

ことが解っている。遺構埋土の状況は比較的均一な水平堆積を示しているが、調査時に作成された実測図には土色や質の記載が欠落しており、残念ながら細かな情報は不明である。

ピット群 ピットの多くは調査区内の南端部分に集中して検出されている。調査区南端付近のピット群はいずれもが墳丘下包含層上面において検出されたものであるが、殆どは径10～20cm前後の小さなもので、柱痕跡も確認できず建物を構成するか否かは判然としないものであった。

このうち調査区中央部で東壁にかかるかたちで検出されたピット1は溝1や土坑1と同様に本来は墳丘下の包含層上面で検出すべき遺構であったが、やはり包含層を大きく掘り下げてしまった時点で遺構が確認され調査を行ったものである。この結果、検出された遺構は径48cm、深さは12cm前後しか残されていなかったが、東壁断面の状況から本来は径98cm、深さ57cmをはかる土坑とも呼ぶべき大きな遺構であったことが解っている。遺構埋土の状況は大きく分けて図87-1-47～51層の上層と52～54層の下層に分けることができ上層は褐灰色系の土、下層は灰色系の砂や細砂、粘土で構成されていた。

2. 出土遺物

第1トレンチからの出土遺物は主に溝1や土坑1などから出土している（図91・92）。1から7は溝1からの出土遺物で多くは弥生形甕である。ラベルに記載された出土層位は淡褐色砂質土と淡茶褐色土との記録があるが、残念ながら土層図には記録が無く詳細な地点は不明であるが出土層位ごとにそれほど時期差のある遺構とは考えられないことから、一括の資料と考えて良いと思われる。概ね庄内期でも古相の資料と考えられるが遺物の量や器種の様相からして細かな時期を限定し得るものではない。8・9は溝1と土坑1の混在資料である。纏向石塚古墳に先行する資料としての価値は高いが、やはり点数や器種の問題から時期を限定し得るものではない。10から24は土坑1からの出土遺物である。このうち10の細頸壺は下層から、他は上層からの出土であった。この土坑からの出土遺物には壺・甕・高坏など比較的多くの器種があり、概ね庄内0式期に属するものかと考えられるが、やはり資料の点数や個々の残存状況からは細かな時期を限定するのは困難である。

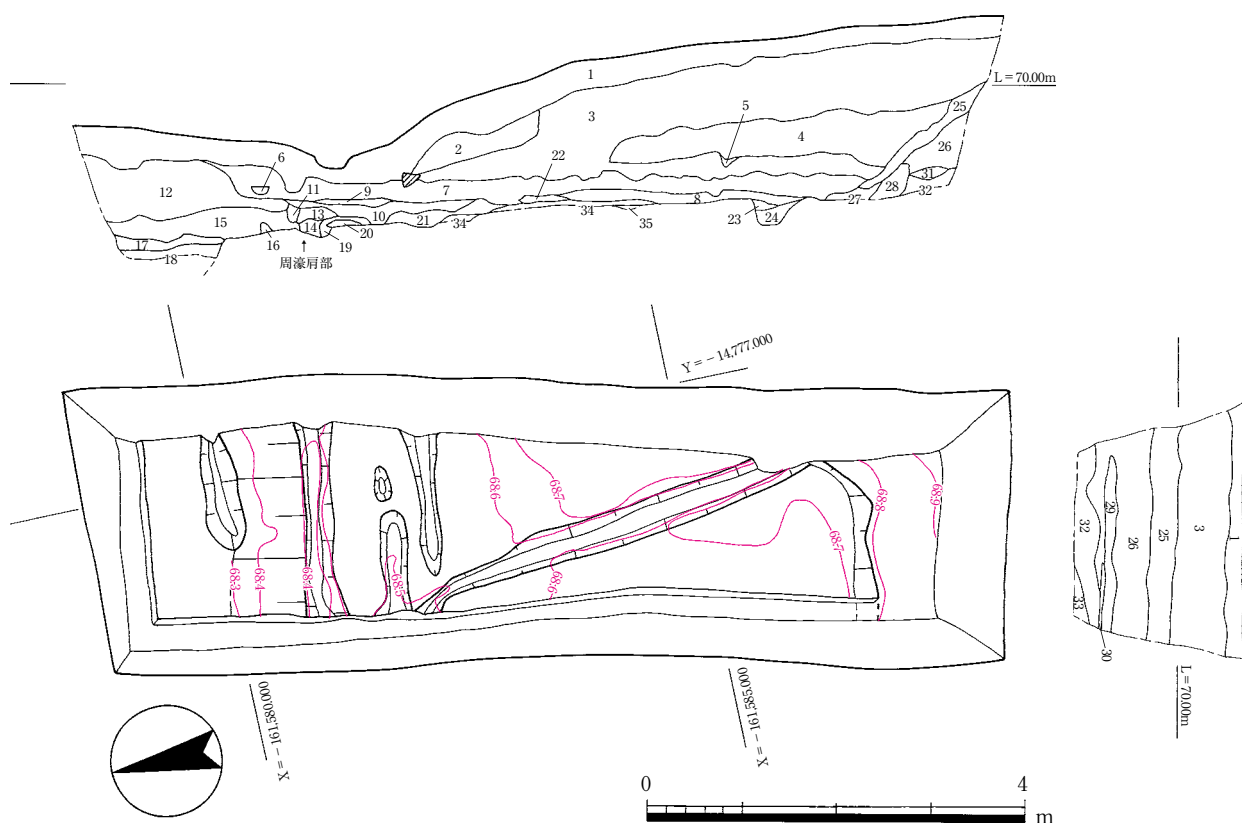
なお、25はピット1からの出土土器で、26から32は暗灰褐色砂礫土からの出土とのラベルが残されていた。このラベルには墳丘盛土との記録も残されていたことやその土色の記録からは図87-1-74層からの出土の可能性が考えられるが、遺物ラベル記載の土色と断面図の土色が必ずしも対応した状態で記録が残されていないこと、また先述したように74層の性格が盛土であるか否かの確認が困難であることから、ここでは墳丘盛土出土との判断は保留することとし、74層出土の可能性を提示するのみに留めておきたい。

（2）第2トレンチ

1. 調査の成果

後円部墳丘の北側、5-3トレンチの延長線上に設定した幅約3m、長さ約10mの調査区で、調査面積は28㎡であった。

この調査区も第1トレンチと同様に墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認を行うことと、



- | | | |
|---|---------|----------------------------------|
| 1 暗灰色土層 | 耕作土 | 19 黄茶褐色土層 (5 mm以下の砂礫を含む) |
| 2 暗黄灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫・シルトブロック・粘土ブロックを含む) | | 20 灰褐色砂礫層 (1 cm以下の砂礫を含む) |
| 3 暗茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫・シルトブロック・粘土ブロックを含む) | | 21 暗茶褐色粘質土層 (3 mm以下の砂礫とマンガン粒を含む) |
| 4 暗茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫・シルトブロック・粘土ブロックを含む) | | 22 青灰褐色土層 (3 mm以下の砂礫とシルトを含む) |
| 5 黄茶褐色粘質土層 (3 mm以下の砂礫を含む) | | 23 灰茶褐色シルト層 (3 mm以下の砂礫を含む) |
| 6 黄褐色粘質土層 — 暗渠 | 素掘り小溝埋土 | 24 暗灰褐色シルト層 (3 mm以下の砂礫を含む) |
| 7 灰褐色土層 (マンガン粒を含む) | | 25 黄茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫と多量の枝を含む) |
| 8 黄灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫と砂礫ブロックを含む) | | 26 暗灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫・マンガン粒・炭を含む) |
| 9 灰褐色砂礫層 (7 mm以下の砂礫で構成される。マンガン粒を含む) | | 27 青灰褐色土層 (2 mm以下の砂礫を含む) |
| 10 黄灰褐色砂礫層 (1 cm以下の砂礫で構成される) | | 28 黄灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫を含む) |
| 11 灰褐色土層 (3 mm以下の砂礫を含む) | 周濠内堆積土 | 29 灰茶褐色土層 (5 mm以下の砂礫・マンガン粒・炭を含む) |
| 12 淡茶褐色土層 (マンガン粒を含む) | | 30 炭化層 |
| 13 灰茶褐色土層 (3 mm以下の砂礫・シルトブロックを含む) | | 31 黄灰褐色シルト層 (2 mm以下の砂礫を含む) |
| 14 淡灰褐色粘質シルト層 (3 mm以下の砂礫を含み、粘性強い) — 素掘り小溝埋土 | | 32 暗灰茶褐色粘質土層 (5 mm以下の砂礫を含む) |
| 15 灰茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫を含む) | | 33 黄灰褐色粘質シルト層 (5 mm以下の砂礫を含む) |
| 16 灰褐色土層 (3 mm以下の砂礫を含む) | | 34 黄灰褐色シルト層 (2 mm以下の砂礫とマンガン粒を含む) |
| 17 暗灰褐色砂礫層 (7 mm以下の砂礫で構成される) | | 35 灰茶褐色シルト層 |
| 18 黄灰褐色シルト層 (3 mm以下の砂礫とマンガン粒を含む) | | |

図88 6-2 トレンチ平・断面図 (1/80)

墳丘肩部および周濠ラインの検出を目的として調査を行っている。

このうち周濠部分の調査は、トレンチ北端から2.3mの地点において周濠肩部を検出することができ、以下周濠堆積の最上層となる暗灰褐色砂礫層 (図88-17層) を除去し、黄灰褐色シルト層 (図88-18層) を露呈させた段階で調査を終了している。一方、墳丘部分の調査は人力によって表土以下の覆土を除去し、墳丘盛土の検出に努めたが中近世の削平が著しく、明確な盛土は確認することができなかった。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や周濠埋土最上層からの土師器・須恵器などの

小片がみられたが、遺物の総量は少ないものであった。また、今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような遺物は認められなかった。

(3) 第3トレンチ

1. 調査の成果

後円部墳丘の北西側、5-4トレンチの南側延長線上に設定した幅3m、長さ10mの調査区で、調査面積は30㎡であった。

この調査区も他の調査区と同様に墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認を行うことと、墳丘肩部および周濠ラインの検出を目的として調査を行っており、周濠部分の調査ではトレンチ北端から4.5mの地点において周濠肩部を検出することができた。周濠部分の調査は堆積の最上層にあたる灰

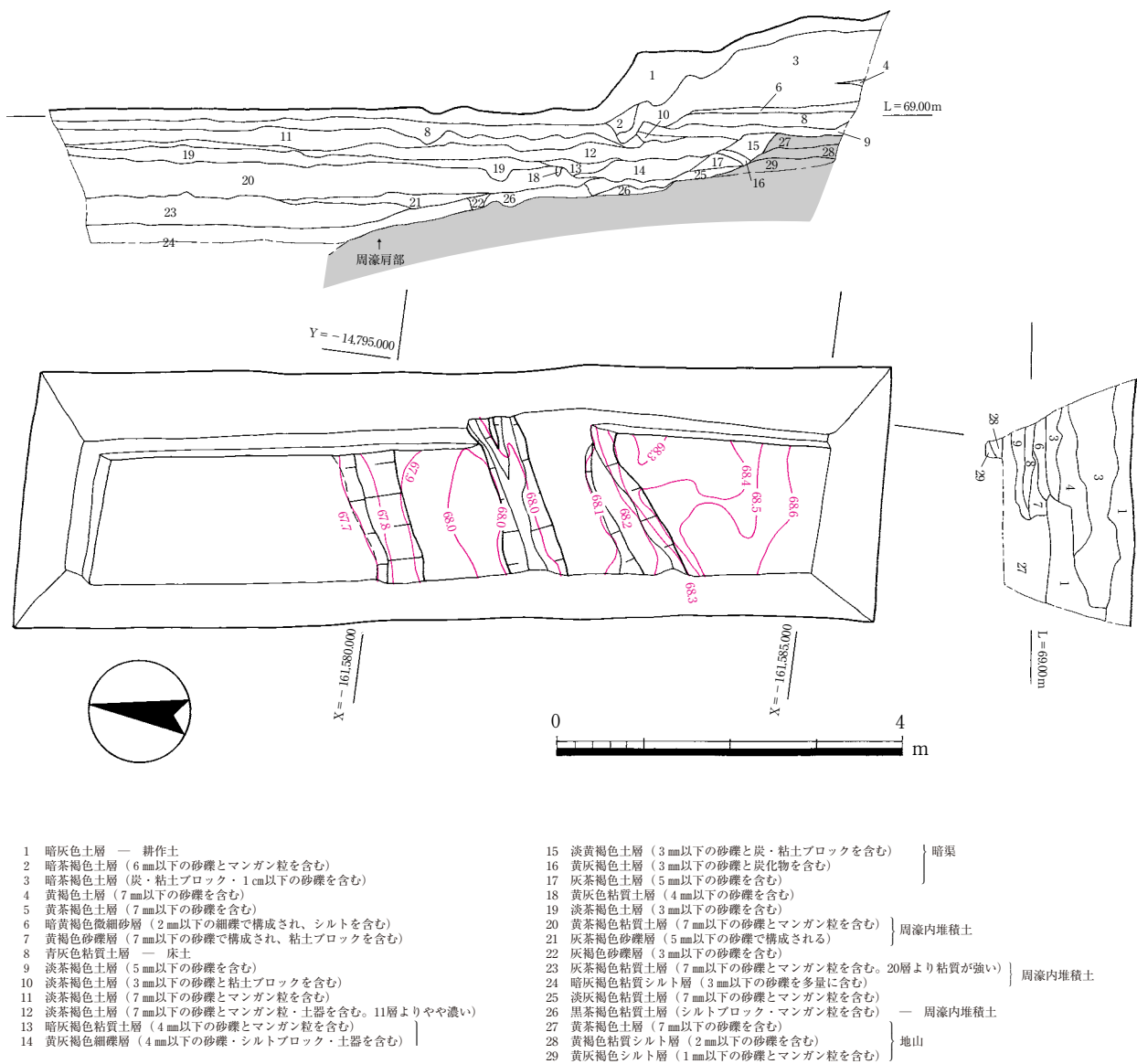


図89 6-3 トレンチ平・断面図 (1/80)

茶褐色粘質土および暗灰褐色粘質シルト層黒茶褐色粘質土層（図89-23・24・26）を除去するに留め、以下の掘り下げは行っていない。墳丘部分の調査は人力によって表土以下の覆土を除去し、墳丘盛土の検出に努めたが6-2トレンチと同様、中近世の削平が著しく、盛土の存在は確認することができなかった。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物は覆土中から中世土器や土師器・須恵器の小片がみられたが、遺物の総量は非常に少ないものであった。今回の報告に際して再度整理と見直しを行ったが、図示できるような遺物は認めることができなかった。

（4）第4トレンチ

1. 調査の成果

6-4トレンチは後円部墳丘の北東側、5-1トレンチの南西側延長線上に設定した幅3m、長さ10mの調査区で、調査面積は30㎡であった。

この調査区も他の調査区と同様に墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認を行うことと、墳丘肩部および周濠ラインの検出を目的として調査を行っており、周濠部分の調査ではトレンチ北端から6mの地点において周濠肩部を検出することができたが、検出された周濠肩部は断面の観察から後世の堆積土である49・50層などの攪乱によって削らたとみられ、本来のラインよりは西南方向へやや後退しているものと考えられる。なお、周濠内部の調査は堆積の最上層にあたる図90-55～58層を除去するに留め、以下の掘り下げは行わなかった。

墳丘部分の調査は調査区南端において標高約70mのレベルにおいて墳丘盛土とみられる高まりを確認しているが検出状況から考えて表層部分は後世に大きく改変を受けているものとみられ、図示した遺構図は墳丘本来の姿をあらわすものではない。

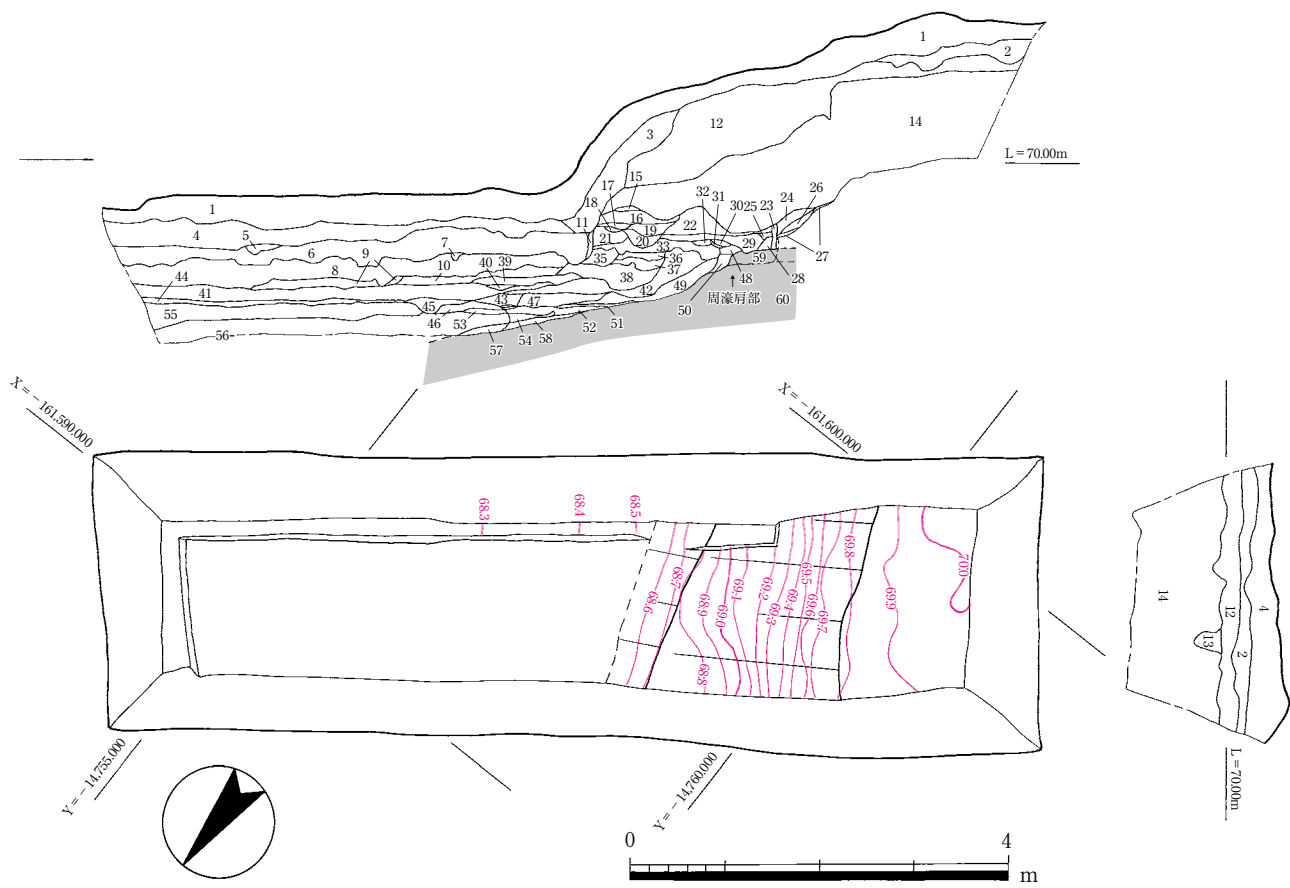
なお、このトレンチにおいては盛土保存を優先し墳丘の断ち割り調査を行わなかったため、残念ながらその構築状況を知ることはできなかったが、第6次調査で設定された他のトレンチでは盛土の残存が全く確認できなかった中で唯一の確認事例となった。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物は他の調査区と同様に覆土中からの中世土器や古式土師器・須恵器などの小片がみられたが、遺物の総量は少ない。今回の報告に際して再度すべての遺物について見直しを行ったが、図示できるような個体や特筆すべき遺物は認められない。

第3節 小結—第6次調査の成果—

第6次調査は墳丘北側の墳丘および周濠の形状確認とその残存状況の確認を目的として4本のトレンチを設定し調査を行った結果、墳丘のラインについてはほぼ当初の推定どおりに検出することができた。それぞれの調査区における墳丘裾の検出レベルを整理しておくと第1トレンチでは標高68.5m、第2トレンチでは68.4m、第3トレンチでは67.8m、第4トレンチでは68.8mと第3トレンチを除いて



- | | | |
|--|------------------------------------|--|
| 1 表土 — 耕作土 | 31 褐灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む) | |
| 2 暗赤黄褐色土層 (5mm以下の砂礫を含む) | 32 淡黄褐色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多く含む) | |
| 3 暗黄灰色土層 (8mm以下の砂礫・土器を含む) | 33 淡茶灰色土層 (1cm以下の砂礫を多く含む) | |
| 4 淡茶灰色土層 (5mm以下の砂礫を含む) | 34 灰色粘質土層 (1mm以下の砂礫をやや多く含む) | |
| 5 淡紫灰色土層 (3mm以下の砂礫・土器片・炭化物を含む) | 35 茶褐色粘質土層 (2mm以下の粗砂をごく微量含む) | |
| 6 淡紫灰色土層 (5層より色が淡い。3mm以下の砂礫と、土器片・炭化物を含む) | 36 淡茶褐色粗砂層 (2mm以下の粗砂を多く含む) | |
| 7 淡茶灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む) | 37 褐灰色土層 (2mm以下の砂礫を含む) | |
| 8 茶灰色土層 (8mm以下の砂礫を含む) | 38 淡褐灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む) | |
| 9 淡黄灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む) | 39 灰色粘質土層 (1mm以下の砂礫をやや多く含む) | |
| 10 暗茶灰色土層 (4mm以下の砂礫を含む) | 40 淡灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む) | |
| 11 褐灰色土層 (3mm以下の砂礫を若干含む) | 41 淡紫灰色粘土層 (1mm以下の細砂と、瓦器片・炭化物等を含む) | |
| 12 暗赤黄褐色土層 (2層より色が濃い。8mm以下の砂礫を含む) | 42 灰色粗砂層 (2mm以下の砂を多量に含む) | |
| 13 暗黄褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む) | 43 暗黄灰色粘質土層 (8mm以下の砂礫をやや多く含む) | |
| 14 淡赤黄褐色土層 (8mm以下の砂礫・土器を含む) | 44 暗灰色粘土層 (1mm以下の砂礫を若干含む) | |
| 15 淡黄褐色土層 (1mm以下の細砂を若干含む) | 45 暗灰色粘質土層 (1cm以下の砂礫を若干含む) | |
| 16 淡黄褐色土層 (3mm以下の砂礫をやや多く含む) | 46 淡緑灰色粘土層 (4mm以下の砂礫・木質を若干含む) | |
| 17 淡赤灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む) | 47 灰色粘質土層 (5mm以下の砂礫をやや多く含む) | |
| 18 淡赤褐色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む) | 48 灰色粘質土層 (1mm以下の砂礫をやや多く含む) | |
| 19 淡黄灰色土層 (5mm以下の砂礫を若干含む) | 49 暗灰色粘質土層 (0.5mm以下の細砂を若干含む) | |
| 20 褐灰色土層 (8mm以下の砂礫を含む) | 50 暗褐色砂礫層 (2mm以下の粗砂を多く含む) | |
| 21 淡茶褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む) | 51 暗灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂を多く含む) | |
| 22 暗橙褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む) | 52 淡黄灰色細砂層 (1mm以下の細砂を多く含む) | |
| 23 淡赤褐色土層 (1mm以下の砂礫を多く含む) | 53 淡灰色細砂層 (1mm以下の砂を含む) | |
| 24 淡黄灰色土層 (1mm以下の細砂をやや多く含む) | 54 淡黄灰色粘質土層 (2mm以下の粗砂を若干含む) | |
| 25 淡茶褐色土層 (3mm以下の砂礫を含む) | 55 灰色粘土層 (3mm以下の砂礫を含む) | |
| 26 淡茶褐色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む) | 56 淡緑灰色細砂層 (1.5mm以下の細砂を多く含む) | |
| 27 淡茶褐色粘質土層 (26層より粘質強い。1mm以下の細砂を若干含む) | 57 暗灰色粗砂層 (2mm以下の粗砂を多量に含む) | |
| 28 淡褐灰色土層 (2mm以下の細砂を多く含む) | 58 淡黄灰色粗砂層 (2mm以下の粗砂を多量に含む) | |
| 29 淡褐灰色砂質土層 (3mm以下の砂礫を含み、硬質) | 59 淡茶褐色細砂層 (2mm以下の砂を多量に含む) | |
| 30 淡紫灰色粘土層 (0.5mm以下の細砂を若干含む) | 60 暗褐灰色砂礫層 (3mm以下の砂礫を多く含む) | |

周濠内堆積土
地山

図90 6-4 トレンチ平・断面図 (1/80)

はほぼ68.6mを中心とした20cm以内のレベルで検出することができた。この中で唯一67.8mと突出して低いレベルで墳丘肩を検出した6-3トレンチでは、明らかに周濠堆積最上層と判断される堆積層

(図89-17・18・20・21・26層)よりも下部において墳丘肩が設定されている。このことは本来周濠肩が来るべき調査区中央部分が新しい時期の暗渠により大きく攪乱を受けていたため、残された墳丘部分における見かけ上の傾斜変換点を周濠肩と判断したことに起因するものだと考えられる。本来の墳丘肩の位置は周濠堆積最上層とのレベル関係から推定すると標高68.4m付近に認めるべきものであろう。

さて、墳丘そのものに目を向けてみると第6次調査においては第4トレンチを除く全ての調査区が後世の著しい改変により、全く墳丘を残さないほど深いレベルまで削平を受け、本来の盛土を失っていることが判明した。今回の調査ではその時期を明らかにすることができなかったが、それは第4次調査のクビレ部周辺や第8次調査の後円部南側で確認されている平安時代の削平よりもさらに新しい時期のものと推定される。

なお、墳丘が大きく削平を受けたことの副産物ではあるが、第1トレンチの調査においては墳丘下に位置する包含層を確認している。纏向石塚古墳の墳丘下には、「弥生時代近畿（唐古45号竪穴上層併行）第5様式期の湿地状の堆積層」の存在が第2次調査の時点で既に指摘されていた¹⁾が、今回調査の対象となった墳丘北側部分では湿地帯ではなく安定した遺構面と、その上面で溝や土坑、ピット群などの存在を明らかにすることができた。

これらの遺構の調査を進めることは古墳築造時期の上限を探る上で重要な手がかりとなり得るものである反面、下層遺構群の掘削時期の下限を探るためには広い範囲にわたって残存する墳丘の盛土を除去しなければ調査ができないという問題もある。

今回の調査では幸いにして墳丘を破壊することなく下層遺構の調査が実施できた訳ではあるが、限られた部分での調査にとどまり、古墳の築造時期を限定し得る良好な土器資料にも恵まれなかった。

(橋本)

【註記】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976

表 45 纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
91—1 126—1	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・b	C : (14.0)	O. (口唇) スリナデヨコICa・ (頸) スリナデヨコICa・ 押捺A i. スリナデヨコICa			O. 10Y R3/1黒褐 i. 7.5Y R7/3にぶい橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—2 126—2	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・b	C : (14.0)	マメツツ不明			O. 2.5Y 3/1黒褐 i. 2.5Y 6/3にぶい黄	・溝埋土第1層(淡 茶褐色粘質シル ト) に対応か
91—3 126—3	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・b	C : (14.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 5Y R6/6橙 i. 10Y R6/6にぶい黄橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—4 126—4	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・c		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5Y R6/3にぶい褐 i. 7.5Y R6/2灰褐	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—5 126—5	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—6 126—6	第1トレンチ 溝埋土 淡茶褐色土	甕 Y	II—C—・a	C : (14.0)	O. (口唇～口縁) スリナデヨコICa (頸) 押捺A i. スリナデヨコICa	O. 右上がりタタキ i. マメツツ不明	25/CM	O. 10Y R4/1褐灰～ 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) かつ、そ の上面での出土
91—7 126—7	第1トレンチ 溝埋土 淡茶褐色土	甕 Y	II—C—1a	C : 14.1 W : 15.1	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. タタキ i. スリナデ1Ab	20/CM	O. 10Y R6/3にぶい黄橙～ 10Y R5/2灰黄褐 i. 10Y R5/3にぶい黄褐	・埋土第1層(淡 茶褐色粘質シル ト) かつ、その上 面での出土
91—8 126—8	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土 第1トレンチ 土坑1上層 土坑1上層 暗青灰色土	甕 Y	I—C—・a	C : (16.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 右上がりタタキ→ スリナデナナメ1Aa i. マメツツ不明	25/CM 9/cm	O. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 7.5Y R7/2明褐灰	
91—9 126—9	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土 第1トレンチ 土坑1下層 暗青灰色土(炭混じ り)	鉢?	II?—A1—・	B : 4.6		O. スリナデ1Ca i. スリナデ1Ab		10Y R6/3にぶい黄橙(底部 外面は10Y R5/1褐灰)	
91—10 126—10	第1トレンチ 土坑1 下層	壺	S—B—a	C : 5.2 H : 15.6 B : 1.0 W : 15.1	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. ミガキA i. スリナデ1Ca		O. 10Y R6/4にぶい黄橙 i. 10Y R5/2灰黄褐	・そのほか、土坑下暗灰 色粘質土、暗青灰色土 (炭混じり)、褐灰色土 の小片とも接合してい る
91—11 126—11	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	壺	H—B—b	C : (16.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10Y R6/4にぶい黄橙	

表 46 纏向石塚古墳第 6 次調査出土土器観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
91—12 126—12	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	壺	・ - - - ・	W : 12.0		O. ミガキAタテ→ ミガキAYヨコ i. スリナデヨコICA→ 押捺A		O. 2.5Y R7/8橙～ 5Y R7/6橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
91—13 126—13	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (壺?)	3—C—・	B : (3.6)				O. スリナデICA・押捺A i. マメツ不明	
91—14 126—14	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—B—・・	—		O. 右上がりタタキ i. ケズリB	30/CM	O. 10Y R5/2底黄褐～ 10Y R3/1黒褐 i. 10Y R6/2底黄褐	
91—15 126—15	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—・—・・a	C : (14.0)	O. スリナデICA・押捺A i. マメツ不明			O. 10Y R5/1褐灰 i. 10Y R5/2底黄褐	
91—16 126—16	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—・—・・b	C : (15.0)	O. スリナデヨコIAa i. スリナデIAa	7/cm 7/cm		10Y R8/1灰白	
91—17 126—17	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—・—・・b	C : (16.0)	O. スリナデヨコICA i. マメツ不明			O. 10Y R7/4にぶい黄橙 i. 10Y R7/2にぶい黄橙 ～10Y R4/1褐灰	
91—18 126—18	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	I—・—・・b	C : (17.0)	O. スリナデICA・押捺A i. スリナデICA			O. 10Y R5/2底黄褐～ 10Y R3/1黒褐 i. 10Y R5/3にぶい黄褐	
91—19 126—19	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (甕Y)	1—A—・	B : (5.0)		O. 右上がりタタキ i. スリナデICA	30/CM	O. 右上がりタタキ i. ケズリB	O. 10Y R6/3にぶい黄橙～ 2.5Y 6/2底黄 i. 10Y R3/1黒褐
91—20 126—20	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	高坏	・ - - - ・	C : (16.0)	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ			10Y R6/3にぶい黄橙	
91—21 126—21	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	脚台 (高坏)	・ - - - ・	B : (17.6)				O. スリナデICA i. スリナデIAa	10Y R6/4にぶい黄橙

表 47 纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (3)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
91—22 126—22	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	脚台 (高坏)	・—・—・	B : (176)			O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ	10Y R6/4にぶい黄橙	
91—23 126—23	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (鉢?)	2—C—・	B : (36)			O. 押捺A i. スリナデICa	O. 10Y R6/6明黄褐 i. 10Y R6/2灰黄褐	
91—24 126—24	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (鉢?)	I—A ₂ —・	B : 36		O. スリナデICa i. スリナデICa	O. 押捺A i. スリナデICa	10Y R3/1黒褐	
92—25 126—25	第1トレンチ ピット1	甕 Y	I—B—・	W : (222)		O. 右上がりタタキ→ 一部スリナデIC i. (上半) ケズリB (下半) ケズリA	30/CM	O. 10Y R6/4にぶい黄橙～ 10Y R3/1黒褐 i. 10Y R6/4にぶい黄橙	・胸部下半外面に スス付着
92—26 126—26	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	壺	T—A ₁ ?—a	C : (100)	O. ミガキAヨコ→ ミガキAタテ i. ミガキAヨコ			7.5Y R7/4にぶい橙	
92—27 126—27	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	壺	T—A ₁ ?—a	C : (180)	O. スリナデヨコIAa i. スリナデIAa	8/cm 8/cm		O. 10Y R5/3にぶい黄褐 i. 10Y R6/3にぶい黄橙	
92—28 126—28	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	壺	H—D?—a	C : (180)	O. スリナデICa i. スリナデICa			O. 10Y R5/2灰黄褐 i. 10Y R5/3にぶい黄褐	
92—29 126—29	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	甕 Y	I—・—・b	C : (160)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコICa	多/cm		O. 7.5Y R4/1褐灰 i. 7.5Y R7/2明褐灰	
92—30 126—30	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	底部 (甕Y)	2—A—b	B : (40)			O. 右上がりタタキ i. スリナデIAb	30/CM O. 10Y R6/2灰黄褐 i. 10Y R5/2灰黄褐	
92—31 126—31	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	高杯	E ₃ —1—B—c	B : (110)		i. ミガキA	O. ミガキAタテ i. スリナデICa	O. 10Y R6/3にぶい黄橙 i. 2.5Y 6/3にぶい黄	
92—32 126—32	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	脚台 (高坏)	・—・—・	B : (190)			O. ミガキA i. ミガキA (端) スリナデIB	多/cm O. 7.5Y R7/4にぶい黄橙～ 7.5Y R4/1褐灰 i. 7.5Y R6/4にぶい黄橙～ 10Y R5/1褐灰	

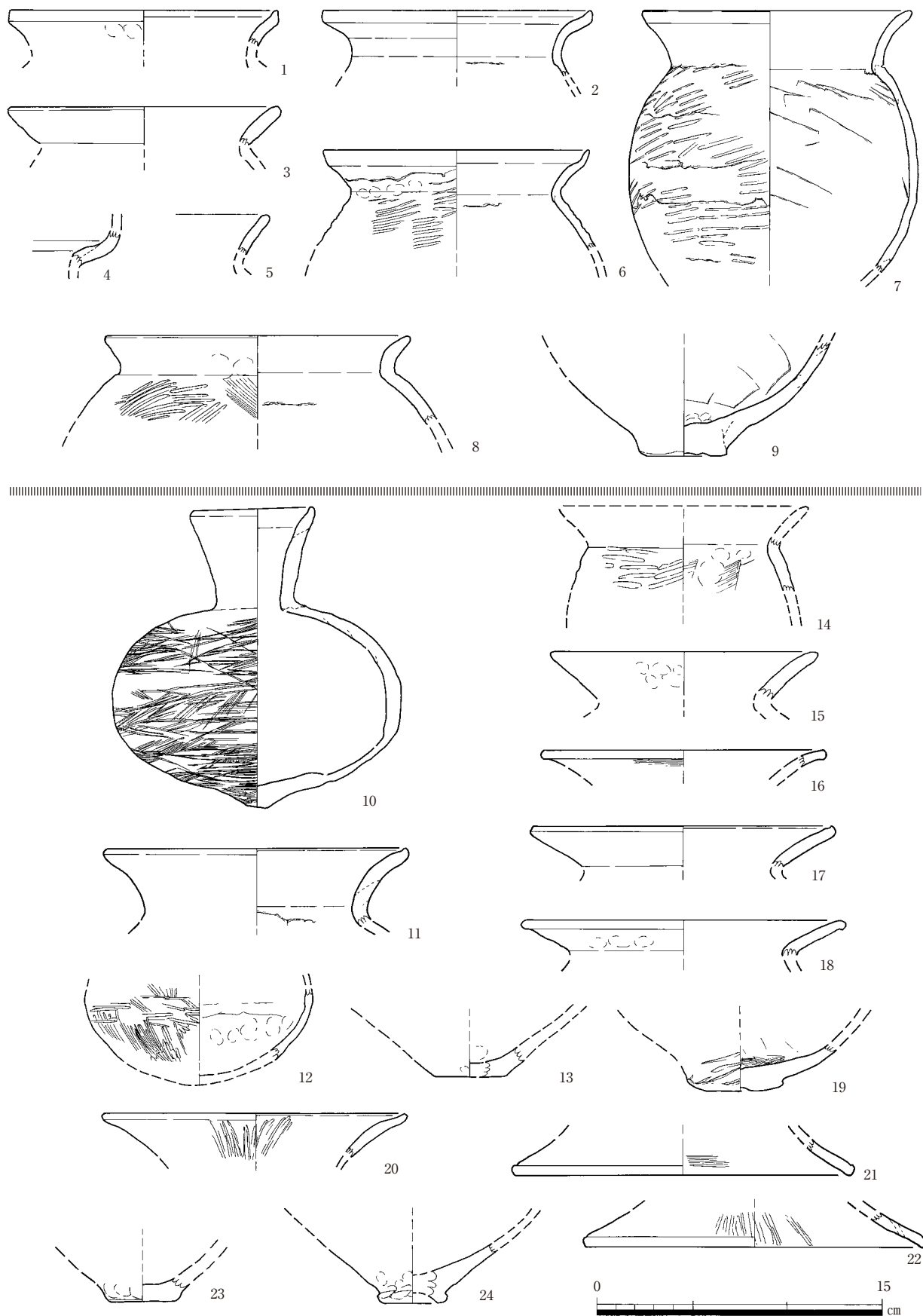


図91 纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図1 (1/3)

第1トレンチ：溝 1～7 溝埋土 8～9 溝・土坑1

土坑1 10下層 11～24上層

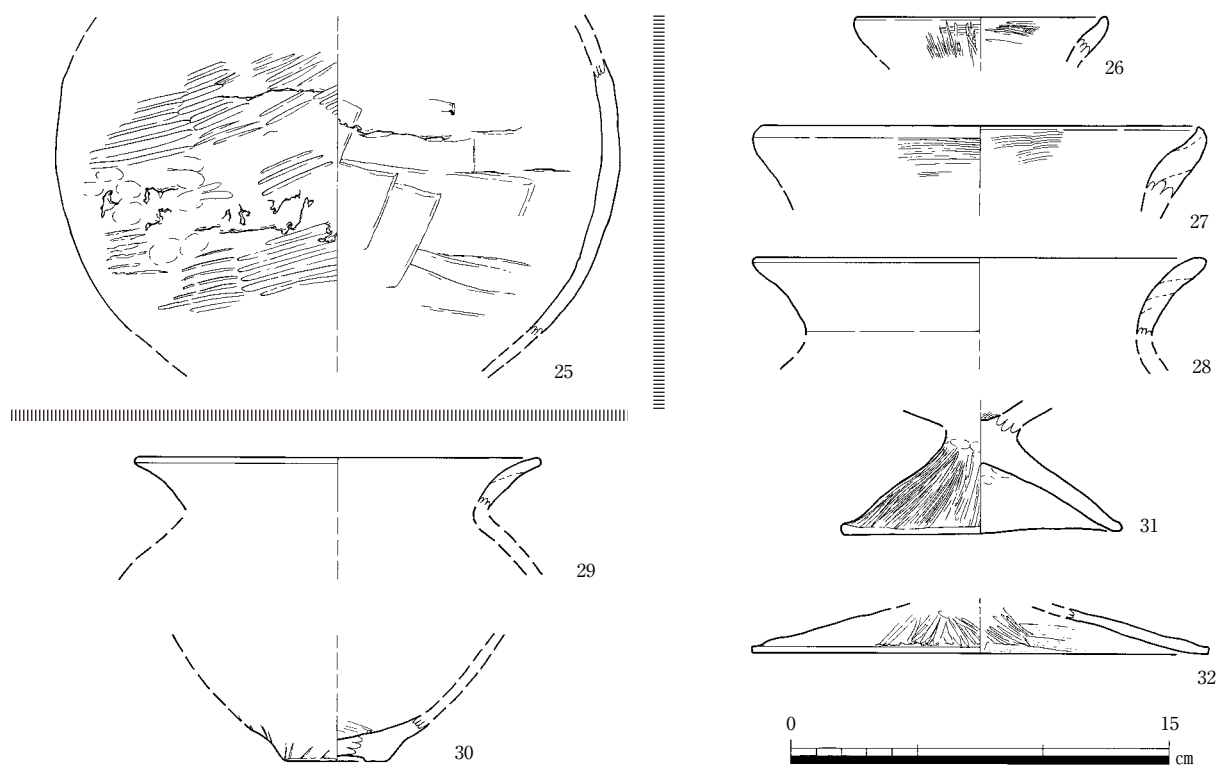


図92 纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図2 (1 / 3)
第1トレンチ：25ピット1 26～32墳丘盛土？

第9章 纏向石塚古墳第7次調査報告

(纏向遺跡第77次調査報告)

第1節 はじめに

第7次調査は平成6年2月から開始される古墳の第1期整備工事に先立ち、纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと桜井市教育委員会が実施したものである。

本調査において目的としたのは6-4、4-3 d トレンチで既に確認されている墳丘東側の墳丘ラインの再確認と、周濠北側の外肩部の詳細な構造および周濠より外側の遺構の残存状況の確認であり、

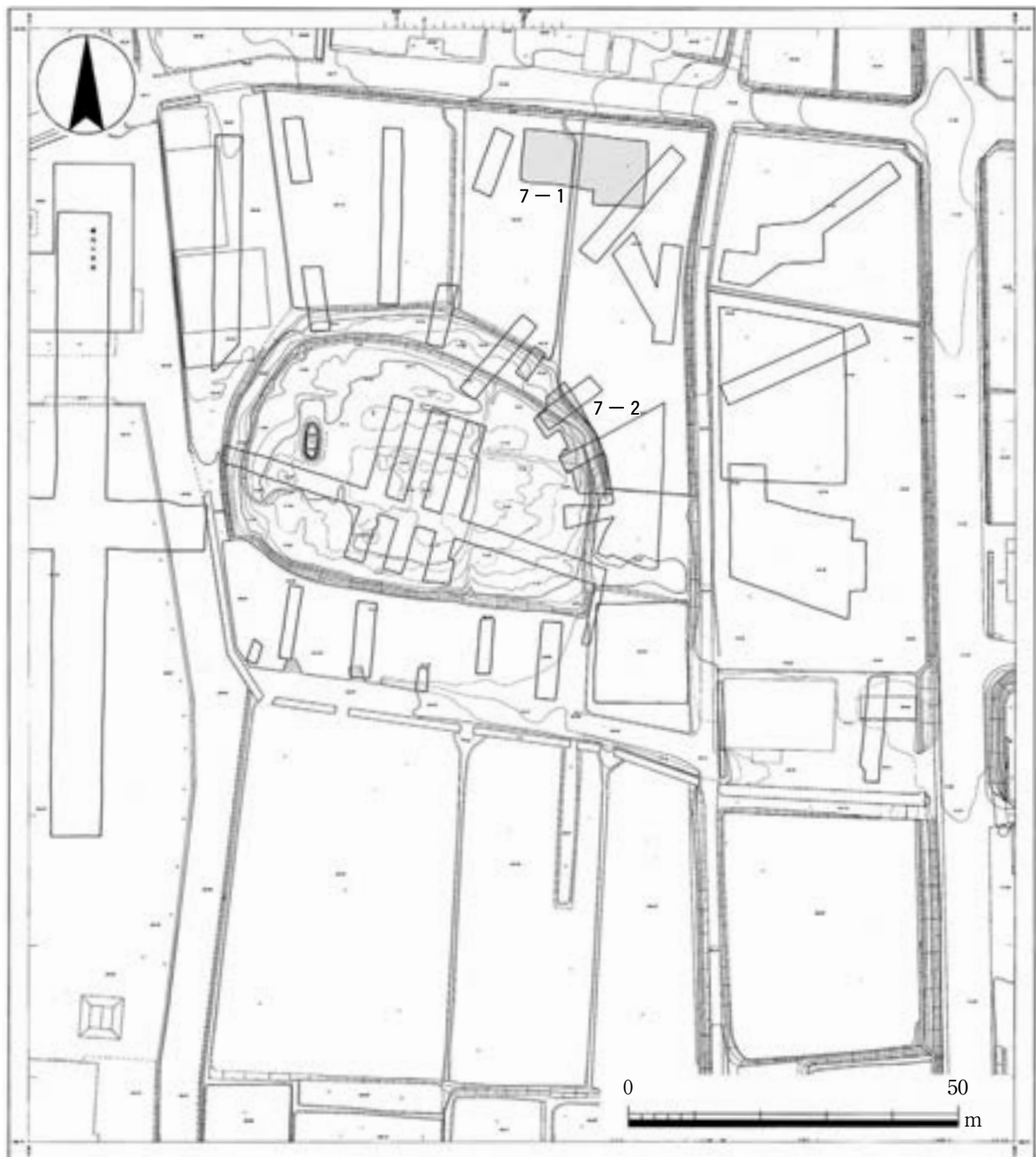


図93 纏向石塚古墳第7次調査地位位置図 (1/1,000)

周濠北側には 7-1 トレンチを、墳丘東部には 7-2 トレンチが設定され調査が行われている。

なお、現地調査は平成 5 年 12 月 2 日から平成 6 年 2 月 20 日にかけて行われており、調査面積は 7-1 トレンチが 173㎡、7-2 トレンチが 97㎡の計 270㎡であった。

第 2 節 各トレンチの成果

(1) 第 1 トレンチ

1. 調査の成果

5-2・3 トレンチの間に設定した幅約 8 m、長さ約 19m の調査区である。調査途中に調査区南西部分で幅 2.3m、長さ約 8 m にわたって調査区の拡張を行っている。

調査区の基本的な層序は現在の耕作土の下に黄茶灰色土（図 95-4 層）や明黄灰色土（図 95-5）などの中近世の耕作土とみられる土壌があり、その下には古墳時代後期の薄い包含層が、そして地山はやや黄味を帯びた灰褐色や褐灰色の粗砂を多く含んだ土壌で形成されていた。

調査はこの地山面までを重機によって掘削し、遺構の検出に努めたが地山面からは第 5 次調査において多数検出されている足跡状の窪みが調査区東半部において検出された他は上層からの素掘り小溝と時期不詳のピットが数基、古墳時代前期の落ち込み、弥生時代後期の土坑が 1 基検出されたのみで遺構の密度は極めて低いものであった。

さて、図 94 に破線で示した周濠ラインの推定線は 5-2・3 トレンチにおける周濠外肩の検出ラインをもとに本調査区内における周濠ラインの復元を行ったものである。既に報告したように本調査区に隣接する 5-2・3 トレンチにおいてはそれぞれ周濠の外肩部が明確に検出されており、相互の位置関係から推定するとほぼ確実に 7-1 トレンチの西南部分に周濠の外肩部が巡るものと考えられるが、調査時に作成された原図や写真類の記録からはその存在を確認することができなかったため、ここでは調査区西南端から約 3.5m の地点を通過する形で推定復元線を示しておくこととした。

なお、この周濠ラインの復元にあたっては先述したように 5-2・3 トレンチでの周濠外肩検出位置を参考としたが、西壁の断面部分においては地山の直上に存在する淡茶褐色礫混じり土（図 95-116 層）が調査区南端より約 4.2m の地点で地山の可能性が考えられる浅黄褐灰色砂礫層（図 95-117 層）と切り合う形で存在することに着目し、淡茶褐色礫混じり土を周濠堆積最上層と仮定して調査区南端から北へ 4.2m の両層が切り合う地点を周濠外肩部の可能性のある地点と推定している。

この淡茶褐色礫混じり土上面のレベルは 5-3 トレンチにおける周濠検出面である標高 68.3m とほぼ一致するものであることや、西壁付近では調査区北端は標高 68.5m で南端が 68.2m と南へと緩やかな勾配を持って傾斜していることから、若干削平を受けた周濠外肩部の存在を推定したものであるが、5-2・3 トレンチ共に周濠への落ち込みは明瞭なものであるのに対し、7-1 トレンチ西壁断面南端部では本来周濠内堆積層で形成されなければならない部分が地山と表記されており、周濠へと向かう落ち込みを確認することができない。これについては如何なる理由によるものなのか、もはや説明のしようがないが、ここでは遺構の検出に錯誤があった可能性も含めてその存在は保留しておくこと

とする。

さて、纏向石塚古墳以外の遺構も見えておくこととしよう。先述したように本調査区で検出された遺構には足跡状の窪みや素掘り小溝群、ピット群、落ち込み遺構、土坑などが検出されたのみである。

素掘り小溝群 調査区内の中央から東側にかけて10条程度の素掘り小溝が検出されており（図94）、時期は明確ではないが北壁の土層観察からは中世段階のものと考えている。

これらは周辺地区で検出されている素掘り小溝がほぼ方位に則った形で検出されているのに対し、7-1トレンチにおいては南東から北西方向へと曲線を描きながら掘削されている点が特徴的で、第4次調査でも明らかにされたように中世段階まで存続した周濠の窪みを避けて水田耕作が行われた様子を示すものと考えられる。

なお、この素掘り小溝群は調査区東半部では比較的密度が高く検出されているのに対し、西および西南部では平面、断面ともにその存在が確認できない。このことは先述した本調査区内における周濠ラインが調査区の西南部に存在する可能性を予想させるものとして注目される。

ピット群 素掘り小溝群と同様、主に調査区の中央から東半分にかけて数基のピットを検出しているが出土遺物は極めて少なく、所属時期を確認することができなかった。ほとんどが径30cm、深さ20～30cm程度の小規模なもので、柱痕などは確認されておらず、平面的にも建物としてのまとまりを確認することはできていない（図94）。

足跡状遺構 調査区東半分に集中して検出された人あるいは動物のものとされる足跡状の窪みである（図94）。同様の窪みは第5次調査における2～6トレンチと後円部北側に設定されたすべての調査区において検出されているが、その形成時期は明らかでは無い。窪みが検出されている遺構面は地山面から周濠内上層堆積土上面、周濠外肩部であり、周濠部の堆積状況から勘案すると古墳時代後期から中世までの間のものと考えられるがそれ以上の限定は困難である。

なお、本調査区内の足跡状の窪みからは須恵器高坏の小片が、5-2トレンチの窪みからは須恵器や円筒埴輪などの細片の出土が確認されているが時期の確定につながるようなものでは無い。

落ち込み1 調査区東半部拡張区の西端部で検出された浅い土坑状の落ち込み遺構である（図94）。遺構平面図以外には詳細な記録が残されておらず、深さ25cmの落ち込みということ以外、平面的な形状や埋土の状況などは不明である。しかしながら、この遺構からの出土遺物に付加されていた遺物カードには暗灰色粘質土や淡褐色礫混じり土からの出土との記載があり、断片的ながら埋土の状況をうかがうことができる。

なお、詳細は後述するが出土遺物はすべてが古式土師器であり、遺物の年代観は布留0式期のものと判断されることから遺構の掘削時期もこの頃のものと考えられる。

土坑1 調査区中央よりやや北西で検出された遺構で、長径1.2m、短径80cmの楕円形の土坑である（図96）。穴の底面は北側の一部に浅いテラス状の平坦面があるのに対し南部分は一段深いもので、平面プランはほぼ正円形を呈していた。北側のテラス状部分の深さから勘案して、遺構の上部は後世にかなり削平を受けたものとみられ、最も深い部分でも深さは約30cmしか残存していなかった。

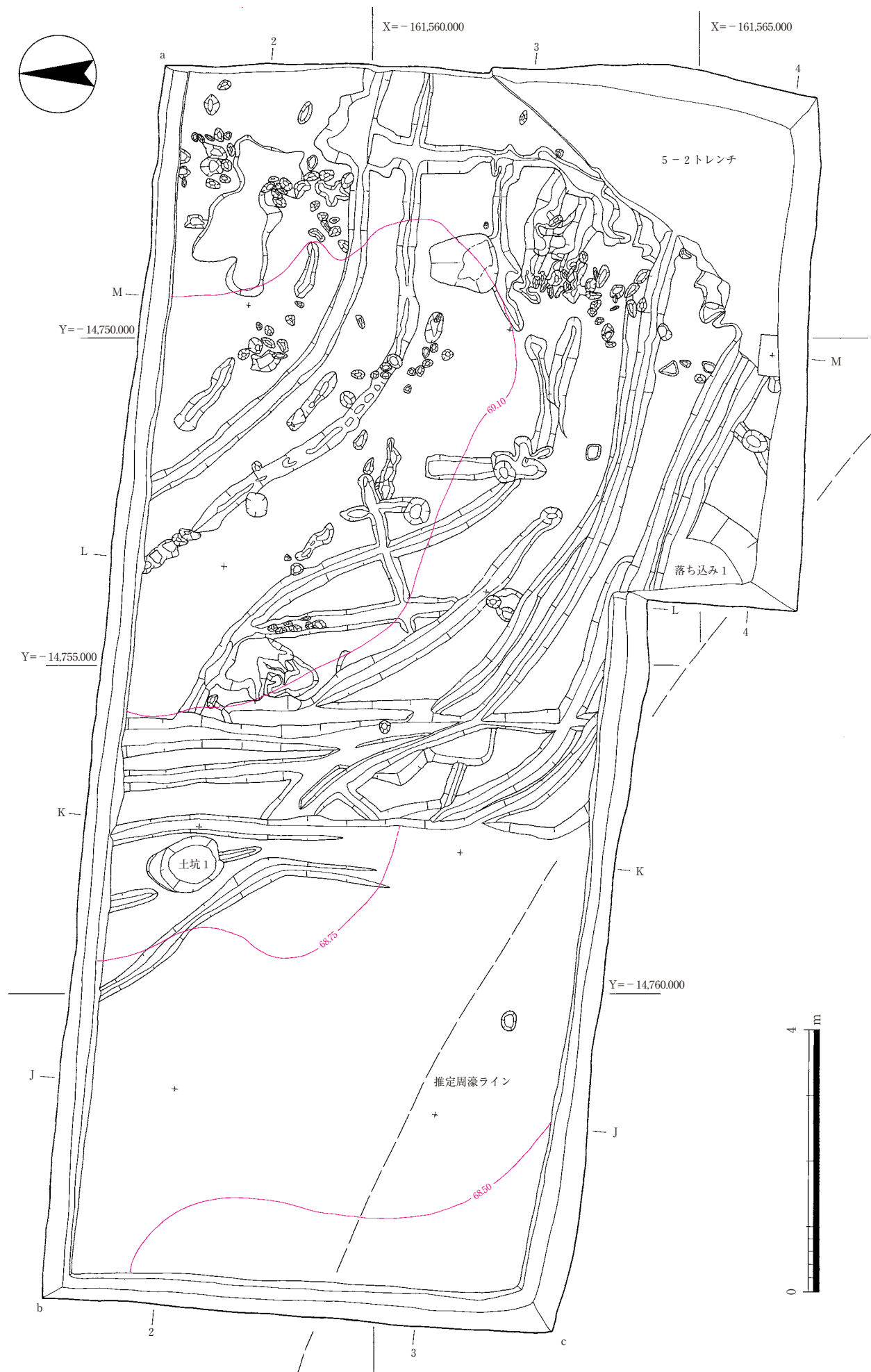


図94 7-1 トレンチ平面図 (1/80)

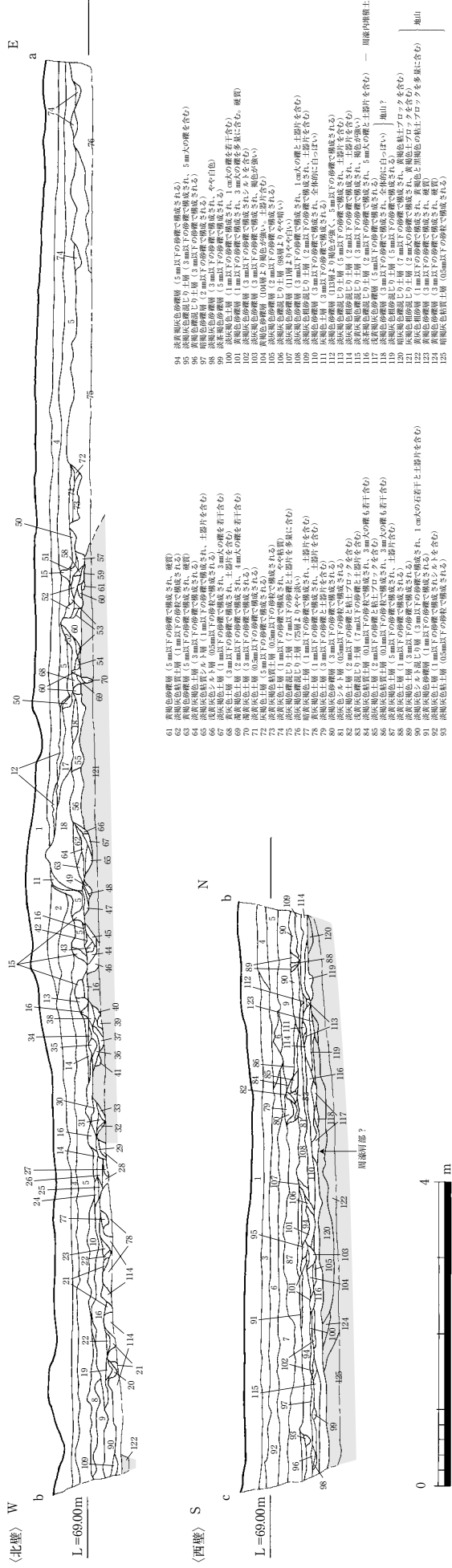


図95 7-1 トレンチ断面図 (1/80)

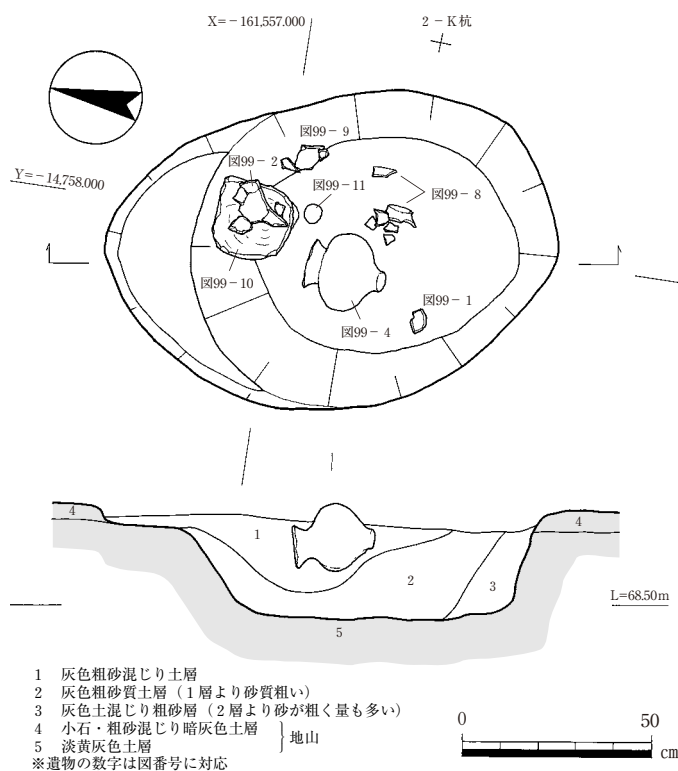


図96 7-1 トレンチ 土坑1平・断面図（1/20）

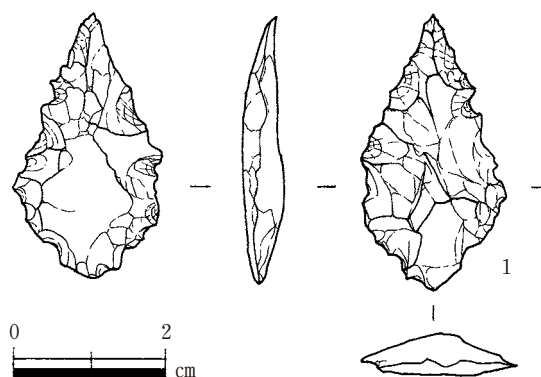


図97 土坑1出土石鎌実測図（1/1）

なお、遺構の埋土は灰色粗砂混じり土（図96-1層）、灰色粗砂質土（図96-2層）、灰色土混じり粗砂（図96-3層）の3層で構成されており、遺物の多くは1～2層上面にかけて集中して出土しており、遺構の底面よりはやや浮いた状態で出土している。後述する出土遺物の年代観から弥生時代後期（V-3～VI-1様式期）頃のものではないかと考えられる。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物は土坑1、落ち込み1、足跡状の窪みと覆土からの遺物に大別される。図99-1～11に示したのは土坑1からの出土遺物で広口壺や長頸壺のほか弥生形甕などがあった。この他、直接遺構に伴うものか否かは判然としないが図97に示した石鎌の出土も確認されている。器種の組成や残存状況に限界があり、厳密な時期は断定できないが土器の年代観からは弥生時代後期（V-3～VI-1様式期）頃のものではないかと考えている。図100-12～17は落ち込み1からの出土遺物である。この遺構からの出土遺物はあまり多くなかったが、すべての破片が古式土師器で構成されること、15に示したような布留形甕の存在が認められることなどから概ね布留0式期のものと判断している。この他、18は足跡状遺構から出土した須恵器高坏の坏部片で、19から23は床土や耕作土からの出土遺物である。いずれもが直接遺構に伴うものではないが、須恵器の坏蓋・高坏・器台と黒色土器碗の底部などがあった。

（2）第2トレンチ

1. 調査の成果

後円部墳丘東側において過去に実施された4-3dトレンチから6-4トレンチに跨って設定された幅約5m、長さ約18mの調査区である（図98）。調査区周辺における後円部の墳形プランの確認はこれまでの調査において概ね終了していたが、現状の墳丘測量からはこの部分が東側へとやや不自然な

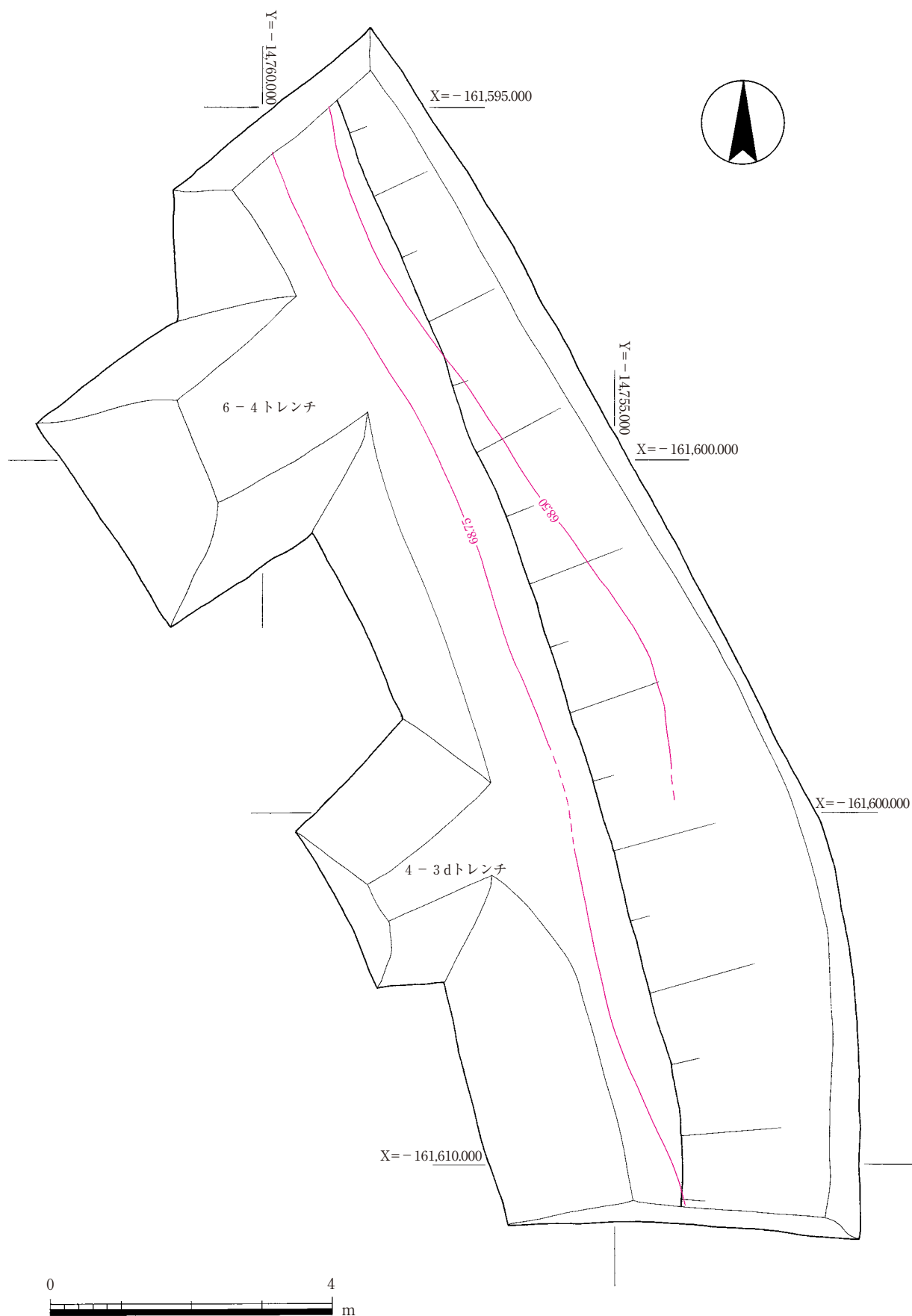


図98 7-2 トレンチ平面図 (1/80)

張り出しが認められたため、過去の調査区も含める形で再度の調査をおこなったものである。

さて、調査は過去に行われた4-3d、6-4トレンチ部分も墳丘側および周濠肩に相当する部分までは再度の掘削を行い、一部過去のトレンチを露呈させてより長いスパンで墳丘の肩部を露呈させたが、地表にみられる東への張り出しは後世の墳丘の取り崩しによるものであることが判明し、標高68.5mの高さにおいて検出された墳丘のラインは従来確認されていたように自然な円弧を描いて延びることが確認された。

なお、このトレンチでは墳丘肩ラインの確認に特化して行ったため、周濠部の掘削は行わず平面検出のみにとどめている。本地点における周濠堆積の状況は先に報告されている第4・6次調査の4-3d、6-4トレンチの項を参照されたい。

2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物はあまり多くない。図101は墳丘を取り崩した際に覆土に混入したとみられる遺物のうち、土器以外の目立った資料を提示したものである。

1は人物埴輪の手の部分の小片である。過去に行われた第4次調査の第3トレンチからも人物埴輪の手の一部が出土しているし、第5次調査の第5トレンチからは人物埴輪の腕の破片が出土しており、纏向石塚古墳の後円部東側に人物埴輪片が集中して出土している。このことは人物埴輪に限らず、他の円筒埴輪や朝顔形埴輪の出土も同様の傾向にあり、墳丘の東側で確認されている石塚東古墳²⁾に由来する可能性が考えられる。2と3は土馬の破片で、2は頭部から前足部分が、3は体部が残存している。いずれも全体像が判然としないため詳細は不明だが、製作技法からは奈良時代後期～平安時代にかけてのものと思われる。

第3節 小結—第7次調査の成果—

第7次調査は周濠外側に展開する遺構の状況と周濠外肩部の形状確認を目的とした7-1トレンチと後円部東側の墳丘形状確認のための7-2トレンチの2本のトレンチを設定し調査を行った。

7-1トレンチの調査では古墳に先行する弥生時代後期の土坑が1基検出されたのみで、纏向石塚古墳と並行する時期の遺構は全く確認されなかったことから、古墳の北側一帯は遺構密度が低く顕著な遺構は存在しないことが確認されている。もう一つの目的であった周濠形状の確認については本来周濠外肩のラインが通過すべき部分でその存在を確認することができなかった。これについては明確な理由を説明することはできなかったが、本報告では想定される周濠外肩ラインの復元と周濠外肩部の位置の推定を行っている。この周濠外肩ラインの復元は先述したように5-2・3トレンチで確認されている周濠外肩ラインを自然な形でつなぐように行ったもので、周濠外肩部の位置の推定は西壁断面の土層の検討からこれを行ったものである。

なお、第2節で図示した周濠外肩の平面ラインと周濠肩部の推定位置には南北に約70cmのずれが生じている。このことは4-4トレンチや5-5・6トレンチ、第9次調査地などで検出された周濠外肩ラインの様子を見ても明らかなように、纏向石塚古墳の周濠外肩のラインはさほど整然としたライ

ンを持つものではなく、部分的には振れを持ちながら古墳の周囲を巡るものであったことによるものと思われる。この他、本来整然としない周濠外肩ラインの振れをさらに大きくした原因と考えられるものには後世の削平がある。一連の調査の結果からは個々のトレンチにおいて検出された周濠外肩部は少なからず上部が削平を受けており、各トレンチの周濠外肩は周濠の内側へと幾分後退しているものと判断される。恐らくはこの周濠外肩部の後退の度合いも削平の深度によってばらつきがあり、周濠外肩ラインに影響を与えているものと判断される。

さて、仮に7-1トレンチ西壁断面での検討が正しいとすれば本来の周濠外肩ラインの復元は図示した推定ラインのように整然と通るようなものではなく、一定の振れを持ちながら周濠肩部の推定位置を通過しながら巡っていたと考えて大きな齟齬はないと考えるが、7-1トレンチの西南隅部一帯からは周濠と認定すべき深い落ち込みが確認されていないことは疑問として残るものである。

そして、後円部墳丘の形状を明らかにするために第4・6次調査の補足調査として行った7-2トレンチの調査からは墳丘ラインが当初の推定線どおり自然な円弧を持って検出されており、調査の対象となった現墳丘の不自然な張り出しは後世に墳丘を取り崩した際の土壌が外側へと掻き出された結果である事が確認されている。

(橋本)

【註記】

- 1) 寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年—近畿編 I—』木耳社1989
- 2) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006

表 48 纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (1)

図番号 図版 番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
99—1 127—1	第1トレンチ 土坑1 下層 灰色混じり粗砂層	底部 (甕Y)	2-C-・	W : (7.4) B : (4.2)		O. スリナデICa i. スリナデICa	O. タタキ→スリナデICa i. スリナデICa	35 ~ 40/CM	O. 5Y R5/4にぶい赤褐～ 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 10Y R6/3にぶい黄橙
99—2 127—2	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	壺	Co-A ₂ -a	C : (12.4) W : (12.6)	8/cm	O. スリナデIAa i. スリナデIAa		8/cm 8/cm	O. 10Y R8/3浅黄橙 i. 10Y R7/2にぶい黄橙
99—3 128—3	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	壺	H-C-・			O. マメツツ不明 i. スリナデICa			O. 5Y R5/6明赤褐 i. 10Y R5/2灰黄褐
99—4 127—4	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	壺	H-C-・	W : (21.0) B : 4.9	5/cm	O. スリナデIAa→ ミガキAヨコ i. スリナデIAa	O. スリナデIAa→ ミガキA i. スリナデIAa	7/cm 5/cm	7.5Y R7/4にぶい橙
99—5 127—5	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	1-A-c	B : 5.55			O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデヨコICa	30/CM	10Y R6/3にぶい黄橙～ 10Y R5/3にぶい黄褐
99—6 128—6	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (壺)	1-A-c	B : (6.5)			O. スリナデICa i. マメツツ不明		O. 7.5Y R6/4にぶい橙～ 7.5Y R7/6橙 i. 10Y R5/2灰黄褐
99—7 128—7	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	甕 Y	I-B-・・	W : (18.6)		O. タタキ i. (脛) スリナデIAa (脚) スリナデICa		40/CM 7/cm	O. 10Y R5/3にぶい黄褐 ～10Y R4/1褐灰 i. 10Y R5/2灰黄褐
99—8 128—8	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	2-・-a	B : (5.0)			O. 右上がりタタキ i. ハクリ不明	40/CM	O. 10Y R5/2灰黄褐～ 10Y R4/1褐灰 i. 10Y R6/3にぶい黄橙
99—9 127—9	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	2-C-c	B : (4.6)			O. 右上がりタタキ→ スリナデICa i. ケズリB	35/CM	10Y R4/1褐灰
99—10 127—10	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	甕 Y	I-A-1・	W : (23.1) B : 5.3		O. (脛) 右上がりタタキ→ スリナデIAa (脚以下) 右上がりタタキ i. スリナデナメIAa	O. 右上がりタタキ i. スリナデIAa	35/CM 7/cm 35/CM 7/cm	O. 10Y R5/2灰黄褐 i. 10Y R6/3にぶい黄橙
99—11 127—11	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	2-C-・	B : (5.6)			O. 右上がりタタキ (底面) ケズリA i. スリナデIAa	20/CM 8/cm	O. 7.5Y R5/3にぶい褐 i. 7.5Y R5/4にぶい褐 ・内面に煮沸痕 のこる ・外面にスス付 着

表 49 纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (2)

図番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部		体 部	底 部 (脚部)		
図版 番号										
100—12	第1トレンチ 3 L区南西角 落ち込み1 暗灰色粘質土	小形丸 底鉢	Ⅱ - A ₂ - a	H : 5.95 C : 9.8	O. ミガキAヨコ i. ミガキAヨコ	O. ミガキAヨコ i. ミガキAタテ	O. ケズリA→ミガキAタテ i. ミガキAタテ		O. 7.5Y R 8/6浅黄橙 i. 2.5Y R 6/6橙	
127—12										
100—13	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色灰色礫混じり土	脚台 (高坏)		B : (16.0)			O. マメツ不明 i. マメツ不明		5Y R 6/6橙	
128—13										
100—14	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色灰色礫混じり土	甕 Y	Ⅱ - ・ ・ ・ a	C : (14.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10Y R 3/1黒褐 i. 10Y R 6/4にぶい黄橙	
128—14										
100—15	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色灰色礫混じり土	甕 F	Ⅱ - ・ ・ ・ g ₂	C : (14.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 5Y R 5/4にぶい赤褐 i. 7.5Y R 6/4にぶい黄橙	
128—15										
100—16	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色灰色礫混じり土	底部 (甕 Y)	3 - C - ・	B : (3.8)			O. 右上がりタタキ i. スリナデ I A b	20/CM	O. 7.5Y R 6/4にぶい黄橙～ 10Y R 4/2灰黄褐 i. 10Y R 4/1褐灰	
128—16										
100—17	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色灰色礫混じり土	底部 (甕 Y)	2 - C - a	B : (4.3)			O. 右上がりタタキ i. スリナデ I A b	20/CM	O. 2.5Y 4/1黄灰 i. 10Y R 6/3にぶい黄橙	
128—17										
100—18	第1トレンチ 2 MIX 足跡状遺構 淡灰色混じり粗砂質土	須恵器 高坏			O. 回転ナデ i. 回転ナデ				O. 7.5Y R 4/1褐灰 i. 7.5Y R 5/1褐灰	
128—18										
100—19	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 坏蓋		C : (10.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 回転ナデ	(天井部) O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ	N6/0灰	
128—19										
100—20	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 坏蓋		C : (12.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 回転ナデ		N6/0灰	
128—20										
100—21	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 器台		C : (26.0)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ→櫛描波状文 i. 回転ナデ			N6/0灰	
128—21										
100—22	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 高坏		B : (12.0)			O. 回転ナデ i. 回転ナデ		5P B6/1青灰	・円形透孔1ヶ 所残存
128—22										